千葉県文化財センター調査報告第182集

佐原市仁井宿東遺跡・牧野谷中田遺跡

中小河川改良事業小野川放水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990年

千葉県土木部河川課
財団法人　千葉県文化財センター

佐原市仁井宿東遺跡・牧野谷中田遺跡

中小河川改良事業小野川放水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990年

千葉県土木部河川課
財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

三方を海に臨む千葉県には、温暖な気候と豊かな自然の恵みを受け、古来より人々の生活が営まれて数多くの遺跡が残されています。佐原市は県北東部、利根川下流に面した水郷地帯にあり、東方に香取神宮をひかえ、大規模な遺跡が集中しています。また、江戸時代には利根川の水運の中継地点として賑わいをみせていました。最近では成田空港、鹿島臨海工業地帯に隣接する地方中核都市として発展が大いに期待されています。

近年来、農業振興及び周辺地域の開発に伴う都市基盤の整備の一環として、千葉県では利根川下流域の河川改良を行ってきているところです。佐原市を南北に貫流し利根川に注ぐ中小河川の小野川は、過去に大雨の際しばしば冠水し大きな被害を引き起こしています。そこで昭和48年に、小野川の水害解消のため総延長2.2kmにわたる放水路を開削し、かつ市街地を通過する区域は地下水路とし、上面に県道を併設する工事が計画されました。

このため、千葉県教育委員会では工事区域内に所在する遺跡の取り扱いについて、千葉県土木部をはじめ、関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、工事の必要性・緊急性にかんがみ、止むを得ず事前に発掘調査を行い記録保存をすることとなりました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが委託を受けて、昭和61年２月から62年３月にかけて実施しました。仁井宿東遺跡・牧野谷中田遺跡の両遺跡の調査において、縄文時代から古墳時代にかけての土器、石器の他、奈良平安時代から近世にかけての建物跡、井戸跡等の遺構が検出されました。これらのことから、低地上にも縄文時代以降、先人の足跡が残されていることが明らかになり、また、奈良時代以後の低地上集落跡の一端をうかがえる資料も得ることができました。

調査終了後、昭和62年６月から整理作業を行ってまいりましたが、このたびその結果がまとまり報告書として刊行することになりました。今後これらの成果が学術資料としてはもとより文化財の普及活動のため、十分に活用されることを願ってやみません。おわりに当たり御指導・御協力をいただいた、千葉県教育庁文化課、千葉県土木部、佐原市教育委員会をはじめとする関係諸機関にお礼を申し上げるとともに、酷暑・厳寒のなかにも、発掘・整理作業に携わっていただいた調査補助員のみなさまにも心から謝意を表します。

平成２年３月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　岩　瀬　良　三

凡　　例

1．この報告書は中小河川小野川河川改良工事に伴い、事業地内に所在する埋蔵文化財を発掘調査した成果である。

2．対象遺跡は佐原市仁井宿東遺跡（佐原市佐原字仁井宿イ3661他）、牧野谷中田遺跡（佐原市牧野谷中田476他）である。調査時点では昭和62年次調査区を№1遺跡（遺跡コード209-033）、昭和62年次調査区を№2遺跡（209-038）と仮称したが、調査の結果をふまえ、№1遺跡および№2遺跡北端を仁井宿東遺跡に、№2遺跡南端部を牧野谷中田遺跡の名称に変更した。

3．調査時点では№1、№2遺跡ごとの遺構に対し、通し番号をつけていたが、本報告書においては、遺構の種別ごとに新たに通し番号をふっている。その新旧番号の対応は表19に示すところである。

4．発掘調査は千葉県教育委員会の指導のもと、以下の期間・人員で実施した。

昭和61年2月7日～昭和61年2月28日

調査部長　鈴木道之助、部長補佐　岡川宏道、班長　高橋賢一

調査研究員　柴田龍司・鈴木文雄

昭和61年6月1日～昭和62年3月20日

調査部長　鈴木道之助、部長補佐　岡川宏道、班長　高橋賢一

主任調査研究員　宮　重行、調査研究員　新田浩三

5．整理作業は宮　重行が主体となって下記の期間・人員で実施した。

昭和62年6月から平成元年7月までに計12か月間

調査部長　堀部昭夫、部長補佐　古内　茂（昭和62・63年度）・阪田正一（平成元年度）

班長　矢戸三男（昭和62・63年度）・藤崎芳樹（平成元年度）

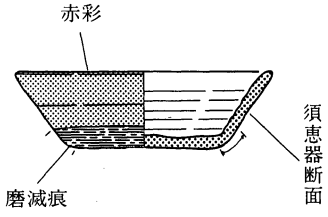
主任調査研究員・班長代理　宮　重行

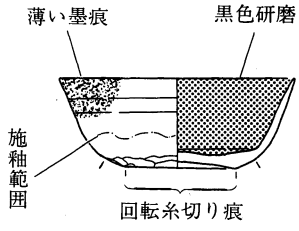
なお埴輪の項は主任技師萩原恭一が原稿執筆までを担当した。寛永通寶の鑑定は主任技師今泉　潔による。また出土木材の樹種同定は株式会社パリノ・サーヴェイに委託し、結果を付章に掲載した。

6．調査の実施および整理・報告書刊行に際し、以下の関係諸機関をはじめ各諸氏の御協力、御指導をいただいた。記して謝意を表する。

千葉県教育庁文化課、佐原市教育委員会、香取郡市文化財センター、東総北部用水舟戸揚水機場、県立佐原病院、国立歴史民俗博物館　平川　南氏、同　永嶋正春氏、同　小野正敏氏、佐原市教育委員会　原田享二氏、県立房総風土記の丘　根本　弘氏

用　　例





本　文　目　次

序文
凡例
第1章　調査に至る経緯 …… 1
第2章　遺跡の位置と環境 …… 2
1　遺跡の位置 …… 2
2　周辺の遺跡 …… 2
第3章　調査の方法と経過 …… 9
1　調査の経過 …… 9
2　調査の方法 …… 10
第4章　仁井宿東遺跡の調査 …… 14
第1節　基本層序 …… 14
第2節　遺構とその出土遺物 …… 17
1　Ⅰ区の調査　A　奈良平安時代の遺構 …… 19
B　中近世および時期不詳遺構 …… 28
2　Ⅱ区の調査 …… 72
3　Ⅲ区の調査　A　奈良平安時代の遺構 …… 80
B　中近世および時期不詳遺構 …… 89
第3節　グリッド出土の遺物 …… 99
1　縄文時代の遺物 …… 99
2　古墳時代の遺物 …… 103
3　奈良平安時代の土器 …… 109
4　中近世以降の土器・陶磁器 …… 117
5　土製品 …… 124
6　石製品 …… 125
7　金属製品 …… 125
第4節　小括 …… 137
第5章　牧野谷中田遺跡 …… 153
第1節　遺跡と調査の概要 …… 153
第2節　遺構と出土遺物 …… 155
第6章　結　　語 …… 159
付　章　仁井宿東遺跡出土材同定成果 …… 160

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡周辺地形図 …… 5
第３図　小グリッド構成 …… 10
第４図　調査区（１） …… 11
第５図　調査区（２） …… 12
第６図　調査区（３） …… 13
第７図　標準土層図 …… 14
第８図　仁井宿東遺跡全体図 …… 15
第９図　Ⅰ区遺構分布図 …… 18
第10図　SE－４平面図 …… 19
第11図　SE－４遺物分布図 …… 20
第12図　SE－４出土遺物（１） …… 21
第13図　SE－４出土遺物（２） …… 22
第14図　SX－６平面図 …… 24
第15図　SX－６出土遺物 …… 25
第16図　SE－１、SE－２平面図 …… 29
第17図　SE－１、SE－２出土遺物 …… 30
第18図　SE－３平面図・出土状況図 …… 31
第19図　SE－３出土遺物（１） …… 33
第20図　SE－３出土遺物（２） …… 34
第21図　SB－１～６平面図 …… 39
第22図　SB－１～６柱穴配列図 …… 40
第23図　SB－１～６および近辺出土遺物 …… 41
第24図　SK－１～SK－７平面図 …… 43
第25図　SX－３出土遺物 …… 46
第26図　SD－１～７出土遺物 …… 49
第27図　SD－８出土遺物（１）、SX－１出土遺物 …… 51
第28図　SD－８出土遺物（２） …… 52
第29図　SD－８出土遺物（３） …… 53
第30図　SD－10・13出土遺物 …… 55
第31図　SD－12出土遺物（１） …… 57
第32図　SD－12出土遺物（２） …… 58

第33図　SD－15出土遺物…… 60
第34図　SD－18・19・23・24出土遺物…… 62
第35図　II区遺構分布図 …… 73
第36図　II区溝出土遺物（1） …… 75
第37図　II区溝出土遺物（2） …… 77
第38図　III区遺構分布図 …… 79
第39図　SE－5、SE－6平面図・出土状況 …… 81
第40図　SE－5、SE－6出土遺物 …… 82
第41図　SK－14平面図…… 83
第42図　SK－14遺物分布図…… 84
第43図　SK－14出土遺物…… 85
第44図　SK－13・15～17平面図…… 89
第45図　III区溝・整地跡出土遺物（1） …… 93
第46図　III区溝・整地跡出土遺物（2） …… 94
第47図　縄文土器（1） ……100
第48図　縄文土器（2） ……101
第49図　縄文時代石器 ……102
第50図　古墳時代土器 ……103
第51図　埴輪（1） ……105
第52図　埴輪（2） ……107
第53図　奈良平安時代土器（1） ……110
第54図　奈良平安時代土器（2） ……112
第55図　奈良平安時代土器（3） ……113
第56図　中近世土器 ……118
第57図　陶磁器 ……121
第58図　土錘・石製品 ……124
第59図　古銭 ……126
第60図　鉄製品・キセル・土製品 ……127
第61図　奈良平安時代土師器一覧 ……142
第62図　出土遺物の時期別遺構配置図 ……147
第63図　カワラケ等一覧 ……149
第64図　水田の分布状況と旧河川 ……153
第65図　調査区、遺構平面図 ……154
第66図　出土遺物 ……156

表　目　次

表1　遺跡一覧 …… 7
表2　SE－4出土土器 …… 26
表3　SX－6出土土器 …… 28
表4　SE－1、SE－2出土土器 …… 36
表5　SE－3出土土器・木製品・石塔 …… 36
表6　SE－3出土杭 …… 38
表7　SB－1～6、SD－9出土土器 …… 42
表8　SX－3出土土器 …… 47
表9　SD－1～SD－7出土土器 …… 65
表10　SD－8出土土器・木製品 …… 66
表11　SD－10・13出土土器・石塔 …… 68
表12　SD－12出土土器 …… 68
表13　SD－15出土土器 …… 70
表14　SD－18・19・23・24出土土器 …… 70
表15　II区溝出土土器 …… 78
表16　SE－5、SE－6出土土器 …… 86
表17　SK－14出土土器 …… 87
表18　III区溝・整地跡出土土器 …… 97
表19　新旧遺構番号対照表 …… 98
表20　古墳時代土器 …… 108
表21　奈良平安時代土器 …… 114
表22　中近世土器 …… 119
表23　陶磁器 …… 122
表24　土製品・土玉一覧 …… 128
表25　土錘一覧 …… 129
表26　石製品一覧 …… 134
表27　古銭一覧 …… 135
表28　銅・鉄製品一覧 …… 136
表29　条里的な溝の方位と距離 …… 146
表30　牧野谷中田遺跡出土土器 …… 157
表31　古銭 …… 158
表32　樹種同定資料一覧 …… 164

図 版 目 次

図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　仁井宿東遺跡遠景
図版３　Ⅰ区遺構群
図版４　SE－４、SX－６
図版５　SE－１、SE－２
図版６　SE－３
図版７　Ⅰ区道路跡・土壙・整地跡
図版８　SD－８
図版９　SD－18～24、試掘坑
図版10　Ⅱ区遺構群
図版11　Ⅲ区遺構群
図版12　SE－５、SE－６、SK－14
図版13　Ⅲ区溝
図版14　SE－４出土遺物（１）
図版15　SE－４出土遺物（２）
図版16　SX－６、SE－１、SE－２出土遺物
図版17　SE－３出土遺物（１）
図版18　SE－３出土遺物（２）
図版19　SE－３出土遺物（３）杭
図版20　SE－３出土遺物（４）杭
図版21　SB－１・６、SX－３、SD－９出土遺物
図版22　SD－１～７出土遺物
図版23　SD－８出土遺物（１）、SX－１出土遺物
図版24　SD－８出土遺物（２）、SD－10出土遺物
図版25　SD－８出土遺物（３）
図版26　SD－12出土遺物（１）
図版27　SD－12出土遺物（２）
図版28　SD－15出土遺物
図版29　SD－18・19・23・24出土遺物
図版30　Ⅱ区溝出土遺物
図版31　SE－５出土遺物
図版32　SK－14出土遺物
図版33　Ⅲ区溝・整地跡出土遺物、SK－14出土墨書土器
図版34　縄文土器（１）
図版35　縄文土器（２）
図版36　埴輪（１）
図版37　埴輪（２）
図版38　縄文時代石器、古墳時代須恵器
図版39　奈良平安時代土器（１）
図版40　奈良平安時代土器（２）
図版41　墨書土器・カワラケ小皿等
図版42　土師質土器等・陶磁器
図版43　土玉・土錘・砥石・古銭
図版44　鉄製品・キセル
図版45　牧野谷中田遺跡
図版46　トレンチ、SD－１
図版47　出土遺物
図版48　樹種同定資料（１）
図版49　樹種同定資料（２）
図版50　樹種同定資料（３）
図版50　樹種同定資料（４）、SE－８出土種子

第１章　調査に至る経緯

小野川は佐原市下小野を主水源とし、北上して佐原市街中央を貫き利根川下流に合流している、総延長7.5kmほどの中小河川である。この河川は利根川の内水河川という性格上、小野川上流域での降雨量の多小にかかわらず、利根川の水位上昇にともなって、下流域はたびたび大きな水害を引き起こしている。というのは、大雨等でひとたび利根川が増水すると、小野川に逆流する形になり、現河道の流下能力不足、橋梁部分が妨げとなって、下流域で氾濫することになるわけである。特に昭和46年の台風25号の襲来の際には大被害をこうむっており、河川の改修が急がれていた。

また新東京国際空港を始め、周辺の開発が進んできたことから、流域の治水安全度を高める必要性が更に高まった。そこで昭和48年には小野川治水計画が策定され、市街地の集中した部分での河巾の拡幅を避け、県立病院のわきを通り、仁井宿と篠原との境部分を南北にバイパスさせる小野川放水路の建設を実施するこが決定された(第２図)。この計画では市街地を通過する区域では地下水路化し、上部に都市計画街路３－４－４仁井宿与倉線を併設して利用に供することとし、相乗的な開発効果がもくされている。

事業は翌49年に開始になり、53年からは北端部・利根川河川敷部分から工事が着手された。昭和59年１月に、微高地以南の部分について県教育庁文化課に対し遺跡の照会が行われた。そこで周辺の古墳の分布状況や、踏査により遺物の散布が認められたことをうけ、同年３月に遺跡が存在するとの回答がなされ、事前調整の必要性が生じてきた。そこで県文化課との協議が行われ、その結果、工事の緊急性・公共性をかんがみて、工事に先行して遺跡発掘調査を行い記録保存していく運びとなった。

昭和61年２月には、工事の進行経過にともない、急遽北端部（№１遺跡）の調査が依頼され、実施された。引き続き以南（№２遺跡）の部分については、同年６月から翌62年３月にかけて確認・本調査を実施し、事業予定地範囲のすべての調査を完了した。

参考文献

千葉県「小野川放水路パンフレット」

久保田鉄工株式会社「アーバンクボタ」№19　1981

第２章　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置（第１図、図版１）

佐原市は千葉県北東部、利根川下流南岸に面しており、河口から約40kmのところにある。北方対岸６kmには水郷で知られる潮来があり、さらに北西には霞ヶ浦に連なっている。東部には下総一の宮である香取神宮が位置する。北東15kmには香取神宮に対向する形で常陸一の宮の鹿島神宮が位置している。これらの東方の鹿島灘には近年、鹿島臨海工業地帯が形成され、大いに発展しているところである。また南西20kmには、江戸時代から不動尊で知られている成田山新勝寺、開港10周年を迎えた新東京国際空港を擁する成田市が位置している。

佐原市下小野に源流を発する小野川は、北上して釜塚で香西川と合流し佐原の市街地を縦断して利根川下流に注いでいる、総延長7.5kmほどの中小河川である。佐原市街地は、利根川南岸沿いに発達した標高５ｍほどの東西にのびる自然堤防に加え、小野川から流出された土砂が扇状地状に沖積し、幅広く形成された微高地上に位置している。小野川はこの微高地に阻まれるごとく急に大きく西に旋回し、台地の縁にあたってまた北に方向を変え市内を流れていく。

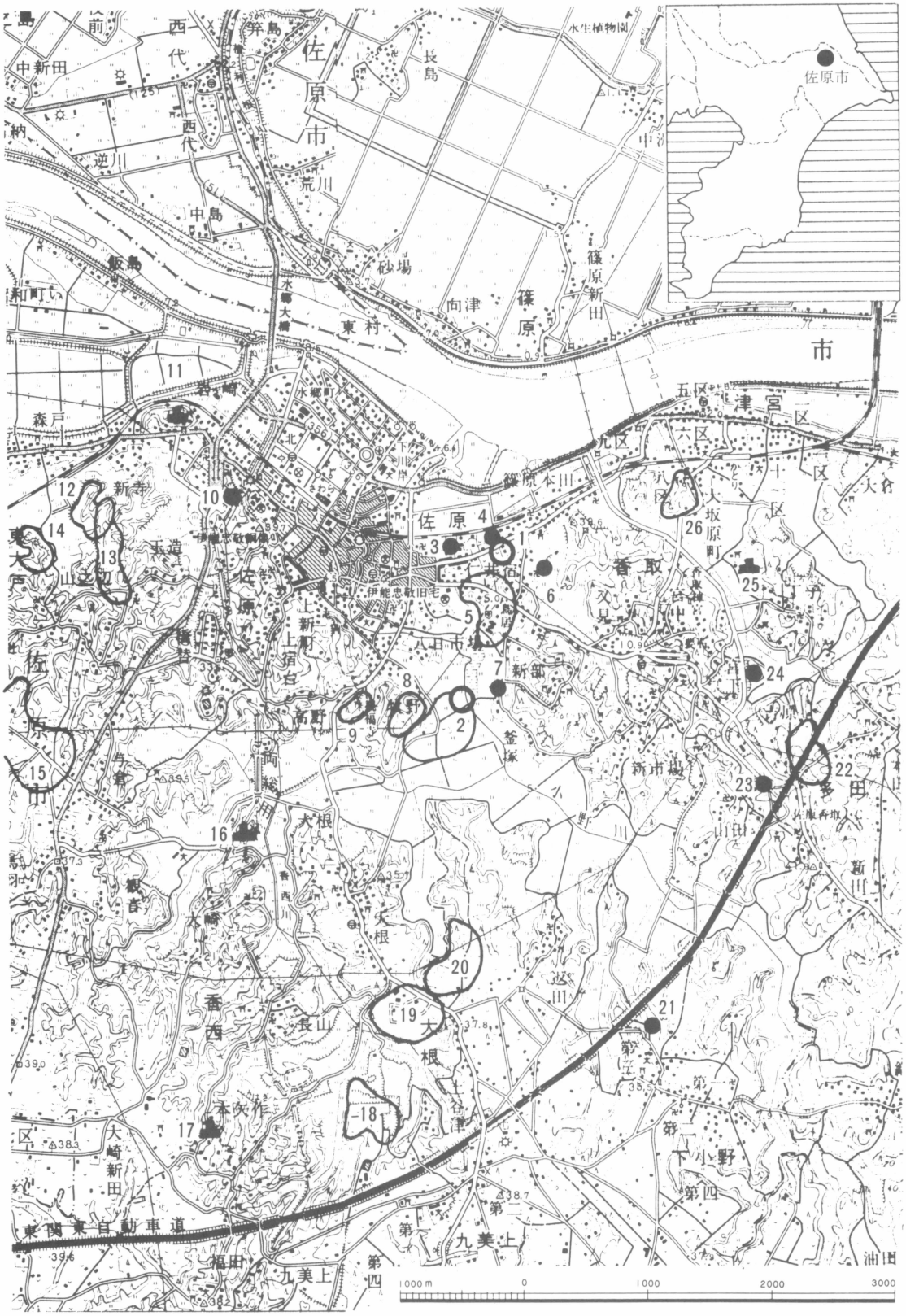
この微高地上には西から順に、佐原の中心部、仁井宿、篠原の各市街が位置している。仁井宿は浅間神社を中心とした地区で、中世には「井戸庭」と称されていた村である。

調査対象箇所は小野川放水路予定地内、変電所東側の仁井宿と篠原の境界部分から、香取神宮一の鳥居前、県立病院西脇、取水堰南側を通って小野川沿いを新部橋まで達する区間である。現況は微高地部分は、道路沿いに宅地があるが、おおむね畑地となっており、低地部分は水田となっている。

遺跡の検出され、本調査を行った地区は仁井宿の東端、篠原村の境に接する個所にあたり、古字名から仁井宿東遺跡とした。地番は佐原市佐原字仁井宿イ366他である。また放水路予定地の南端にあたる新部橋の西岸からは溝が検出されたが、この地点の西側は佐原市街南方にあたる牧野の台地から東方に小野川べりまで連なる微高地で、牧野谷中田遺跡という古墳時代後期から奈良平安時代にかけての包蔵地になっている。遺構・出土遺物の状況からみて、今回の調査部分も牧野谷中田遺跡に含めて取り扱った。

２　周辺の遺跡（第１・２図、表１）

縄文時代の佐原の様子は仁井宿東遺跡［１］の調査結果から推定できる。まず海進状態にあった縄文時代の中期以前にはこの付近の大半はまだ内海の状態であったと思われる。出土土器は少なく、しかも水に流されて摩滅状態であった。中期後半には、湾に面した砂州程度でかもしれないが、ある程度陸地化されたようで、良好な状態の土器が包含層で出土している。後期



第1図　遺跡位置図（国土地理院 1/50,000 佐原・潮来）

の土器は広範囲に良好な状態での出土がみられており、縄文時代後期には陸地化がかなり進んできたと思われる。

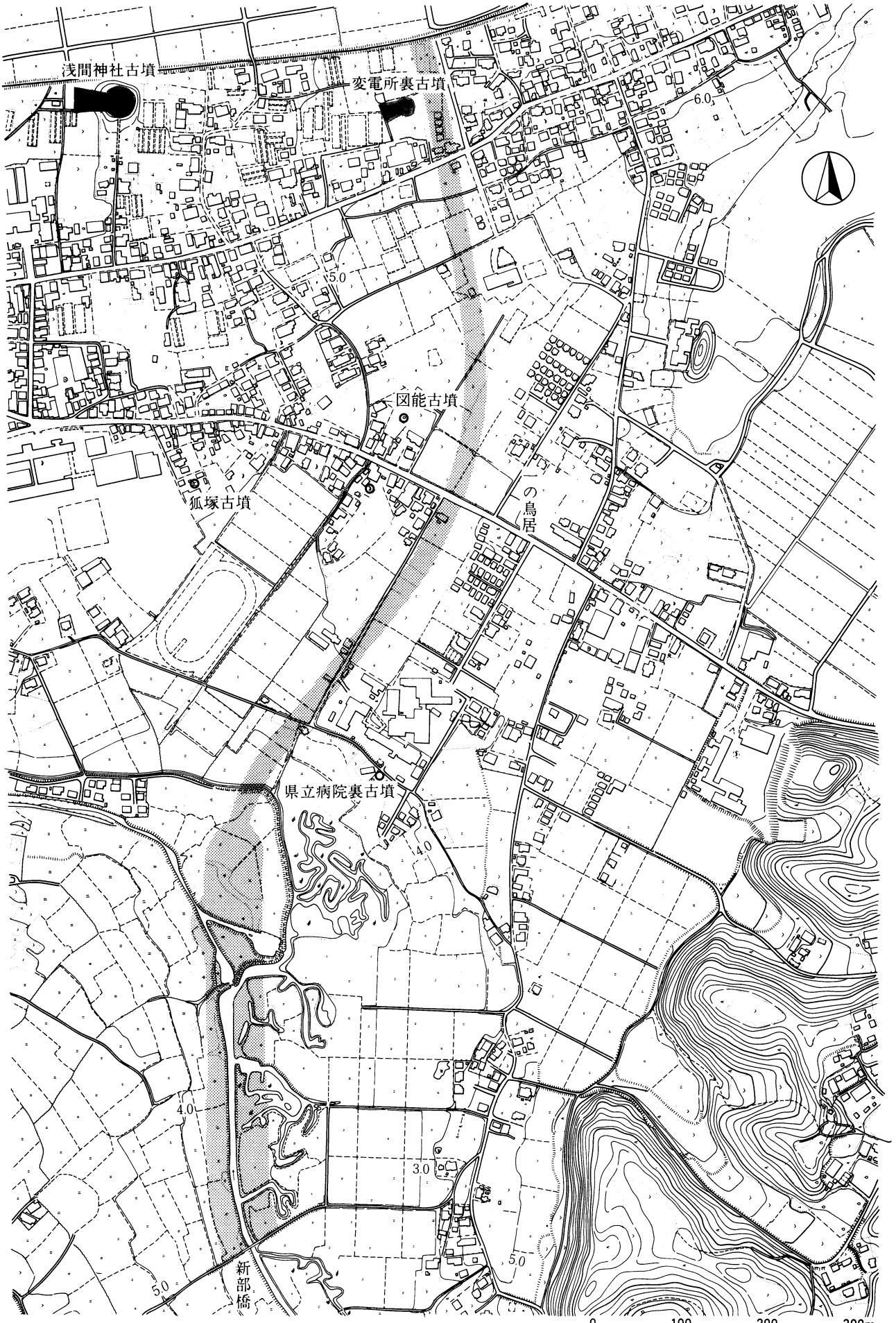
大規模な縄文時代の遺跡は中期から周辺の台地上に多数知られている。南に位置する大根の台地上には中期大規摸な集落跡の想定される磯花遺跡［18］(註1)を代表とする大根遺跡群［18～20］があり、東南方には加曽利E期の大規摸集落跡の検出された多田遺跡［23］がある。また水源付近には中期初頭の下小野式で知られる下小野貝塚［21］も位置している(註2)。後期以降となると縄文時代遺跡は数が少なくなり、多田遺跡の他、香西川の支流に与倉、橋替の両貝塚が目だつ程度であろうか。至近な所では牧野谷中田遺跡［2］の対岸、新部下の微高地上にコシテ遺跡［7］が所在している。

弥生時代の遺跡はさらに少なく、現在までに報告されているところでは大戸の山の辺手ひろがり遺跡、香取の長部山遺跡程度である。ただし最近の調査では事例が増加している。今回、弥生中期の土器が出土した牧野谷中田遺跡及び、西側の台地上［8・9］にも集落の存在が示唆されるところである。

古墳時代には集落も増加し、山の辺手ひろがり遺跡［14］を始め、市街西方の台地上に玉造遺跡群［12］があり、香取の台地上にも多数の存在が確認されている。古墳は台地上の山辺古墳群の他［14］、玉造古墳群［12］、大戸白幡古墳群［15］、香取の神道山古墳群［26］などが知られている。また微高地上にも古期のものを主体に古墳が存在している。前方後円墳である浅間神社古墳［3］を始め、遺跡内にも削平されているが前方後円墳とされる変電所裏古墳［4］が、小規模墳の集まる県立病院裏古墳群［5］が存在する(註3)。また土取りで消滅してしまったたが、調査区のすぐ東側には篠原の裏手から連なる細長い台地があり、かつては石比地横穴［6］が存在していた。

香取神宮の成立は、同じ性格をもちほぼ同時期に成立したとみられる鹿島神宮の常陸風土記の神領の記事や、六国史等の東北経営に関する文献上、多賀城跡の調査結果からみて古墳時代後半7世紀頃の時期と思われる(註4)。当時香取神宮は鹿島神宮とともに大和朝廷の東北経略との関連が深く、この地域は兵站基地としての機能を果していたと推定される。

奈良平安時代になると周辺遺跡の分布密度が濃くなる。玉造上の台遺跡［13］(註5)、牧野遺跡群の他、香取の台地上には遺跡が集中しており、長部山遺跡［24］(註6)、吉原三王遺跡［22］(註7)など大規摸な集落が認められる。この時期香取神宮は前代より東北経略に欠かせない軍神として、ひき続き国家的な庇護を受けていた。神宮周辺の十二郷は神領とされており、香取の台地を始め群内には神宮に関連する諸施設が設けられていたと推定される。この時期の遺跡の多さもうなづけるところである。仁井宿東遺跡での結果からも明らかであるが、微高地上に同時期の大規模な遺跡の分布が推定される。なお小野川を境に西側は摂関家領の大戸荘となっている。



第2図　遺跡周辺地形図（1/6,000）

中世には新興勢力である武士の崇敬を受け、依然として香取神宮が大きな位置を占めていた。この時代に関しては「香取文書」とよばれる香取神宮関係の文書がよく残されており、当時の状況を推定することができる(註8)。佐原周辺には神社領の名田が拡がっており、仁井宿は「井戸庭」あるいは「井戸場」と呼称され、神官の「録司代」や「案主」の住居があったとされる。また中世後半の時期は全国的に荘園の押領を通じ徐々に武士が勢力を拡大していった時期であり、周辺の神宮領においても同様の拮抗状況にあったことも明らかになっている。

「香取文書」のなかの「旧大禰宜家文書」の「海夫注文」によれば、中世には香取海沿岸に篠原、井戸庭、佐原などの津が出現している。これらは元来、平安期には香取神宮の庇護・支配下にあった漁村という形であったろうが、中世にいたり商品経済の発展にともない、漁業の枠を超え、商業、港の町としての機能を併せ持ち始めた村が出現したと理解される。なかでも南北朝・室町期の佐原には定期市が設けられ、水上交通の拠点、商業の中心として栄えつつあった(註9)。

南北朝から戦国期には、時勢を反映して、周辺の台地上には砦・城跡［24・25］が多く分布している。周辺地域には千葉氏の支族である国分氏の影響力が強まってくる。国分氏の根拠地は遺跡の南方の香西川流域であり、居城の本矢作城［17］・大崎城［16］が設けられるが(註10)、戦国時代末期には佐原市街西方の岩ケ崎城［11］に進出している。

天正十八年の豊臣秀吉の関東制覇に伴い、小田原北条氏に属していた国分氏は滅亡し、引き続く徳川家康の関東入府により佐原には鳥居元忠が封ぜられ、大崎城、次いで岩ケ崎城を居城とした。だがほどなく鳥居氏は奥州に転封になり、以後佐原は概ね旗本領となって分割して知行された。

江戸期には幕府の治水政策の進展や交通路整備の方針により、河岸が整備され利根川の水上交通は活発になる。佐原にも河岸がおかれ、潮来方面への分岐点でもあって、水運の要衝であった。また市が定期的にたって商品の流通が盛んになり商業町として大いに発展した。香取神宮は庶民的な信仰の対象となり、鹿島神宮、茨城県神栖町の息栖神社をあわせ、舟での三社詣りが盛んであった(註11)。

水上路のみならず、市内からから各方面に通じる道路が整備され、佐原は陸上路の要衝でもあった。佐原から津の宮を経て銚子へ向かう「銚子街道」は、日常的な主要交通路として住民に利用されていた(註12)。仁井宿東遺跡ではまさにこの中近世からの街道跡ならびに建物跡・井戸跡を検出することができたことになる。また現道下で調査できなかったが、香取神宮一の鳥居を通る現在の県道は、佐原から直接陸路香取神宮へ至る道で「香取街道」と称される主要路であった。また遺跡の周辺には十三塚とよばれる塚ないし古墳が存在し信仰の対象とされていた地域でもある。

明治時代以降の佐原には、鉄道の開通と道路交通網が整備されたことで大きな変化がおこった。

水運はすたれてしまい、かつ近年の東京集中の傾向により、地方都市としてはやや停滞気味である。しかし、かつての水運の要衝としての繁栄の面影は小野川の水路や旧商店の建物に残されている。現在は、いぜん東総地区の中心的な都市であり、周辺の開発地のベットタウンとして、また古い情緒を残す町並みを活かした観光都市として、活性化する試みがなされているところである。

表1　遺跡一覧

No.	遺　跡　名	概　　要
1	仁井宿東遺跡	本書所収
2	牧野谷中田遺跡	本書所収、縄文・古墳後期～中世包蔵地
3	浅間神社古墳	前方後円墳
4	変電所裏古墳	前方後円墳（削平）
5	仁井宿古墳群(仮称)	狐塚古墳、図能古墳 県立病院裏古墳等
6	石比地横穴	古墳時代（消滅）
7	コシテ遺跡	縄文後期・奈良平安時代包蔵地
8	権現台遺跡	古墳後期・平安時代包蔵地
9	塙台遺跡	古墳後期包蔵地
10	神田台遺跡	縄文早期・奈良平安集落跡
11	岩ヶ崎城	近世城跡
12	玉造古墳群	前方後円墳、円墳
13	玉造上の台（ムチナカ）遺跡	縄文・古墳後期・奈良平安・中世集落跡
14	山之辺古墳群、山之辺すえひろがり遺跡	古墳、弥生・古墳・平安・近世集落跡
15	白幡古墳群、白幡遺跡	前方後円墳、円墳、箱式石棺1基調査
16	大崎城	中近世城跡、多郭構造
17	本矢作城	中世城跡
18	磯花遺跡	縄文中後期集落跡 古墳後期・平安包蔵地
19	新山遺跡	縄文中期包蔵地
20	金田貝塚、金田遺跡	地点貝塚 縄文中期包蔵地
21	下小野貝塚	縄文中期貝塚
22	吉原遺跡、吉原三王遺跡	縄文中期・古墳後期・奈良平安集落跡
23	多田遺跡	縄文中期・平安集落跡
24	長部山遺跡	弥生・古墳後期・奈良平安集落跡、中世
25	山崎城	中世城跡
26	神道山古墳群	前方後円墳、円墳

補　註

（註1）岡崎文喜他「磯花遺跡」磯花遺跡調査会　1981

岡崎文喜他「磯花遺跡III」磯花遺跡調査会　1984

原田享二他「大根磯花遺跡の発掘調査」佐原市内遺跡群発掘調査概報佐原市教育委員会　1987
(註２) 原田享二「佐原市仁井宿浅間神社古墳－低地古墳群の成立をめぐって－」香取民衆史４　香取歴史研究者協議会　1985
(註３) 篠遠喜彦・江守正義・岡田茂弘「千葉県下小野貝塚発掘報告」考古学雑誌36－33　1950
(註４) 神宮本体の調査がなされていないために明言はできない。
(註５) 原田享二「佐原市上の台遺跡（旧香取郡）」房総における歴史時代土器の研究　房総歴史考古学研究会　1987
(註６) 小松　繁他「佐原市長部山遺跡」長部山遺跡調査会　1980
(註７) 池田大助他「佐原市吉原三王遺跡出土遺物について」研究連絡誌　第７・８合併号　㈶千葉県文化財センター1984
栗田則久「佐原市吉原三王遺跡出土の墨書土器について」研究連絡誌　第10号　1984
(註８) 千葉県史編纂審議会「千葉県資料　中世篇　香取文書」1957
(註９) 山本直彦「砂洲上に発達した中世の佐原」図説　千葉県の歴史　河出書房新社　1989
山本直彦「地名からみた中世の村　中世の佐原」「資料が語る千葉の歴史60話」千葉県高等学校歴史研究会歴史部会
横田光雄「活発になった房総の市　流通経済の発達」「資料が語る千葉の歴史60話」千葉県高等学校歴史研究会歴史部会
(註10) 千葉県文化財センター「飯野陣屋跡・山崎城発掘調査報告」千葉県中近世城跡研究調査報告書第８集　1987
千葉県文化財センター「大崎城・万喜城跡発掘調査報告」千葉県中近世城跡研究調査報告書第５集　1984
(註11) 赤松宗旦「利根川図誌」　江戸時代の観光案内的な書　木下から三社詣りの舟が出ていた
(註12) 千葉県教育委員会「銚子街道」千葉県歴史の道調査報告書　3　1987

その他の参考文献

㈶千葉県文化財センター　「千葉県埋蔵文化財地図(2)－千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区－」　1986
佐原市　「佐原市史」　1966

第３章　調査の方法と経過

１　調査の経過（第４～６図）

調査の対象となったのは仁井宿変電所わきから新部橋までの総延長約1.4km、道路併設部幅約27m、河川部最大幅約83m、総面積約56,300m²である。期間および面積は以下のとおりである。

Ａ　昭和60年次調査

昭和61年２月７日から昭和61年２月28日

№１遺跡と仮称した区間、約300m²の本調査（第１次とする）を行い、井戸跡・溝若干、掘立柱建物跡多数等を検出した。

Ｂ　昭和61年次調査

昭和61年６月１日から昭和62年３月20日

№２遺跡と仮称した56,000m²の範囲について調査を実施した。

本調査面積6,000m²、確認調査延べ面積2,400m²になる。

協議の結果、工事の工程上調査が急がれる市道をはさんだ区間については、前年度の本調査範囲に接続する区域であり、当然遺構が検出されることが予想されたので、確認調査を省略し即本調査を行うこととし、昭和61年６月１日から昭和61年９月30日まで、前年度調査区から南へ延長80mまで約2,000m²の区間の本調査（第２次）から開始した。

この以南の54,000m²については順次確認調査を実施し、その結果をもって本調査範囲を決定して行うこととした。まず確認調査はその南端から県道佐原・山田線（佐原街道）までの約9,500m²について、昭和61年10月２日から昭和61年10月23日にわたって行った。終了後、引続き県立病院下から取水堰間約12,400m²について昭和61年10月27日から昭和61年11月21日までの間実施した。

その結果、追加する本調査範囲（第３次）を既調査区から南へ総延長160mの部分、約4,000m²に決定し、昭和61年11月25日から昭和62年２月17日まで約３ヶ月間で実施した。

残りの確認調査は県道佐原・山田線からから県立病院わきまでの区間約10,800m²を昭和62年２月３日から昭和62年２月18日まで、取水堰以南新部橋までの区間約21,300m²を昭和62年２月19日から昭和62年３月20日まで実施した。後半の確認調査では遺構が牧野谷中田遺跡での溝１条のみの検出で、本調査は実施せず、確認調査の期間内で溝の精査を行い終了した。

2　調査の方法

A　グリッドの構成（第3～6図）

調査区内を公共座標に合わせて、20m間隔の方眼を組み大グリッドを構成した。それをさらに4m間隔で区切り、一辺4mで、計25個の正方形に分割して、遺物や遺構の位置を記録する小グリッドとした。大グリッドは南北軸を算用数字を、東西軸をアルファベットをふり、29Iのように呼称した。25個の小グリッドは第3図のように最北列が北西隅00から04まで、順次南に10代ごと繰下がって同様に最南列40から南東隅44までの番号をふった。

00	01	02	03	04
10	11	12	13	14
20	21	22	23	24
30	31	32	33	34
40	41	42	43	44

第3図　小グリッド構成

B　発掘調査の手順

確認調査は、微高地となっている県立病院までの区間については基本的には2m×8mのトレンチをほぼ80m²に1ヶ所の割合で設定、県立病院以南の河川部については2m×8mを基本とし適宜2m幅のトレンチを設定し調査した（第4～6図）。なおあらかじめ盛り土の部分は重機で除去し、以下を人力で発掘した。

本調査においては表土層・攪乱は重機で除去、包含層以下を手掘りにし、遺物を残しながら掘り下げ、遺構を確認し、遺構の精査にかかるという工程をとった。

C　遺物の取り上げ

遺構外の遺物についは基本的に小グリッドごとに通し番号をふり、遺構中の遺物は遺構ごとに通し番号で実施した。

昭和60年次調査区を№1遺跡（遺跡コード209-033）、昭和61年次調査区を№2遺跡（209-038）としている。遺跡コードは仁井宿東遺跡では033と038の2種になる。

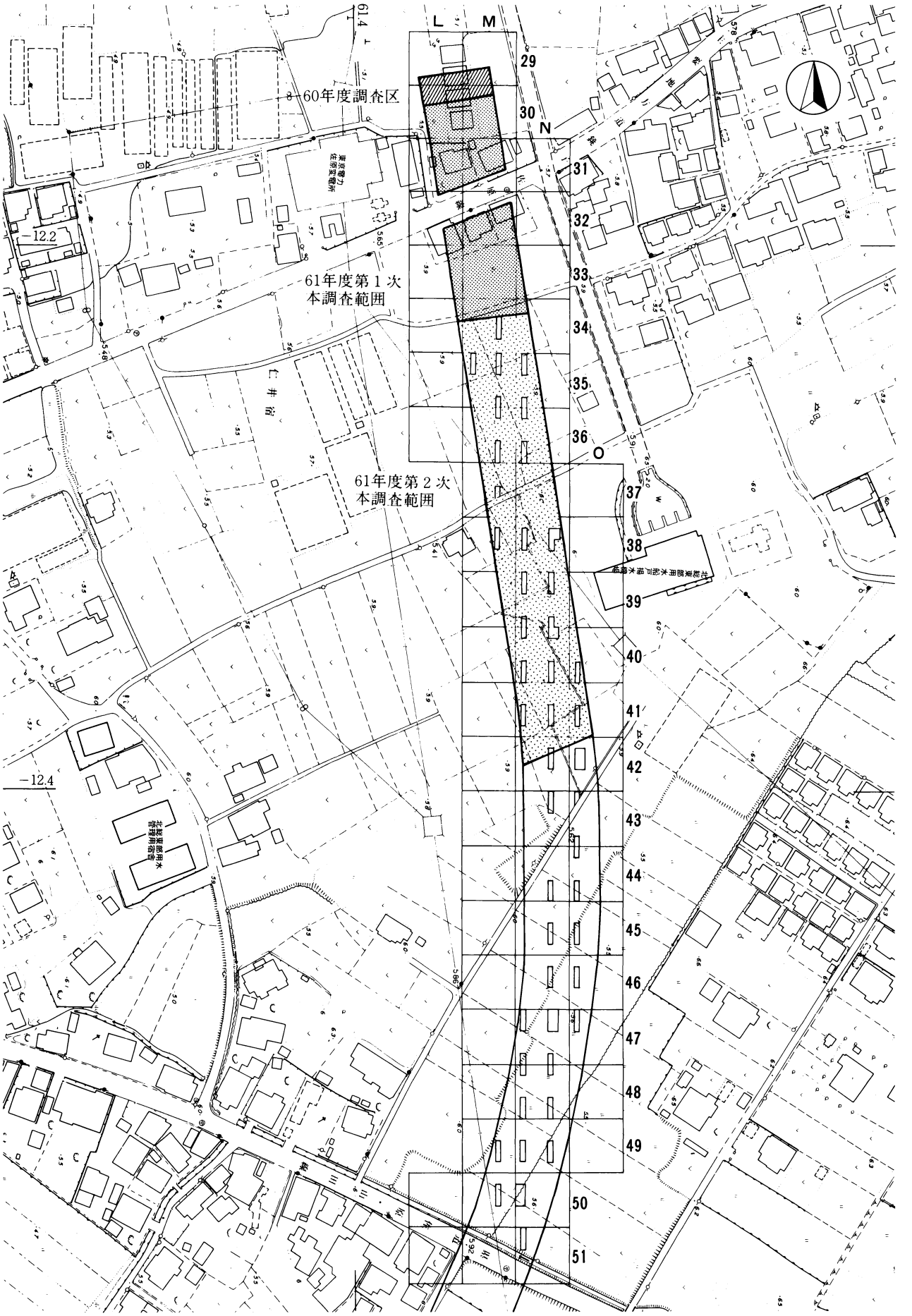
遺物には下記の順で上から順に三段に注記してある。

①遺跡コード

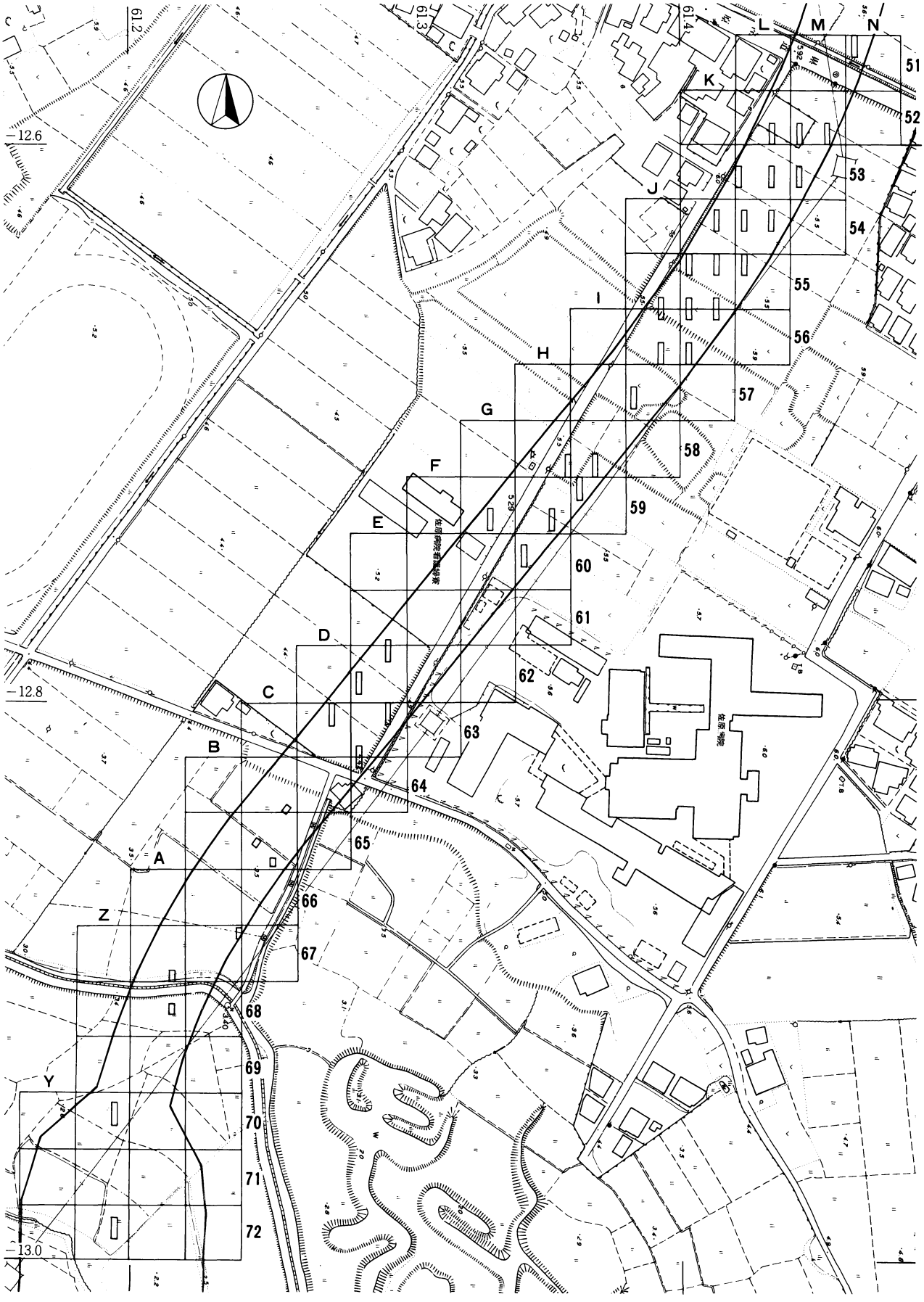
②グリッドあるいは遺構ナンバー

③遺物通し番号

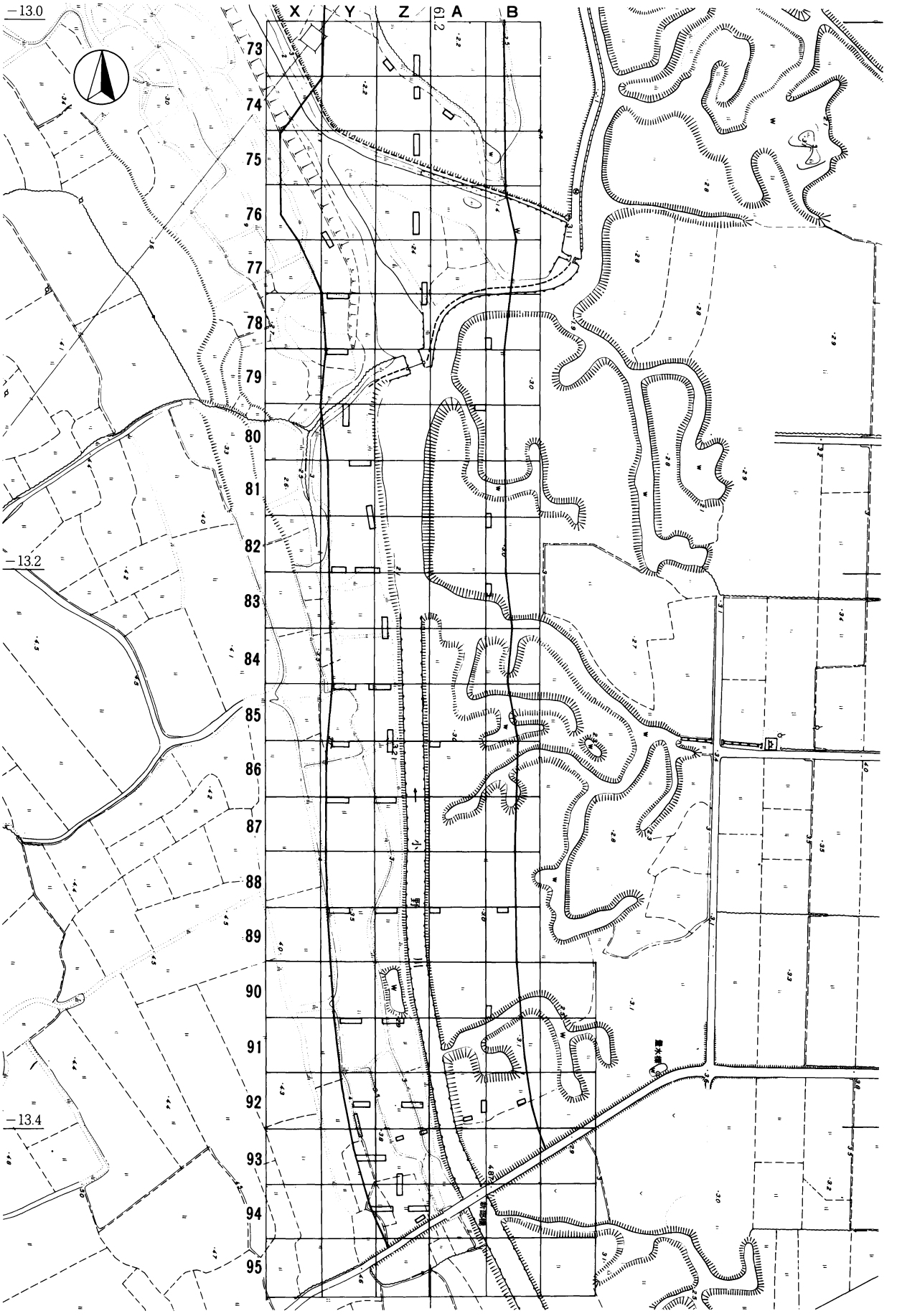
なお、昭和60年調査では一部で仮番号や大グリッド通し番号を使用し取り上げていたが、本報告では小グリッド単位に直して表示してある。



第4図　調査区(1)（1/1,000）



第５図　調査区(2)（1/1,000）



第6図　調査区(3)（1/1,000）

第４章　仁井宿東遺跡の調査

第１節　基本層序

当遺跡では、佐原の微高地を横断する形で流路が設定されたため、地点により土砂の堆積状況が大きく異なっている。①、②の30列は微高地上にあり、畑地として使用されていた区域である。標高は５ｍ弱である。40列以南は水田区域であり、特に64～72列は⑤で示されるように沼田の状況を呈している。73列以南は⑥のように沖積層とみられる細かい砂（IIIからＶ層）が堆積していた。

標準的な土層堆積は以下の層序に分類できる。

Ｉ．表土

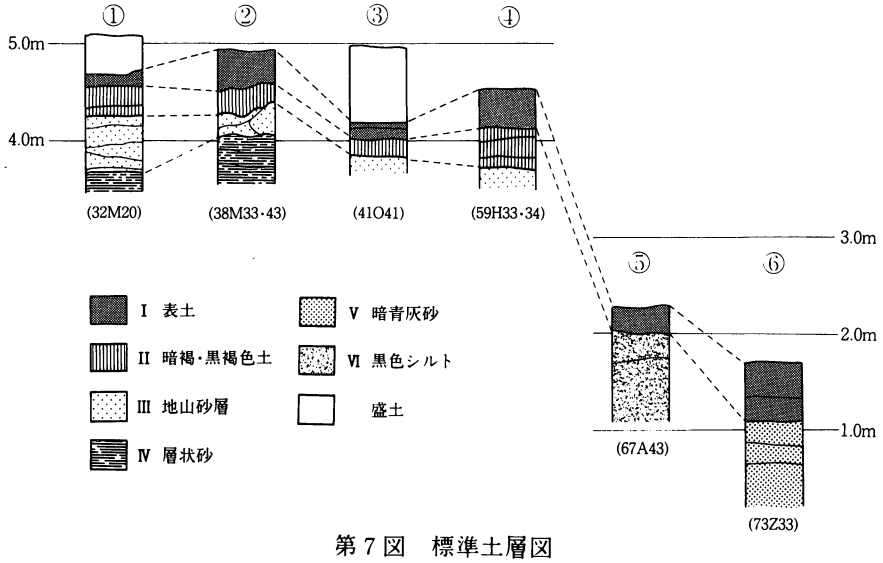
耕作土、盛り土の部分。耕作土の厚さは畑地部分で平均0.6m、水田部分で0.2m である。

盛り土が水田部分には１ｍ以上の厚さに山砂が敷かれており、確認調査では非常に苦労した。また上層の土が取り除かれ、排土が充塡されている例もめだった。

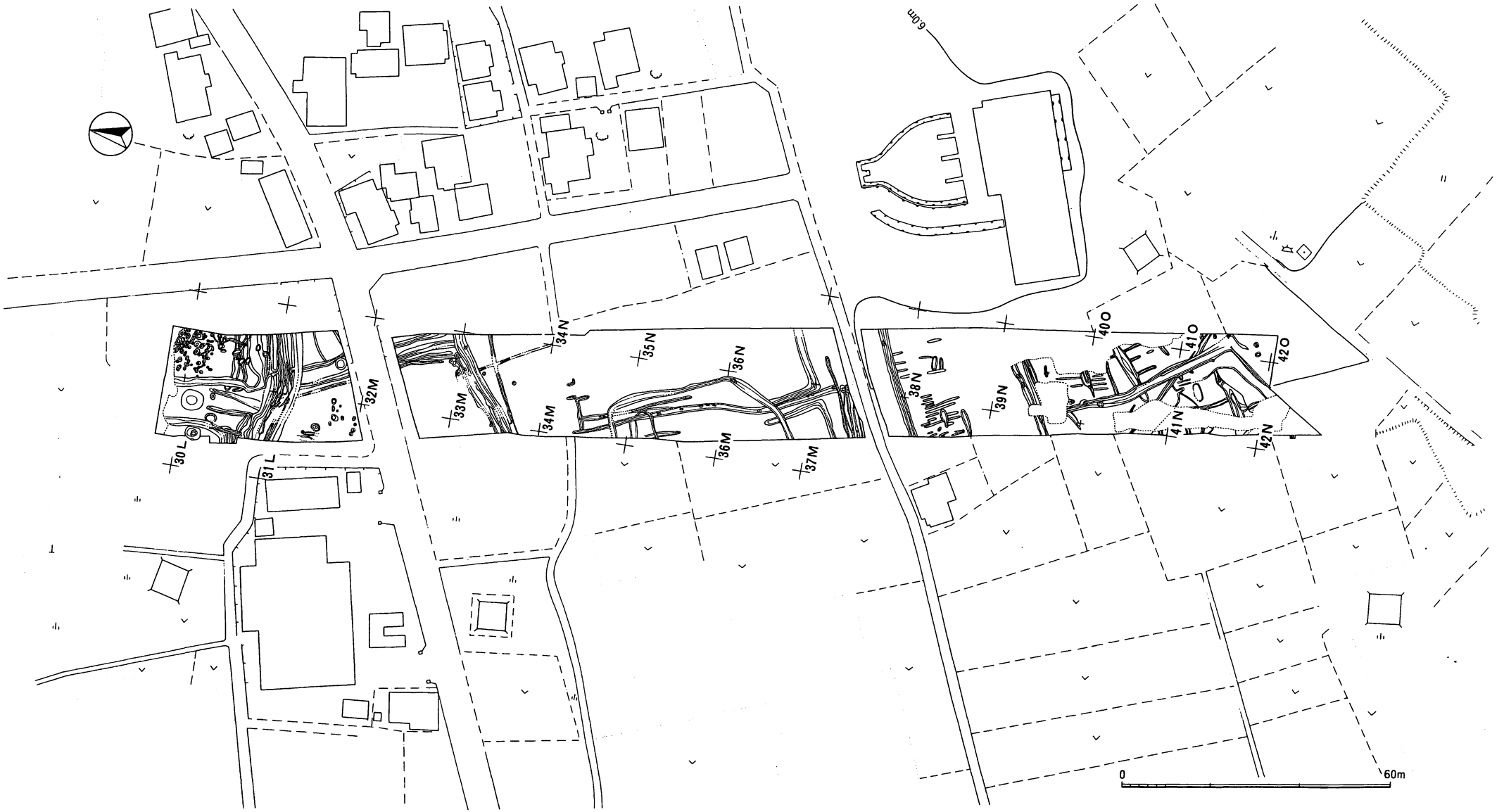
II．表土下の遺物包含層を２層とした。さらに上下に分層される。

IIａ．暗褐色土

上部の土層。砂礫・浮石粒を多量に含む。腐食質で粘性のある締まった土。厚さ15cmほど。中近世の包含層でもある。構成物から見て主に川の氾濫で堆積したものとみられる。基本的には耕作土と共通する。一般の遺跡では表土下部としてとらえられるだろう。



第７図　標準土層図



第８図　仁井宿東遺跡遺構配置図

II b．黒褐色土

砂の分量が多い。29・30列では認められなかったが、31列以南ではほぼ全域で確認された。厚さ15cmほど、主に奈良平安時代の遺物の包含層である。II a 層堆積前の旧表土の性格を持った土層であろうか。38Nでは縄文時代後期称名寺式土器の復元個体の出土が得られている。奈良平安時代の遺物は広範囲に漫然とした散布をみせていた。川の氾濫との因果関係が注目されるところである。

III．地山砂層

遺構の確認面でもある。微高地上では黄褐色混礫砂が主体であるが、部分的に黒褐色砂など、異なった質の砂が、川の流路に沿った形で東西に延びる幅広いベルト状にみられた。利根川の搬出してきた土砂が常時均質ではないためであろう。黄褐色の色調を示すのは、ロームや浮石礫が主要な構成分となっているためで、利根川（鬼怒川）が搬出した土砂の供給源となった、栃木県北部の地質状況が反映されているものと思われる。

IV．層状砂

粒度の異なる砂礫が層状（いわばサンドイッチ状）に堆積しているもの。水成層。微高地部分にみられる。縄文後期土器が摩滅状態で出土している。

V．暗青灰色砂

70列以南の水田耕作土直下の基盤層の砂。グライ化して青灰色を呈している。植物繊維が下部に顕著であつた。標高１ｍ以下がこの層になっている。粒子細かく、成田層と近似の質であり、新部橋まで連続して検出されている。小野川起源の砂ではないかとおもわれる。74Ｚ24区では直上で縄文時代後期加曽利Ｂ式が出土している。

VI．黒色シルト

沼地部分の上部堆積層。病院南の水田地域でみられる。もともと小野川旧流路際の69列までの部分は沼田であったとのこと。樹木細片やマコモ等の繊維を含む。砂質である。

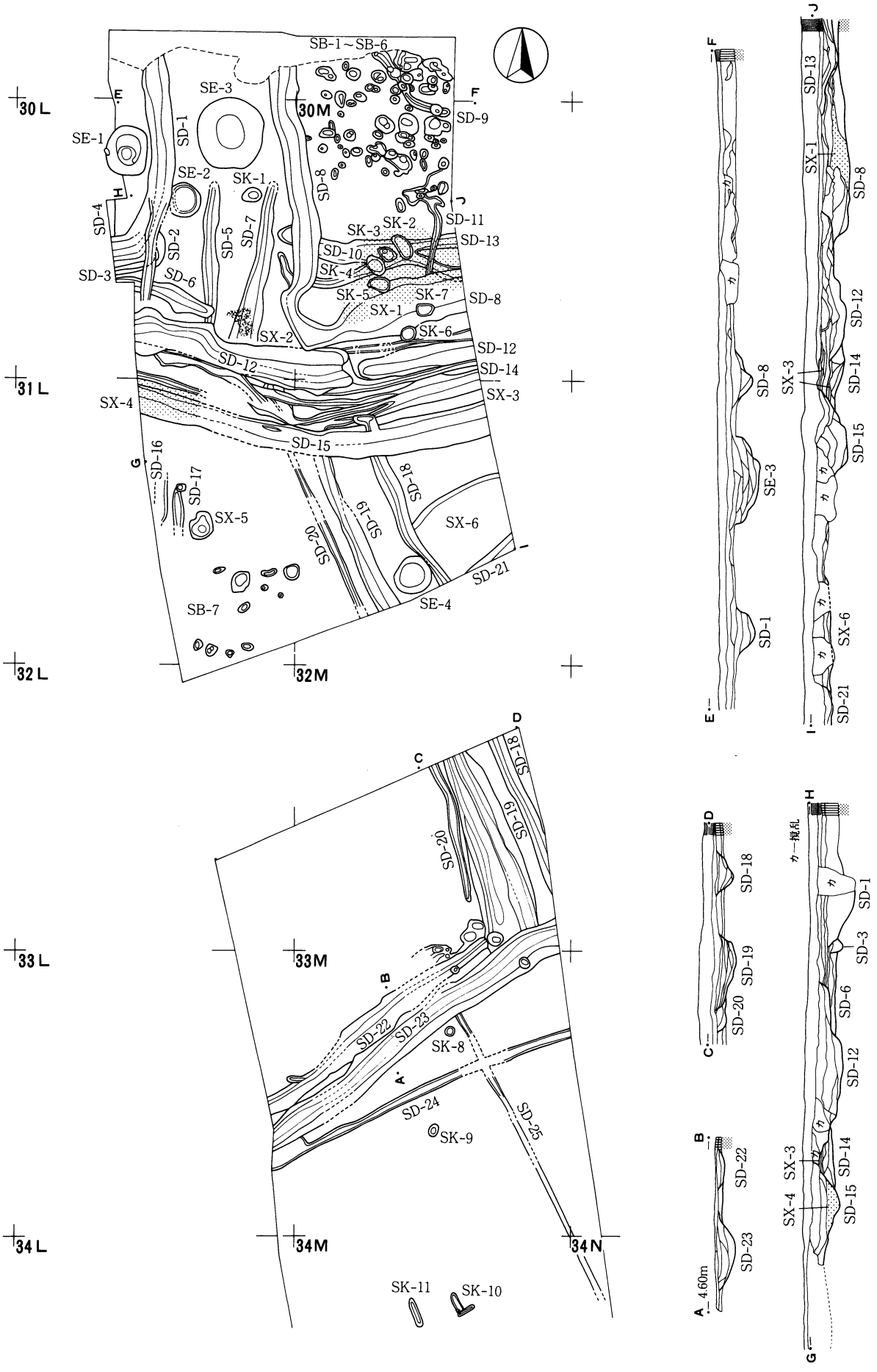
第２節　遺構と出土遺物

本調査区は幅27m、南北250m の長さにわたり、遺跡の状況は地区ごとにかなり異なった様相を呈しているので、遺構・遺物の検出状況等を考慮して、以下の３区域に分割して記載する。

Ｉ区　調査区北端から南へ90m の範囲で、銚子佐原線をはさんだ両側の区間である。グリッドでは29列からほぼ33列までになる。奈良平安時代、中近世の各種の遺構が検出された。

II区　34列から38列までの約95m の区間。若干の包含層、および溝状遺構の分布がみられた。

III区　39列以南、水田部までの約65m の距離の区間。溝状遺構、奈良平安期の井戸等が検出されている。



第９図　Ⅰ区遺構分布図　（平面図1/400 断面図1/200）

1　Ⅰ区の調査（第９図、図版３）

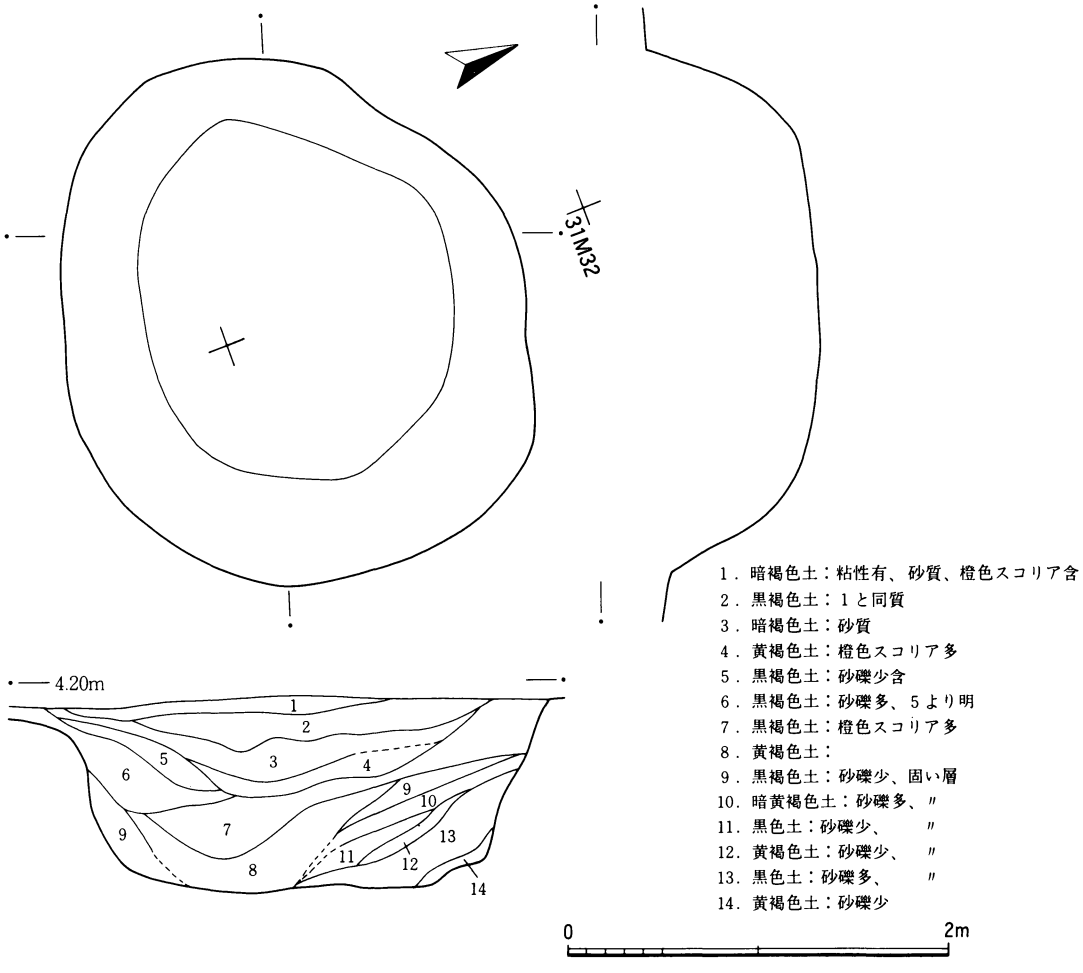
29列からほぼ33列までの区間、面積にして約2,250㎡の範囲になる。旧街道とその北側では中世末から近世にかけての遺構分布域、旧街道以南の溝を主体とする遺構の分布する土師器・須恵器の包含層からなる。検出された遺構の内訳は井戸跡４基、整地跡３ヶ所、掘立柱建物跡群２群、街道跡１ヶ所、土壙11基、特殊遺構５基、溝25条である。

A　奈良平安時代の遺構

井戸跡

SE－４　038－015（第10・11図、図版４）

県道際、31M32に位置する。II層下部で径1.5mほどの黒色の落込みとして検出した。平行してほぼ南北に走るSD－18とSD－19の溝に挟まれており、東北壁上部がSD－18と若干重複している。また整地跡SX－６が東北側に溝SD－18を介して隣接している。

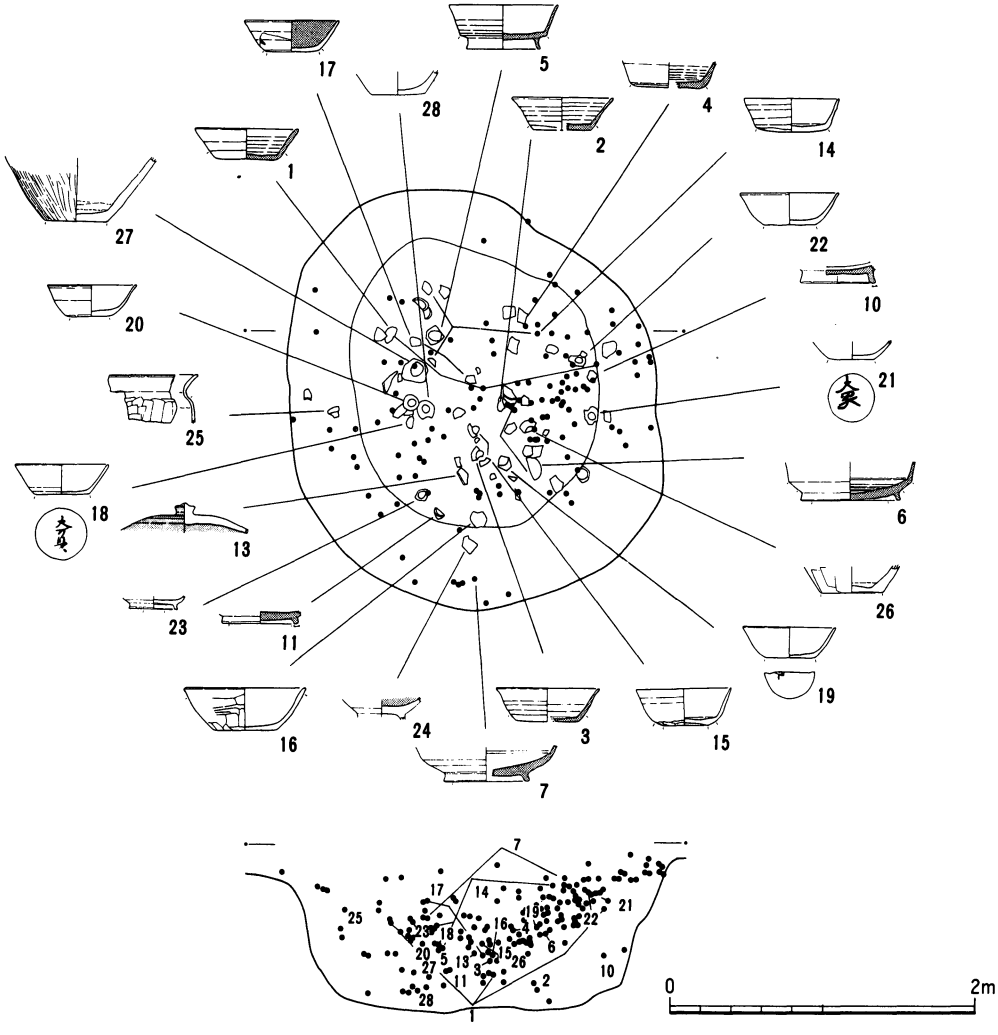


第10図　SE-4 平面図

開口部は径2.7m×2.4mのやや東北－西南方向に長い円形、底面で径1.6m×2.0mのほぼ円形を呈し、深さ1.0mを測る。断面は下部が筒状を呈し、上部は擂鉢状に開口している。上部は壁の崩落があるとみられる。底面は若干皿状をなすが、第III層の砂層中に設けられ、湧水もあり本来の形か否かは不明。

覆土は上部中央にレンズ状に暗褐～黒褐色の砂質土層があり、中位には壁ぎわから底面にかけて流れ込む形でレンズ状に黒褐色土層、黄褐色土層、下位には礫混じりの黒色を基調とした土層が入る。

遺物は土師器主体に総数約480点が出土した。大半が中間層からのもので、底面にむけて落ち込むような形で分布していた。遺物の時期は8世紀の中頃から10世紀代まで幅が広いものがほぼ同一の層から得られている。しかも正位に置かれたように配されたものや、完形に近いものもあり、理解に苦しむところである。

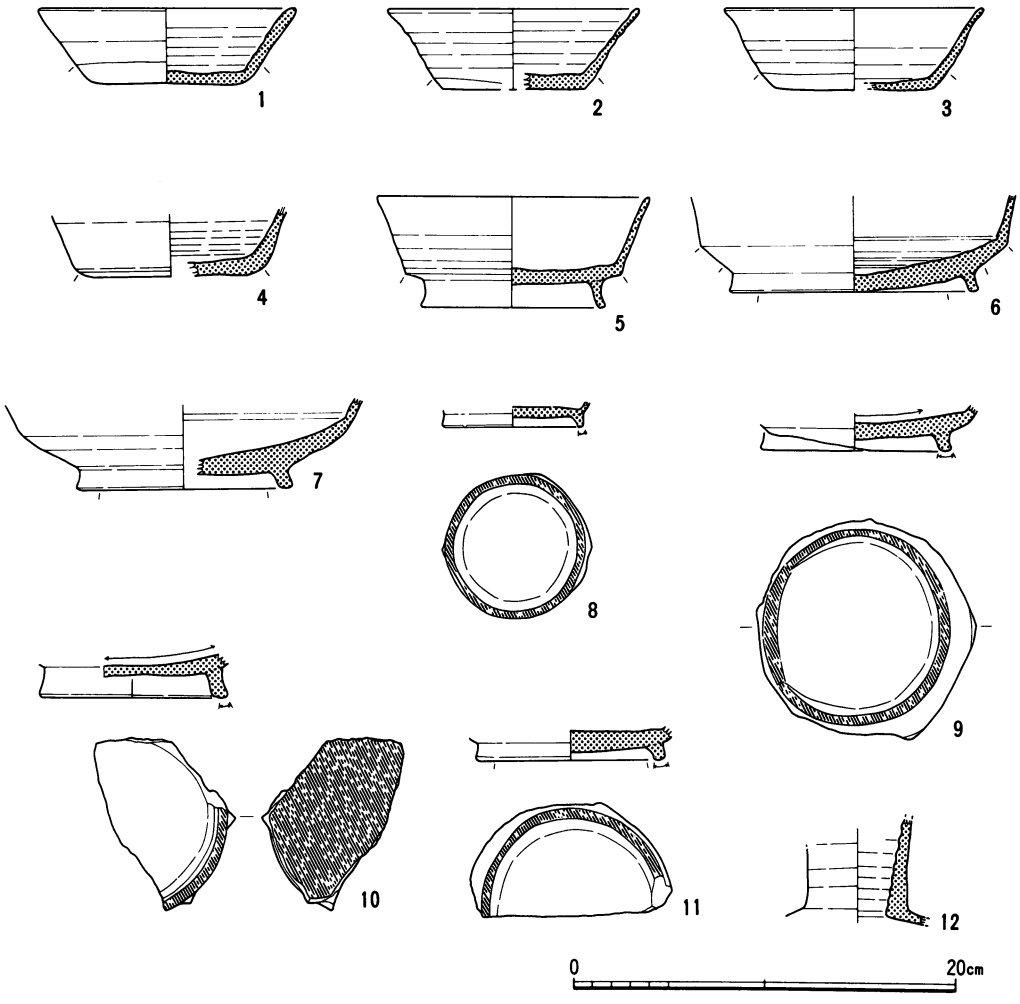


第11図　SE-4 遺物分布図

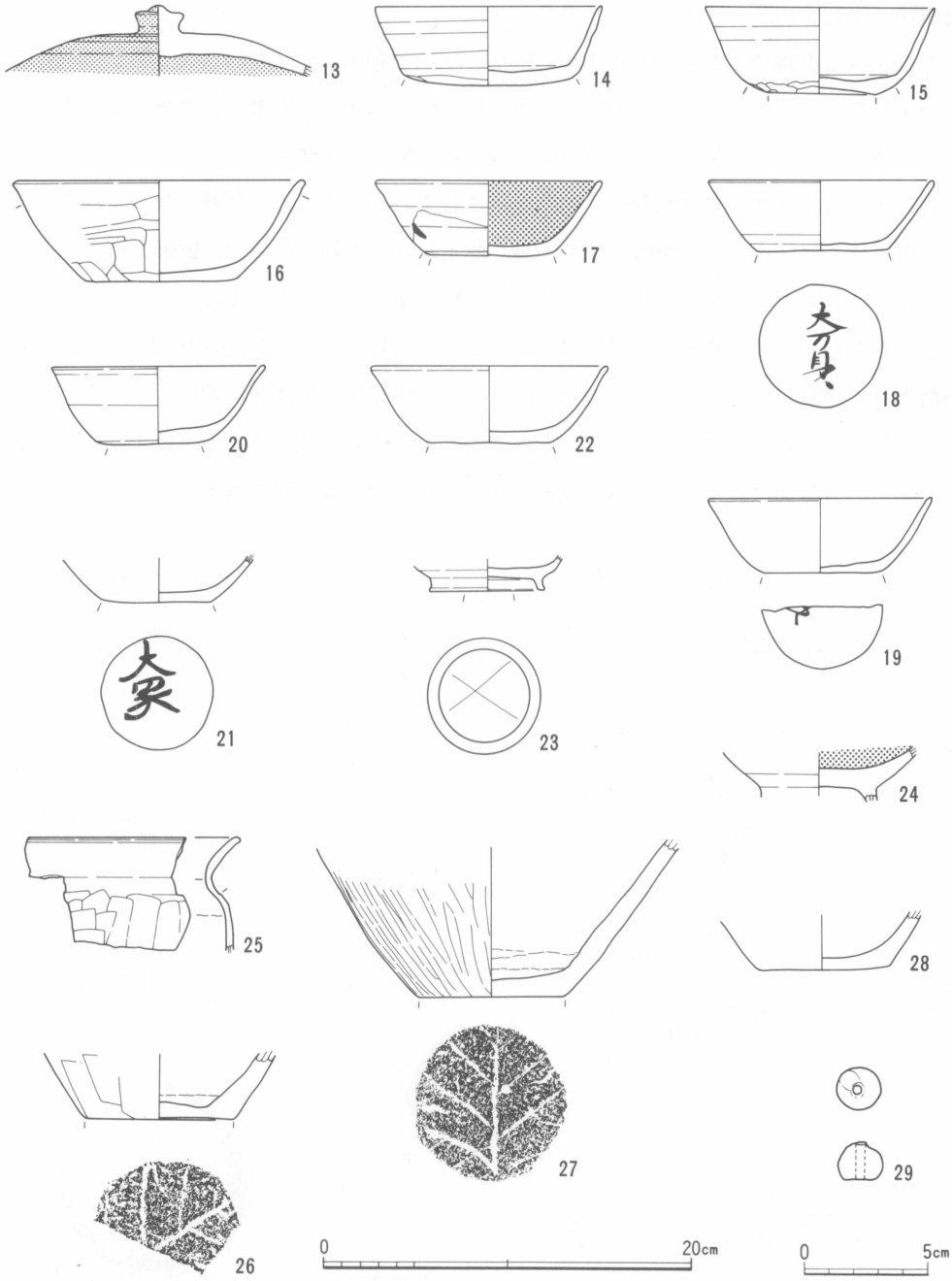
出土遺物（第12・13図、図版14・15、表２・24）

１から４は須恵器坏である。１はほぼ完形のもの。口径13.5cm、器高4.0cm。胎土に白色細砂粒を多量に含んでいる。内面口縁上端、外面底部の稜の部分が全周擦られ摩滅している。２は口縁部が薄くなり、外反するもの。青みがかっており堅く焼き締まっている。胎土に白色細砂粒を含んでいる。底面、稜は回転ヘラ削りを施されている。３は口縁が薄くなって、やや外反する。白っぽく軽い土質で、焼成はやや不良。胎土には白色細砂粒の他、微細雲母がめだつ。胴部下端から底面をヘラ削りを施している。底部稜は摩滅している。４は下半部の破片で、箱型に近い器形を呈する。底面、及び稜にかかる部位に回転ヘラ削りが施されている。稜部はよく研磨され、摩滅している。雲母のめだつ胎土で、全体的な印象は３に類似している。

５から11は須恵器の高台付坏である。５は口縁の大半が欠けている。高台は末端で外反している。胎土に白色細砂粒を少量含み、生地はきめ細かい。焼成良好で外面の一部に自然釉が認



第12図　SE-4 出土遺物(1)



第13図　SE-4 出土遺物(2)

められる。東海系のものとみられる。高台の端部がやや摩滅している。6は底面の球状に膨らむ大型のものである。7は大型品であるが底部から口縁には緩やかに連なり、稜がない。高台端が擦られて摩滅している。8は小型品。高台のみで端部が摩滅している。9は高台部のみ。内外面中央部、高台端部が擦られており、特に高台は斜めに擦り減っている。6～9は胎土に

雲母が顕著であり、焼成等は3と共通している。10は高台部の1/2のみ。内面は滑沢に研磨されており、また高台端部も摩滅している。白色細砂粒含有多く、胎土・焼成等全体的な感じは1に類似している。11は高台部の1/2のみ。内面、高台端部が摩滅している。雲母を胎土に顕著に含む類である。

12は須恵器長頸壺の頸部である。胎土は精緻で焼成も非常によい。内外面には灰釉がかかっている。東海系のものであろう。

13は土師器坏蓋である。つまみ部は高い宝珠形。内外面にはミガキ調整、赤彩が施されている。

14～22は土師器坏である。14は完形品。口径12.5cm、器高4.3cm、底径9.2cm。底部は厚い。箱型に近い形状をなしている。底面は凸レンズ状に手持ちヘラ削りされている。底面及び稜は軽く摩滅していた。内面上端に焼成時の炭化物が付着していた。15は口径12.5cm、器高4.7cm。体下半部は、底面に糸切り痕を残し、上げ底をなす。稜の部分が手持ちケズリをうけている。16は碗に近い器形をなすもの。推定口径15.8cm、器高5.4cmと大ぶりである。全体に橙色を帯びている。体部、底面に手持ちヘラ削りを施している。内面はよく磨かれている。17は内黒土師器で、内面が磨かれている。体部に墨書があるが一部しか残っていない。18はほぼ完形で口径12.3cm、器高3.8cm。底面は手持ちヘラ削りされており、「大万具」と墨書されていた。胎土に微細砂が顕著に認められる。19は18と酷似した個体で底面に「具」の文字の下位とみられる部分が残っている。20は口径12cm、器高4.2cm。非常に焼きのよい土器である。口縁上端で緩やかに外反し、体部下半は球状を呈している。底面は口径に比して小さく、手持ちヘラ削りが施されている。21は20と近似した個体で、ヘラ削りされた底面に「大冢」の墨書がなされていた。「冢」の字は「家」の異体字になる。22は器形や調整面では20に似るが、底径が7.0cmと大きめである。胎土には白色微細砂粒が多量に含まれている。

23は高台付坏であり、箱型に近い器形をなす。高台裏には焼成後に「X」の線刻がなされている。24は高台付碗状の形態になると思われる。内面は黒色を呈している。高台部は剝落している。

25～29は土師器の甕である。25は小型、薄手のもので、頸部が大きくくびれ、胴部との接合部で段がつく。胴部は縦ヘラ削りが認められる。26は底面木葉痕、外面ヘラ削りの底部片。胎土に石英・長石の含有が著しい。27は外面縦ヘラナデが認められ、底面に木葉痕がつくもので「常総型甕」の底部である。胎土には石英・長石の含有が顕著である。28は底部片で、内外面とも平滑にヘラナデされている。胎土は微細砂を含むもの。

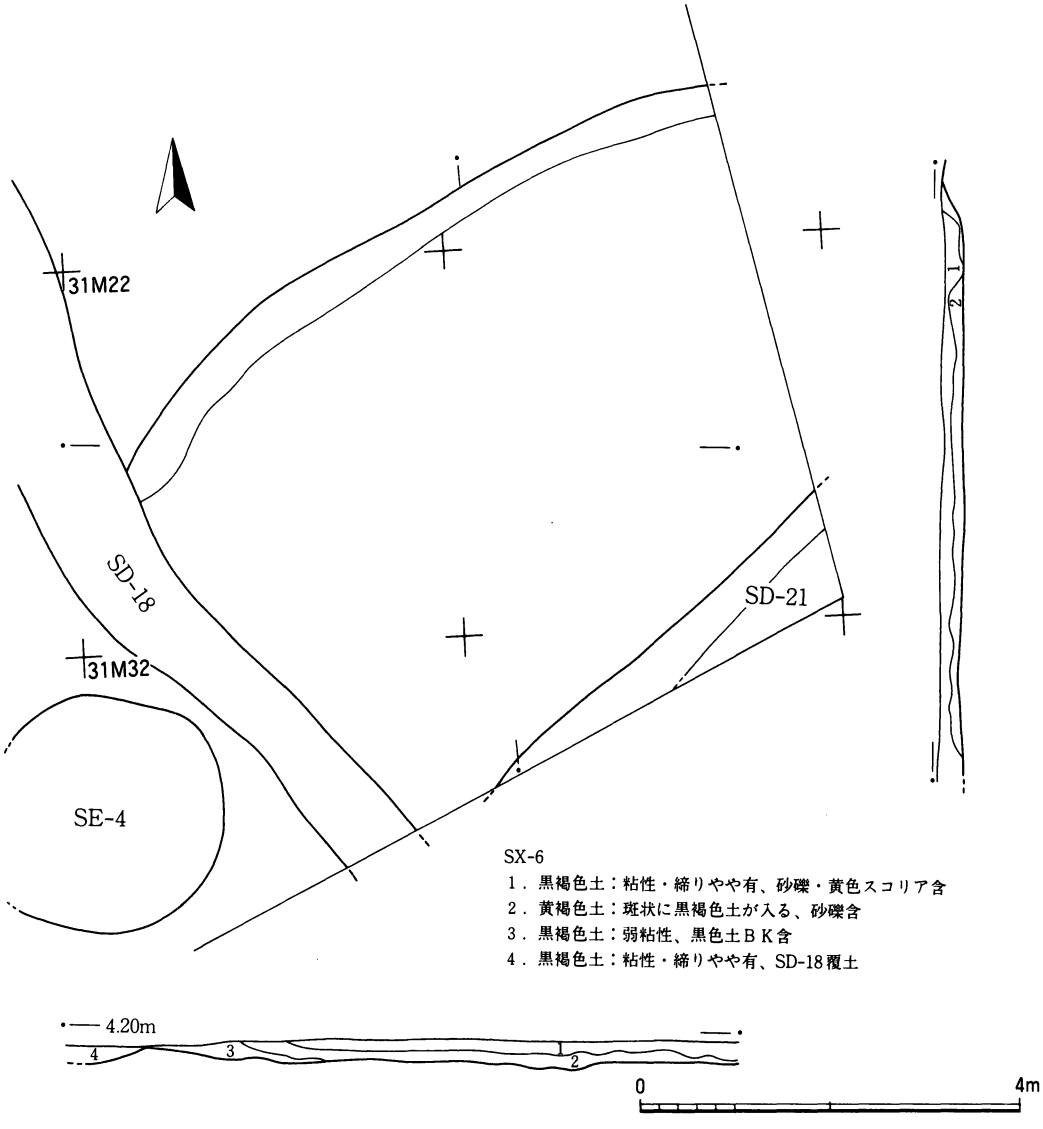
30は数珠状の土玉である。焼成前に中軸に穴があけられている。

整地跡

SX－6　038－003（第14図、図版４）

県道のきわ、調査区東壁にかかる31M22,23を中心とした個所にある。II層を下げたところ、土師器を包含する黒色の土の広がりを確認し、奈良平安期の遺構であるとしてとらえた。東壁と南側が調査不可能であったことと、西側に溝が走っていたため、壁は北側のみで全容は不明である。西南で溝SD－18をはさんで井戸跡SE－４と接している。

北壁はダラダラ上がりで高さ約20cmほどしかない。覆土の厚さも同様で浅い。床はほぼ平坦に整形されている。柱穴は認められなかった。竪穴住居跡の可能性もあるが、壁が一面のみしか確認できていないため断言できないので、一応整地跡としておく。



第14図　SX-6平面図

遺物は土師器破片主体に949点が出土した。31M22区と23区の境に特に集中がみられる。そこが遺構の中心であろうか。

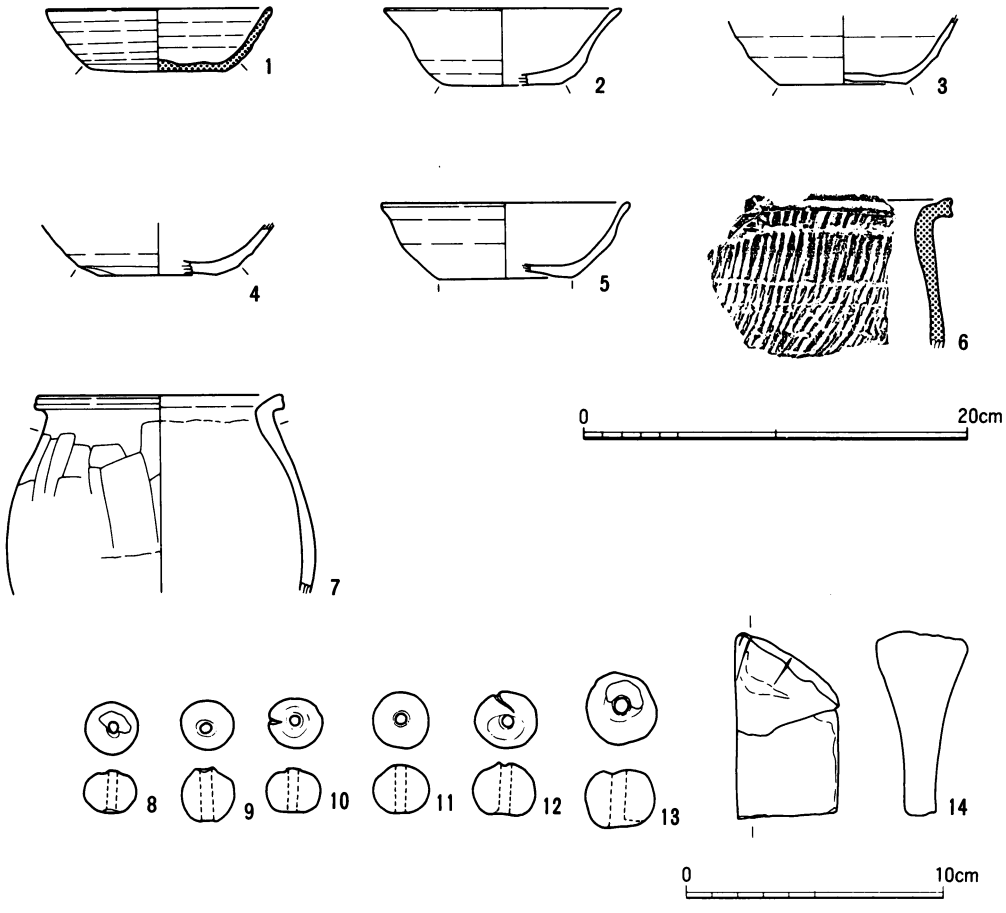
出土遺物（第15図、図版16、表３・24・26）

１は須恵器の坏である。焼成はあまりよくない。口径13.8cm、器高3.3cm。ロクロ成形で、底面手持ちヘラ削りを施されている。

２～５はロクロ土師器の坏である。２は底面手持ちヘラ削り、口縁下部が薄くなりながら、かるく外反している。白っぽい色調のもの。３は底面手持ちヘラ削りの施されたもので、全体的な感じは２に類似。４は底面と稜部に手持ちヘラ削りの施されたもので、黒っぽく焼成がよくない。胎土に白色微細砂を多量に含む。５は底面に糸切り痕をのこしたもの。口縁上部が薄くなっている。質感、他の調整具合いは２と酷似。内面上端がかるく摩滅している。

６は須恵器の甕の口縁部である。明～暗褐色を呈し、一見土師器と変わらない。口縁は断面Ｌ字を呈し水平に近い環状に形成されている。外面にはキャタピラ状の叩き目が施されている。

７は土師器の甕である。口径13.1cm、胴径16.1cm、高さは推定16～18cmになると思われる。



第15図　SX-6 出土遺物

口縁は断面L字をなし環状に突出するもので、胴部には縦ヘラ削りがみられる。

8～13は土玉である。径2cm前後で、いずれも球状を呈し、焼成前に中心に窄孔されている。

14は砥石である。凝灰岩製。角柱状の4面が使用されている。特に主使用面の表裏は摩滅が

表2　SE－4出土土器

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	須恵器 坏　1a類	13.5 4.0 7.2	ほぼ完形	ロクロ成形 体下：回転ケズリ 底：ケズリ	灰色 長石、石英含 底面磨耗	106・114・117・180・189
2	〃 坏　1b類	13.3 4.2 7.5	1/2	ロクロ成形 体下・底：回転ケズリ	灰色 黒色粒子多	200
3	〃 坏　1b類	13.6 4.3 8.3	1/4	ロクロ成形 体下：回転ケズリ 底：ケズリ	灰白色 雲母粒含	88
4	〃 坏　4類	— — 8.0	1/4	ロクロ成形 体下・底：回転ケズリ	青灰色 長石粒混	81
5	〃 高台付坏	14.4 5.8 11.4〔9.7〕	口縁一部 底部完	ロクロ成形 付け高台 底：回転ナデ	灰色 白色微細砂、黒色粒多 体高4.6cm	194
6	〃 高台付坏	— — 16.1〔13.0〕	底部	ロクロ成形 付け高台 底：回転ケズリ	灰白色 白色砂、銀雲母粒多 高台端磨耗	84・116
7	〃 高台付坏	— — 16.8〔11.3〕	底部1/2	ロクロ成形 付け高台 底：回転ケズリ	灰白色 灰色砂、銀雲母粒多	127
8	〃 高台付坏	— — 〔6.6〕	底部	ロクロ成形 付け高台 底：回転ケズリ、ナデ	灰色 白色砂、銀雲母粒多 高台端磨耗	204
9	〃 高台付坏	— — 〔10.0〕	底部	ロクロ成形 付け高台 底：回転ケズリ	灰色 白色砂、銀雲母粒多 京台端磨耗	143
10	〃 高台付坏	— — 〔10.0〕	底部1/2	ロクロ成形 付け高台	灰色 白色砂粒多 底面、高台端磨耗	204
11	〃 高台付坏	— — 〔10.0〕	底部1/2	ロクロ成形 付け高台 底：回転ケズリ	灰色 白色砂、銀雲母粒多 底面、高台端磨耗	149
12	〃 長頸瓶	— — —	頸部	ロクロ成形 灰釉	胎土：灰白色、緻密 猿投窯産	178
13	土師器 坏蓋	— — —	1/4	ロクロ成形 表裏：ミガキ	赤彩 胎土精選	80

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
14	土師器 坏 2a類	12.5 4.3 9.2	ほぼ完形	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	口縁端スス付着	93・171・ 177・183・ 185・186・188
15	〃 坏 5類	12.5 4.7 5.9	体部一部欠	ロクロ成形 回転糸切り 体下：ケズリ		87・89
16	〃 坏 1類	15.8 5.4 8.4	口縁一部残	内、口：ミガキ 体、底：ケズリ	ミガキ後ケズリ 碗？	148 31M30-20
17	〃 坏 4類	12.5 4.0 6.8	体部一部残	ロクロ成形 内：ミガキ 回転糸切り 底周：ケズリ	内黒 側面：墨書	91・174・175
18	〃 坏 4類	12.3 3.8 7.0	口縁一部欠	ロクロ成形 回転糸切り 底周：ケズリ	底：墨書 「大万具」	100
19	〃 坏 4類	12.2 3.9 6.3	1/2	ロクロ成形 回転糸切り 底周：ケズリ	底：墨書「…具」	82
20	〃 坏 4類	11.6×12.3 4.2 5.5	口縁一部欠	ロクロ成形 回転糸切り 底周：ケズリ	銀雲母粒多	94
21	〃 坏 4類	— — 5.7× 6.1	体下半	ロクロ成形 底：ケズリ	底：墨書「大冢」	27
22	〃 坏 4類	13.0 4.1 6.7	口縁一部残	ロクロ成形 底：ケズリ		77
23	〃 高台付坏	— — 〔 6.4〕	底部	ロクロナデ 回転糸切り	底：「×」印	96
24	〃 高台付坏	— — 〔 6.4〕	底部	ロクロナデ	内黒	16
25	〃 甕	— — —	口縁・ 体上1/4	口：ヨコナデ 胴：タテケズリ		99
26	〃 甕	— — 8.2	底部	胴下：ヨコケズリ 底：木葉痕	石英、長石、雲母粒多 焼成良	86
27	〃 甕	— — 8.4	胴下、底部	胴：タテナデ 底：木葉痕	石英、長石、雲母粒多 焼成良	101
28	〃 甕	— — 7.1× 7.5	底部		スス付着	121

表3　SX－6出土土器

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	須恵器 坏　1a類	11.8 3.3 7.1	ほぼ完形	ロクロ成形 体下・底：ケズリ	灰色	231・350・ 365・395・ 396・398・408
2	土師器 坏　4類	12.5 4.0 6.5	1/3	ロクロ成形 底：手持ちケズリ		55・85・99
3	〃 坏　4類	— — 6.4	1/3	ロクロ成形 回転糸切り 底：ケズリ		4・178・179
4	〃 坏　4類	— — 12.2	下半1/2	内外：ナデ 休下・底：ケズリ	暗褐色 細砂粒多 焼成下良	82・250
5	〃 坏　5類	13.2 3.9 7.2	1/4	ロクロ成形 回転糸切り		189
6	須恵器 甕	—	口縁片	外：平行叩き目 内：凹凸	外：黒褐色 内：明褐色 砂粒多	38
7	土師器 甕	13.1 — 胴径 16.1	上半2/3	口：ヨコナデ 胴：ヘラケズリ		2・4・ 56・174・ 290・292

激しく、一端が薄くなっており、その箇所で折損したとみられる。もう一端には鋭利な刃物による切込みが4本認められる。

B　中近世および時期不詳遺構

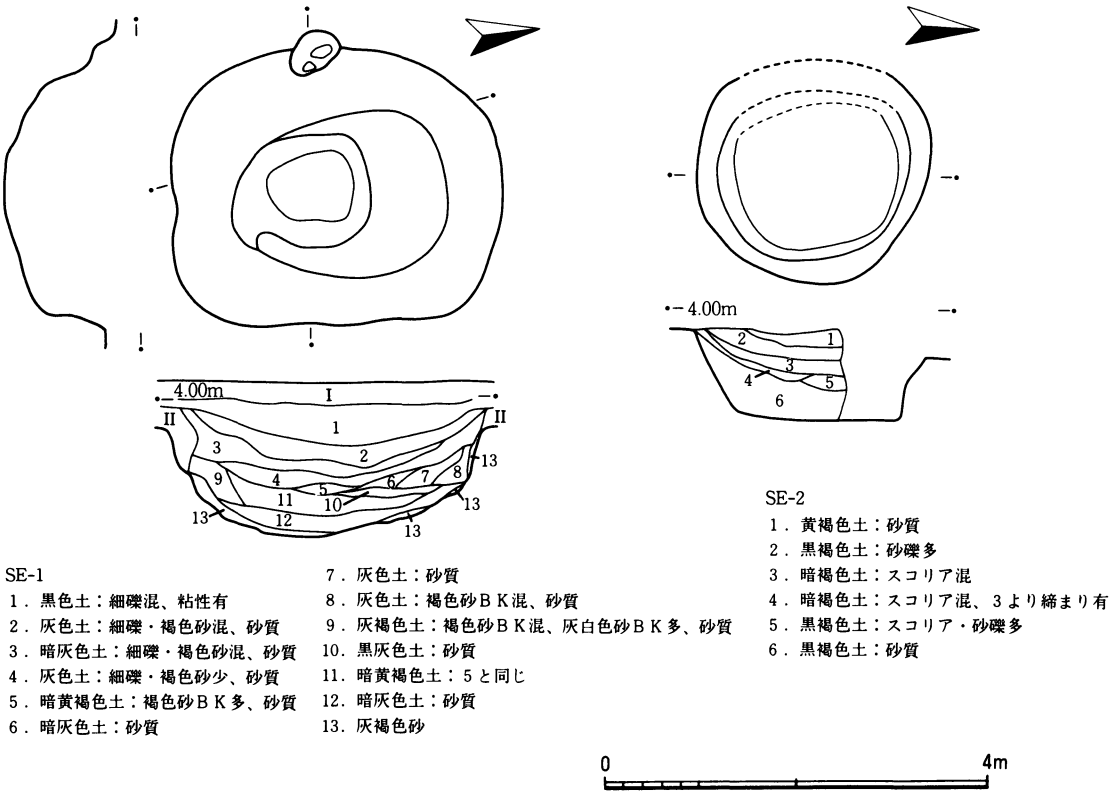
井戸跡

SE－1　003－001（第16図、図版5）

調査区西端で30L12杭を中心とする箇所で検出された井戸跡である。SD－1が東側に接している。

開口部は径3.5m×2.9mの楕円形を呈し、底面は2.1m×1.9mで皿状にくぼんでおり、砂質の黒っぽい土が充満していた。深さ1.1mを測る。長軸はほぼ南北を指している。覆土上部には黒色土がレンズ状に落込んでいた。中位には暗灰色砂主体で自然堆積状態をなしており、下半部は褐色砂ブロックを多く包含する層主体で、急激に埋まったような人為的な堆積状況を示している。

遺物は流れ込みの状態で30点出土しているが、変電所裏古墳と近接している関係上、古墳時代の須恵器や埴輪の出土が20点と顕著である。SD－1と接合する青白磁片が1点出土してい



第16図　SE-1、SE-2 平面図

る。時期を明確に決定できる資料はないが、中近世遺物が包含されており、その頃としてよかろう。

出土遺物（第17図、図版５、表４）

１は小型の台付き皿の台部である。体部は全周欠けており、その割れ口が擦られている。２は長さ3.7cmほどの細管状土錘（１類）である。

SE－２　033－005,038－023（第16図、図版５）

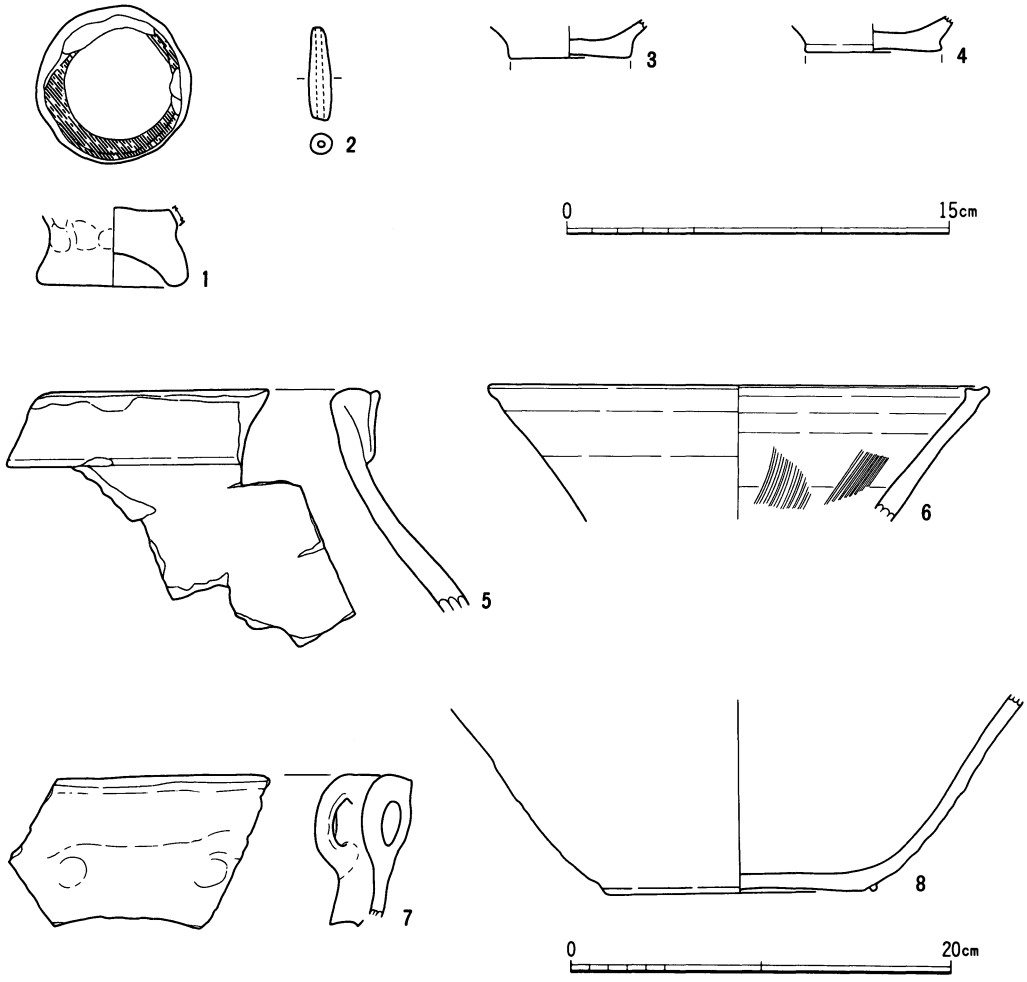
30L12、13にかかって、SD－１、SD－５の間に検出。西側はSD－１と重複している。調査が昭和60・61年度にわたったため、遺構番号が２種類になつてしまった。平面形は隅丸方形に近い円形を呈し、開口部は径2.5m×1.7m、底面で径1.7m ほど、検出面からの深さ0.9m を測る。上部は擂鉢状、下半部は筒状の壁を持つ。底面の形状は湧水のため不明であった。

内部には上部に黄褐色砂、中位に黒褐色から暗褐色土、下位に黒褐色砂がレンズ状に堆積していた。遺物は上部に集中し、土師器の他、陶磁器、土鍋等の中近世遺物を主に約70点が出土した。

出土遺物（第17図、図版16、表４）

５は常滑産の大甕で、SD－８の溝状遺構出土品と接合している。幅広いN字折り返し状口縁をなして内傾し、胴部の肩が張る器形をとると思われる。煉瓦質で焼成は良好である。胎土には礫がめだつ。口縁内面から外面全体はヨコナデされ、薄く赤紫色のテリがかかっている。年代は15世紀末から16世紀初頭のものである。６は擂鉢片で、口縁内側上端に細い突帯が巡る。内外面ロクロナデされ、薄く鬼板状の鉄釉がかけられている。内面の櫛目はまばらで浅い。瀬戸・美濃産で、５とほぼ同時期と思われる。

７・８は内耳土鍋である。７は２個の耳を持つ口縁部。上部はキャリパー状に突出気味である。口縁外面に孔を開け粘土紐を差し込んで耳を形成しており、外面に端部を押しつぶして接合した跡が残されている。７・８とも胎土には砂礫、特に雲母礫の混入がめだち、よく焼き締まっている。外面の調整は成形時のもの以外はみられない。炭化物の付着が外面に顕著である。

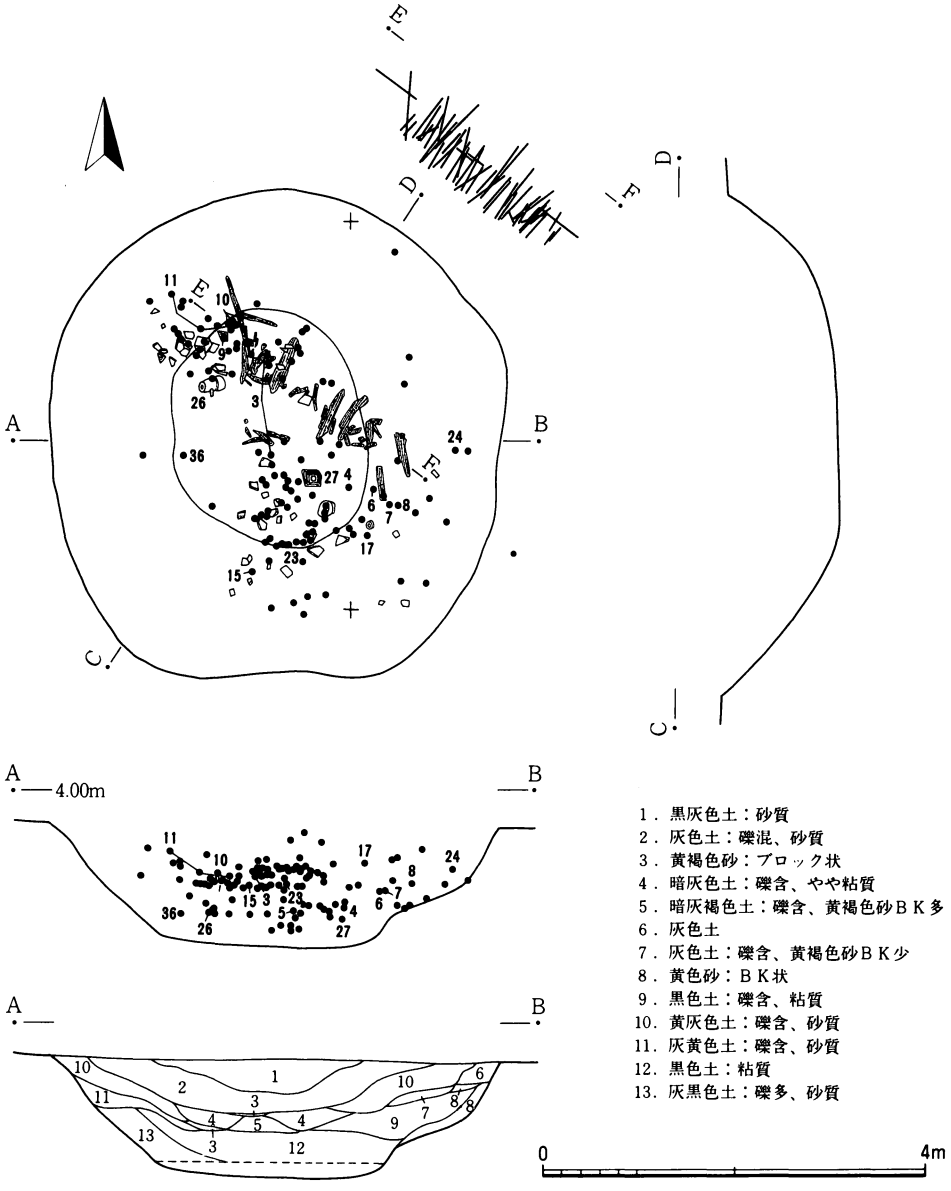


第17図　SE-1、SE-2 出土遺物

SE－3　033－003（第18図、図版６）

30L03、04区、SD－１とSD－８とのほぼ中間に位置している。検出された井戸のうちでは最も規模の大きいものである。

平面形は、開口部では径5.0m前後の円形、底面で径2.0m×2.5mの楕円形を呈し、摺り鉢状の壁形態をなしている。深さは1.2mを測る。底面の状態は湧水のため不明である。底面北東部には細い雑木を主とする木杭列が１mにわたり腐りきらないで検出された。底部近で作業するための足場の土止めを目したものであろう。



第18図　SE-3 平面図・出土状況図

覆土は上部にII層に対応すると思われる黒灰色、中位には灰褐色を主体とする土がレンズ状に落ち込んでおり、また下半部には黒色土で充塡されていた。遺物は杭列より南西、中央よりに集中しており、かつ下位の黒色土の上部にのって中央へ落ち込む形で多くが出土している。井戸が半ば埋まった段階で遺物が窪みに投棄された状況を示している。

出土遺物（第19・20図、図版17～20、表5・6・24）

1～7はカワラケ小皿である。カワラケ小皿全体に共通する特徴だが、内外面ロクロナデされ、底面には糸切り痕が残されている。微細砂を包含し焼成はよい。色調は黒っぽいものが多い。1は小型品で外面に旧字体で細かく「薬師」の墨書がみられる。口縁が短く低い。明褐色の色調を呈している。2はやや厚手のものである。3は薄手であり、下半部がボール状をなし、口縁は極端に外反する個体で、明るい色を呈している。体部外面の周囲に梵辞が間隔を開けて墨書されている。梵字は5字は認められるが、確実なものは右端の「ぁ」＝カ ha のみである。左端の字は「ぇ」＝ナウ na であろうか。2字目は「ぴ」に似た記号である。左から3字目は「ぁ」＝ア a ないし「ぁ」＝ス su か。本来は体部を全周して書かれていた可能性が高い。4はやや大振りのもの。5は底部が厚く、高台状をなしている。6・7は口縁を欠いている。

8は小型の有孔台である。高台状をなし、底面中央に下部から径7㎜の孔が開けられている。この孔に棒状の製品を立てたものと推察される。9は外耳釜の口縁である。土師質で焼成はよい。胴上部は球状をなし、口縁は直立気味に内傾している。

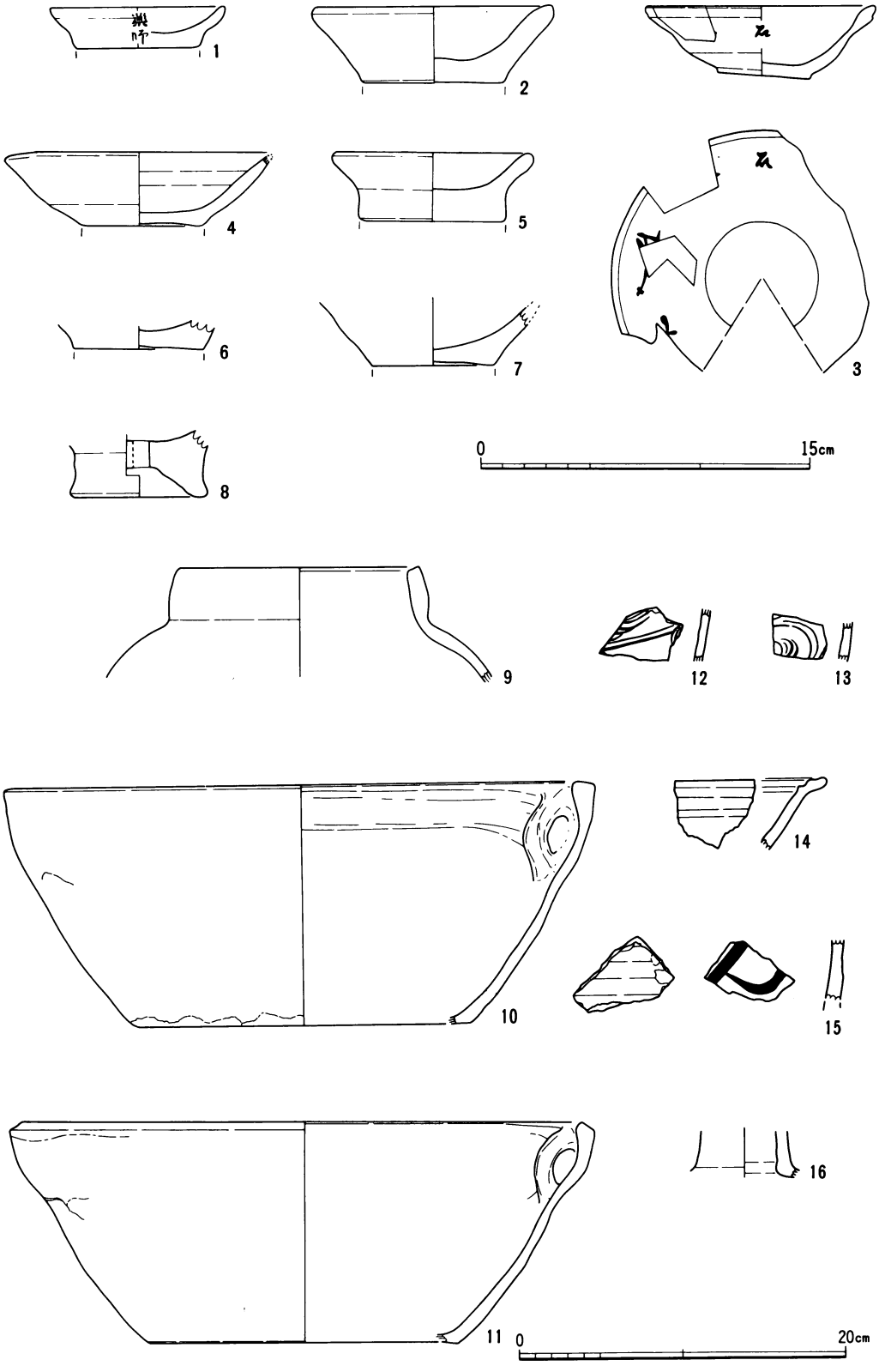
10・11は内耳土鍋である。口径36cmで高さ、底径とも近似している。焼きが良く、胎土に雲母粒が目だつ。ほぼ同一地点から出土している。

12・13は中国製青白磁の梅瓶の胴部下半の破片である。淡青緑色を呈し、不明瞭だが草文がみられる。釉は外面に厚く、内面は薄く施されており、外面には貫入がある。胎土は緻密で青灰色を呈している。

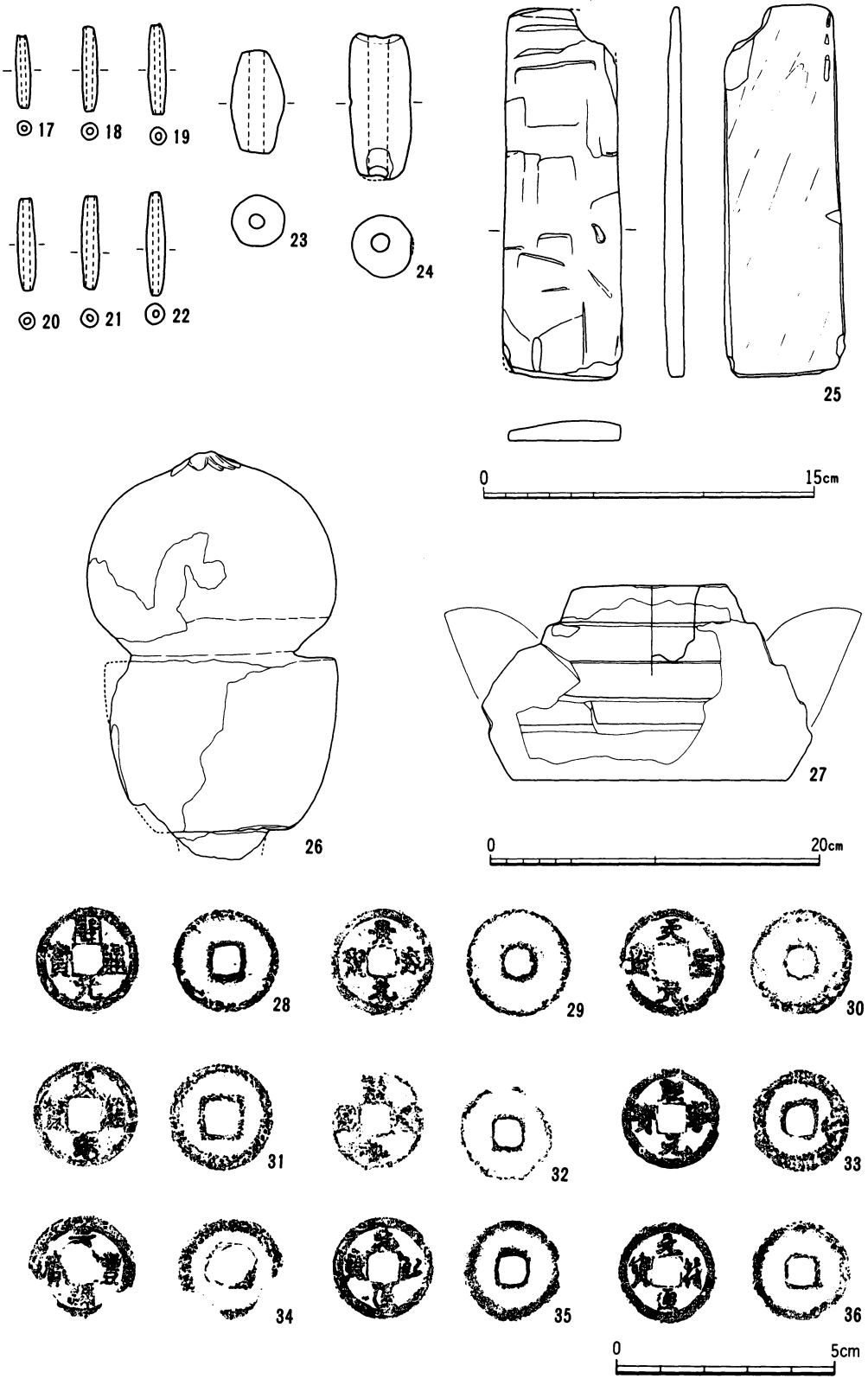
14から16は陶器片である。14は三足盤の口縁部で、口縁に二段の稜を有し折り縁をなし、内外面に細かい貫入のある灰釉が施されている。胎土は灰白色を呈し緻密である。15世紀前半の瀬戸産ものである。15は大皿か鉢の破片と思われるもので、鉄絵の上に長石釉が施されている。胎土は乳褐色を呈している。16は瓶子の頸部片で外面には薄緑色の灰釉がみられる。胎土は14と同様。14・15世紀の瀬戸産のものである。また内面に鉄分が付着していた。この鉄分は歴史民俗博物館の永嶋正春氏による分析ではほぼ純粋な鉄ということであり、顔料等の容器としての用途が推定される。

17～24は土錘である。手づくねで成形され、いずれも焼成はよい。17～22は長さ4cm前後で細棒状（1類）のもの。胎土は精選されている。23は細長い算盤玉状（2類）のもの。24は管状（3類）のもの。

25は井戸底部から出土した木製品で、一辺16.9cm×5.4cm、最大厚0.8cmの長方形に裁断され



第19図　SE-3 出土遺物(1)



第20図　SE-3 出土遺物(2)

た薄板材である。材質はヒノキ属の一種である。一面はカマボコ状にカーブをもつように成形される。一端は徐々に薄くされ、端部ではちょうどタガが入るような僅かな溝がつけられている。また表面に刀子跡が観察される。もう一面はほぼ平らで、槍ガンナ状の工具で削った跡が並列している。性格は不明であるが、材質からみても初期の樽製品の一部の可能性も考慮される。

26は一体成形された五輪塔の宝珠・受花部であり、軟質砂岩製である。宝珠部径15.2×13.5cm、底面までの高さ22.7cmで、やや細長い形をとる。表面に整形時の細かい凹凸が残されている。27は宝篋印塔の笠部である。露盤と隅飾り突起をのせる基部のみで、高さ12cm、隅飾り部を含めて一辺約30cmと小型である。隅飾り突起は大部分欠損している。基部は外傾しており、隅飾り突起も外傾している。露盤部は四段で、内傾している。変則的な仕様であり、類例から室町時代中期のものかと思われる。

28から36は古銭である。28は開元通寶で唐銭である。29〜36は宋銭である。29は景徳元寶、30は天聖元寶、31は皇宋通寶、32は不明瞭だが至和通寶であろうか。33は熙寧元寶、34は元豊通寶、35は元祐通寶、36は元符通寶である。29・30・31・35は接着して出土した。これらは薄手で孔が広いものや文字のつぶれたものが多く、ほとんどが鐚銭であると思われる。

図版19・20に示した木杭は底部近の杭列を構成していたものである。最大のものは（147）の長さ89cm×径19cm、最小のものは（182）の長さ35.5cm×径3cmである。長さ45cm、径5cmほどのものが最頻である。一端がナタ状の工具で尖らされている。材質については附章で分析しているが、サクラ、ヤブツバキ、ヒサカキ等、通常の屋敷内にみられるような雑木が利用されていることが特徴である。

表4　SE－1、SE－2出土土器

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	カワラケ 台付皿	— — 5.0	台部	ロクロ成形 糸切り痕		SE-1 (001)-1
3	カワラケ 小皿	— — 4.9	下半部	ロクロ成形 糸切り痕		SE-2 023-4
4	〃 小皿	— — 5.4	下半部	ロクロ成形 糸切り痕		SE-2 023-14
5	陶器 大甕	— — —	口縁一部	内外：ヨコナデ	胎土：赤褐色 テリ 常滑	SE-2 023-7 067-58 30L32-1
6	〃 擂鉢	(26.4) —	口縁一部	ロクロ成形	炻器的 鉄錆釉 瀬戸・美濃	SE-2 023-23
7	内耳土鍋	— — —	口縁一部	内面：ヨコナデ	〃 胎土：雲母粒多 外面スス付着	SE-2 023-16 30L22-22
8	内耳土鍋	— — 14.2	下半部1/3	内面：ヨコナデ	〃 胎土：雲母粒多 底部稜に貼付	SE-2 023-18 30L13-1・2 30L22-13・20・21

表5　SE－3出土土器・木製品・石塔

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	カワラケ 小皿	8.0 1.9 5.7	1/2	ロクロ成形 糸切り痕	「薬師」の墨書	一括
2	〃 小皿	11.1 3.5 6.8	2/3	ロクロ成形 糸切り痕		一括
3	〃 小皿	10.6 3.3 4.3	2/3	ロクロ成形 糸切り痕	梵字の墨書	14・77 30L03
4	〃 小皿	12.2 3.5 6.1	完形	ロクロ成形 糸切り痕		45

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
5	〃 小皿	9.3 3.2 6.3	体部1/2欠	ロクロ成形 糸切り痕	台付	79
6	〃 小皿	— — 6.0	底部のみ	ロクロ成形 糸切り痕		49
7	〃 小皿	— — 5.8	上端欠	ロクロ成形 糸切り痕		50
8	土師質土器 有孔台	— — 6.3	台部1/2	ロクロ成形 底部穿孔	底面中央に径 0.7cmの穴	51
9	〃 外耳釜	15.8 — —	口縁1/2	ロクロ成形		65 30L-03・04
10	内耳土鍋	36.2 14.5 20.5	体部1/4 底板欠	内面：ヨコナデ 口縁外面：ヨコナデ	細砂混、雲母多 焼成良	4・67・68
11	内耳土鍋	35.9 13.4 19.1	体部1/2 底板欠	内面：ヨコナデ 口縁外面：ヨコナデ	細砂混、雲母多	5・63・64 30L-03、04
12	青白磁 瓶子	—	胴部片	ロクロ成形 内外施釉 草文	淡青緑色 胎土青灰色、緻密 外面貫入	一括
13	〃 瓶子	—	胴部片	ロクロ成形 内外施釉 草文	淡青緑色 胎土青灰色、緻密 外面貫入	一括
14	陶器 瓶子	—	頸部片	ロクロ成形 灰釉	胎土：灰白色、緻密 内面鉄付着 細かい貫入、瀬戸	一括
15	〃 三足盤	—	口縁片	ロクロ成形 灰釉	胎土：灰白色、緻密 細かい貫入、瀬戸	33
16	陶器 皿、鉢？	—	破片	ロクロ成形 長石釉	鉄絵	一括
25	木製品	長 16.9 巾 5.4 厚 0.8	完形	刀子　ヤリ ガンナ跡	ヒノキ属の一種	底面
26	五輪塔 宝珠・受花部	径 15.2 × 13.5 高 22.7	ほぼ完形	ノミ痕	軟質砂岩	108
27	宝篋印塔 笠部上半	辺（30） ×　— 高 12.0	隅飾り欠損		軟質砂岩	46

表6　ＳＥ－３出土杭

番号	長さ(cm)	最大径(cm)		材　質	備　考
128	53.5	5.0	4.4	シイノキ属	
130	58.0	7.1	6.3	サクラ属	2本でねじれている
131	50.0	7.6	5.2	イヌガヤ	半分曲っていて急に細い
132	56.0	4.1	4.0		
134A	33.0	2.6	2.0		
135	47.8	3.4	3.0		
134B＋136B	45.0	4.8	3.7		同一にした長さ
136A	53.5	3.9	3.6	ニシキギ	
137	46.0	4.7	4.2		
138	52.5	3.3	2.9	ヤブツバキ	2本折
139	60.0	4.8	4.2	サクラ属	2本折
140	55.0	3.9	3.1		
141	33.0	3.4	3.2		
143	36.0	3.8	3.5		
144	50.5	3.8	3.7		2本折
146＋155	85	10.0	7.7	サクラ属	
147	89.0	19.0	14.6	サクラ属	2本、くずれそう
148	54.0	4.3	3.9	ヤブツバキ	
150	39.5	4.0	4.0	ヒサカキ	
151	55.0	8.5	6.8		
152	(直)61.5 (曲)71.0	7.5	5.2	シイノキ属	曲っていて半分細い
154	48.0	3.4	3.4	サクラ属	2本折

番号	長さ(cm)	最大径(cm)		材　質	備　考
156	25.0	2.8	2.3		2本折
157	47.0	8.8	8.0	ヤブツバキ	凹凸があり全体太い
158A	14.0	4.0	4.0		3本の1つ
158B	11.7	5.4	4.2		3本の1つ
158C	8.0	4.5	3.7		3本の1つ
160	45.3	3.9	3.7		少し曲っている
161	53	5.5	5.0	シイノキ	半分腐っている
164	21.0	2.5	2.4		2本折
165	30.5	2.5	2.3		2本折
167	42.3	3.2	3.0		
168	40.5	2.8	2.7	広葉樹	2本折
169	54.0	3.7	3.3		
170	46.5	3.4	3.1		
171	48.0	3.6	3.5	ヤブツバキ	
172	45.5	3.8	3.6	サクラ属	
173	36.2	2.7	2.6	ヒサカキ	
174	37.5	3.1	2.9		
176	40.5	4.6	4.1	ヤブツバキ	
177	40.0	3.2	3.1		
178	45.0	3.2	3.0		
179	19.0	5.5	3.9	サクラ属	
182	35.5	4.8	4.5		

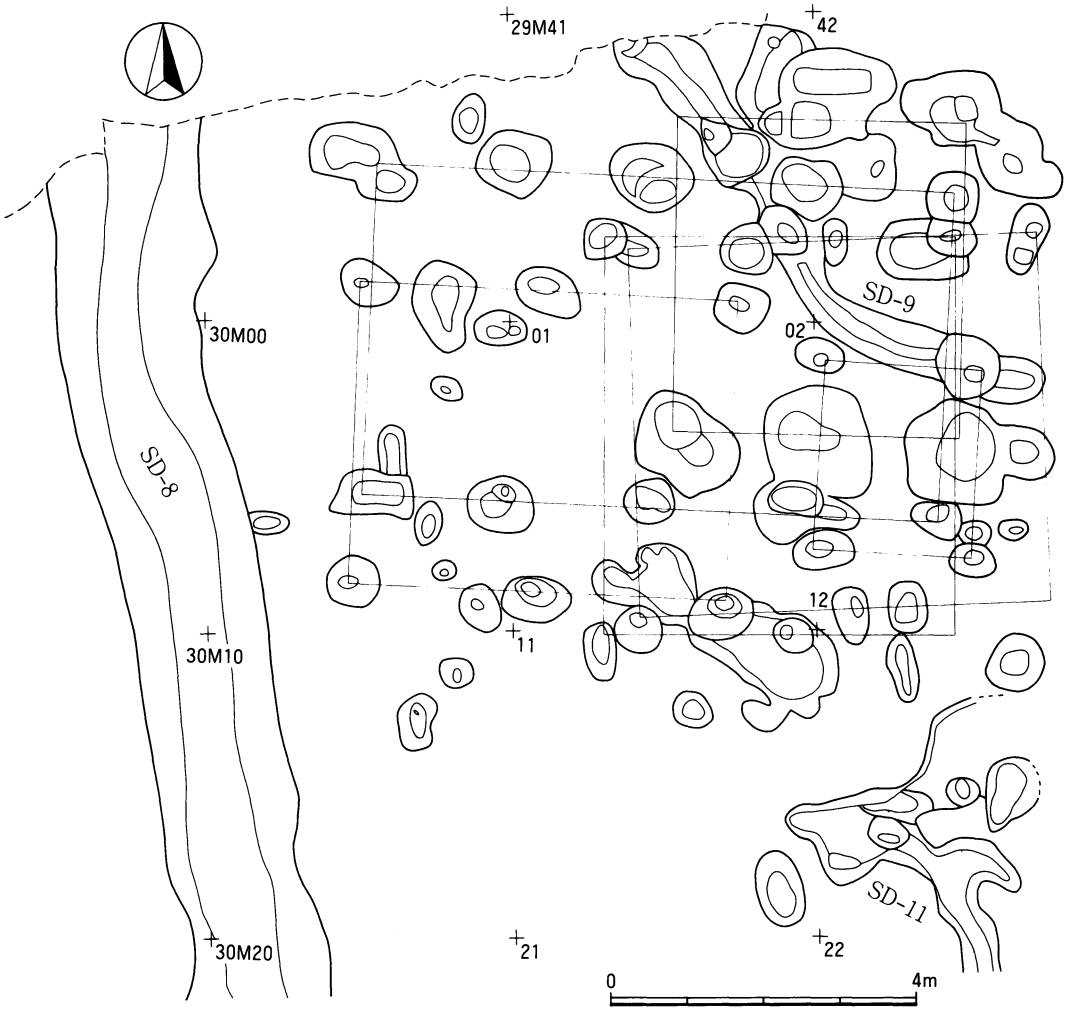
掘立柱建物跡

SB－1～SB－6　033－ピット（第21・22、図版3）

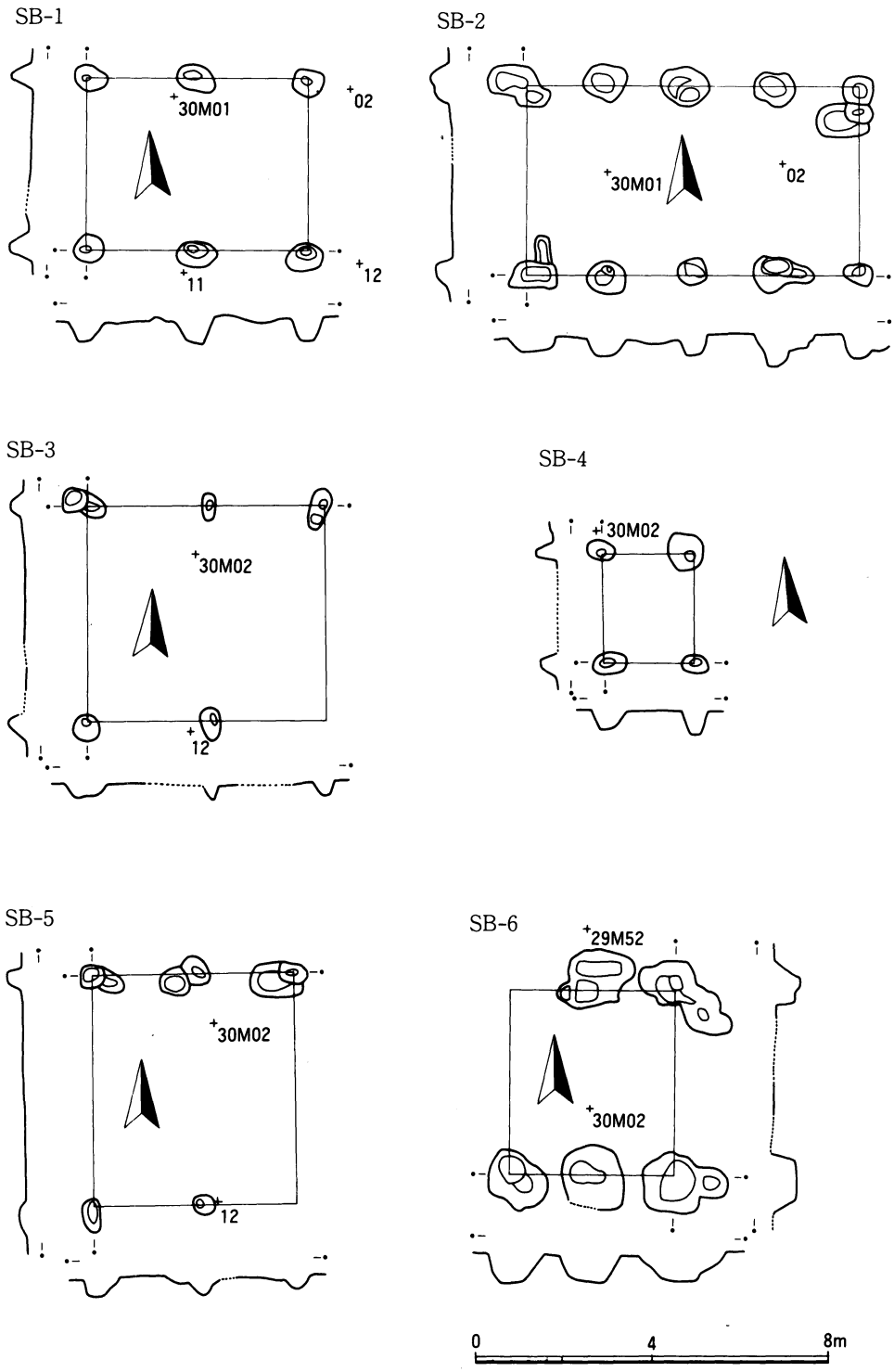
本調査区の北端、29Mから30M10列にかけてL字形の溝SD－8に囲まれた範囲内に計63個の小ピットが分布している。径0.3mから1.5mまでの不整円形をなし、深さは0.3mから0.7mで、総じて浅い。桁方向ををほぼ真北に合わせた6とおりの配列が認められ、SB－1からSB－6と称した。掘立柱建物跡としては浅いが掘り込み面はもっと上にあったと思われる。調査区外にかかっているため不明確であるが、北側にもう一組はありそうである。なお北東部で細い溝が重複して検出されたがこれはSD－9として分離した。

SB－1　東西棟2間×1間、4.98m×3.90mの建物である。径0.7m×0.9mほどの楕円形ピットを主とする。桁行き2.49mになる。深さは0.6mと深いほうである。

SB－2　東西棟4×1間、7.68m×4.28mの建物である。桁行き1.92mになる。径0.8m、深さ



第21図　SB-1～6平面図



第22図　SB-1～6 柱列配列図

0.4m ほどのピットを主とする。

SB－3　東西棟2間×1間、5.36m×4.78m の建物である。径0.6m 内外の小ぶりで浅いピットからなる。南西偶が検出されなかった。桁行きは2.68m になる。

SB－4　1間×1間、2.80m×2.45m の建物である。径0.5m×0.7m、深さ0.5m 程度の楕円形ピットが主である。東側へさらに延びていく可能性がある。

SB－5　東西棟2間×1間、4.70m×5.15m の建物である。桁行き2.35m になる。径0.5m 弱でかつ浅いピットからなる。一部未検出である。

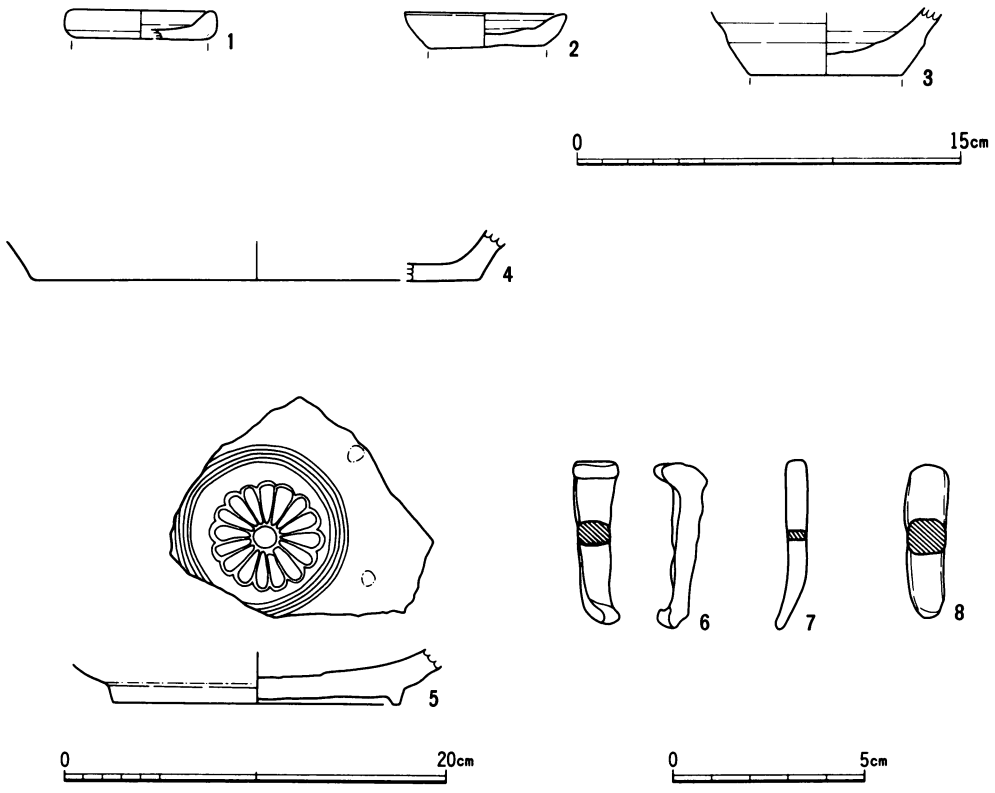
SB－6　東西棟2間×1間、3.76m×4.08m の建物である。桁行き1.88m になる。径1m 以上、深さ0.6m ほどのピットで構成されている。北西隅は検出されていない。

出土遺物（第23図、図版21、表7・28）

ピット群全体で約100点の遺物が出土したが、確実に伴う状況で出土したものはない。量的に土師器片、カワラケ片が多く、次いで土鍋片となる。

1～3は糸切り痕を残すカワラケ小皿である。1は小型でごく浅いもので、円盤状をなす。SB－6出土。3は厚口であり、SB－1出土のもの。

6～8はSB－6で出土した鉄製品である。6は折頭釘であり、ややねじれがあり、先端部が



第23図　SB-1～6および近辺出土遺物

表7　SB－1～6、SD－9出土土器

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	カワラケ 小皿	6.0 1.1 5.4	1/2	ロクロ成形 糸切り痕		SB-6 ピット d
2	〃 小皿	6.4 1.4 4.7	3/4	ロクロ成形 糸切り痕		SD-9 ピット p
3	〃 小皿	— — 6.0	口縁欠	ロクロ成形 糸切り痕		SB-1 ピット h
4	土師質土器 内耳土鍋	— — 23.4	底部片		黒褐色 雲母粒多	SD-9 ピット p
5	陶器 鉢	— — —	底部	型押文 長石釉 ケズリ出高台	18C　美濃	SD-9 ピット p

折れている。7は先が「くの字」に折れる尖頭状になる太い針状製品。8は先端はあまり細くはないが楔状品としておく。

SB－7　038－004～014（第9図）

県道際、30L区南東隅に所在する。Ⅲ層の黒褐色砂上黒灰色の落込みとして検出された。深さ20～40cm、径が0.3mから1mを越すものまで各種、計11基のピットが不規則に配されていた。性格は不明確であるが、街道の南側には明治以降とみられる新しい遺構がみられるので、それに関連したものであろうか。

遺物は土師器片が若干得られているが、図示できるものはなく、かつ伴わないとみられる。

土壙

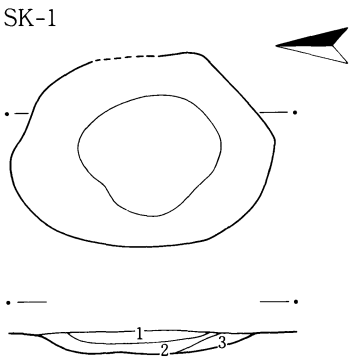
SK－1　038－019（第24図）

30L24区に所在する皿状の浅い落込み。東側でSD－7に接している。開口部径0.7m×0.5mの楕円形を呈し、深さは0.13mを測る。遺物は出土しなかった。時期、性格とも不明である。

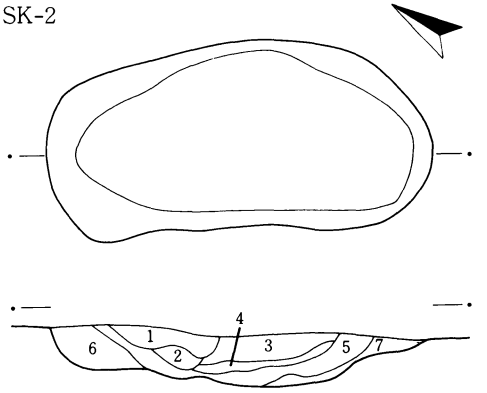
SK－2　038－048（第24図、図版7）

SK－2からSK－5は整地跡SX－1上に設けられた土壙群である。北側から順に番号をふった。いずれも不整な楕円形の平面形を呈し、断面鍋底状を呈している。

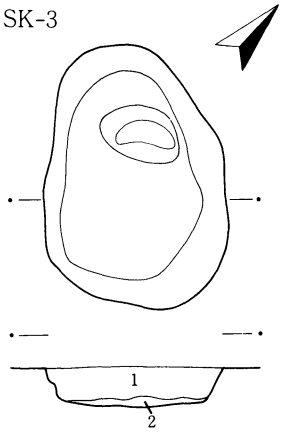
SK－2は30M21に位置し、開口部径1.0m×2.0m、底面で径0.85m×1.75m、深さ0.26mを測



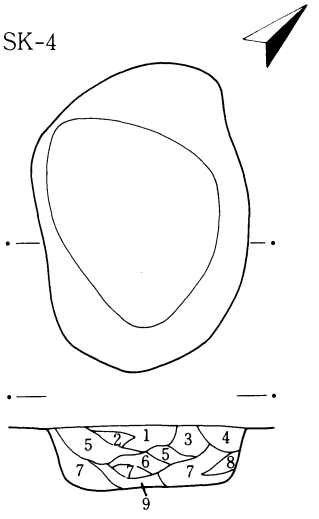
1．暗褐色土：砂質
2．褐色土：粘性・締まりなし
3．黒褐色土

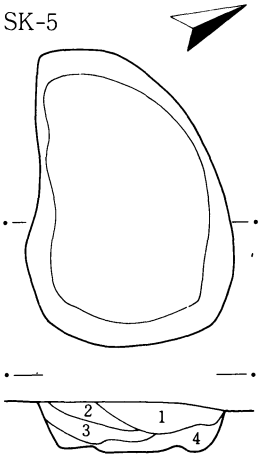


1．褐色砂：礫・黄褐色砂混
2．褐色砂
3．黒褐色土：粘性・締まり有、黄褐色砂少混
4．黄褐色砂：礫少混
5．黒褐色土：粘性少、礫少・黄褐色砂少混
6．褐色砂：黄褐色砂・粘土ＢＫ混
7．黄褐色砂：黒褐色土・礫少混



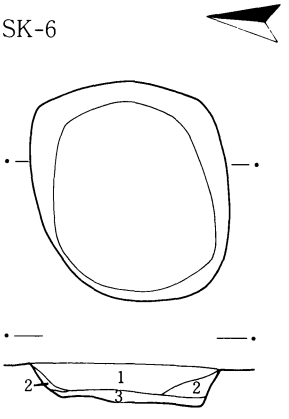
1．黒褐色土：スコリア混
2．黄褐色砂



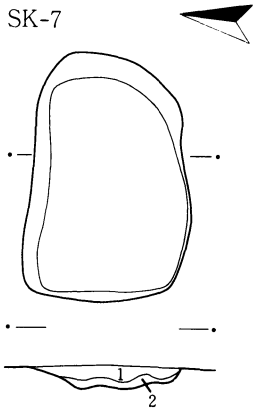


(SK-4)
1．黄褐色砂：黒色土混
2．黒褐色土
3．黒褐色土：黄褐色土混
4．黒褐色土：粘性有
5．黒褐色土：粘性富
6．黒褐色土：黄褐色砂多混
7．黒褐色土
8．黄褐色砂
9．黄褐色砂：混じりなし

(SK-5)
1．黒褐色土：スコリア混
2．黒褐色土：スコリア少混
3．黒褐色土：粘性有、スコリア混
4．黒褐色土：粘性富、スコリア少混



1．黒褐色土：締まり有
2．黒褐色砂：黒色土細粒混
3．褐色砂：焼土ＢＫ・礫多混



1．褐色土：砂質、スコリア混、粘性富
2．黒褐色土：粘性富

第24図　SK-1～SK-7 平面図

る。覆土は複層しており、人為堆積を示すと思われ、土鍋や陶器片など若干の遺物が出土した。

SK－3　038－051（第24図、図版７）

30M21に位置している。開口部は径0.95m×1.4m、底面で径0.75m×1.1m、深さ0.2m を測る。覆土はほぼ黒色土で充填されていた。遺物は出土しなかった。

SK－4　038－050（第24図、図版７）

30M21に位置している。開口部は径1.1m×1.6m、底面で径0.9m×1.1m、深さ0.33m を測る。覆土には各種の土が複層していた。人為堆積であろう。遺物はカワラケ１点の出土である。

SK－5　038－049（第24図、図版７）

30M31に位置する。開口部は径1.6×1.1m、底面で径1.35m×0.85m、深さ0.26m を測る。黒褐色土が覆土となってたる。須恵器片１点のみの出土であった。

SK－6　038－044（第24図、図版７）

SK－６と SK－７は SD－８の溝覆土上に構築された土壙である。

不整円形を呈し、開口部は径1.15m×1.0m、底面で径1.0m×0.8m、深さ0.2m を測る。覆土は黒褐色層が主である。土鍋、陶磁器など10点の遺物が出土した。

SK－7　038－004～014（第24図）

30M32に位置している。開口部の径1.3m×0.85m、底面で径1.1m×0.8m、深さ0.12m を測る。黒褐色土の上に褐色土がのっている。後世の攪乱の可能性もある。遺物はカワラケ、土鍋片など若干の遺物が出土した。

SK－8　038－063（第24図）

33M12区に位置する。開口部径0.7m ほどの円形を呈する。底面の径は0.7m ほど。深さは約0.3m で、上部に黒色土、下部に黄褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

SK－9　038－054（第24図）

33M32区に位置する。開口部径0.9m×0.6m の楕円形を呈している。底面では径0.7m。覆土は SK－８に準じる。遺物は出土しなかった。

SK－10　038－066（第９図）

33M12区にSK－11の東側2.5mに配されている。幅0.35m長さ1.4mとそれに直交する幅0.5mのいずれも浅いU字土壙がL字状に接している。溝とした方が適当か。深さは0.1mと浅い。耕作土的な土が覆土となっていた。遺物は出土しなかった。

SK－11　038－061（第9図）

SK－9同様33M12区に位置する。長さ1.2m幅0.5mの浅いU字状をなし、覆土もSK－9と類似している。遺物は出土しなかった。

特殊遺構

SX－1　038－064（第9図）

SD－8の北側の浅い谷状部を灰褐色の山砂で埋め立てて平坦部を形成し、整地した跡。幅4.0m、最深部での厚さ0.5m。東側は区域外である。この下部からはSD－10・11・13が検出されている。遺物は土師器・須恵器を始め、カワラケ・土鍋等の中近世のもの含めて25点出土した。

出土遺物（第27図、図版23、表8）

16は高台状の厚い底部を有し、現代の「サカズキ」の形状を呈しているカワラケ小皿である。口縁の先端は焼成後、平坦にそぎ落とされている。

23は外耳釜の耳部である。胴上部外面に短く舌状突起をつけ、その先端中央で粘土紐をブリッジ状に渡して耳部を形成している。外面はススが付着している。

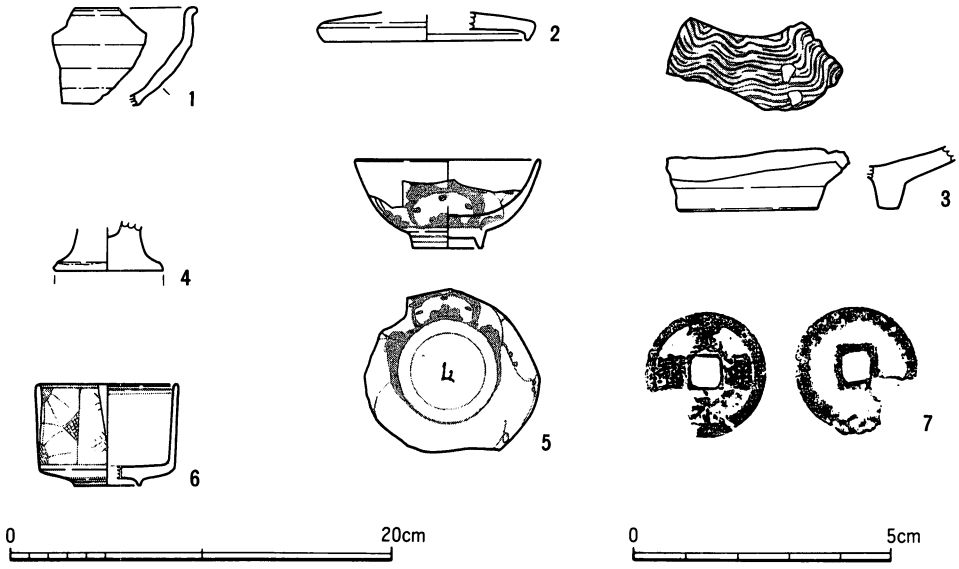
SX－2　038－001（第9図）

30L44杭上、SD－7の上部からII層中で検出されたヤマトシジミの貝ブロック。一辺1.5m（短辺0.8m）×1.85mの不整台形を呈し、厚さは最大11cmでレンズ状に落ち込んだ状態であった。採集された量は土嚢袋6袋分。間層はみられず、短期間に形成されたものとみられる。遺物は伴っていないが層位からみて近世以降のものだろう。

SX－3　038－039（第9図、図版7）

旧道跡。北にSD－012、南にSD－015の溝ではさまれている。幅2.6mで軽くカーブを描いている。顕著な硬化面2面が残されていた。上部硬化面は表土直下から厚さ20センチの層があり、20cmの間層をはさみ15cm厚の下部硬化面が連なる。これらの面もさらに細かい硬化層が密に重なって構成されている。断面観察によれば、上部面にはSD－15の溝が、下部面にはSD－12の溝が伴うようである。また硬化面を除去した後の地山面には2ないし3条のワダチ状の小溝SD－14が認められた。

遺物は上部面のものは、グリッド一括で取り上げたので不明だが、下部面以下では土師器を



第25図　SX-3 出土遺物

主体に陶磁器、須恵器等約110点が出土している。中近世遺物は下層硬化面を中心に、土師器・須恵器は下層硬化面以下の層に集中していた。

出土遺物（第25図、図版21、表９・27）

１は黒釉天目茶碗である。瀬戸・美濃産で16世紀末から17世紀のもの。２は瀬戸・美濃産の陶器である。黄褐色釉が両面にかかっている。皿状で、端部が直角に内折している。一見蓋のようだが花瓶の口縁部であろう。３は三島手の大皿の底部である。白色の顔料で波状の櫛書文が描かれ、部分的に透明釉がかけられている。胎土は暗褐色を呈し、緻密で半磁器的。よく焼け締まっている。４は小型の花瓶の台部である。外面に鉄釉がかけられており、底面には糸切り痕が残されている。

５は染付筒形茶碗で菊花文がみられる。見込みには花文が認められる。６は染付の梅木文様の丸茶碗である。底裏に銘がある。全体に青味がかっている。18世紀前～中期の「くらわんか手」のもの。７は古寛永の称沓谷銭か。

SX－４　038－033（第９図）

31M02・03区でSD－15溝の中位に検出された硬化した平坦面。幅は溝幅一杯あり、溝床まで最大厚45cm黒褐色土が堅く締まった状態であった。東側の限界は攪乱のため、不明である。新しそうなフイゴの羽口、スラグ及び鉄くず約90点を始め、新旧の陶磁器や瓦片等、計約130点が出土した。明治以降の鍛冶に伴う作業場ではないかと思われる。

SX－５　038－038（第９図）

表8　SX－3出土土器

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	陶器 天目茶碗	— — —	口縁1/5	ロクロ成形 鉄釉		41
2	〃 花瓶	11.5 — —	口縁1/5	ロクロ成形 釉（両面） 黄褐釉		12
3	〃 大皿	— — —	台部1/4	ロクロ成形 透明釉	櫛書波状文 胎土黒褐色、緻密 三島手	68
4	〃 花瓶	— — 5.7	台部	ロクロ成形 糸切り痕 鉄釉		46
5	磁器 染付碗	7.4 5.2 7.0	1/4	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	くらわんか手 胎土：白色 底裏銘	93
6	〃 染付筒型碗	9.7 4.8 —	2/3	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色	97

31M23区で検出されたカマド跡。底面部分が残存していた。平面形は径1.9m×1.6mの不整円形をなし、高さ0.3mを測る。内径は0.6m。本体は黒褐色砂からなる。カマドの熱の影響を受けて硬化したII層部分の可能性もある。内面は赤褐色に硬化した焼土があった。焚口は平面からみて北になるか。内部から鉄クズやガラス瓶等かなり新しいものも出土している。整地跡SX－4やピット群SB－2と関連した新しい時期の遺構とみられる。

溝状遺構

SD－1　033－002、038－025（第9図、図版5・7）

29L42からSD－12にむかい南北に走り、30L22で西へL字形に屈曲する中規模の溝で、東へ8mほど離れてほぼ平行してSD－8がある。上下2層に分かれ、上層をSD－2、下層を本遺構とした。幅1.6m～2.0m、深さ0.7m、U字状断面をなす。

出土遺物は約80点、カワラケ小皿や土鍋片の出土が多い。また中国製青白磁や上層での復元された常滑の甕の出土が特筆される。

出土遺物（第26図、図版22、表9・25）

1・4・6はカワラケ小皿である。1は小型で高さがない。4は通常型。6は高めの高台がついたもの。

8は細管状の土錘（1類）である。

10～12は中国製青白磁の瓶子で、梅瓶といわれるものである。10は口縁部だが、上端部を切り取って、平坦に研磨している。外面は荒れており二次焼成を受けている。11・12は胴上部の破片で、不明瞭だが草文がみられる。

SD－2　033－002、038－020（第9図、図版5・7）

SD－1の上層遺構であるが、30L12区より北側では区別がつかなっかった。幅は1.4m、深さ35cmを測る。南にむかい細く浅くなっていき、最終的にSD－12に直角に接続する。

出土遺物（第26図、図版22、表9）

35点ほどの遺物が出土。14の常滑大甕や土鍋片がが顕著である。

5はカワラケ小皿である。

14は常滑大甕である。広口で型が張り底部は小さく、高さと胴部最大径はほぼ同じになる。口縁内面から外面全体にテリがかかっている。赤褐色を呈する炻器質で、レンガ的な質感をもつ。15世紀末から16世紀初頭にかけてのものとみられる。SE－3やSD－4、SX－3等からも接合するものや、同一と思われる個体が出土している。

SD－3　038－031（第9図、図版7）

SD－1のコーナー部に接する布掘り状のL字に曲がる溝である。幅0.5m、深さ0.4mを測り、北側はSD－1に壊されて不明である。よく締まった黄褐色土が覆土となっていた。

出土遺物（第26図、図版22、表9）

遺物は7点えられたのみである。3はカワラケ小皿である。

SD－4　038－042（第9図）

SD－1を調査区境まで拡張したところ、30L12、30L2区でわずかにかかって検出された。南北に延びる溝と思われる。遺物は土鍋片4点が出土した。

SD－5　038－017（第9図、図版7）

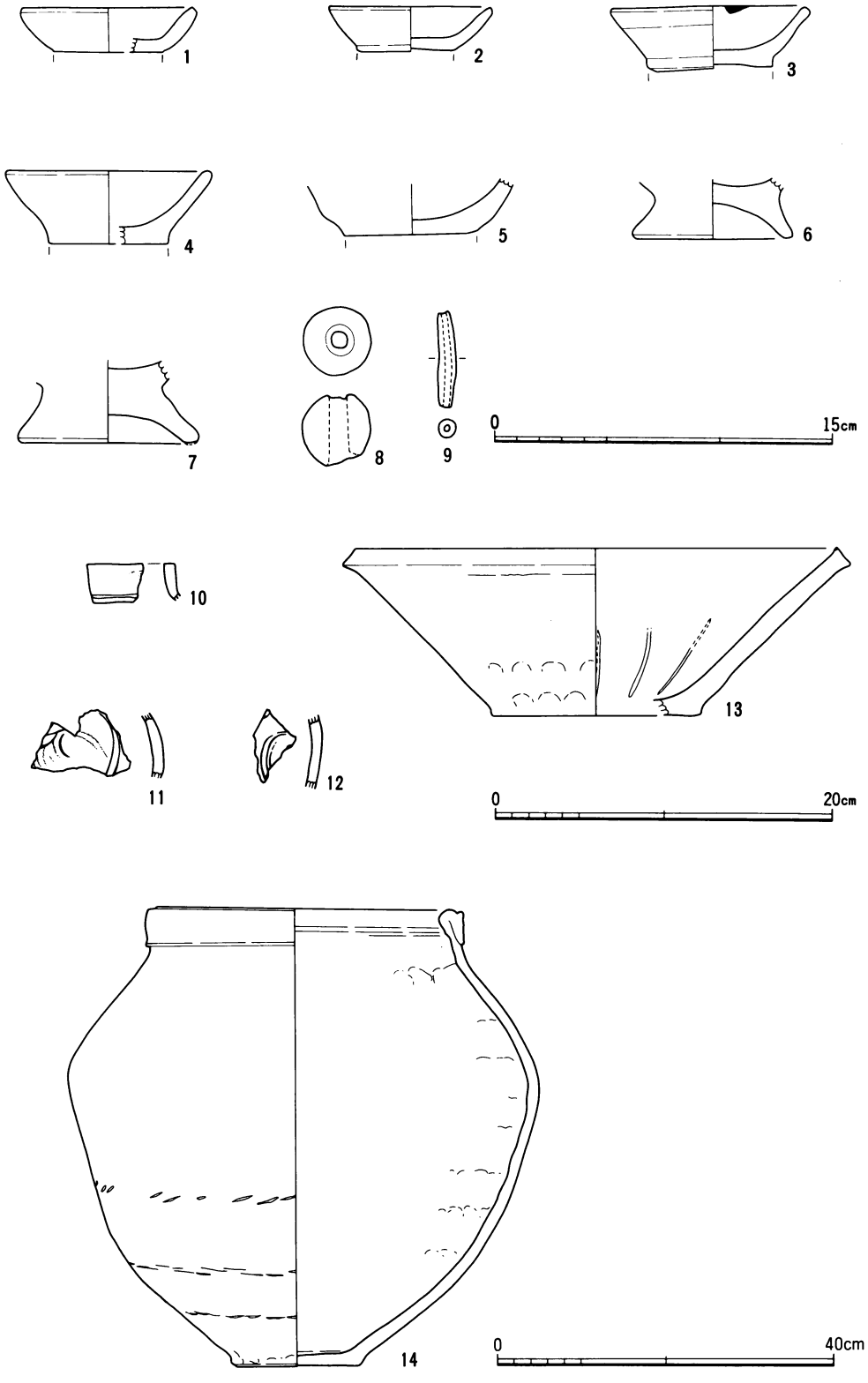
SD－7とともにSD－1とSD－8の間を走る南北溝。SE－3の南側からSD－12に達する、最大幅1.5m、深さ15cm、長さ9.5mほどの浅い溝である。遺物は出土しなかった。

SD－6　038－021（第9図、図版7）

30L30列をSD－12に沿って東西に走る浅い溝。幅1.0m、深さ10cmを測る。

出土遺物（第26図、図版22、表9・24）

遺物は6点のみの出土。8は土玉である。13は常滑産の炻器質の捏鉢で、内面はよく摺られ



第26図　SD-1～7 出土遺物

ており、下半部には焼成後に施されたとみられる縦刻線がまばらに配されている。15世紀末から16世紀初頭にかけてのものとみられる。

SD－7　038－016（第9図、図版7）

SD－5と同じくSD－1とSD－8間の南北溝。幅0.7～1.8m、SD－12に近接するにつれ、幅が広くなる。深さ0.2m前後、底面はほぼ水平である。

出土遺物（第26図、図版7、表9）

計22点の遺物が出土した。2は小型のカワラケ小皿である。

SD－8　033－004、038－030、032、067、073（第9図、図版8）

29M、30Mの遺構群を大きくL字に囲むように配された中規模の溝。南北に延びてから、SD－12の手前で西へ若干突出しながらL字に曲がり、SD－12に平行して東へ延びる。東西溝の北壁はSX－1の盛り土で形成されている。

南北溝部分幅1.7mから2.0m、深さは0.6m、東西部分では最大幅上面で4.0m、底面で2.0m、深さは確認面から平均0.9m、地山面からは0.7mと規模が大きくなる。砂礫を多量に含む黒っぽい土が覆土となっていたが、大きくは2層に区別できた。上部は0.7mの厚さで黒色土があり、その下層はに黒褐色土の硬質な層がある。2回以上にわたって構築されたものと思われる。

遺物は上層溝部分が分布密度が濃い。カワラケ小皿の多さ、常滑の甕破片が出土していることが特筆される。。また下層の床面では常時水がでているため加工材片や木の枝、種子などが腐らずに残って出土した。

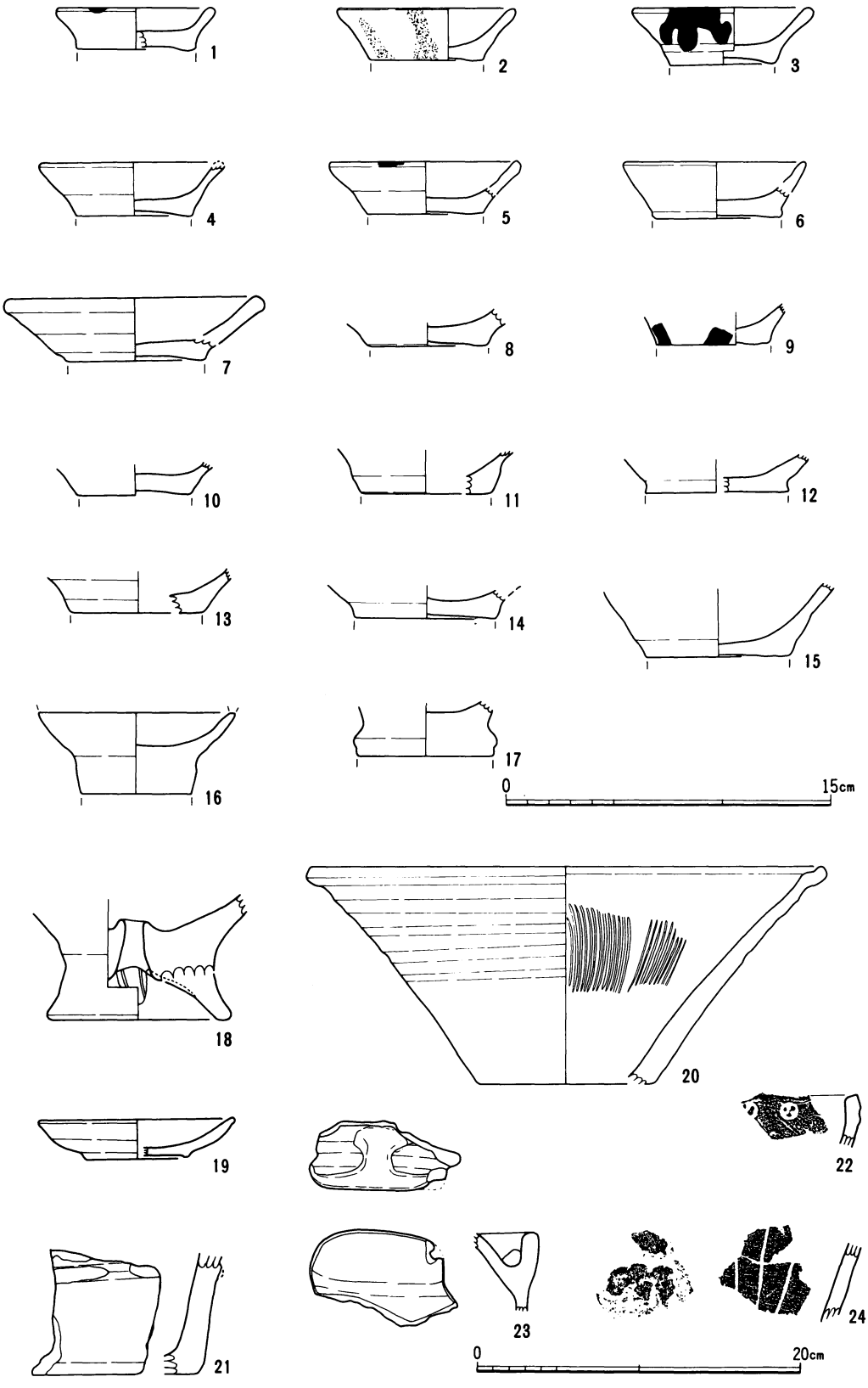
出土遺物（第27～29図、図版23～25、表10・24・25）

1～15、17はカワラケ小皿である。1は小振りのもの。2～6は口径9cmほどの一般的なもの。7、15は大型である。17は高台状に、極端に厚い底部をなす。なお1～5、9には口縁にスス痕が認められ、灯明皿としての使用が想定される。

18は底部中央に太い孔の開けられた、高台状をなす器台である。台部径11.3cm。高さは8cm以上と大型である。底部厚は3cmである。孔は径1.6cm×1.2cm、底部裏面から開けられ、孔の縁が外面に突出しており、高台裏には箆状工具で粘土を掻き出した痕が放射状に残されている。

19は鼠志野の皿である。径約12cm。黒灰色の胎土に白濁した釉（長石釉）が厚めにかかり、器面が灰白色を呈しており、また貫入が著しい。二次焼成を受けており、炭化物が全面に付着していた。20は瀬戸・美濃の擂鉢である。底板は欠く。内外面に鉄錆釉が薄くかけられている。外面上部に凹帯が数条めぐり、内面口縁直下には突帯が形成され、まばらな条線が上部から底面に向け施されている。下半部の条線は使用のため摩滅して摩り消されている。

21は厚手で瓦質、火鉢と思われるものの底部。隆帯がみられる。器面にススが付着している。



第27図　SD-8 出土遺物(1)、SX-1 出土遺物

22は土師質の土器で、三つ葉型押文が口縁上部にみられる。径は13cmほどと小型である。胎土は金雲母粒を含み、焼成がよく内耳土器と共通している。

24は土師質の擂鉢片で、内面に刻線を有し摩滅している。胎土には石英・長石・雲母粒がみられる。

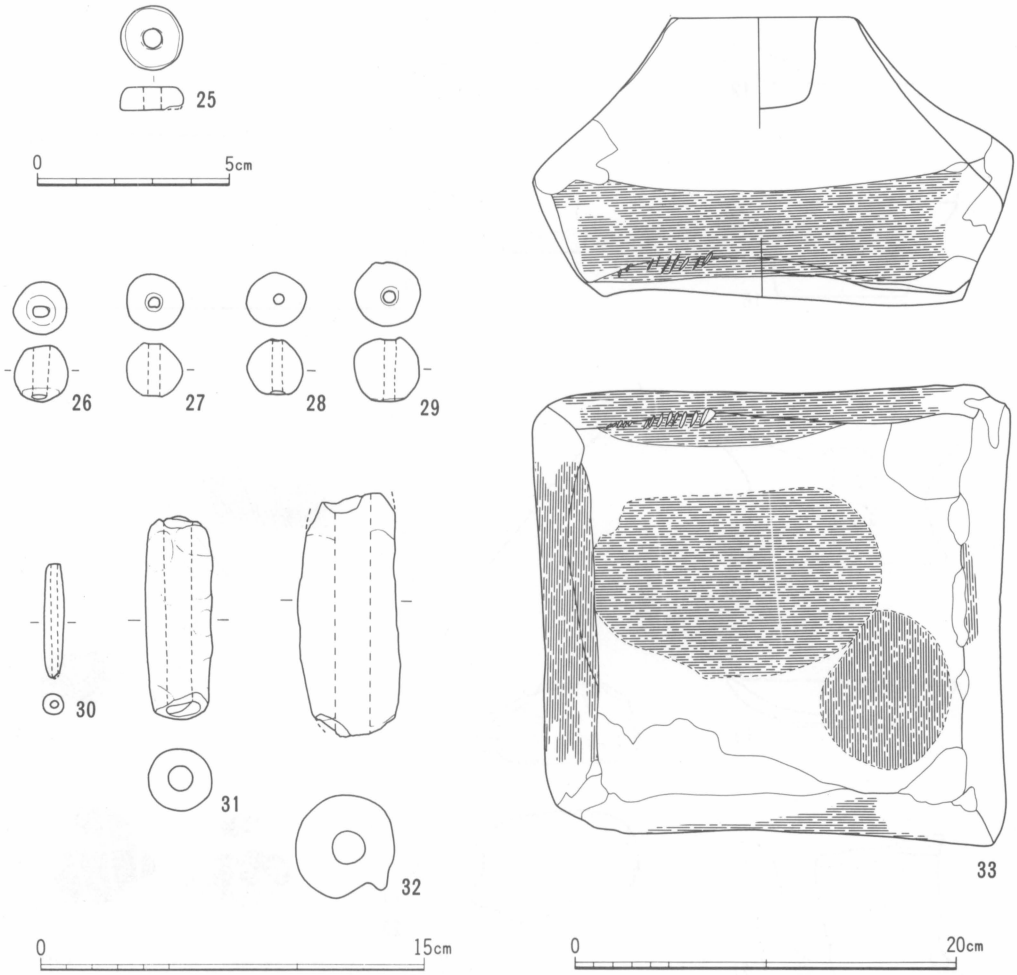
25は径約２cm、厚さ0.6cmほどの臼玉状土製品である。孔径は0.5cmである。焼成が悪く非常に脆い。器面は平滑に加工されていた。用途は不明である。

26～29は土玉である。径は２cmほど。櫛刺し状に孔が貫通している。

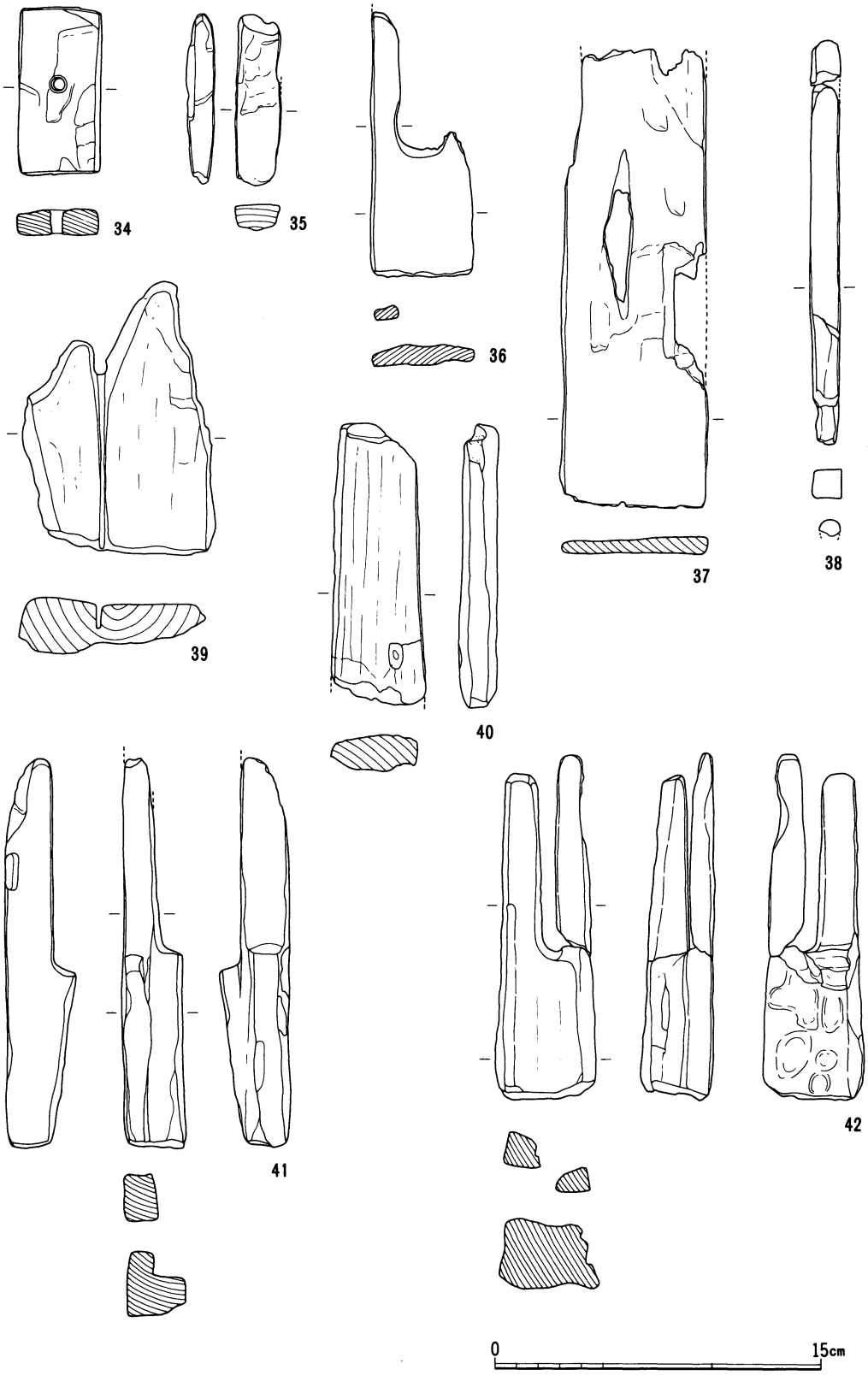
30は細管状（１類）、31は棒状（３類）の土錘。手づくねで製作され、焼成は非常に良好である。手で握った時の指痕が明瞭に観察される。32は太い棒状（４類）のものである。

33は軟質砂岩製の五輪塔の笠部である。一辺約25cm、高さ15cmほどで、側面と裏面が砥石状に使用され、摩滅している。頂部には径5.2cmの接合孔を有する。

34～42は最下層で出土した木製品である。34は一辺7.7cm×3.7cm、厚さ１cm強の長方形に整



第28図　SD-8 出土遺物(2)



第29図　SD-8 出土遺物(3)

形された板で、中央に径6㎜の孔が貫通している。素材はヒノキ属類似種の板目板である。35は幅2.0cm、厚さ1.2cmの細板状品で、両端は折れているとみられる。コナラ属の硬い材質で、側面と正面は平坦に加工されている。36は厚さ0.9cmの薄板で一端は破損している。ヒノキ属の木の板目板である。37も同様の板状品である。裏面は剝落したように薄くなっている部分が多い。38は1.4cm角の角棒状に加工されたもの。端部は折損している。また一端はカマボコ状に削られているようにみられる。材質はヒノキ属の一種。39は一面が平坦に加工され、ノコギリの痕が残されている。最大厚2.3cmと厚めで、木の芯近くの部材である。素材は針葉樹である。40は最大幅4.3cm、最大厚1.7cm。一端にむかい幅と厚みが増しており、太めの平棒状になるかと思われる。端部は折損しており、全長は不明である。先端にはホゾ状の加工がなされている。41・42は角棒にホゾ孔様の加工がなされているもの。41は破損部が多いが、断面L字状に削った上、二面からエグリを入れているように観察される。幅2.8cm×3.2cm、長さ17.6cmになる。42は一端が破損して叉す状になっている。エグリ加工はほぼ同じ高さに、直通するものと左右二方向から互い違いにあるものと、三面で行われていると思われる。叉すの間隔は0.8㎜ほどあり、36や37の板材に適合する。素材はヒノキ属類似種である。37・40・41も類似した材質であり、ヒノキ属でないかと思われる。

SD－9　003－Pピット（第21図、図版3）

SB－1～6の掘立柱群中にあり、北西から南西へ走る小溝。幅0.6m、深さ10cm～30cmで北側が深くなっている。遺物は3点のみの出土であった。

出土遺物（第23図、図版21、表7）

2は小型のカワラケ小皿である。4は内耳土鍋の底部である。

5は美濃産の17世紀前半頃の大鉢である。長石系の釉が施されており、スタンプ手法により見込みに同心円を加えた菊花文を配している。重ね焼きのピン跡が器面に残されている。

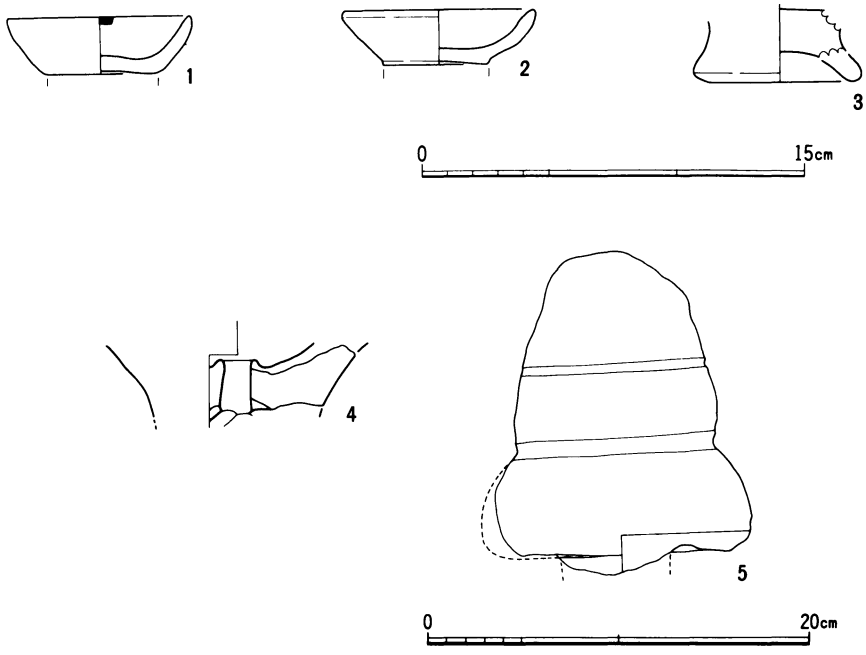
SD－10　O38－035（第9図）

30L20列をSD－13とX字状に交差しながら西から東に走る浅い溝でSX－1の盛土の下から検出された。幅0.8～1.5m、深さ10cmを測る。カワラケ・土鍋片等若干量の出土遺物があった。東側SD－11と交差する箇所では石塔の宝珠部が出土した。

出土遺物（第30図、図版24、表11）

4は有孔大型器台である。台裏面に箆状工具で孔の縁の粘土を掻き取った痕が放射状にみられる。外面では孔の周囲が盛り上がっている。孔と箆状工具の痕は指先ほぼ合致しており、指で粘土を掻き出しながら孔をあけたものと推定される。

5は石塔の相輪基部とみられるもので、風化して摩滅が激しく残りが悪い。最大径14.3cm、



第30図　SD-10・13 出土遺物

現存長16.7cmを測る。軟質砂岩製である。

SD－11　038－065（第９図）

SD－13、SD－10同様整地跡の SX－１下の地山から検出されたもので、ピット群の南端から続く幅0.3～0.5m、深さ0.1m の南北溝である。遺物は出土しなかった。

SD－12　038－018（第９図、図版３・７）

街道跡 SX－３の北側を沿って東西に走る大溝。SD－４の突端部でカーブし、幅をやや減じ SD－４と平行しながら東へ延びる。地山面でみると、30M41で半ば途切れてブリッジ状部分を形成しており、東半部では南側に幅0.6m ほどの浅いワダチ跡状の細溝を伴っている。地山面での規模は西半部での幅3.0～4.0m、深さ0.6m、東半部では幅約2.3m（北側の溝も含めると2.8m）、深さ0.6m を測る。下端は西半部が0.5m、東側が1.0m である。壁はダラダラとあがっている。検出面では幅５ m ほど、深さ0.9m である。検出面は街道跡の下層のレベルと同じであって、断面からみて掘り込み面がほぼ同じレベルにあるので、これが本来の規模であろう。自然堆積の黒褐色土が覆土となっており、下半部は水気のため鉄分を含みシルト化している。

遺物は18世紀中葉までのものを主体に250点が出土した。陶器や18世紀の有田焼が29％でめだつ。この他土師質土器、土師器で40％を占めている。街道跡の下層はこの溝に対応しているとみられる。

出土遺物（第31・32図、図版26・27、表12・27）

1は大振りな鉢の下半部で灰釉が施されている。内面に3箇所、円形に釉のかからない部位があるが、重ね焼きの保持具を置くためであろう。底裏には墨書があるが解読できない。17世紀の美濃産のものである。

2・3は小皿で、灯明皿とされるもの。内面から口縁外部にかけて、2では厚く、3では薄く鉄釉が施されており、また両面に輪状の保持具痕が残されている。4は内面に受けが廻る型の灯明皿で、内面から口縁外部にかけて鉄錆状の釉がみられる。内外面には炭化物が全面に付着している。この炭化物は割れ口にも見られ、破損後も使用されていたと推測できる。

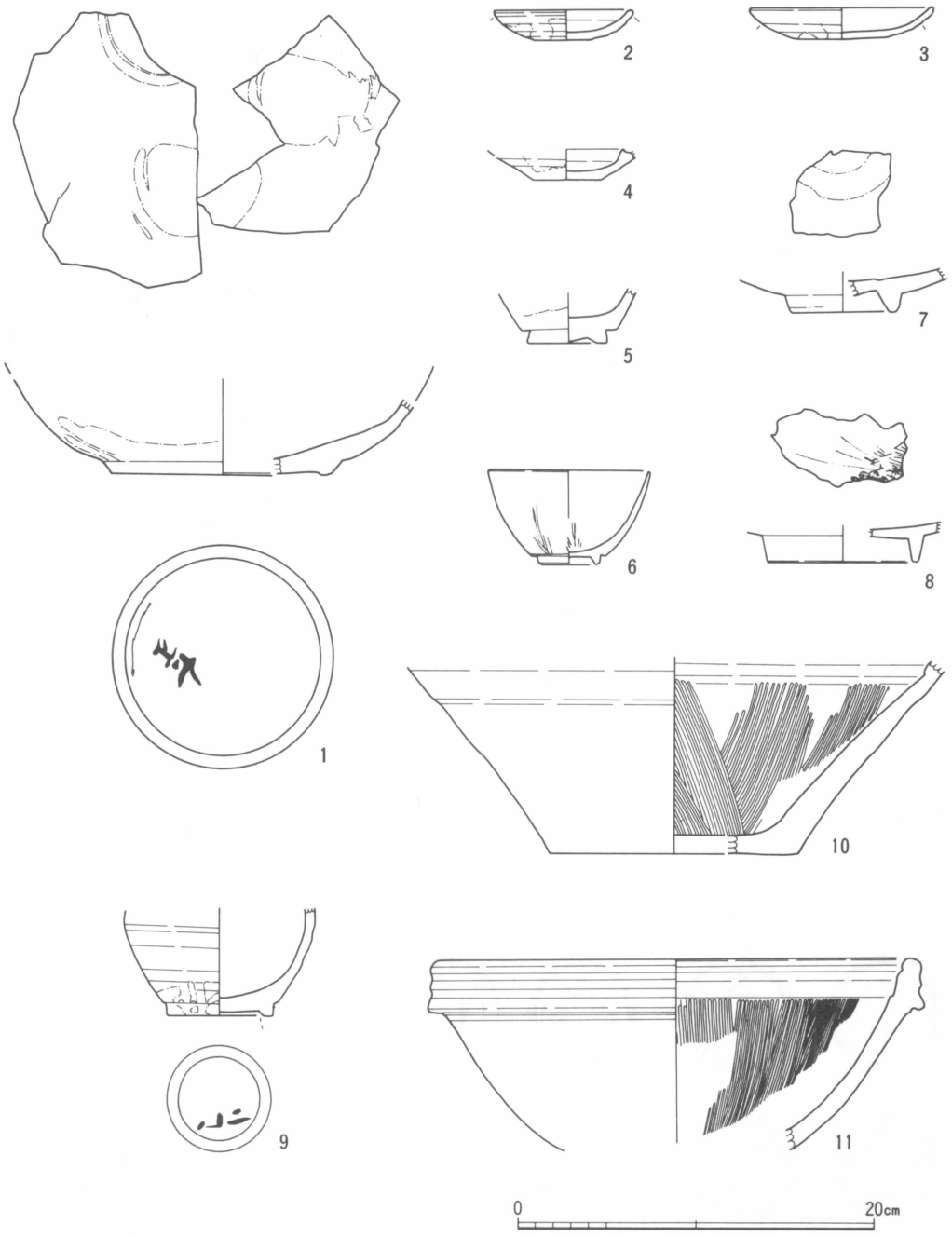
5は鉄釉の天目茶碗である。胴部は直線的に外傾している。釉は薄めにかかっている。17世紀の瀬戸・美濃系のものであろう。6は灰釉鉄絵碗で「信楽系」と称されるもので、鉄絵による笹葉文が施されている。体部は砲弾型に似た、上部が直立気味な形を呈しており、胴部下端には高台削り出しによる稜が形成されている。胎土は半磁器である。19世紀前半に比定できる。

7は輪禿鉢である。淡緑灰褐色の釉がかかっている。8は灰釉鉄絵鉢で、「京焼き風」の陶器である。鉄絵による草木文が施されており、高い高台を有している。底裏には「木弥下」の刻印がみられる。胎土は非常にきめ細かく、灰褐色の生地に乳褐色の粘土が混合され、斑状をなしている。19世紀の所産。産地は問題となるところであるが、九州で作られていることは判明している。

9は黄褐釉の徳利で、球状の胴部に小振りの高台がつけられている。底裏には「小」と書かれた墨書がなされている。瀬戸・美濃系で17世紀の所産と思われる。

10は全体に鉄錆釉の施された擂鉢である。径30cm強、高さ10cmを超える。口縁上端は欠けるものの、端部で段をなすことがうかがえる。内面は条がかなり密にみられ、下半部は使用によりよく摩滅している。底面も置いたために擦れて、部分的に摩滅痕がある。17～18世紀、瀬戸・美濃系のものであろう。11は無釉の焼き締め擂鉢で、径約28cmほどのものである。口縁にタガ状の縁帯が巡らされ、内面の条線は上部まで間隙なく施されている。19世紀中葉の備前系のものであろう。

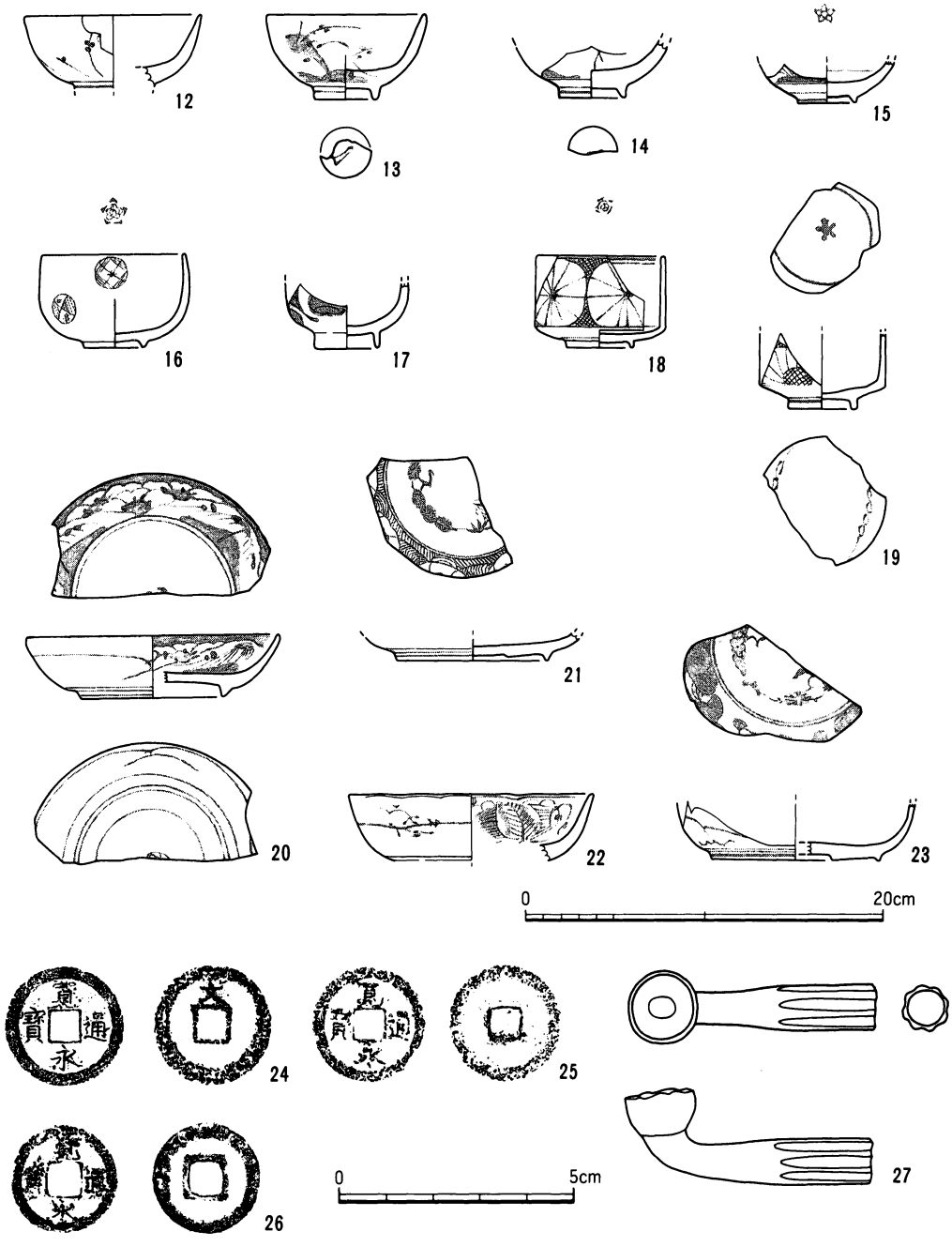
12～19は磁器の染付碗である。12～15は梅樹文が施されており、「くらわんか手」と呼ばれるもの。厚手で体部は球状を呈しており、口辰部は薄くなる。12は鉄絵である。13・14は底裏に銘が、15は底部内面にコンニャク版らしい五弁花がみられる。16は背の低い丸型の茶碗であり、体部は直立し、口縁近くで若干内湾する。円形文が体部を上下交互に配されている。底部内面には五弁花がみられる。17は16と似た器形をとると思われるが小振りである。細い刻線で曲線文を区画し、内部に点や線を書き加え、さらに呉須で区画内を塗っている。文様の全体は窺えないが、栗の実とイチョウの葉のようである。新しい時期のものの感じが強い。18・19は筒型碗である。黒っぽい青で大柄な菊花文が格子目文と組み合わされて施されている。18は底部内



第31図　SD-12 出土遺物(1)

面に崩れた花文がみられる。19では底部内面にコンニャク版の五弁花の他、底部裏面に鎖状の文様がみられる。

20～23は染付の皿である。草木・草花文が内面に描かれ、外面には唐草文が横走する。20はこの中では最も古い様相を示すもので、口唇には鉄で縁どりがされ、以下に黒味がかった青で、



第32図　SD-12 出土遺物(2)

大柄な花・柳・山を組合わせ、山水的な文様を施している。見込みには五弁花、底裏には銘がみられる。21は口縁内面の文様は不明だが、見込みには松・梅がみられる。底裏は蛇の目状に段がつき、釉が剝される部分がある。22は口縁が波状をなし、草の葉に唐草と条線が組み合わされた文様を持つ。23は見込みに松・竹を配し、口縁に花文と綾杉文を組み合わて施すものと思われる。底裏は21と同じ形状である。

24～26は寛永通寶で、いずれも新寛永である。26は寛文亀戸銭、27は延宝亀戸銭、28は元禄大坂軽目銭になる。

27は銅製のキセルの雁首である。長さ5.3cm、火皿部の径1.5cm、脂返し部は直角に近く屈曲する。ラウとの接合部は外径1.0cm、内径0.75cmで、軸に平行する筋が8条密接して彫りこまれている。

SD－13　038－035（第9図）

SX－1の下をSD－10とX字状に交差しながら東西に走る浅い溝で、幅0.7m、深さ0.15mである。出土遺物にはカワラケ小皿等が若干量得られた。

出土遺物（第30図、図版25、表11）

1・2はカワラケ小皿、3は台付き皿の高台部である。

SD－14　038－058（第9図、図版7）

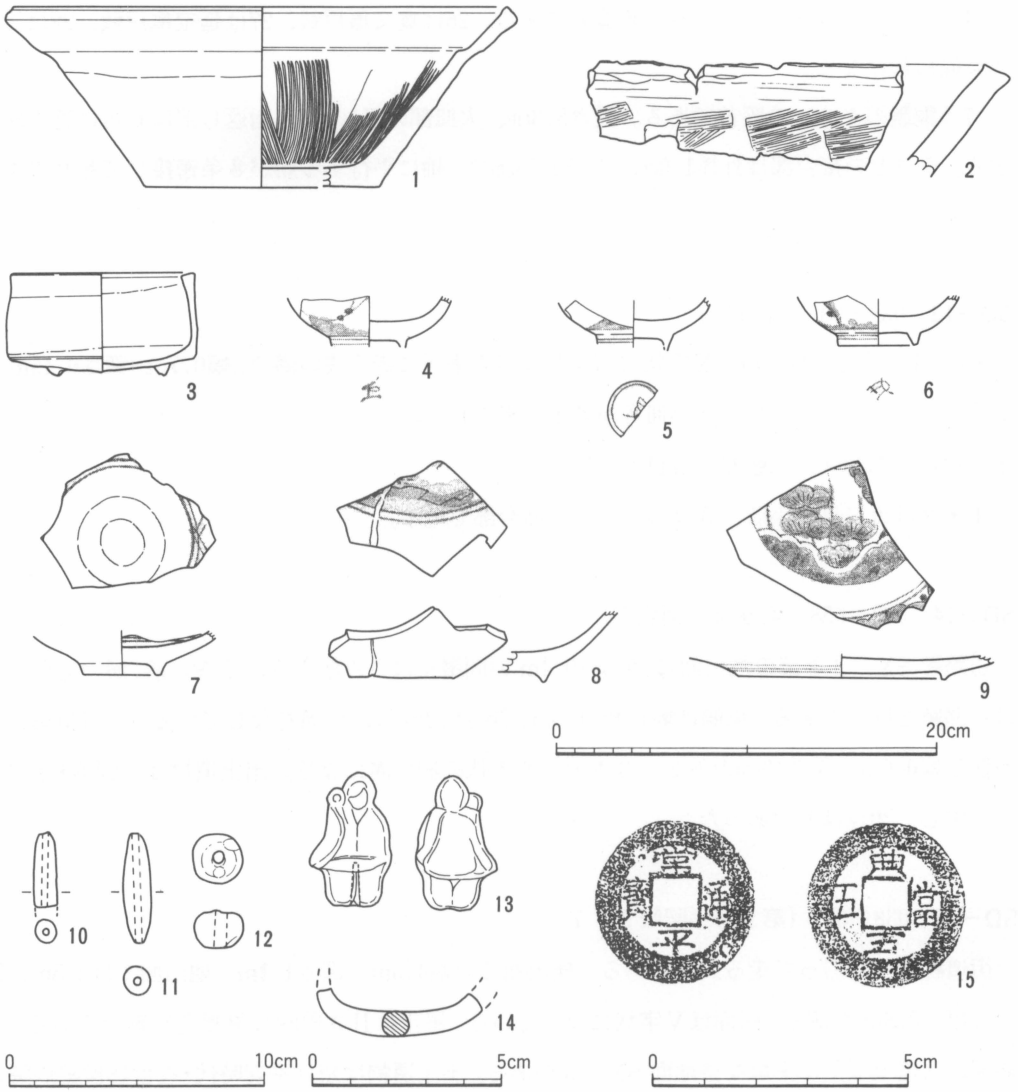
道路跡SX－3下部の地山面に、0.3～0.4mの間層をはさみ配置される浅い溝。溝の走行方向は道路跡と同一である。東側は幅1.4～1.5m、深さ0.2mの浅い溝をなしているが、31M01から西側は幅0.6m、深さ10cm内外2～3本のワダチ状の細い溝になる。出土遺物は土師器・須恵器片を中心に20点ほどであった。

SD－15　038－002（第9図、図版3・7）

街道跡南側を沿って走る大溝である。検出面での幅4.5m×深さ1.1m、地山面では3.5m、底面の幅は0.8mを測る。断面はV字状になっている。覆土はIIa層的な黒褐色砂質土である。西端部には覆土下位に平坦な整地面SX－3がある。出土遺物は奈良平安時代・近世18世紀以降の遺物から現代のものまで約530点がえられた。土師器・須恵器・陶磁器で7割方を占める。図示したものには明治期以降とみられるものは除外している。

出土遺物（第33図、図版28、表13・24・25・28）

1は瀬戸・美濃系の擂鉢である。口縁下端で2段階に屈曲して段をなしている。櫛目はその段以下に施され、底面では同心円状になる。鉄錆釉が底裏にまでかかっている。使用痕は下部に僅かに認められる。18世紀前半のものか。2は常滑産の捏ね鉢である。口唇は断ち切ったように角頭状をなしている。胎土はレンガ質。器面にテリがかかって光沢がみられる。体部には刷毛目が残されており、使用により内面の下半部がよく摩滅している。右側の割れ口には炭化物状のものが付着しているが、歴史民俗博物館の小野正敏氏の御教示によると割れ目を修復する際に用いられたウルシの痕跡ではないかとのこと。16世紀末から17世紀初頭のものとみられる。3は黄褐色釉香炉である。釉は内面口縁上端からから外面の底部際にかけて施されている。



第33図　SD-15 出土遺物

胎土は精選されており、調整も丁寧である。底面に粘土を小さく貼りつけて、三足としている。

4～6は染付磁器の碗で、「くらわんか手」のものである。いずれも外面に梅樹文、底裏に銘を施されている。5は呉須が黒ずんでおり発色が悪く、釉も白濁している。6の高台には砂が溶着している。

7から9は染付磁器皿である。7は文様は不明だが、見込みに輪剝ぎ痕がみられ、重ね焼きの痕が残されている。全体に厚手で釉にムラがあり、仕上がりは悪い。高台は厚みがあるが径は小さく、砂が若干溶着し残されている。8は見込みに染付文様が施され、かつ口縁表裏に薄青磁釉がかけられて着色されている。割れ目が透明の接合材で修復されており（焼き継ぎとみられる）、貴重なものであったことをうかがわせる。9には梅花文がみられる。底裏中央にはピ

ン痕が残され、新しそうな様相と思われる。

10・11は細管状の土錘（１類）である。素焼で胎土は精選されている。12は土玉で、径2.0cm、やや偏平である。

13は長さ3.0cmの土人形であるが、両面から型を合わせ成形され、底面からは細い孔が開けられている。狩衣状の服装や顎の髭、右手に有している持ち物からみると、七福神の類ではないかと推定される。

14は鉄製品である。部分品だがU字に曲がる円棒状で端部が細くなる。タンスの引き手ではないか思われる。

15は常平通寶という大型の鉄銭である。李氏朝鮮時代の貨幣で初鋳年は1678年である。

SD－16　038－037（第９図）

31L12、31L22で調査区西境に半ばかかって検出された。南北とも攪乱が入っていて規模不明。一応溝状遺構に含めた。土師器甕や赤彩坏の破片の出土が少量みられた。

SD－17　038－036（第９図）

31L22でSD－16とSX－5との間に検出された細い南北溝。幅0.7m、深さ0.1mを測る。南側に攪乱があり、続き具合いが不明である。遺物は土師器・須恵器片が若干出土したのみである。

SD－18　038－026、027（第９図、図版９）

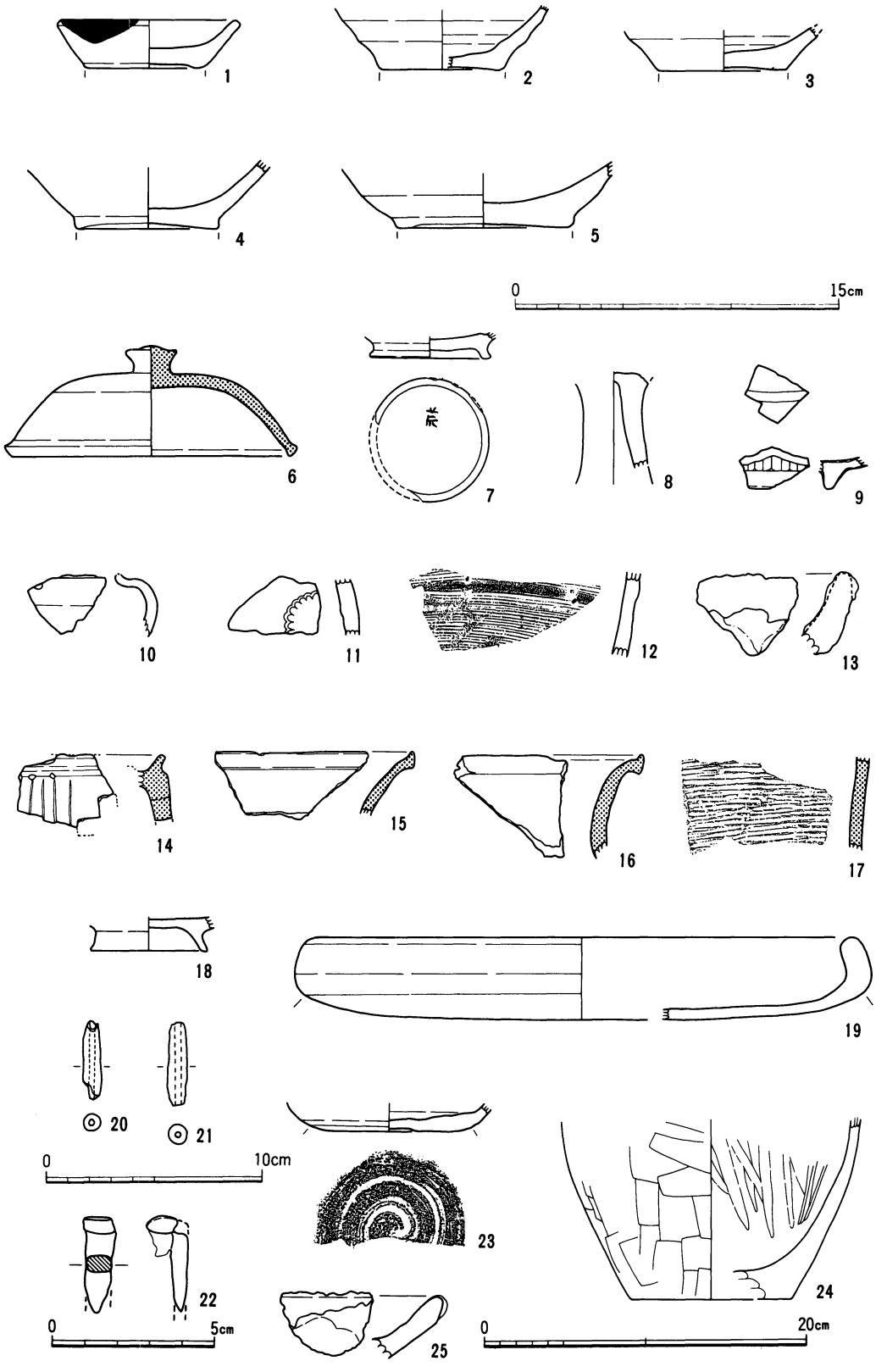
本遺構およびSD－19、SD－20は、街道跡部分からSD－23の溝まで軸をやや西に傾けながら、並列して延びる南北溝である。31M11から32M34にかけ、幅0.7m～1.3m、深さ0.3mを測る。土師器・須恵器を主体に、若干土鍋片等の中近世遺物も加え、30点ほどが出土した。

出土遺物（第34図、図版29、表14）

24はルツボ片である。厚手の皿状をなしており、径は10cm程度か。胎土は細砂粒多く含み、灰褐色を呈する。内面から口縁上部にかけて溶鉄が付着している。また外面下半部は擦られて摩滅している。

SD－19　038－024、034、040（第９図、図版９）

並列する３溝の中央にあり最も規模が大きい。幅1.0～4.0m、深さは0.3m以内。南に向けて広くなっている。覆土上部東壁ぎわには0.4mほどの幅で硬化した面（038－040）があった。床面、特に南側部分では段やワダチ状の浅い溝がみられる。南端SD－23の直前に径1.2m×0.9m、深さ0.3mのピット（038－034）がある。道路跡に伴う溝である可能性が濃い。出土した遺物はほとんど破片ではあるが約500点と多量である。内訳は土師器が約400点、次いで須恵器が



第34図　SD-18・19・23・24 出土遺物

80点と奈良平安期の遺物が支配的である。

出土遺物（第34図、図版29、表14）

14～17は須恵器である。14は十字透かしの入る円面硯で、縦の篦書き沈線を伴う。胎土には長石粒が顕著である。15・16は須恵器甕ないし甑の口縁部である。上端部で急激に外反し、口唇は垂直に切られ、丸みをもって端部処理され、若干上方に突出気味である。15は黒灰色を呈し硬質。胎土がきめ細かい。頸部内面の一部が擦られて摩滅している。16は灰色で軽い感じ。17は平行叩き目の施された胴部片であり、胎土に石英、長石、雲母細粒がめだつ。

18は土師器で、内黒の高台付き坏の底部である。内面は黒色研磨され暗文が放射状に施されている。

19は近世のホウロク鍋である。径27cm、高さ5cmと偏平である。耳はない。土師質で、体部内外面はきれいにロクロナデ調整されている。底裏は無調整でススけている。

SD－20　038－028（第9図、図版9）

SD－19の西わきに配される細い溝。幅0.4～0.7m、深さ0.1m弱である。遺物は土師器主体に20点余りが出土した。

SD－21　038－029（第14図、図版4）

SX－6の南端、調査区境と県道にかかっており、ごく一部しか調査できなかった。SX－6よりも新しい。規模は不明である。遺物は土師器を主体に少量出土した。

SD－22　038－053、055（第9図、図版9）

SD－19南端を起点として、SD－23の北側に沿って、北東－南西にのびる浅い溝。最大幅2.0m、深さ0.2m。底面は軽いワダチ状を呈していた。道路としての性格が強い。遺物は74点が出土し、内訳は6割が土師器、次いで3割が須恵器である。

SD－23　038－022、068（第9図、図版9）

32L44区から33L34区間を北東－南西に直進する、V字溝で幅1.6～2.5m、深さ0.45m。底面での幅は平均0.6m、比高差はなく、ほぼ水平にのびている。東端部でSD－19のピットと対向するように、径0.8m深さ0.3mのピット（038－068）が検出されている。出土遺物は約200点、5割が土師器、3割が須恵器であるがすべて破片である。カワラケや土鍋、陶磁器片など中近世遺物も2割を占めており比較的比率が高く、この溝が近世まで使用されていたことは確実である。

出土遺物（第34図、図版29、表14・25・28）

1～4はカワラケ小皿である。1は小型で灯芯をかけた箇所にスス痕がみられる。ススは内面では芯部が薄く、芯の両側が顕著である。5はカワラケとしては大振りで、皿としてよかろう。

6～8は土師器である。6は体部が高い球状をなし、擬宝珠形のツマミがつく。カエリは消失して、口縁端部の身との合わせ部分が凹線状に成形されている。7は赤彩の施された高台付き坏の高台部で、裏面に小さく「荒」の墨書がある。器面には赤色顔料塗布時のハケ痕が明確に認められる。8は高坏の脚部で、先端は坏部との接合する箇所で分離している。脚の内側にまで平滑にロクロナデが及んでいる。

9は中国青磁の盤の高台部片である。外面に蓮弁文、内面には同心円文が施されている。龍泉窯系の製品で14世紀に位置づけられる。釉は1㎜の厚さにかけられている。

10は肩衝茶入壺で、内外面に鉄釉が施されている。胴径は10cm程度と小型のもので、肩が張る器形で、頸部・口縁はわずか立つのみである。美濃産と思われる。11は外面に横走の条線のみられる陶器で、鉄錆状の釉がかかっている。甕ではなく、手あぶり・火鉢等の器種になると思われる。還元炎焼成で、胎土が灰色を呈しており、黒斑が顕著に認められる。産地は不明。

13はルツボであり、土師質で内面から口縁にかけ溶鉄が付着している。

19・20は細管状（1類）の土錘である。

21は折頭釘の上部である。半欠品であり、残りが悪い。

SD－24　038－059（第9図、図版9）

33M14区から西南西方向の33L34区に直線的に走り、SD－23に接する細溝。幅0.7m、深さ0.1m、SD－23に接する近辺で幅が1.2m以上と拡がる。遺物は土師器を主体に約100点の出土であった。

出土遺物（第34図、図版29、表14）

23は土師器の碗とおもわれるものである。回転ヘラ切りされており、細砂を多量に含みやや焼成が不良で質感は甕のそれと似ている。24は土師器の甕の下半部で、底板が厚く、胴部は直立気味にのびる。かなり高い器形になりそうである。焼成は良い。外面底部裏までヘラ削りが施されている。

SD－25　038－060（第9図、図版9）

33M12区からSD－23の南東岸から始まり、34N00区へ延びる細溝。幅0.4m、深さ0.1m弱である。遺物は出土しなかった。

表9　SD－1～SD－7出土土器

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	カワラケ 小皿	7.8 2.0 4.8	1/3	ロクロ成形 糸切り		SD-1 (002)一括
2	〃 小皿	7.4 2.0 4.3	4/5	ロクロ成形 糸切り痕		SD-7 016-6
3	〃 小皿	8.9 2.9 5.6	4/5	ロクロ成形 糸切り痕		SD-3 031-6
4	〃 小皿	9.2 3.2 5.3	1/4	ロクロ成形 糸切り痕	内面スス跡	SD-1 (002)一括
5	〃 小皿	— — 6.1	口縁欠	ロクロ成形 糸切り痕		SD-2 020-22
6	カワラケ 高台付皿	— — 7.1	底部のみ	ロクロ成形		SD-1 (002)-108
7	〃 高台付皿	— — 8.0	底部のみ	ロクロ成形		SD-1 025-13
10	青白磁 瓶子	— — —	口縁片	ロクロ成形 内外施釉	上端切断加工 淡青緑色 胎土：青灰色・チミツ	SD-1 (002)
11	〃 瓶子	— — —	胴上部片	ロクロ成形 内外施釉 草文	外面：貫入	SD-1 (002)
12	〃 瓶子	— — —	胴上部片	ロクロ成形 内外施釉 草文	外面：貫入	SD-1 (002)-1・112
13	陶器 擂鉢	(26.6) 9.9 12.5	1/5	口縁ヨコナデ 外：指頭痕	常滑 胎土：石英・長石多 底面砂つき	SD-6 021-5
14	〃 大甕	37.6 54.0 15.5	1/4	外：ヨコナデ ハケ目、ヘラ跡 内：指頭痕 テリ	常滑 胴径　55.9cm 胎土：褐色、礫混 30L-12、13、22、23 30	SD-1 (002)-102 131～133・ 135～137・ 140～142 020-1～3・ 5～7・9 11・12・17 (003)-9 025-3 030-8、039- 74・84・86

表10　SD－8出土土器・石塔・木製品

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	カワラケ 小皿	7.3 2.0 5.5	1/2	ロクロ成形 糸切り痕	スス付着 断面磨滅	067-137
2	〃 小皿	8.4 2.5 5.2	1/2	ロクロ成形 糸切り痕	内外面にリング状のスス	067-29
3	〃 小皿	8.4 2.7 5.0	3/4	ロクロ成形 糸切り痕	スス付着	030-71
4	〃 小皿	8.8 2.5 5.9	2/3	ロクロ成形 糸切り痕	内面スス	030-29
5	〃 小皿	9.0 2.4 5.6	1/2	ロクロ成形 糸切り痕	スス付着	030-70 067-48
6	〃 小皿	8.5 2.6 6.0	2/3	ロクロ成形 糸切り痕		073-11
7	〃 小皿	12.0 2.8 6.4	1/2	ロクロ成形 糸切り痕	胎土：金雲母片混	073-10
8	〃 小皿	— — 5.8	1/5	ロクロ成形 糸切り痕		030-87
9	〃 小皿	— — 5.5	口縁欠	ロクロ成形 糸切り痕	スス付着	067-92
10	〃 小皿	— — 5.5	1/3	ロクロ成形 糸切り痕		030-14 19
11	〃 小皿	— — 6.2	1/5	ロクロ成形 糸切り痕		(004)一括
12	〃 小皿	— — 6.6	1/3	ロクロ成形 糸切り痕		030-23
13	〃 小皿	— — 6.3	1/2	ロクロ成形 糸切り痕		067-112 030-113
14	〃 小皿	— — 6.7	口縁欠	ロクロ成形 糸切り痕		067-97
15	〃 小皿	— — 6.8	口縁上部欠	ロクロ成形 糸切り痕		067-115

16	カワラケ 小皿	9.0 3.2 5.1	1/2	ロクロ成形 糸切り痕	口唇先端ケズリ	SX-1 064-1・23
17	〃 小皿	— — 6.4	台部1/2	ロクロ成形 糸切り痕		032-3
18	土師質土器 器台	— — 11.3	台部1/3	ロクロ成形 穿孔		067-122
19	陶器 皿	12.1 2.4 6.3	1/2	ロクロ成形 ケズリ出し高台 灰白色釉	鼠志野 胎土：灰黒色 炭化物付着	073-12
20	〃 擂鉢	32.3 13.3 11.0	胴2/3 底欠	ロクロ成形 ケズリ	まばらな条線 内面炭化物	067-72・126・ 140、073-13 (004)-69
21	〃 火鉢	—	底部片	ヨコナデ	瓦質 スス付着	067-133
22	土師質土器 火鉢？	—	口縁片	(内) ヨコナデ (外) 型押文	胎土：雲母粒含	073-33
23	〃 外耳釜	—	耳部	ヨコナデ	土師質 SX-1	064-27
24	〃 擂鉢	—	破片	巾2㎜、深さ 1㎜の刻線	土師質 長石、雲母、石英含	030-86・113
33	五輪塔 笠部	辺25.3 ×24.9 高15.0	完形	ヤスリ状の工具 で平滑化 ノミ痕一部残	砥石として転用 孔径=5.2 軟質砂岩	(004)-41
34	木製品	長 7.7 巾 3.7 厚 1.3	完形	平坦に加工	内径=0.6 ヒノキ属類似種	073-61
35	〃	長(7.8) 巾 2.0 厚 1.2	両端欠	3面平坦に 加工	コナラ属（アカ ガシ亜種）の一種	073-35
36	〃	長(12.3) 巾 4.7 厚 0.9	一端欠	板状	ヒノキ属の一種	073-23
37	〃	長(20.9) 巾 6.7 厚 0.8	一端欠	板状	ヒノキ属か	073-52
38	〃	長(18.3) 巾 1.4 厚 1.3	両端欠	角棒状 一端加工？	ヒノキ属の一種	073-30
39	〃	長 12.2 巾 8.5 厚 2.3	不明	厚板状 正面平坦	針葉樹	073-28
40	〃	長(12.7) 巾(4.3) 厚(1.7)	一端欠	平棒状	ヒノキ属か	073-56

41	木製品	長 (17.6) 巾 2.8 厚 (3.2)	部分品	棒状 ホゾ穴？	ヒノキ属か	073-4
42	〃	長 (15.6) 巾 4.7 厚 3.2	部分品	棒状 ホゾ穴？	叉手状 ヒノキ属類似種	073-54

表11　SD－10・13出土土器・石塔

番号	器　種	法量 (cm) 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	カワラケ 小皿	7.2 2.3 4.2	1/4	ロクロ成形 糸切り痕	スス付着	SD-13 4
2	〃 小皿	7.6 2.2 4.2	2/3	ロクロ成形 糸切り痕		SD-13 3・4
3	〃 台付皿	— — 6.6	高台部 の2/3	ロクロ成形 糸切り痕		SD-13 5
4	土師質土器 有孔台	— — —	上下欠	ロクロ成形		SD-10 6・7
5	石塔 相輪？	長 — 径 14.3	基部		風化磨滅著しい 軟質砂岩	SD-10 12

表12　SD－12出土土器

番号	器　種	法量 (cm) 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	陶器 鉢	— — 〔12.4〕	1/3	ロクロ成形 灰釉（貫入有）	胎土：乳灰色 底：記号墨書	120・139 002-101 026-3
2	〃 灯明皿	8.0 1.7 3.3	1/2	ロクロ成形 外：回転ヘラケズリ 鉄釉	胎土：灰褐色	58
3	〃 灯明皿	10.4 1.8 5.0	2/3	ロクロ成形 外：回転ヘラケズリ 鉄釉	胎土：灰褐色	79
4	〃 受付灯明皿	— — 3.8	2/3	ロクロ成形 外底：回転ヘラケズリ 鉄釉	胎土：乳灰色	24
5	〃 天目茶碗	— — 5.4〔 4.6〕	底部	ロクロ成形 削り出し高台 鉄釉	胎土：乳灰色	
6	〃 鉄絵碗	9.2 5.1 4.2〔 3.5〕	1/3	ロクロ成形 削り出し高台 灰釉（貫入有）	胎土：褐灰白色 半磁器 笹葉文	177

7	陶器 輪禿鉢	— — 〔 5.8〕	底部1/3	ロクロ成形 灰釉？	胎土：乳褐色 輪剝ぎ痕	88
8	〃 鉄絵皿	— — 〔 4.6〕	底部2/3	ロクロ成形 削り出し高台 鉄釉	胎土：乳灰色	177
9	〃 徳利	胴　10.7 — 6.1〔 5.9〕	下半部	ロクロ成形 黄褐釉（貫入有）	胎土：乳灰褐色 底：記号墨色	115
10	〃 擂鉢	— — 14.0	1/5	ロクロ成形 外：回転ヘラケズリ 鉄錆釉	胎土：乳灰色 内：底裏磨滅	93
11	〃 擂鉢	— — —	口縁1/4	ロクロ成形 焼き締め	胎土：赤褐色	45・65
12	磁器 染付碗	9.9 — —	1/3	ロクロ成形 鉄絵染付 全面　施釉	胎土：灰白色 全体褐色味 くらわんか手	126
13	〃 染付碗	8.9 4.8 〔 3.6〕	1/3	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 全体青味 底裏銘、くらわんか手	5
14	〃 染付碗	— — 〔 3.7〕	底部1/2	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：灰白色 全体青味、貫入有 底裏銘くらわんか手	120
15	〃 染付碗	— — 〔 3.5〕	底部のみ	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：灰白色 全体青味、貫入有 底内面五弁花 くらわんか手	61
16	〃 染付碗	8.2 5.2 〔 3.5〕	2/5	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 底内五弁花 円形文	97
17	〃 染付碗	— — 〔 3.6〕	1/4	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 貫入有 曲線文	1
18	〃 染付筒形碗	7.2 5.1 7.3〔 3.7〕	1/2	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 貫入有、底内花文 菊花文	128
19	〃 染付筒形碗	— — 7.0〔 3.8〕	1/3	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 底内五弁花 菊花文、高台に砂	70
20	〃 染付皿	14.1 3.4 〔 7.8〕	1/2	ロクロ成形 口銹、呉須染付 全面施釉	胎土：白色 底内五弁花、底裏銘 草木文	125
21	〃 染付皿	— — 〔 8.6〕	1/4	ロクロ成形 呉須染付 蛇ノ目高台	胎土：白色 全体薄青味 草花文	12
22	〃 染付皿	13.9 — —	口縁部片	ロクロ成形 呉須染付	胎土：白色 全体青味 草花文	1
23	〃 染付皿	— — 〔 9.4〕	1/3	ロクロ成形 呉須染付 蛇ノ目高台	胎土：白色 全体青味 草木文	117

表13　SD－15出土土器

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	陶器 擂鉢	27.6 9.5 12.4	2/5	ロクロ成形 胴、底裏：回転ヘラ 鉄錆釉　　ケズリ	胎土：乳灰色	322
2	〃 擂鉢	— — —	口縁片	ロクロ成形 外：ハケ目 鉄錆釉	胎土：褐色 内：下半磨滅	134 32M20 29M40
3	〃 香炉	9.6 5.4 9.8	ほぼ完形	ロクロ成形 底：回転ヘラケズリ 黄褐釉	胎土：乳褐色 三足	72
4	磁器 染付碗	— — —	1/3	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 梅樹文 底裏銘	322
5	〃 染付碗	— — —	底部片	ロクロ成形 呉須（黒味）染付 全面施釉	胎土：白色 梅樹文、底裏銘（白濁した釉）	323
6	〃 染付碗	— — 〔4.3〕	1/4	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 梅樹文、底裏銘（高台に砂付着）	323
7	〃 染付皿	— — 〔4.3〕	底部	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 輪剝ぎ痕 高台に砂付着	32
8	〃 染付皿	— — —	底部片	ロクロ成形 呉須染付 透明・青磁釉掛分け	胎土：白色 焼継ぎ痕	187
9	〃 染付皿	— — 〔10.8〕	底部1/4	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 梅花文	244

表14　SD－18・19・23・24出土土器

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	カワラケ 小皿	8.5 2.3 5.8	完形	ロクロ成形 糸切り痕	スス付着	SD-23 022-166
2	〃 小皿	— — 5.8	1/4	ロクロ成形 糸切り痕		SD-23 022-130
3	〃 小皿	— — 6.1	2/3	ロクロ成形 糸切り痕		SD-23 022-148
4	〃 小皿	— — 6.8	1/2	ロクロ成形 糸切り痕		SD-23 022-109
5	〃 小皿	— — 8.3	2/3	ロクロ成形 糸切り痕		SD-23 022-81・86 91、97

6	須恵器 坏蓋	径 18.8 高 6.7 —	1/5	ロクロ成形 つまみ近へラケズリ	長石粒混 つまみ部3.1×1.7cm	SD-23 022-76・89
7	土師器 高台坏	— — —	底部のみ	ロクロ成形 赤彩	胎土特選 「荒」の墨書	SD-23 022-160
8	〃 高坏	— — —	脚部1/2	内外：ロクロナデ	微細砂混 焼成良	SD-23 022-104
9	青磁 盤	— — —	底部片	内：円心円文 外：鏑蓮弁文	胎土：灰白色 釉：淡緑色	SD-23 022-2
10	陶器 肩衝茶入	— — —	口縁片	ロクロ成形 鉄釉	胎土：乳灰色 16C後半、美濃	SD-23 022-108
11	〃 瓶子	— — —	破片	内：ヘラ痕 灰釉（貫入有）	胎土：灰褐色 菊花文 瀬戸	SD-23 022-65
12	〃 鉢？	— — —	破片	ロクロ成形 鉄錆釉	胎土：灰色 黒色スコリア含 条線文	SD-23 022-100
13	ルツボ	— — —	口縁片		溶鉄付着	SD-23 022-31
14	須恵器 円面硯	— — —	破片	ロクロ成形 淡緑、十字透し	青灰色 長石礫多	SD-19 024-1
15	〃 甕？	— — —	口縁片	ロクロナデ	黒灰色堅緻 白色微細砂混	SD-19 024-213
16	須恵器 甕？	— — —	口縁片	ロクロ成形	灰色　軽質 白・黒色、微細砂混	SD-19 024-111
17	〃 甕？	— — —	胴部片	平行叩き目	雲母、石英、長石 細粒混	SD-19 024-43
18	土師器 坏	— — 7.7	底部のみ	ロクロ 内：黒色研磨		SD-19 024-213
22	炮烙	27.0 5.0 27.4	1/2	ロクロ成形	微細砂混 底部黒色	SD-19
23	土師器 碗	— — 8.4	底部1/2	ロクロ成形 回転へラ切り	暗褐色 白色細砂多	SD-24 059-3
24	ルツボ	— — —	口縁片		溶鉄付着 外面磨滅痕	SD-18 027-3
25	土師器 甕	— — (10.0)	底部1/3	外：ヨコへラケズリ 底：へラケズリ	明褐色 焼成良	SD-24 059-2・4 5・6

2　II区の調査

溝状遺構の集中箇所といえる。計11条が検出された。攪乱が地山面まで達する区域が大半で、包含層は僅かしか残存していなかった。所属時期の明確なものはない。他の遺構は流し桶跡1基、畝状遺構1箇所である。

特殊遺構

SX－7　038－087（第35図）

37M14・37N10区にかかって検出された排水施設の桶（流し桶）である。ちょうどSD－37の溝の東端にある。掘り方部分の上部2.0m、下半部径1.4m、深さ0.6m。桶の外径70cmで下部が残っていた。北側に径1.5m、深さ0.3m、擂鉢状のの張り出し部がつく。カワラ片、擂鉢片等が出土していることや覆土からみて近現代のものと判断した。

SX－8　038－101（第35図、図版11）

II層下で検出した畑の畝跡とみられる遺構。地山の暗褐色砂上に、SD－38に直交して幅0.2～0.4mの帯状に、黒色に染まった砂の分布が20条近くみられた。最長8.4m、畝の中心間隔は0.93mほどが多い。黒色砂は10cm弱の厚みがあった。伴出遺物は奈良平安期の土師器や須恵器などであるが、この地域自体、該期の包含層であるので、これが直接時期を示すものとはいえない。

溝状遺構

SD－26　038－086（第35図）

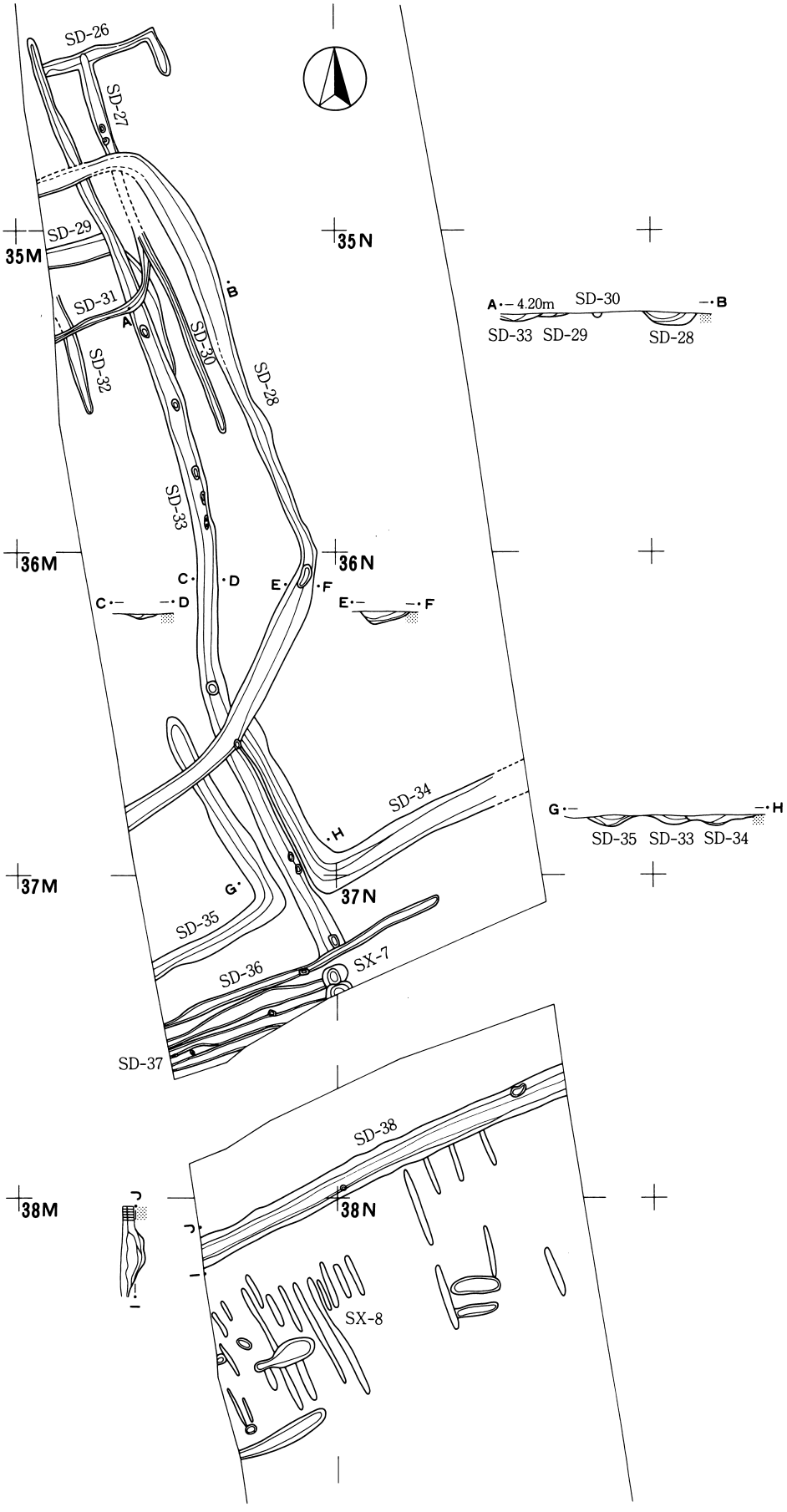
34M20区でSD－33から直角に西に延び、34M22区でL字に曲がって終わる溝。幅0.5～0.9m、深さ0.1m、総延長10m。遺物は土師器1点のみの出土であった。

SD－27　038－082（第35図、図版10）

34M21区でSD－26から発する南北溝。幅1.0m、深さ0.3mを測る。SD－28に接した南側は攪乱が入っており、つながりが不明である。遺物は須恵器・土師器片若干が出土した。

SD－28　038－081（第35図、図版10）

34M40列、35M、36Mを西側からコの字状に大きく廻るU字溝。幅0.8～2.0m、深さ0.2～0.4m。35M区の南部の部分が幅狭く浅い。その箇所が最も高く南と北方向に向けて若干下がっている。暗褐色土が覆土の主体となっていた。調査区内での延長51m。遺物は約240点で、9割方奈良平安期の土師器、須恵器である。



第35図　II区遺構分布図（平面図1/400 断面図1/200）

出土遺物（第36・37図、図版30、表15・25）

1は須恵器坏蓋のつまみの付近。胎土に礫、黒斑を含み、硬質な感じである。2は同質の須恵器坏、径は14cm。薄手の器厚を有し口縁上端で外反する。底部は手持ちヘラ削りされ、上げ底を呈している。

5は土師器の坏底部である。薄手で底部が小さく、体部は球状気味になる。6は内黒の台付坏の底部で球状体部を有する。7は「常総型」甕の胴下半の部分である。外面のヘラナデ、底面木葉痕、礫混じり胎土等の特徴を有している。

9は中世し器系陶器の台付鉢である。厚口で器高は高くなりそう。内面は擦られてよく摩滅している。還元炎焼成で、内面に自然釉が認められる。東海系で12世紀の所産であろう。

13は鉄絵、長石釉の施された皿である。瀬戸・美濃系である。

14・16はカワラケ小皿で、14は特に偏平で小型である。

18・19は長い算盤玉状を呈した土錘（2類）。器面は平滑に加工され、堅致な焼きである。24は中型の棒状土錘（3類）で、手づくねで粗雑な品である。25は全面ヘラ削りで径3.4cm、高さ3.5cmの短円柱状に成型され、中軸に細い孔が貫通している土製品。質感は土師器的である。形状、及び調整のなされ方からみて、単なる土錘ではなく、土製紡錘車であろう。

SD－29　038－085（第35図、図版10）

35M00区から西へ発し、35M01区SD－33と交差する箇所で南にカーブする、SD－28の内側を平行して走るL字溝で、南北溝部分の西壁はSD－33に切られている。南側はSD－33と重複してしまい1本になる。幅1.3m、深さ0.1mを測る。粘性・締りのない黒色土が覆土である。土師器、須恵器主体に15点の遺物が出土した。

出土遺物（第37図、図版30、表25）

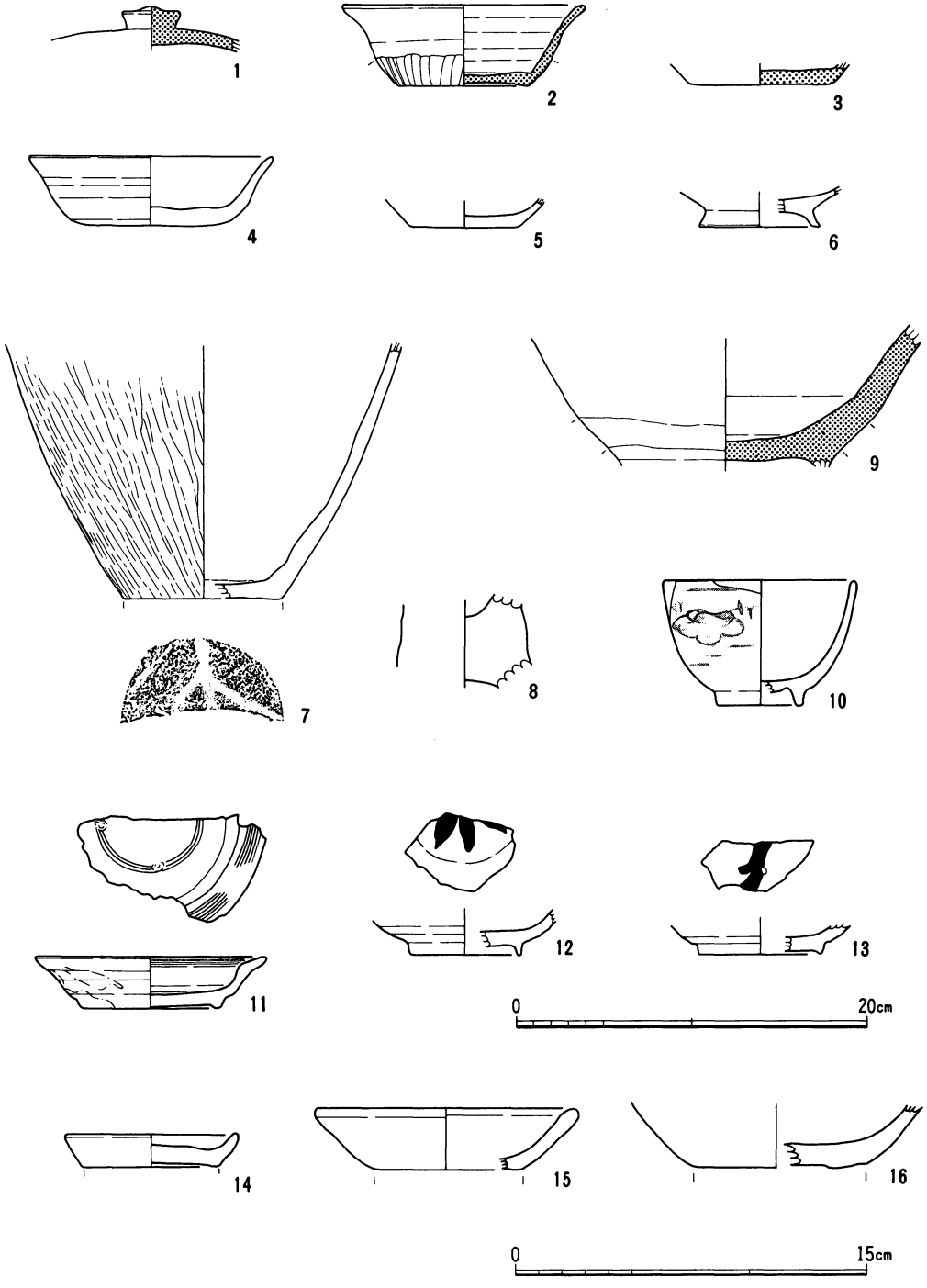
23は棒状の土錘（3類）である。

SD－30　038－082（第35図、図版10）

35M02区でSD－31と分かれ、SD－28とSD－33とのほぼ中間を走る細い布堀状の南北溝。幅0.2～0.5m、深さ0.2m。締まった暗褐色土が覆土となっていた。SD－27の延長線上にあるが、北側に攪乱が入っているのでSD－27からの続きぐあいは不明。遺物は土師器・須恵器片がごく少量出土した。

SD－31　038083（第35図、図版10）

SD－30と分かれL字にカーブしてSD－29、SD－33をきって西側調査区外に延びる細溝。幅0.5m、深さ0.2m。黒色系の土を覆土とする。遺物は土師器・陶器など約20点の出土があった。



第36図　II区溝出土遺物(1)

SD－32　038－084（第35図、図版10）

35M の調査区西端部の南北溝。幅0.5～0.8m、深0.1m。遺物は土師器・須恵器等が若干出土したのみである。

SD－33　038－076（第35図、図版10）

35M00区から37M14区まで総延長59.5m を南北に走るU字溝。南端は SD－36と接続する。幅0.5～1.6m、北側が細く、南に至って幅を増していく。深さ北側34M 区は0.1m と浅いが、中間部35M 区では0.3m と比較的に深く、また36M 以南になると0.2m ほどになる。床面の比高差でも同様の傾向がある。なお底面でピットが 9 個検出されている。覆土は暗褐色から黒色系の土である。土師器を主に、陶器など計115点が出土した。

出土遺物（第36・37図、図版30、表15・25）

8 は土師質の高坏脚状品で、上下端が欠損している。性格不明だが器台的なものの可能性もありそうだ。内面はきれいにナデ調整が行われている。

10は磁器碗であるが、志野のように釉が白濁しおり、かつムラがある。鉄による草花文の染付が行われている。高台には砂が付着して残されている。19世紀以降の瀬戸・美濃系の可能性がある。

15は大振りなカワラケ小皿である。20は長算盤玉状の土錘（2類）である。

SD－34　038－074（第35図、図版10）

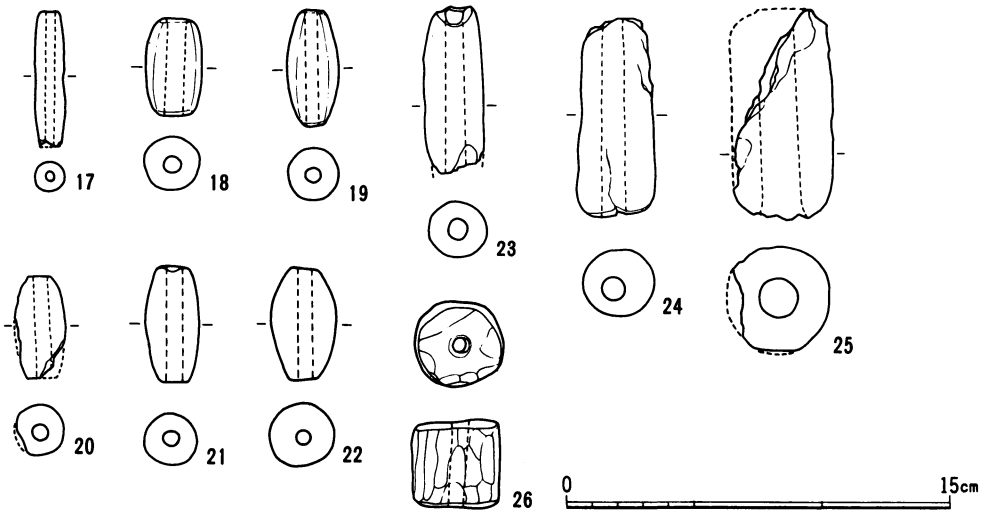
36M23で SD－28から SD－33の西側に接しながら南下し、直角に折れて東に続く溝。幅1.2～1.9m、深さ南北溝部分で0.5m、東西溝東端部で0.2m である。覆土は黒色系の土である。遺物は土師器の他、中近世土器等計18点の出土をみた。

SD－35　038－075（第35図、図版10）

SD－33をはさみ SD－34と正対するL字状の溝。幅1.2～1.5m、深さは北部では0.2m ほどであるが、南に向かうにしたがい0.4m 以上にもなる。底面の比高も東西溝部分が低くなっている。覆土は締りを欠く黒色系の土である。遺物は土師器・須恵器が75％で、陶器や土鍋も少量含み、40点余りの出土をみた。

SD－36　038－077（第35図、図版10）

道路の北ぎわにあるワダチ状の溝のうち最も北側のもの。SD－34・35から 3 m ほどはなれて平行している。幅0.4～0.8m、深さ0.1m。須恵器、陶器片若干が出土した。



第37図　II区溝出土遺物

SD－37　038－078、079、080（第35図、図版10）

道路北ぎわの一連のワダチ跡状溝。全体的に落ち込んでおり幅広い１本の溝としてとらえた。覆土が下がった段階で、幅0.5～1.0m、深さ0.1mの溝３条がSX－７の溜桶のところまで続いている状態が確認できた。

SD－38　038－088（第35図、図版11）

道路南側にあるＶ字溝。東北東－西南西方向に直線的にのびている。幅1.8m、深さ0.4m。底部の幅0.6m。東側は底面がやや高くなっている。やや締りをもつ黒褐色土、黒色土が覆土としてあった。出土遺物は土師器、須恵器等約50点の出土をみた。

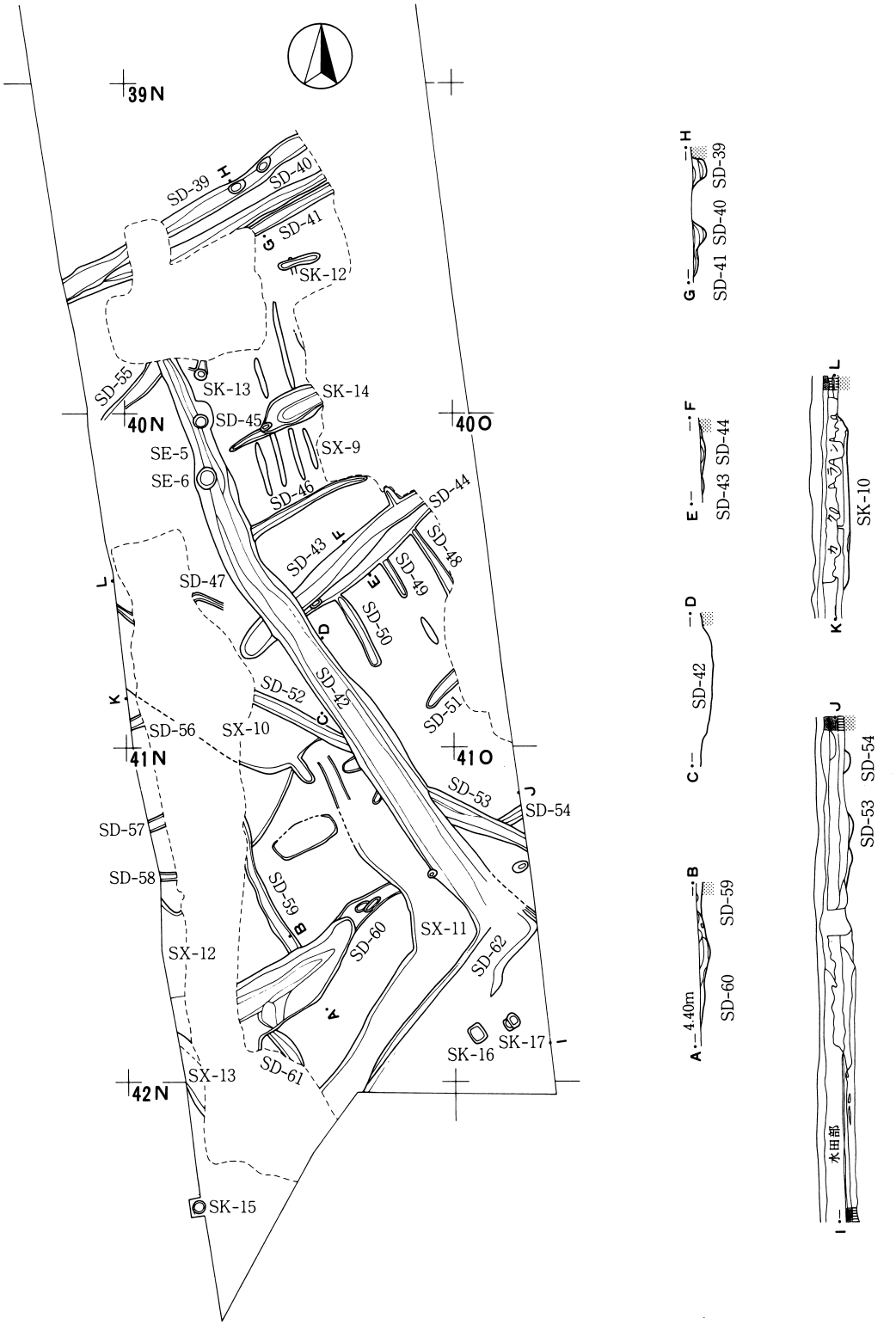
出土遺物（第36・37図、図版30、表15・25）

３は須恵器坏底部である。４は土師器坏で径14cm口縁上部で外方に開く器形をなす。両者ともに風化が進んでいる。

20・21は長算盤玉状の土錘（２類）で、外面はきれいに平滑にされ、堅致な焼成である。胎土は精選されている。

表15　II区溝出土土器

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	須恵器 坏蓋	— — —	1/3	ロクロ成形 外：ヘラケズリ	青灰色 石英長石礫混	SD-28 081-57
2	〃 坏　1b類	14.0 4.2 7.6	1/2	ロクロ成形 外底：手持ちケズリ	青灰色 長石、黒斑 灰色BK混	SD-28 081-5・37 59
3	〃 坏　2b類	— — 8.2	底部のみ	ロクロ成形	明灰褐色 全面風化	SD-38 088-10
4	土師器 坏　2a類	14.0 3.0 9.3	1/3	ロクロ成形	明灰褐色 全面風化	SD-38 088-8.9
5	〃 坏　4類	— — 6.5	底部のみ	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	風化激しい	SD-28 081-122
6	〃 高台付坏	— — 6.9	底部1/2	ロクロ成形 付け高台	内黒 内面風化	SD-28 081-135
7	〃 甕	— — 9.0	下半1/2	外：タテナデ 木葉痕	長石、石英、雲母多 焼成良	SD-28 081-202
8	〃 高坏	— — —	脚部	外：ヨコナデ 内：ナデ	上部内面：平滑	SD-33 076-21
9	陶器 台付鉢	— — —	底部1/4	ロクロ成形 外：回転ケズリ 付け高台	明灰色 長石：石英、SC混 内面磨滅	SD-28 081-155 157・191
10	磁器 染付碗	11.6 7.1 〔5.2〕	1/3	ロクロ成形 鉄銹染付 全面施釉	胎土：白色 白濁釉、砂つき 草花文	SD-33 076-16
11	陶器 折縁皿	13.4 2.8 〔8.0〕	1/3	ロクロ成形 ケズリ高台 外下半無施釉	胎土：黒灰色 銅緑釉	SD-33 076-12
12	〃 皿	— — 〔6.6〕	底部片	ロクロ成形 底裏無施釉	胎土：乳灰色 鉄絵、長石釉	SD-33 076-44
13	〃 皿	— — 〔7.0〕	底部片	ロクロ成形 ケズリ高台 底裏無釉	胎土：乳灰色 鉄絵、長石釉	SD-28 081-208
14	カワラケ 小皿	7.4 1.4 5.9	1/2	ロクロ成形 糸切り		SD-28 081-1
15	〃 小皿	11.4 2.7 6.2	1/3	ロクロ成形 糸切り		SD-33 076-59.64
16	〃 小皿	— — 〔7.3〕	底部1/2	ロクロ成形 糸切り		SD-28 081-89



第38図　Ⅲ区遺構分布図（平面図1/400 断面図1/200）

3　III区の調査

II区同様溝の集中地域であるとともに、他の遺構も若干検出された。南端部は地山が下がって旧水田となっている。薄いながらも土師器の包含層でもあった。検出された遺構の内訳は井戸跡２基、土壙６基、整地跡３箇所、畝状遺構１箇所、溝24条である。

A　奈良平安時代の遺構

井戸跡

SE－５　038－094（第39図、図版12）

40N01区でSD－42を精査した段階で、溝に半ば切られて検出された井戸跡。SD－42の溝底部での径1.2mであるが東側に残された部分から推定すると上部の推定径1.8mとなる。底径は1.0m、地山面からの深さ1.0m、溝の底からは0.6mを測る。

黒灰色の砂質土が覆土となっており、遺物総数20点である。特に下部を中心に完形に近い坏などの土器が埋納されたように、まとまって出土したことが特徴的である。

出土遺物（第43図、図版32、表17・58）

１は須恵器坏の蓋である。上部で中央に向け落ち込むように出土した。径15.0cm、偏平で、口縁端部がＬ字状に折れている。紐部は欠けており接合のための渦巻沈線がみられる。青灰色を呈し、長石、石英粒の他、黒斑がみられる。

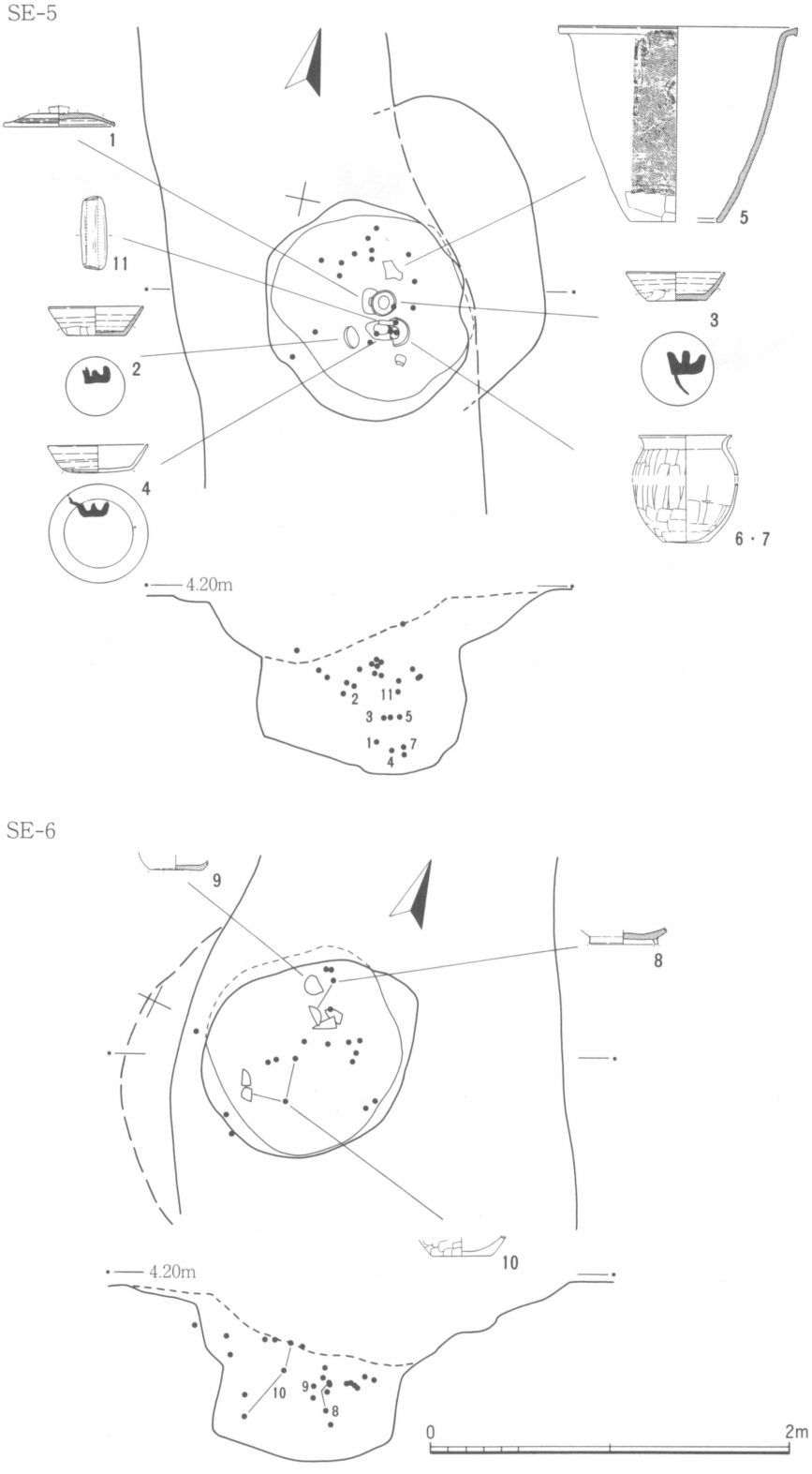
２・３は須恵器の坏である。２は３の真下に逆位で出土。口径12.9cm、器高4.1cm。胎土には長石、石英粒が多量に含まれている。底面には一方向への手持ちヘラ削りがなされ、太い粗雑な字で「山」の墨書が底部の稜よりに施されている。内面口縁上部、及び底面は擦られてやや摩耗している。３は中央下部で正位で出土した。口径13.3cm、器高4.0cm。底面回転ヘラ削りされ、２同様の「山」の墨書が施されている。墨は一部下方にたれている。胎土・焼成とも１と同一である。

４は土師器の坏である。３と南接して正位で北東へ落ち込んで出土したもの。口径13.8cm、器高3.8cm。内外面に赤彩痕がある。底面は手持ちヘラ削りされ、２同様の「山」の墨書が底面縁際にかかれており、一部墨が口唇にかけてたれている。

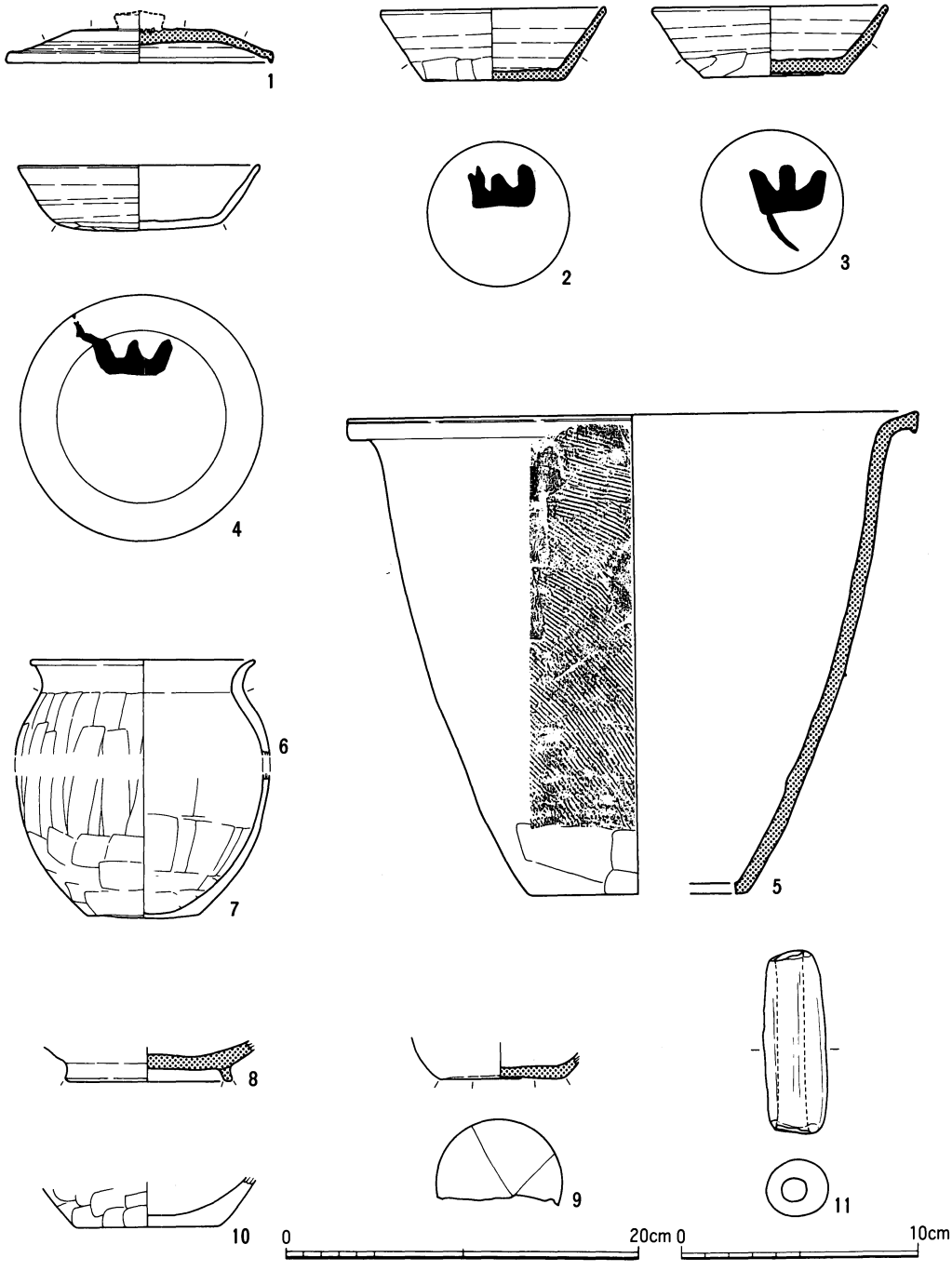
５は平行叩き目を有する須恵器の甑である。全体の４分の１周が残存していた。口縁端部で極端に屈曲し、いわば環状になる。色調など質感は２の坏に準じる。胴下端部はヘラ削りされており、摩耗している。底面の孔は２個以上であろう。

６・７は小型の土師器の甕で質感からみて同一個体かと思われるが接合しない。下半部である７のほうは中央部底面付近で正位で出土している。胴部は丸みを帯びており、口縁はくびれて緩く外反している。胴部外面にはヘラ削りが残る。内面にはヘラ痕がみられる。

11は棒状土錘（３類）である。縦長で大きい。胎土粒子細かく硬質な焼きである。



第39図　SE-5、SE-6 平面図・出土状況図



第40図　SE-5、SE-6 出土遺物

SE－6　038－095（第39図、図版12）

40N01・11区でSD－42の床面で検出された井戸跡。開口部、底部ともに径1.1mのほぼ円形をなす。地山面での径は2 m近くなると思われる。規模的にはSE－5とほぼ同一である。地山面からは深さ1.0m、溝の底からは0.7mを測る。黒色の砂質土が堆積しており、土師器などが

48点出土した。

出土遺物（第43図、図版32、表17）

8は須恵器高台付き坏の底部である。灰白色を呈し、胎土に微細な雲母がめだつ。内面の半分、高台端部が擦られて摩滅しており、転用の可能性がある。

9は底面手持ちヘラ削りの土師器坏で、中央に静止糸切り痕が残されている。

10は土師器甕の底部片である。内面にヘラ痕がみられる。

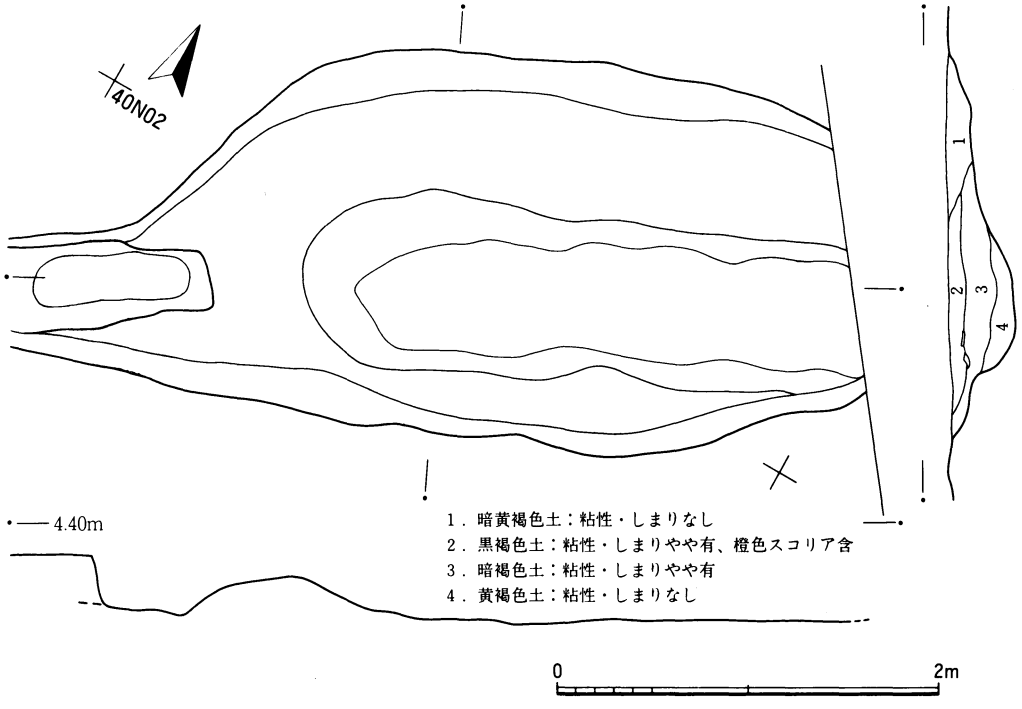
土壙

SK－14　038－093（第41・42図、図版12）

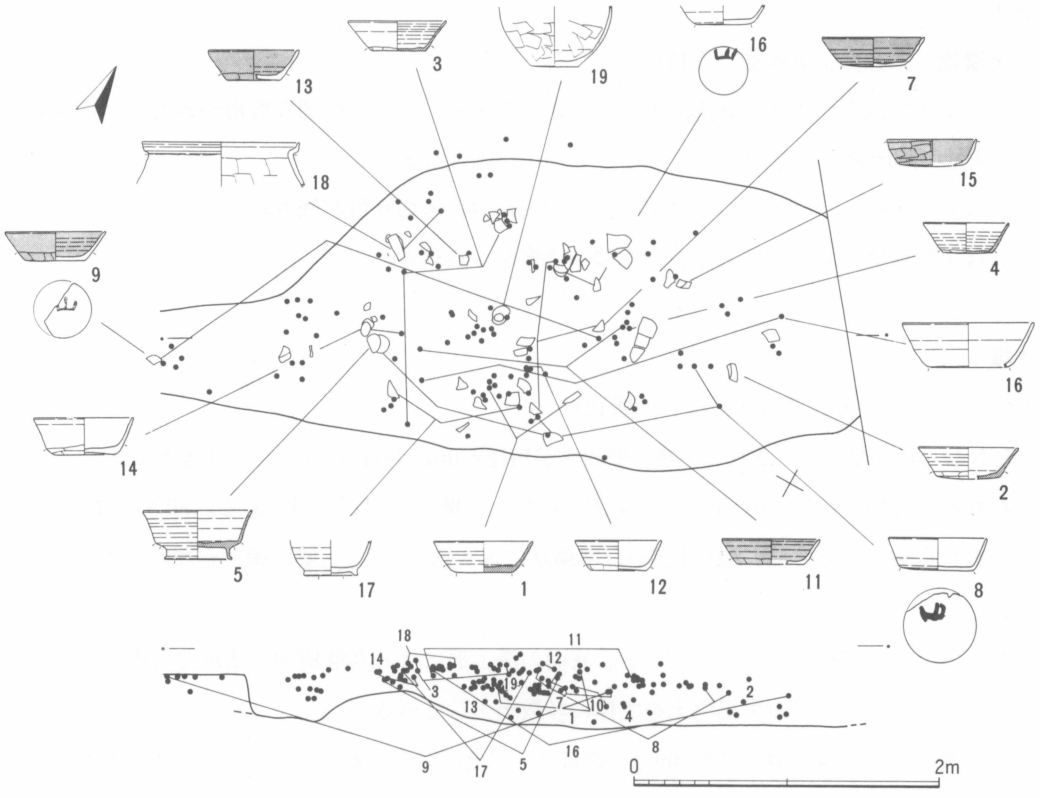
39N42、40N02で検出された土壙。平面形が短径2.0m、長径4 m以上の不整楕円形になると思われる。長軸方位N－62.5°－E。東側の延長上は攪乱が入り不明である。深さ0.3mを測る。床中央が長軸に沿って幅0.8mほどのU字溝状に落ち込んでいる。壁は緩やかな立ち上がりをみせている。

覆土の上部は黒褐色土になっている。底面の溝上部には人為堆積的な状況で黄褐色砂質土がみられた。遺物は上層の黒褐色土を主体に多数出土している。

出土遺物は土師器を中心に約200点にのぼる。完全な完形土器はなく、破片主体で大半が浮いた状態で乱雑に配されていた。



第41図　SK-14平面図



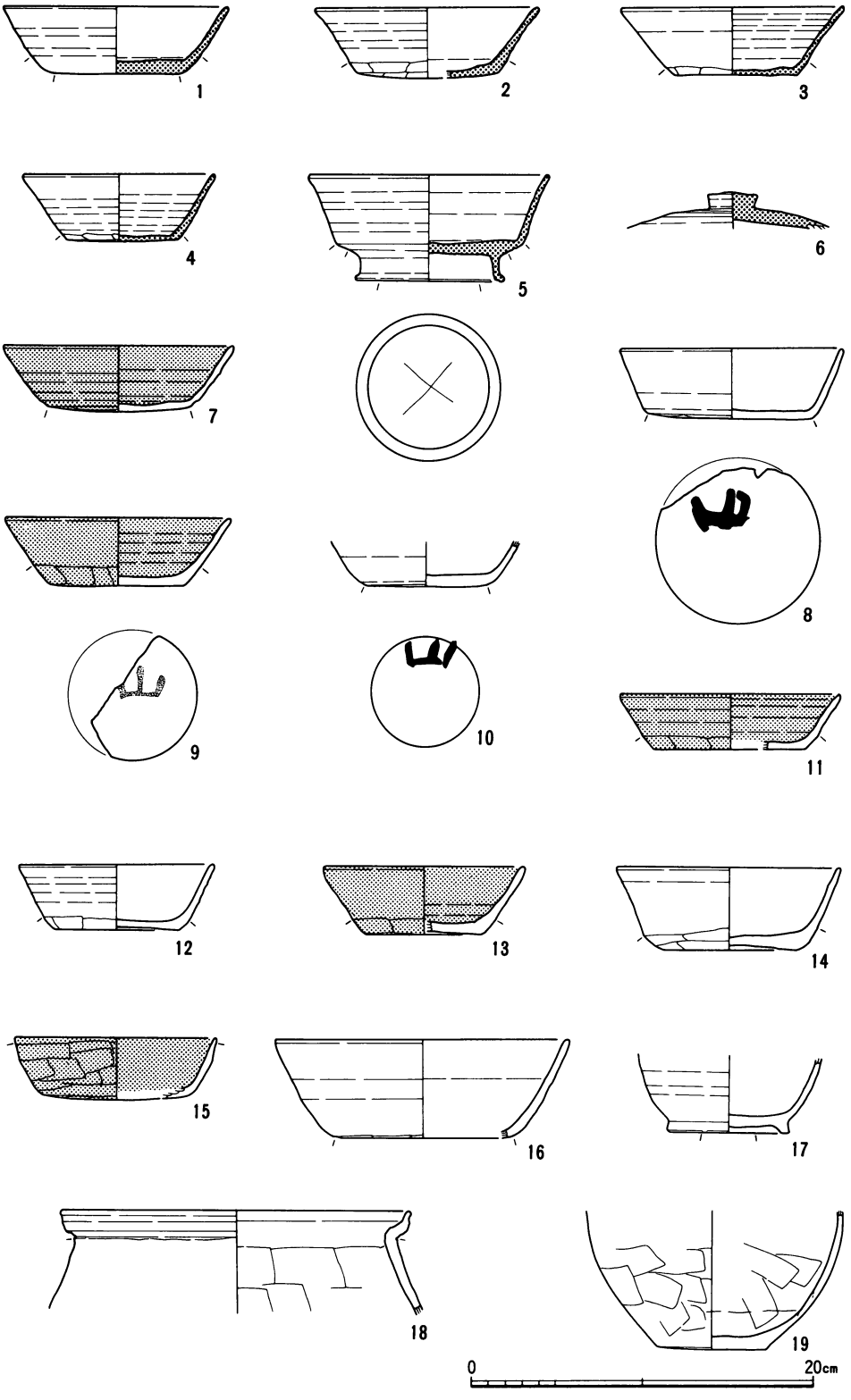
第42図　SK-14 遺物分布図

出土遺物（第43図、図版32、表17）

1～4は須恵器坏である。1は淡灰色を呈し、胎土に長石、石英、雲母粒が顕著であり、黒斑も認められる。底面は手持ちヘラ削りがなされている。底部外面および内面が擦られて摩滅しており、特に外面の稜部分の痕跡が顕著である。2は胎土に石英、長石礫を多量に含むもので、底面手持ちヘラ削が施されている。3は口径13.0cm、器高4.0cm。薄手に作られており、胎土には雲母の微細粒がめだつ。底部は手持ちヘラ削りを施されている。4は口径11cm強の小型もので、底面はヘラ切り後、手持ちヘラ削り施されている。胎土に長石、石英を含み、黒斑が認めらる。

5は須恵器高台付坏で、口径14.2cm、器高6.2cm、高台は1.5cmと高い。胎土には大きめの石英、長石粒を含んでいる。高台裏には「X」字のヘラ記号が施されている。また口唇は少し摩滅していた。6は須恵器蓋の中央部破片で、低いつまみを有する。器面の風化が激しい。胎土には石英、長石、雲母粒が顕著である。

7～16は土師器の坏である。7は赤彩土器で、底面手持ちヘラ削りが行われ、かるい球状に成形されている。8は箱型に近い器形のもので、底面手持ちヘラ削りとなる。底面の縁よりに「山」の墨書が施されている。胎土には赤色粒子が含まれている。9は赤彩土器で、底部に手持



第43図　SK-14 出土遺物

ちヘラ削りがなされ、底面の中央に「山」の墨書が施されている。10は底面回転ヘラ削りがなされ、縁よりに「山」の墨書が施されている。11は赤彩土器で、口径12.9cm、器高3.2cmと偏平である。底部にヘラ削りが施されている。12は径が推定11.4cmとやや小振りのもので、底部手持ちヘラ削りになる。13は赤彩土器で、径は12cm前後と小さく、底面には回転ヘラ削りが施されている。胎土には細礫が目だつ。焼成は非常によく、堅く焼き締まっている。14は口径13.1cmであるが、器高4.7cmと高さがある。全体的に黒味を帯びており、かつ外面にタール状の付着物が認められる。底部は厚手であり、周辺がヘラ削りされるが、底面中央に糸切り痕を残し、上げ底状を呈している。15は小型の赤彩土器で、体部及び底面が手持ちヘラ削りされている。口縁内面上端、底部は擦られ摩滅している。16は口径17cm前後、器高6cm前後と、器形が大きくなるもので、不明瞭だが赤彩の可能性がある。胎土には赤色粒子が認められる。

17は小型の土師器高台付坏である。箱型の体部になる。

18は土師器甕であり、胴上部で内傾し、L字に折れ曲がる口縁をなすもので、口縁端部は上部につまみ出されている。胎土には石英、長石、雲母の細粒が多量に認められる。焼成は非常によく、須恵器的である。いわゆる常総型の甕である。19は小型の土師器甕の下半部である。外面は特に底部が平滑に調整されているが、上部にはヘラ削り痕がよく残っている。内面にはヘラ痕が認められる。

表16　SE－5、SE－6出土土器

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	須恵器 坏蓋	15.0 — 1.9	つまみ欠 体部ほぼ完	ロクロ成形 天井：回転ケズリ	青灰色 長石、石英粒混 黒斑有	SE-5 094-23
2	〃 坏　1b類	12.9 4.1 8.3	ほぼ完形	ロクロ成形 体下：ケズリ 底：ケズリ	灰色 長石、石英粒多 「山」墨書器面磨耗	SE-5 094-24
3	〃 坏　1b類	13.4 4.0 8.0	完形	ロクロ成形 体下：ケズリ 底：回転ケズリ	灰色 長石、石英粒混、黒斑 「山」墨書	SE-5 094-20
4	土師器 坏　2a類	13.6 3.8 9.3	3/4	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	赤彩 「山」墨書	SE-5 094-22
5	須恵器 甑	32.4 26.5 12.4	1/5	外：平行叩き目 胴下：コヨケズリ	青灰色 長石、石英粒多 下端磨耗痕	SE-5 094-2・14・15・18 SD-42 102-41・45・47・51・213

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
6	土師器 甕	12.6 — —	口縁肩部	口：ヨコナデ 胴：タテケズリ	7と同一個体か	SE-5 094-21
7	〃 甕	— — 6.2	胴下半・底部	胴上：タテケズリ 胴下：ヨコケズリ 底：ケズリ		SE-5 094-8
8	須恵器 高台付坏	— — 〔 9.4〕	底部2/3	ロクロ成形 付け高台	灰色 長石礫混	SE-6 095-3・18
9	須恵器 坏　2b 類	— — 7.1	1/3	ロクロ成形 静止糸切り 底周：ケズリ	底裏「×」印	SE-6 095-4
10	〃 甕	— — 8.3	底部1/2	胴下：ヨコケズリ 底：ケズリ		SE-6 095-8・14 24

表17　SK－14出土土器

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	須恵器 坏　1a 類	13.1 4.0 7.5	1/2	ロクロ成形 体下：ケズリ 底：手持ちケズリ	淡灰色、黒斑 長石、石英、雲母粒含	81・85
2	〃 坏　1a 類	13.2 4.2 8.4	1/3	ロクロ成形 体下：ケズリ 底：ケズリ	青灰色 石英、長石礫多	154・164
3	〃 坏　1b 類	13.0 4.0 7.2	1/3	ロクロ成形 体下：ケズリ 底：ケズリ	灰色 雲母粒多	12・20・44・ 50
4	〃 坏　1b 類	11.2 4.1 6.6	1/2	ロクロ成形 回転ヘラ切り 体下、底：ケズリ	青灰色 石英、長石粒含、黒斑 薄手底部小	140
5	須恵器 高台付坏	14.2 6.2 11.1〔 8.9〕	2/3	ロクロ成形 付け高台 底：回転ケズリ	灰色 石英、長石粒含 底：「×」ヘラ記号	62・91
6	〃 坏蓋	— — —	天井部片	ロクロ成形 天井：回転ケズリ	明褐灰色 石英、長石、雲母含	130
7	土師器 坏　2a 類	13.4 7.9 8.4	1/3	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	赤彩	118・131・138
8	〃 坏　2a 類	13.0 4.2 9.5	2/3	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	底：「山」墨書	2・4・3 152・155

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径（高台径）	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
9	土師器 坏　2b類	13.0 3.9 7.8	1/3	ロクロ成形 体下：ケズリ 底：手持ちケズリ	赤彩 底：「山」墨書	139・168
10	〃 坏　2b類	— — 7.3	口縁欠	ロクロ成形 糸切り痕 底周：回転ケズリ	底：「山」墨書	121・164・209
11	〃 坏　2b類	12.9 3.2 8.8	1/2	ロクロ成形 底：ケズリ	赤彩	64・144・164
12	〃 坏　2b類	11.4 3.8 7.2	1/2	ロクロ成形 体下、底：ケズリ		6・7
13	〃 坏　2b類	11.9 4.0 7.0	1/2	ロクロ成形 体下：ケズリ 底：回転ケズリ	赤彩	76
14	〃 坏　3類	13.1 4.8 7.9	3/4	ロクロ成形 糸切り痕 底周：ケズリ	外面　タール状物 付着	60・63・98
15	〃 坏　1類	12.0 4.6 8.6	1/5	体、底：ケズリ	赤彩	153
16	土師器 碗	17.2 5.8 10.5	1/3	ロクロ成形 底：ケズリ	赤彩？ 赤色粒含	15・159
17	〃 高台付坏	— — 〔7.1〕	口縁欠	ロクロ成形 付け高台 静止糸切り 底周：回転ケズリ		1・10・14
18	〃 甕	20.6 — —	口縁、胴、上部	口：ヨコナデ 胴上：タテハケナデ	常総型	19・37
19	〃 甕	— — 6.4	胴下半、底部	胴下、底：ケズリ 内：ハケナデ		72・102

B　中近世および時期不詳遺構

土壙

SK－12　038－103（第38図）

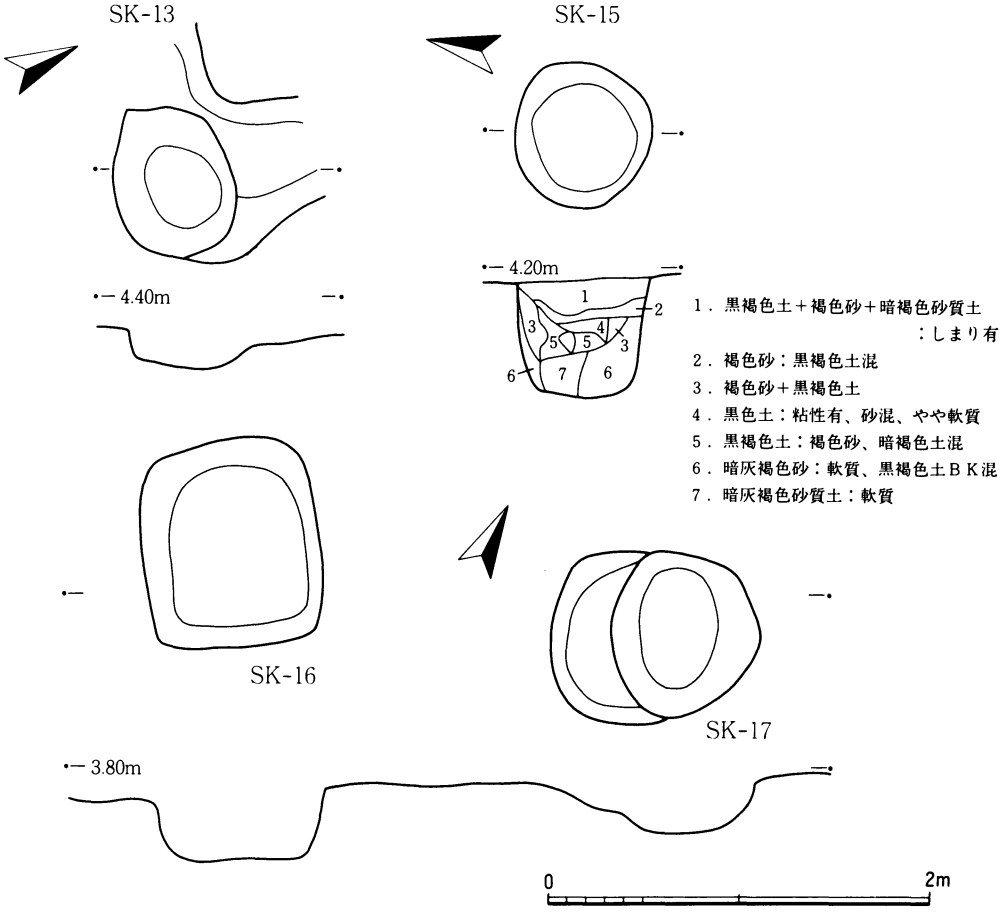
39N22区に位置する幅0.5m、長さ1.25m、深さ0.1m、長楕円形を呈する土壙。掘り込みは明確にとらえられた。土壙とするか溝状遺構とする判断に迷うところである。南側で風倒木痕と重なっており、その関連である可能性もあろう。遺物は土師器が５点出土したのみである。

SK－13　038－112（第44図、図版11）

39N41区でSD－42の東わきに検出された小型土壙。開口部の径0.6m×0.8m、底径0.4m。深さ0.5mを測る。遺物は土師器が少量出土した。

SK－15　038－118（第44図）

42N11にと位置する円形土壙。表土下の黄褐色砂層で検出した。径0.7m、底径0.55m、深さ



第44図　SK-13･15～17平面図

0.6m を測る。断面は筒状を呈する。床面、壁とも明確であった。褐色砂と黒褐色土の混じった土が覆土となっており、かなり短期間に堆積したものとみられる。遺物の出土はなかった。

SK－16　038－120（第44図）

本調査区南端、41O40でSK－17とともに水田面下で検出されたもの。開口部で一辺1.1m×1.0mの方形プランを呈する。底面では0.7m×0.8m、深さは0.4m弱である。水田耕作土に似た礫混じりの暗褐色粘質土が覆土となっていた。遺物は出土していない。

SK－17　038－121（第44図）

開口部平面形は径0.9m×1.1mの楕円形を呈している。深さ0.3mである。覆土はSK－16とほぼ同じであった。遺物は出土していない。

特殊遺構

SX－9　038－099（第38図、図版11）

39N、40N区のSD－42東岸に検出された畝跡と思われる遺構。幅0.3m、間隔1m強となる。5～10cmの厚みで黒色の土がみられた。奈良平安時代の遺物が土師器を主体に90点余りが出土した。

出土遺物（第45図、表18）

3は須恵器の杯である。灰色を呈し胎土に雲母粒を含む。底裏に不明瞭な墨書がある。

SX－10　038－097（第38図、図版11）

40N30から40N42にかけて、SD－52の南側に沿って所在する。幅4mほど、深さ約0.2m下げて平坦面を形成したもの。西側延長上は調査区外となっている。5割以上の部分を攪乱帯で壊されていた。暗褐色砂質土が覆土であり、床は砂層で良好に残されていた。遺物は土師器が主体である。北側の壁は大部分SD－52と重なっており不明である。南側で検出されている壁からみると、明確に立ち上がっており、竪穴状遺構としてもおかしくないが、断言はできないので、一応、整地跡としておく。南側にさらに5cmほど下げられた平坦面らしい跡が連なる。奈良平安時代の遺物が土師器主体に約100点出土した。

出土遺物（第45・46図、図版33、表18・25）

2は須恵器坏の底部である。回転ヘラ切り痕を有し、「X」字のヘラ記号が残されている。

20は棒状土錘（3類）である。手づくねで、孔の径が端部で広がっている。

SX－11（第38図、図版13）

本調査区南端、41N13よりSD－42の西岸及び低地部に沿って幅２～３ｍでＬ字状にのびる、テラス状に形成された平坦面。耕作にともなう整地跡か。

SX－12　038－109（第38図）

調査区南端、西側境界と、攪乱帯の間に幅1m残された部分で検出された整地跡とも溝とも判別のつけがたい遺構である。北側部分の42N20・30区は深さ0.2mのテラス状部をなし、41N40にと至って溝状に0.2mほど深くなる。幅の限られたごく一部の調査であり、性格は不明である。

溝状遺構

SD－39　038－089（第38図、図版11）

III区の北端にはSD－39、SD－40、SD－41と３条の東西溝が密に平行しているが、そのうち最も北側のもの。幅1.2m、深さ0.2mを測る。床断面が弧状を呈し、壁は緩やかに上がっている。東側に径1.1m×0.6m、溝の床面からの深さ0.5m程度のピットが２個設けられている。西側はSD－40と重なっている。覆土は黒色系の土であった。遺物は奈良・平安時代の土師器を主体とし、25点が出土した。

出土遺物（第46図、図版33、表25）

22は大型の棒状土錘（４類）である。

SD－40　038－090（第38図、図版11）

幅1.0m、深さは0.4m弱、底面の幅が狭いＵ字溝である。西半部に攪乱が広くはいっている。西端でSD－39と重複しているが、当遺構の方が新しそうである。覆土は黒褐色土主体。遺物には土師器の他、近世の陶器を20点ほど出土した。

出土遺物（第46図、図版33、表25）

16は短棒状の土錘（２類）である。

SD－41　038－090（第38図、図版11）

SD－41にと密接して並走する浅いＵ字溝。幅0.8m、深さ0.2mを測る。西側に大きな攪乱があって、続き方が不明。Ｌ字にカーブしてSD－42にと連なる可能性もある。黒色系の土が覆土で、近世の陶器等の遺物が若干得られた。

SD－42　038－102（第38図、図版11・13）

39N40から42O20の間、約40mにわたって直線的に延びる南北大溝である。北端部は攪乱で切られている。幅1.1m～2.6m、深さ0.2m～0.4m。北側、40N01区までは幅1.4m前後と狭

く、深さ0.35m、底面の幅が狭くV字溝に近い形態をとる。中ほど、SE－6から南40N32付近までは、幅平均2.4mとなり、深さは北部が0.2mと浅目。床の比高も高い。南側に至って、溝幅が1.8mと広くなる。底面も幅広い。東壁側に溝状に一段下がっている。調査区南端は標高が下がっているので、相対的に深さが減じていている。

覆土は黒褐～黒色土が主体である。遺物は約360点の出土であり、8割は土師器・須恵器だが、陶器など新しいものも多い。

出土遺物（第45・46図、図版33、表18・25）

1は須恵器坏である。口縁が直線的に強く外傾する。胎土は灰色で雲母粒が多量に包含されている。軽質な仕上がりである。

14・15は長算盤玉状（2類）の範中に入る土錘である。17・19は棒状土錘（3類）である。いずれも手づくねで、器面に凹凸がある。焼成は良い。

SD－43　038－091（第38図、図版11）

SD－42の中ほどに、直交する溝。幅1.5m、深さ0.2m。東側は攪乱で不明。SD－44の北西側を切って構築されている。暗褐～黒褐色土が覆土であった。遺物はほとんど奈良平安時代の遺物で、土師器中心に約200点出土した。

出土遺物（第45・46図、図版33、表18・25）

5～7は土師器坏である。5は赤彩土器で体部及び底部外面が手持ちヘラ削りされ、球状に成形されている。6は体部が強く外傾する型の坏で、底部にはヘラ削りがなされるが、裏中央には静止糸切り痕が残されている。7は底径が大きく。底裏が回転ヘラ削りされ、X字のヘラ記号が刻まれている。赤彩土器である。

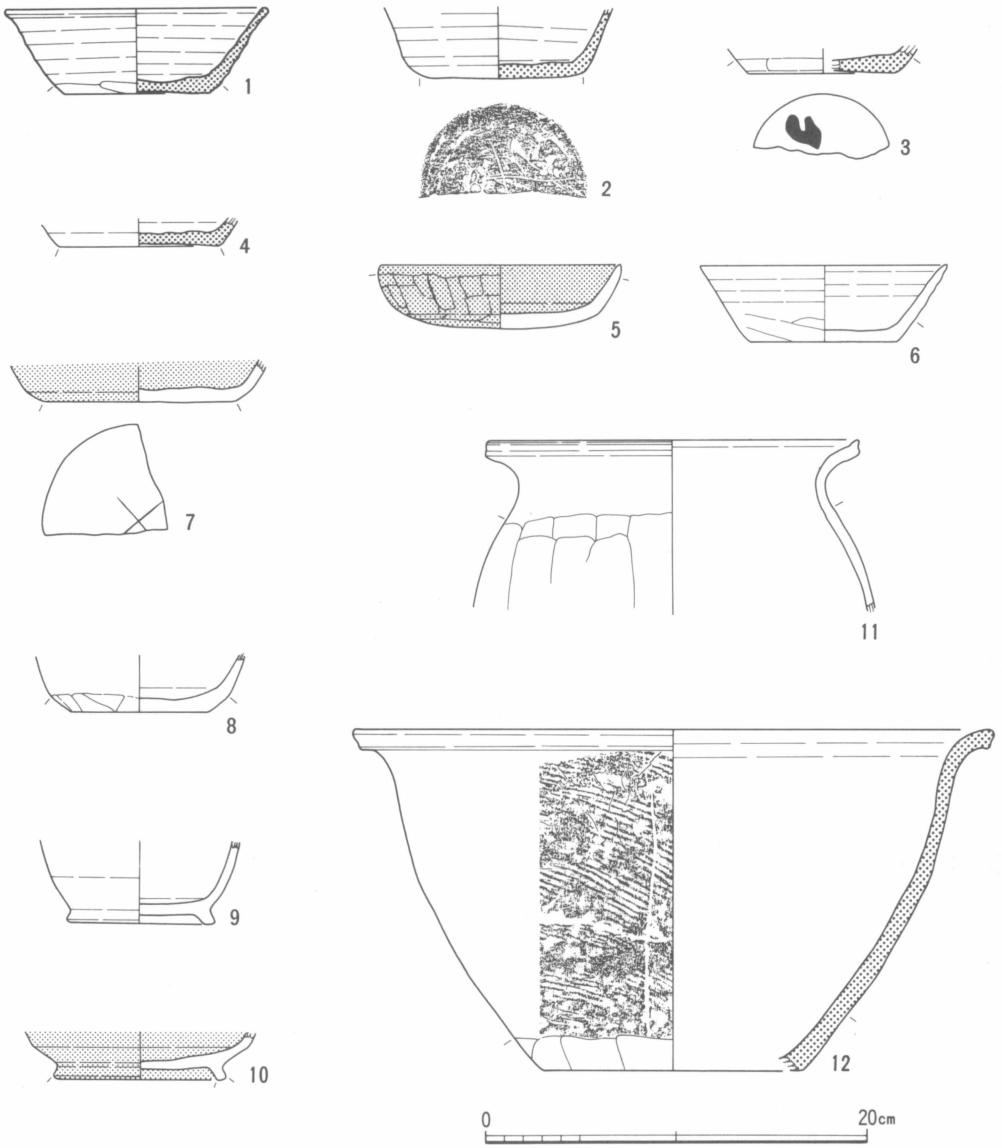
9・10は土師器の高台付坏である。9は底部が広いタイプで、赤彩されている。高台端は二次的に使用されたためか、かなり摩滅している。10は小型品で、箱型に近い器形になりそうである。

11は土師器甕である。薄手で小型。口縁が「く」の字に外反し、口唇は端部で折れて上方につまみ出される。胴部には縦ヘラ削りがなされている。12は須恵器甑である。偏平なバケツ形を呈している。口縁が極端に屈曲し、かるい縁帯が形成される。外面には斜行の平行叩き目文が施されている。

12は細管状土錘（1類）である。18・21は棒状土錘（2類）で、18の胎土は精選され焼成が非常に良好である。

SD－44　038－092（第38図、図版11）

SD－43の南東側を重複して走る浅い溝。推定幅2.0m、深さ0.1mである。黒色土が覆土であ



第45図　Ⅲ区溝・整地跡出土遺物(1)

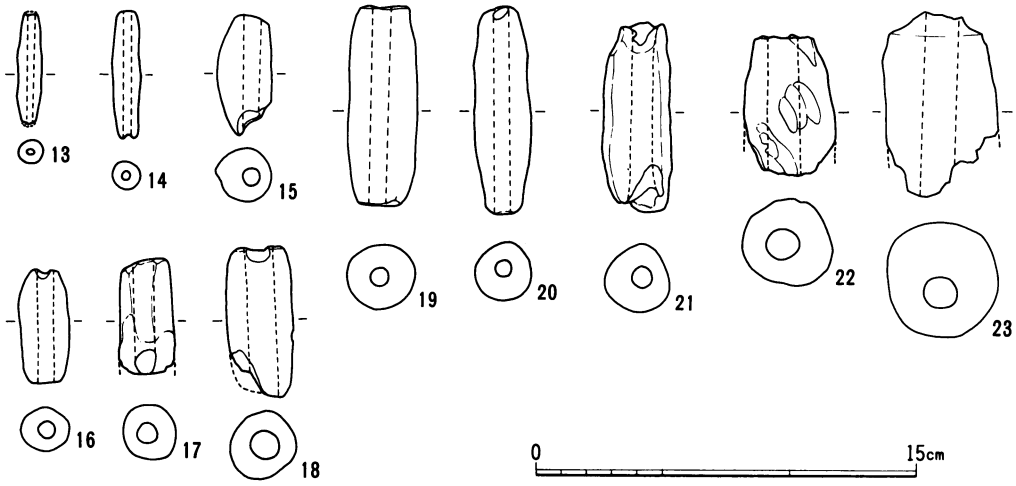
り、遺物は奈良平安時代の土師器を主体に36点出土した。

出土遺物（第46図、図版33、表25）

13は細管状の土錘（１類）である。

SD－45　038－093（第38図、図版11・12）

SK－4から西に連なる細い溝。幅0.2～0.6m、深さ0.2m、長さ３ｍである。東側、SK－4との接続部は深さ0.4ｍの細長いピット状を呈している。遺物は土師器が若干出土した。



第46図　Ⅲ区溝・整地跡出土遺物(2)

SD－46　038－096（第38図、図版11）

SD－42の東側で、直交する細い溝。幅0.4～0.6m、深さ0.2m、長さ 8 m。遺物は土師器等20点余りの出土であった。

SD－47　038－110（第38図、図版11）

40N21区に検出された細溝。幅0.4m、深さ0.1m ほど。北西－南東の向きをとる。北西側に攪乱があって、続き具合いがわからない。遺物は須恵器が若干出土した。

SD－48　038－111（第38図、図版11）

SD－48、SD－49、SD－50は40N 区、SD－42の東岸にあり、SD－43・44に直角に接する浅く細い溝である。当遺構は最も東に位置するもので、幅0.5～0.7m、深さ0.1m である。遺物は出土していない。

SD－49　038－115（第38図、図版11）

幅0.4m、深さ0.1m、長さ 6 m を測る。途中が切れている。遺物の出土はない。

SD－50　038－116（第38図、図版11）

幅0.5～0.7、深さ0.1m、長さ 5 m を測る。黒褐色砂質土を覆土となす。遺物の出土はなかった。

SD－51　038－100（第38図）

40N44区にあり、SD－43、44とほぼ平行して北東－南西に走る浅い溝。幅0.7mほどである。遺物は出土しなかった。

SD－52　038－098（第38図、図版13）

40N42、43を西北西－東北東に向かう溝。SD－42を越えて延長上にSD－53がある。幅0.8m、深さ0.2mを測る。南東側に整地跡SX－10を伴う。遺物は土師器・須恵器が若干である。

出土遺物（第45図、表18）

2は須恵器坏である。箱型の器形を呈し、回転ヘラ切り痕、「X」字のヘラ記号を残している。

SD－53　038－098（第38図、図版11・13）

SD－42の東岸、SD－52の延長上にある。連続している溝の可能性が高いが確定できないので別扱いとした。幅0.9～1.4m、深さ0.2mである。黒色土が覆土となっていた。遺物は土師器を主体に20点ほどが出土した。

出土遺物（第45図、表18）

8は土師器坏である。箱型の器形を呈し、底部稜、裏に手持ちヘラ削りが施されている。

SD－54　038－117（第38図）

41O00区でSD－53と接続してごく一部が検出された。北東－南西に走る幅0.7m、深さ0.15mの溝。遺物は出土しなかった。

SD－55　038－113（第38図）

39M43、44区で、南北とも攪乱に壊されごく一部のみ検出された、北東－南西にのびる浅い溝。北東端は大溝の北端に接している。幅1.0m、深さ0.05m。出土遺物は須恵器片1点のみである。

SD－56　038－091（第38図）

40N40で検出した幅0.6mの浅い東西溝である。SD－43・44と接続する可能性もある。遺物は出土しなかった。

なお本遺構及び、SD－57、SD－58は西側がIII区の調査区境界にかかっており、かつ幅5mにも及ぶ攪乱帯にはさまれて1m幅の部分のみしか調査できなかった。

SD－57　038－107（第38図）

41N10区に位置する。幅0.8mの浅い東西溝である。遺物は出土しなかった。

SD－58　038－108（第38図）

41N10区、SD－57の南に位置する。幅0.4mの浅い東西溝である。出土遺物はなかった。

SD－59　038－106（第38図、図版13）

41N11からSD－60と直角に接続する東西溝。北側は攪乱のため不明。幅0.8m、深さ0.1m。東壁側が一段深くなっている。礫混じりの黒褐色砂質土が覆土であった。遺物は出土しなかった。

SD－60　038－105（第38図、図版13）

水田部手前6 mを東北東－西南西に延びる溝。幅0.8～3.6m、北東側が幅が狭く、西側が広くなっている。深さは北東部0.2m、西側は両壁側に深さ0.1mでテラス状に平坦部をなし、底面中央部がU字溝状に一段低くなっており、深さ最大0.4mとなる。締りのある黒褐色砂質土が覆土となっていた。出土遺物は土師器主体に約30点が得られた。

SD－61　038－105（第38図）

41N42区でSD－60の南側で直角に接合する溝。幅0.8m、深さ0.1mを測る。遺物の出土はなかった。

SD－62　038－114（第38図、図版11・13）

調査区南端、水田の存在する低地部にかかる肩の部分に、SD－42の南端からL字状に接続して南西に走る。表土除去段階からよく締まった黒灰色土の堆積が確認されていたが、低地部の土を除去した段階で地山面から一段落ち込んで確認された。幅2 m強、深さ検出面から0.6m、地山面から0.2m、長さ5 mを測る。覆土が異常に締まっており、上面が通路として使用されていた可能性がある。遺物は陶器や土師質土器等、20点余りの出土をみた。

表18　III区溝・整地跡出土土器

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	須恵器 坏　1b類	13.7 4.5 7.6	2/3	ロクロ成形 回転ヘラ切り 底ヘラケズリ	灰色 雲母粒多　軽質	SD-42 102-59
2	〃 坏　2類	— — 8.5	口縁欠	ロクロナデ 回転ヘラ切り ヘラ記号	底稜マツメ 青灰色 長石、石英粒多黒斑	SD-52 098-58
3	〃 坏　1b類	— — 8.4	底部	ロクロ成形 底：ヘラケズリ	暗灰褐色	SX-10 097-2
4	〃 坏　1b類	— — 7.7	底部1/2	ロクロ成形 体下・底：ヘラケズリ	灰色、黒書？ 雲母、石英、長石礫多	SX-9 099-13
5	土師器 坏　1類	12.9 3.3. 10.2	1/3	ロクロ成形 内：ヘラミガキ 体・底：手持ちケズリ	赤彩 灰褐色	SD-43 091-100・101
6	〃 坏　2b類	13.0 3.9 7.8	1/2	ロクロ成形 静止糸切り 体下・底：ヘラケズリ	暗褐色	SD-43 091-12・13・35
7	〃 坏　3類	— — 9.9	底部1/4	ロクロ成形 内：ヘラミガキ 底：回転ケズリ	赤彩 底裏「×」印	SD-43 091-93
8	〃 坏　1b類	— — 7.1	2/5	ロクロ成形 体下・底：手持ちケズリ		SD-53 098-1
9	土師器 高台付坏	— — 11.1〔8.9〕	底部	ロクロ成形 内：ヘラミガキ 付け高台	赤彩 高台端磨滅	SD-43 091-54
10	〃 高台付坏	— — 〔7.6〕	1/3	ロクロ成形 底裏：回転ケズリ 付け高台		SD-43 091-26・55
11	土師器 甕	19.6 — —	上半部1/4	内、口外：ナデ 胴：タテヘラケズリ		SD-43 091-59・65・66・68
12	須恵器 甑	37.6 17.6 17.6	1/2	内：ナデ 外：口　ヨコナデ 胴：タタキ目 胴下：ケズリ	灰色、焼成不良 長石、雲母等混	SD-43 091-70～73 75～77

表19　新旧遺構番号対照表

仁井宿東遺跡

No.1遺　跡　209033

(旧)	(新)
011	SE－1
002	SD－1
003	SE－2
004	SD－8
005	SE－1
ピット	SB－1～SB－6

No.2遺　跡　209038

(旧)	(新)
001	SX－2
002	SD－15
003	SX－6
004～014	SB－7
015	SE－4
016	SD－7
017	SD－5
018	SD－12
019	SK－1
020	SD－2
021	SD－6
022・068	SD－23
023	SE－2
024・034・040	SD－19
025	SD－1
026・027	SD－18
028	SD－28
029	SD－21
030・032・067・073	SD－8
031	SD－3
033	SX－4
035	SD－10－13
036	SD－17
037	SD－16
038	SX－5
039	SX－3・SD－14
041・056・057	SB－1
042	SD－4
043	攪　乱
044	SK－6
045	攪　乱
046	SK－7
047	攪　乱
048	SK－2
049	SK－5
050	SK－4
051	SK－3
052	攪　乱
053・055	SD－22
054	SK－9
058	SD－14
059	SD－24
060	SD－25
061	SK－1
062	攪　乱
063	SK－8
064	SX－1
065	SD－11
066	SK－10
070	確認坑
071	確認坑
074	SD－34
075	SD－35
076	SD－33
077	SD－36
078・079・080	SD－37
081	SD－28
082	SD－30
083	SD－31
084	SD－32
085	SD－29
086	SD－26
087	SX－7
088	SD－38
089	SD－39
090	SD－40
091	SD－43・56
092	SD－44
093	SK－14・SD－45
094	SE－5
095	SE－6
096	SD－46
097	SX－10
098	SD－53
099	SX－9
100	SD－51
101	SX－8
102	SD－42
103	SK－12
104	攪　乱
105	SD－60～61
106	SD－59
107	SD－57
108	SD－58
109	SX－12
110	SD－47
111	SD－48
112	SK－13
113	SD－55
114	SD－62
115	SD－49
116	SD－50
117	SD－54
118	SK－15
120	SK－16
121	SK－17
——	SX－11

牧野谷中田遺跡

No.2遺　跡　209038

(旧)	(新)
119	SD－1

第3節　グリッド出土の遺物

1　縄文時代の遺物

縄文土器（第47・48図、図版34・35）

1～4は前期の土器である。1・2は繊維土器で前期黒浜式。1は上端部に半截竹管による連続刺突文がみられる。2は頸部で、無節の縄文を地に半截竹管の沈線が施されている。3は浮島式の口縁部で横走する波状爪形文を持つ。上端部には短刻列が施されている。4は縄文を地に半截竹管沈線が施されるもの。諸磯a式土器であろう。

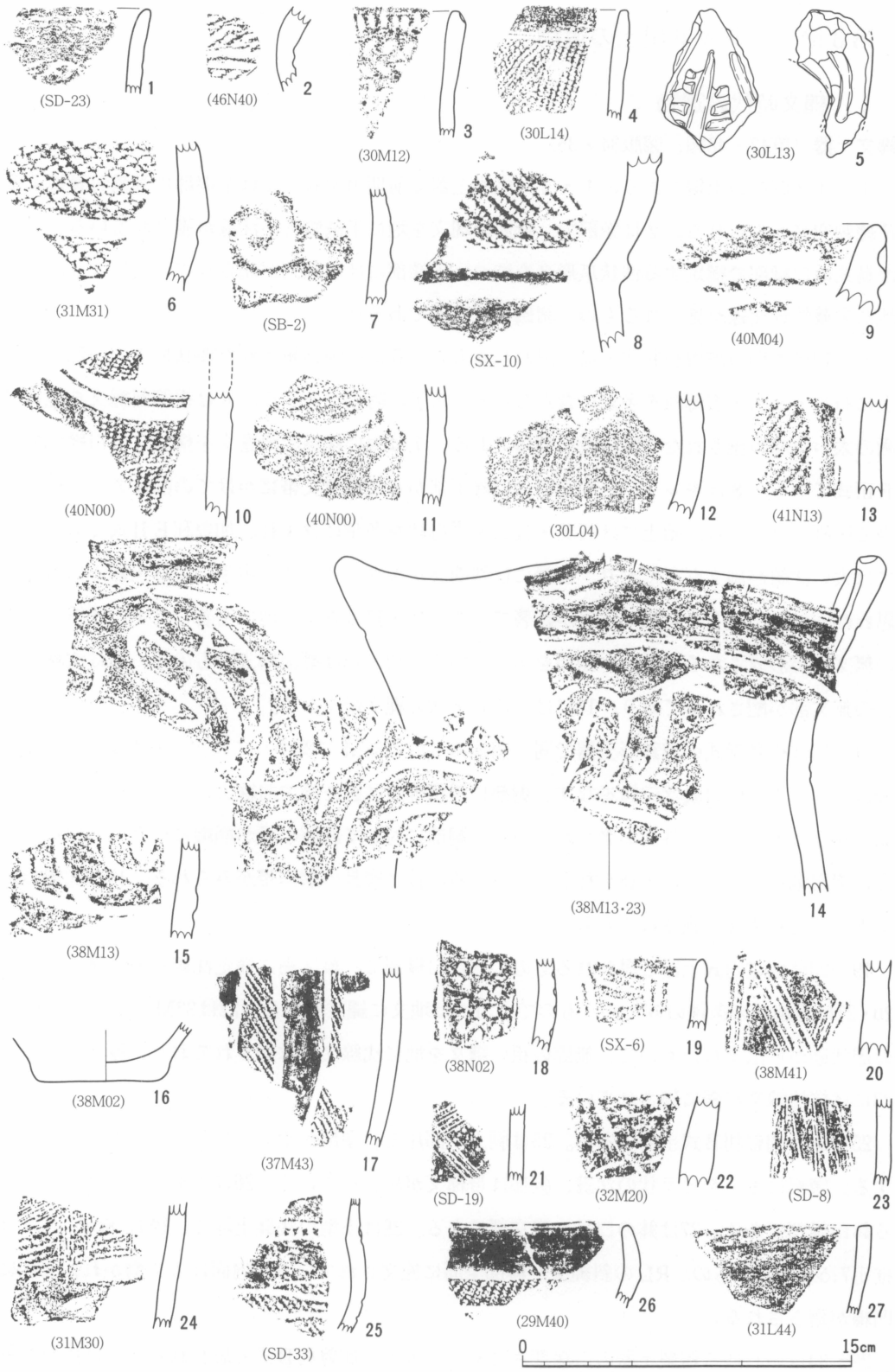
5～13は中期の加曽利E式土器と思われるもの。5は沈線の施された環状把手の一部で、胎土に石英・長石・雲母粒を多量に含んでいる。古手の時期であろう。6は複節斜縄文を地に区画の太い沈線の施された口縁付近の個体である。7は太い沈線で渦巻文を構成する口縁部で、EIII式である。8はキャリパー型土器の口縁下部から頸部無文帯にかけての部位で、文様が隆帯で区画されている。胎土には石英・長石・雲母粒を多量に含まれ。加曽利EII式である。9には太い沈線が施文されており、口唇には斜縄文が施されている。古手の浅鉢土器の口縁部と思われる。胎土は8と同様雲母等が顕著である。10・11は縄文を地に密着した平行沈線で曲線の無文帯が形成される。新しい様相を示している。12・13は磨消縄文のもので、12は沈線で舌状の無文部が配されるており、13には逆にU字状の縄文帯をなす。

14～16は称名寺式の深鉢形土器で同一個体のもので38Mで集中して検出されたもの。外径25cmほどで、4単位の波状口縁をなす。胴部に舌状等の区画を施す曲線文がみられる。15は胴下部。16は底部であり、外面が磨かれている。胴部に対して底部の径が極端に小さく、底板が下方に突出気味である。17・18も称名寺式である。17は縦長の磨消帯がみられる。18は沈線の区画内に連続刺突文の施されるもの。

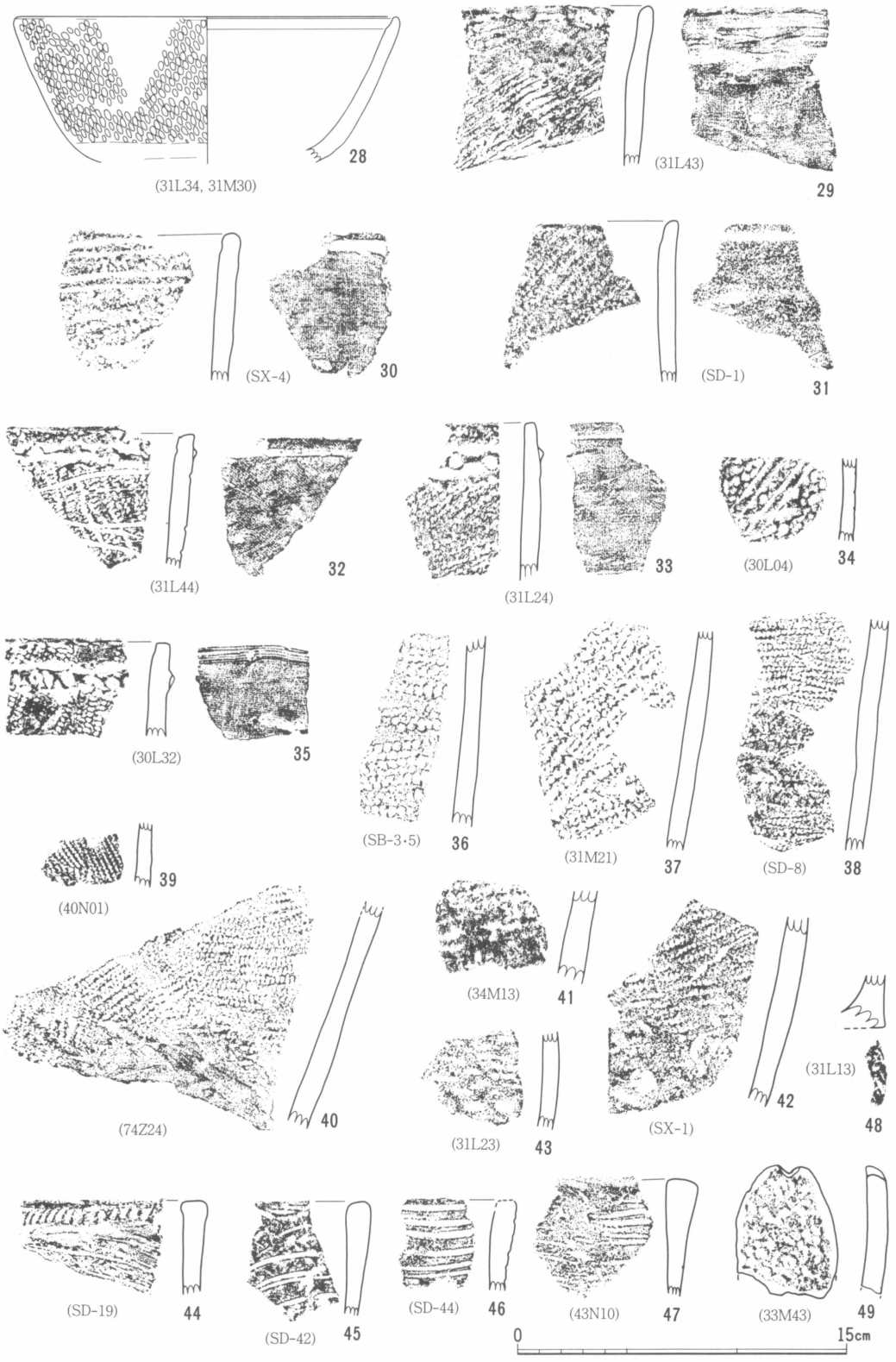
19～23は堀之内式土器と思われるもの。19は口縁部で、縦区画に横走沈線を密に施すもの。20・21は鋸歯状の条線のみられるもので、21には地文に縄文がある。22は32Mの確認坑でIV層の層状砂から出土したもので、無節の粗い縄文を地に沈線文の付加されており、厚手である。23には縦沈線文が密に施されている。

25～28は加曽利B式土器である。25は胴上半部片で、頸部がややくびれ、甕に近い器形を呈する。頸部にキャタピラ状の沈線、胴部は帯縄文が施されている。26は上部に帯縄文の配される鉢口縁部である。27は鉢の口縁の無文部である。28は小型の浅鉢土器で、径17.6cm、高さは推定7.5cmほどのもの。RLの斜縄文が体部全面に施文されている。内面はよく磨かれ、上端に凹線が廻らされる。

29～34はいわゆる粗製土器の口縁部片であり、大半は加曽利B式と思われる。29は撚戻し縄文、30は斜縄文に半截竹管の沈線、31は表面の風化が激しいが斜縄文が施されている。32～34


(SD-23)
1
(46N40)
2
(30M12)
3
(30L14)
4
(30L13)
5
(31M31)
6
(SB-2)
7
(SX-10)
8
(40M04)
9
(40N00)
10
(40N00)
11
(30L04)
12
(41N13)
13
(38M13・23)
14
(38M13)
15
(38M02)
16
(37M43)
17
(38N02)
18
(SX-6)
19
(38M41)
20
(SD-19)
21
(32M20)
22
(SD-8)
23
(31M30)
24
(SD-33)
25
(29M40)
26
(31L44)
27
0
15cm

第47図　縄文土器(1)


28
(31L34, 31M30)
(31L43)
29
(SX-4)
30
(SD-1)
31
(31L44)
32
(31L24)
33
(30L04)
34
(30L32)
35
(SB-3·5)
36
(31M21)
37
(SD-8)
38
39
(40N01)
(34M13)
41
(74Z24)
40
(31L23)
43
(SX-1)
42
(31L13)
48
(SD-19)
44
(SD-42)
45
(SD-44)
46
(43N10)
47
(33M43)
49
0
15cm

第48図　縄文土器(2)

は紐線文の土器で、32は斜縄文に沈線文と33・34には斜縄文のみを有している。

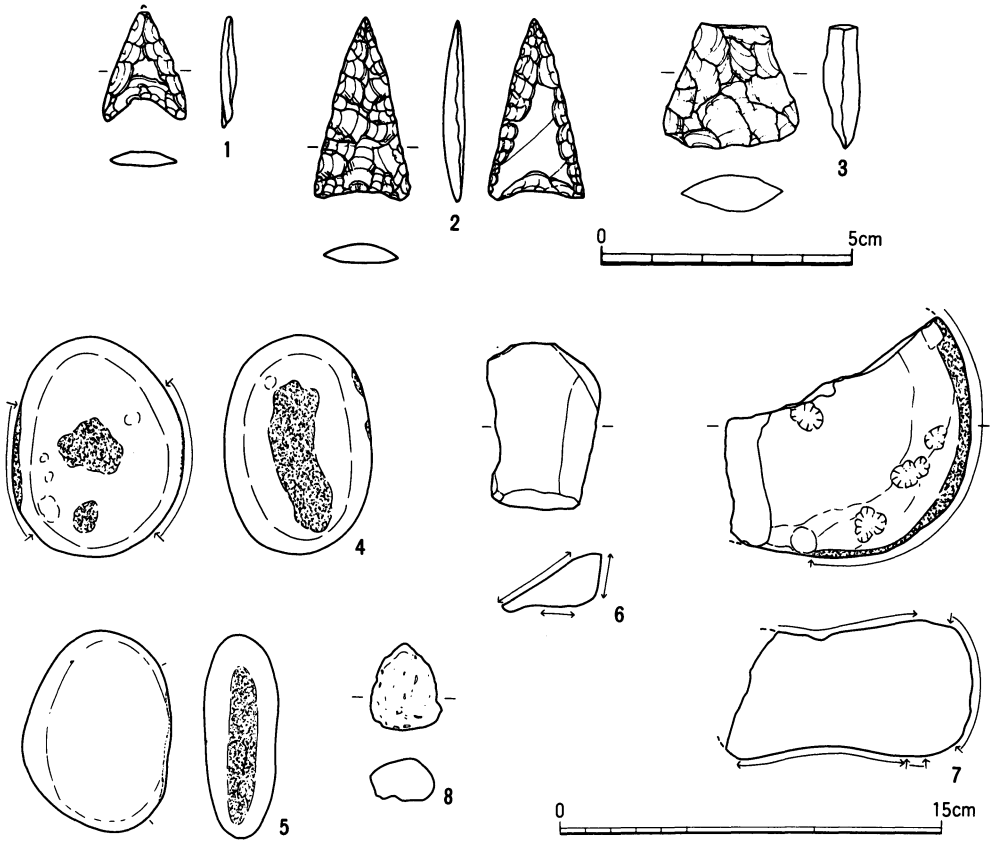
35～42は加曽利B式と思われる斜縄文の胴部片であり、35は半截竹管の沈線が加えられている。39は特に細かい縄文である。40～42は底部に近い部分で、下部が無文に残されている。40は現水田の74Zグリッドで田土直下の砂層上で出土した。41は22同様に砂層中で出土したもので、堀之内式的である。

43は短沈線が連続的に施されているもので、晩期安行式の可能性がある。44～47は口縁が肥厚し横位の連弧状沈線文が施文されるもの。44には口唇外縁に刻み目が入る。後期安行式であろう。48は網代痕の残る底部である。

49は土器片錘になるもの。一端を欠く。粗い縄文の施された胴部片を楕円形に整形し、端部にノッチを入れて利用している。

石器（第49図、図版38、表26）

1・2は石鏃である。1は基部にえぐりの入る小型のもの。両面からの浅い調整で製作されている。石質は粘板岩と思われる。2はチャート製の縦長の三角鏃である。基部は若干凹状に



第49図　縄文時代石器

なる。A面には薄く細長い剝離が行われるが、B面は短い剝離のみを受け、主剝離面が残されている。3は端部を欠損するもので三角形状を呈し、周辺からの粗い剝離を受けている。玄武岩製で、石錐あるいは石鏃の未製品かと思われる。

4・5は磨石である。4は安山岩の楕円球状の礫を素材とし、両側縁には広く敲打や摺り等による痕跡がみられる。表裏面には敲打によるくぼみが形成されている。5は偏平な砂岩の円礫を素材とし、一側縁に使用による摩滅痕のあるもの。

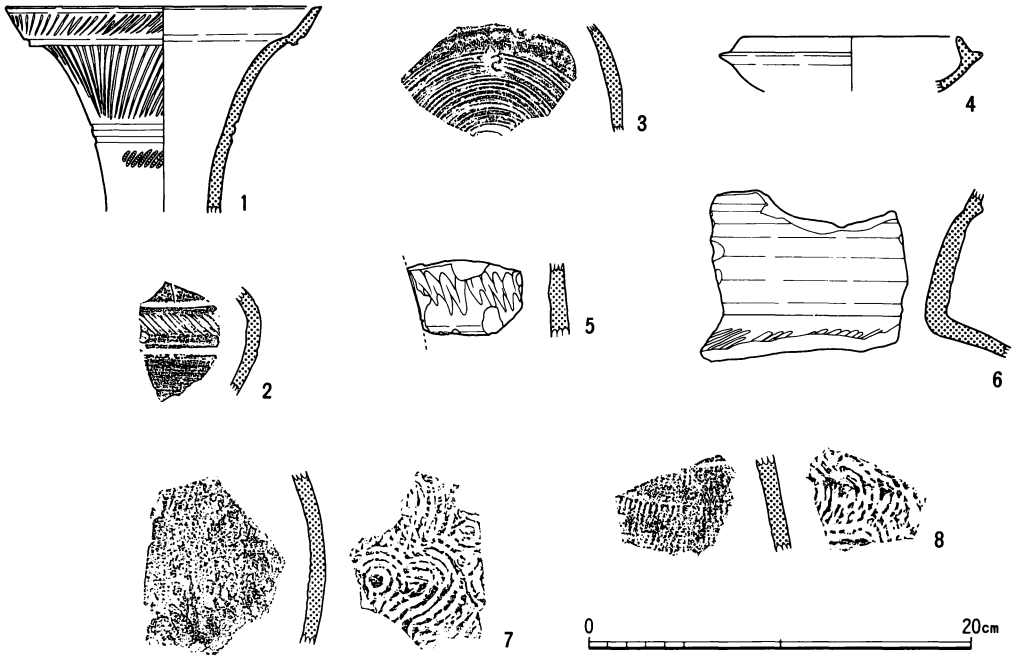
6は軟質砂岩の砥石である。一側縁と裏面も平坦にされており、多少使用されているとみられるが、特に正面は摩滅により側縁に向い徐々に薄くなり凹状を呈し、主使用面であったことが明らかである。7は安山岩製の石皿で、1/4が残る。両面ともよく摩滅し、くぼんでいる。一面にはくぼみ石様の小孔もみられる。側縁には成形のためと思われる敲打痕が顕著に残されている。

8は小型の軽石で、全面が摩滅している。

2　古墳時代の遺物

須恵器（第50図、図版36、表20）

I区北端部で出土した須恵器である。本来北西に隣接している変電所裏古墳に伴う遺物が、後世の攪乱等により混入したとみられる。



第50図　古墳時代須恵器

1・2は瓹である。1は口縁部で、頸基部が細く、ラッパ状に外反し口縁下端で段をなす器形をとる。口縁、頸上部には密な篦書き波状文が施され、以下に沈線をはさみ篦先の刺突文がみられる。2は球状を呈する胴部で、平行沈線間にヘラによる連続する刻み目が施されている。この2点の全体的に酷似しており、同一個体かもしれない。

3は提瓶の胴部の片側である。ロクロ成形され、外面に櫛状工具による調整で同心円文が残されている。胎土・焼成は1・2に類似している。4は坏身部である。立ち上がりは短めで直線的に内傾している。胎土に長石礫をまじえる。5は器台の透かし窓の部分で、波状文が施されている。胎土は夾雑物をほとんど含まず、堅緻である。

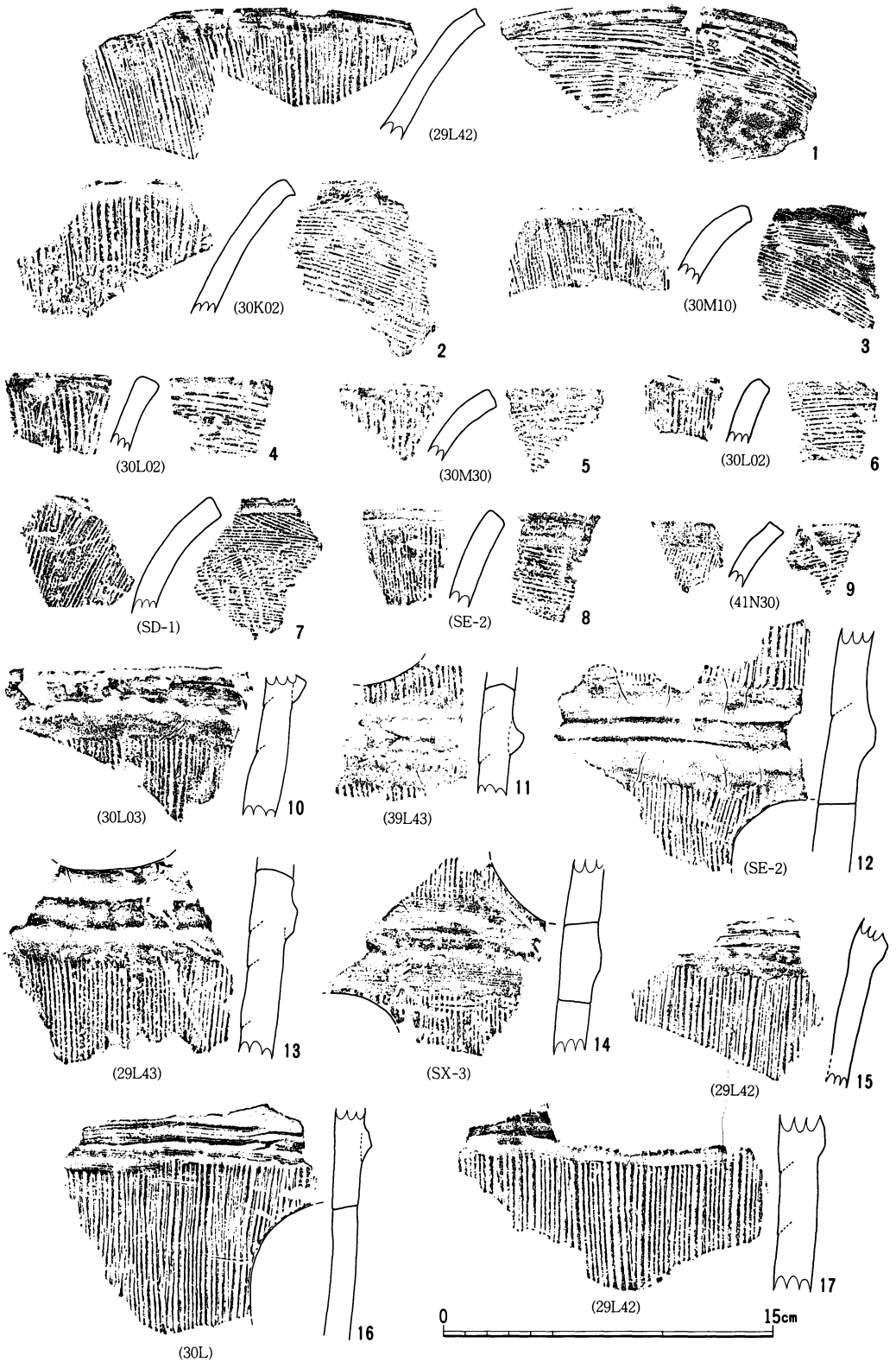
6は甕の口縁部。頸部に隆帯を有し、胴部には平行叩き目が残されている。胎土には夾雑物が僅かである。7・8は甕の胴部片である。自然釉がかかっており、内面には同心円状の叩き目が残されている。外面には、7ではの平行叩き目がハケ状工具でカキ目調整を受け消されており、8では外面に櫛歯状の連続刺突文と条線文が・廻らされている。

埴輪（第51・52図、図版37・38）

調査区内には埴輪を伴うような遺構はまったく検出されず、その分布範囲が遺跡北端に集中していることからも、調査区北西に隣接する前方後円墳に伴うものであろうと考えられる。図に示したのは実測・拓本に耐えうるもののみで、この他にも総量として遺物整理箱にちょうど一箱ほどの破片が採集されている。

なお、挿図中に内面の拓影図のないものは、内面の調整が指ナデのみのものである。

1～9は円筒埴輪口縁部の破片である。1は器表面黄褐色、器肉中央灰色のサンドウィッチの胎土を呈している。外面縦ハケ、内面横方向の指ナデ調整ののちに、内面上端に横方向のハケを施し口縁端部を横方向のナデで処理している。以下、特に記述しない限り円筒埴輪口縁部の調整技法はすべて同様である。焼成は硬質で胎土中には酸化鉄粒、石英粒を普通量含む。開口度がやや強い。2は内外面、器肉すべて橙褐色である。やはり硬質であるが、外面は部分的に剝離が進んでいる。調整は1と同様であるが、内面の指ナデ調整は残存範囲中には見えない。口唇端部を外面にやや強く引き出している。3は内外面、器肉すべて乳橙色である。胎土中の石粒含有量はやや少なめで、焼成はやや硬質である。4は内外面、器肉すべて乳黄色を呈する。全体に摩耗が進んでいるが焼成は普通である。口唇部外面端部はやや丸まっている。5は全面橙褐色である。胎土中には酸化鉄粒を始め石粒をやや多めに含んでいる。6は器表面乳橙色、器肉灰褐色のサンドウィッチ状を呈している。焼成は堅緻である。7は全面乳黄色で、胎土はさらさら、器表面は若干摩耗が進んでいる。8は6と同様のサンドウィッチ状の器肉をしている。さらさらの胎土で、全体に摩耗が進んでいる。口唇部の形状にやや特徴があり、内面は面取状になっており、外面は縦ハケとの境に弱い沈線状のナデ痕が見える。9は他の資料と異り、


(29L42)
1
(30K02)
2
(30M10)
3
(30L02)
4
(30M30)
5
(30L02)
6
(SD-1)
7
(SE-2)
8
(41N30)
9
(30L03)
10
(39L43)
11
(SE-2)
12
(29L43)
13
(SX-3)
14
(29L42)
15
(30L)
16
(29L42)
17
0
15cm

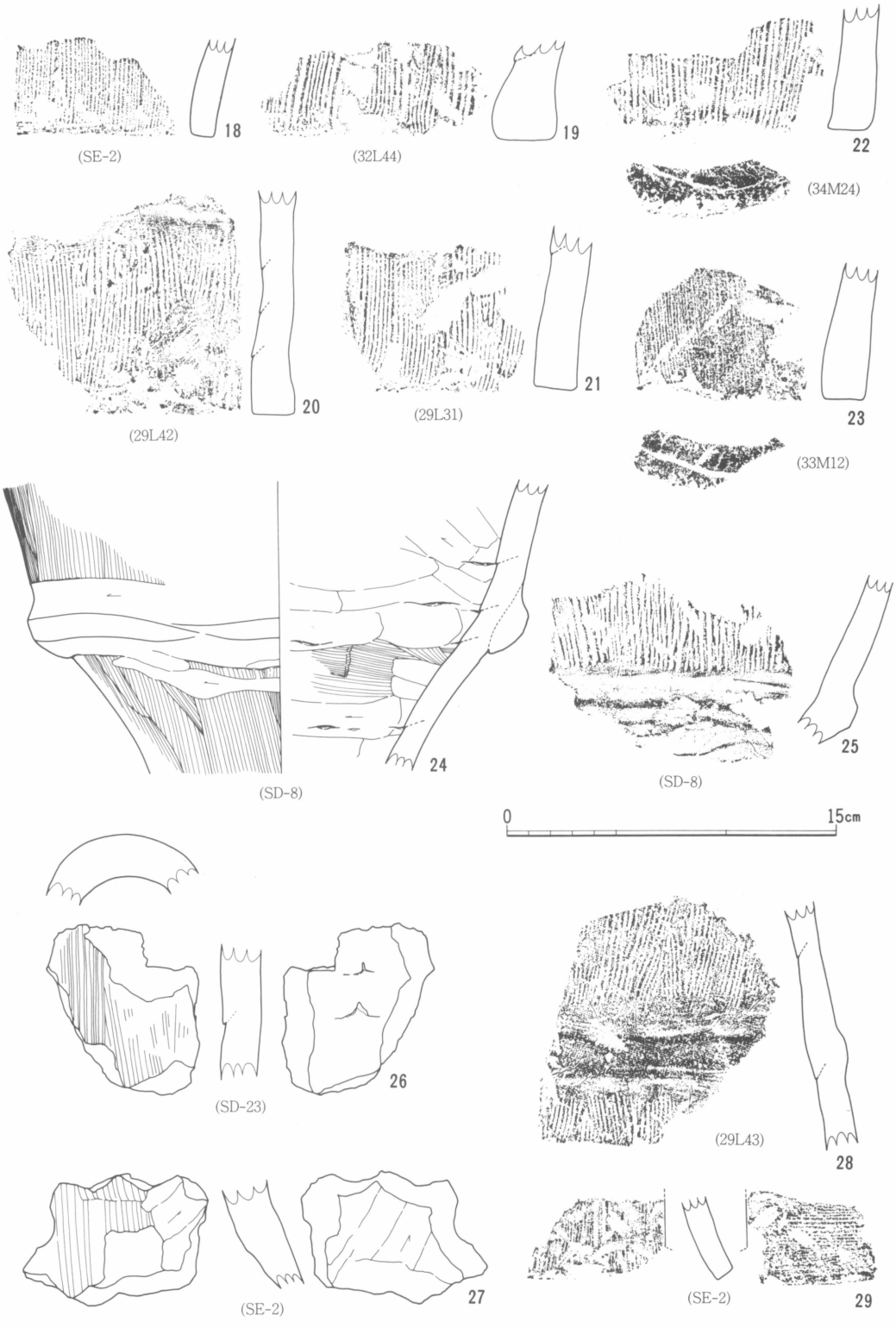
第51図　埴輪(1)

調査区域内の南端で検出されている。胎土中には雲母粒が多く含まれており器肉もやや薄手である。焼成は器肉中央で二分され、外側は乳橙色、内側は灰色を呈している。硬度もそれに見あうように異り、外面は摩耗が進み内面は堅緻である。

10～17は突帯および透孔付近の資料である。ただし、円筒、朝顔型埴輪の分離は不可能であった。10は全面乳橙色でさらさらしており、全体に摩耗が進んでいる。突帯は断面三角形に近いほどに下の稜線の弱い形態を示している。貼り付け方は粗雑で断続的である。内面には粘土紐接合痕が明瞭に観察でき、紐の太さは2cm平均である。11は器表面乳橙色、器肉灰黄色のサンドウィッチ状を呈している。やはりさらさらで摩耗が進んでおり、突帯の形状も10に近い。透孔は円形と考えられ、二度にわたって切り取られたらしく、中央が高くなっている。12は器表面乳橙色、器肉は灰黄色を呈している。突帯は部分的に端部中央が窪んでいる。透孔は円形であろうと考えられる。13は全面橙黄色で、胎土中の混和物が酸化鉄粒のみのためにさらさしており、全体に摩耗が進んでいる。突帯は貼り付けがやや粗雑なために、部分的に剝離しかけている。透孔はやはり円形であろうと考えられる。14は全体が乳黄色で、13同様にさらさらしている。突帯は著しく低く稜線はほとんど観察できない。透孔が突帯を挟んで段違いに穿たれており、3条4段型の円筒埴輪の破片であろうことが想像でる。15は非常に堅緻な焼成で、器表面灰色、器肉乳橙色を呈する。器表面は還元化しており、胎土中の表層の鉄分は黒色化している。突帯は細目であるが、稜線は上稜・下稜ともにはっきりしている。16は15と同一個体であろうと考えられる。透孔は円形であろう。17は器表面乳褐色、器肉灰黄色を呈する。胎土中には酸化鉄粒以外には混和物はほとんどない。突帯はダレており、稜線ははっきりしない。

18～23は底部の破片資料である。それぞれ円筒、朝顔、形象のいずれであるかは判別できない。18は底部資料中ではやや異質の個体である。全体に厚手の底部破片が多い中で、唯一薄手の個体である。色調は器表面が乳橙色、器肉が淡灰色のサンドウィッチ状になっている。焼成は普通であるが全体にやや粉っぽい。残存部位で観察するかぎりは粘土板成形であると考えられる。19はかなり分厚い破片である。色調構成は18と同様である。成形は基底部からの粘土紐巻き上げ技法を用いている。外面器表に見える縦方向の指ナデの連続は作成中に生じた亀裂の補修痕である。20は上端に辛うじて第一条の突帯が見える。突帯付け根の部分までで測った第一段高は9.5cmである。色調は器表面乳橙色、器肉灰黄色のサンドウィッチ状を呈している。成形はやはり基底部からの粘土紐巻き上げ技法を用いている。21は全面乳黄色を呈している。基底部から5.5cmの高さまでを粘土板で成形し、その上に粘土紐を巻き上げている。22は全面乳黄色で、焼成は普通であるが全体にやや粉っぽい。やはり粘土板成形技法を用いている。胎土中には酸化鉄粒が目立つ以外には混和物は見られない。23は器表面橙褐色、器肉灰黄色で焼成は悪くないが全体に摩耗が進んでいる。やはり粘土板成形技法を用いている。

24・25は朝顔形円筒埴輪片である。ともに花状部破片であるが同一個体ではない。


18
(SE-2)
19
(32L44)
22
(34M24)
20
(29L42)
21
(29L31)
23
(33M12)
24
(SD-8)
25
(SD-8)
0
15cm
26
(SD-23)
(29L43)
28
27
(SE-2)
(SE-2)
29

第52図　埴輪(2)

24は器表面の色調乳橙色、器肉の色調灰黄色のサンドウィッチ状を呈している。焼成は普通で、胎土中には酸化鉄粒がやや目立つ。突帯部分で傾斜が大きく変っており、その部分を太目の突帯が幅広に覆っている。稜線はややだらしなく、貼り付け方もやや粗雑である。25も24と同様の開口状態を呈する個体であろうと考えられる。色調は全面乳黄色で、焼成は悪くはないのだが全体に摩耗が進んでおり、かなり粉っぽい印象を受ける。ハケ目は24に比べてかなり粗く、汚らしく見える。その他の成形、調整、形状などの特徴は24とほぼ同じである。

26〜29は形象埴輪の破片資料である。全体に小片であるので、どのような形象のどの部分であるのかは特定するのが難しい。26は径の小さなもので、人物もしくは動物埴輪の手足の部分である可能性が高い。色調は器表面橙黄色、器肉灰黄色で、胎土中には酸化鉄粒が目立つ程度で、全体の石粒含有量はやや少なめである。27は上方に向って強く絞りこむ形状を示している。色調は器肉中央できれいに分かれており、外面側が乳橙色、内面側が灰白色である。外面右端の指ナデは亀裂補修痕であろうと考えられる。28は27ほど急激にではないが、やはり上方に向って絞りこまれる形状を呈している。色調は内面の一部に黒灰色の部分があるほかは、全体に

表20　古墳時代土器

番号	器　種	法量（cm） 口　径 高　さ 底　径（高台径）	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	須恵器 瓹	16.5 — —	口縁1/4	ロクロ成形	青灰色	(003)-122・126
2	〃 瓹	— — —	胴部片	ロクロ成形	青灰色	030-37
3	〃 堤瓶	— — —	胴部片	ロクロ成形 櫛状工具調整	青灰色 黒斑	(003)
4	〃 坏身	— — —	破片	ロクロ成形	青灰色 長石粒混	030-27
5	〃 器台	— — —	破片	外：ロクロナデ	灰色	(003)-72
6	〃 甕	— — —	破片	ロクロナデ 外：平行叩き目	青灰色	(003)
7	〃 甕	— — —	破片	外：カキ調整 内：同心円叩き目	灰色 自然釉	024-158
8	〃 甕	— — —	破片	外：条線、櫛歯文 内：同心円叩き目	灰色 自然釉	022-120

乳黄色である。胎土中には酸化鉄粒が目立つ程度で、石粒混和量は全体に少なめで粉っぽく、摩耗もかなり進んでいる。突帯は摩耗によるものかも知れないが、かなりダレた形状になっている。内面は粘土紐接合痕がはっきり見える。29は当初円筒埴輪の口縁部であろうと考えていたが、実測図に見えるような切り込みが観察され（部分的にしか残っていないので、透かしの形態の復元は不能である）、他の埴輪に付与される年代から言って方形透孔を有する円筒埴輪とは思えないので、形象埴輪の部分破片であろうと考えた。色調は乳橙色、焼成は普通で、胎土中には酸化鉄粒と少量の角閃石粒などが見える。

3　奈良平安時代の土器

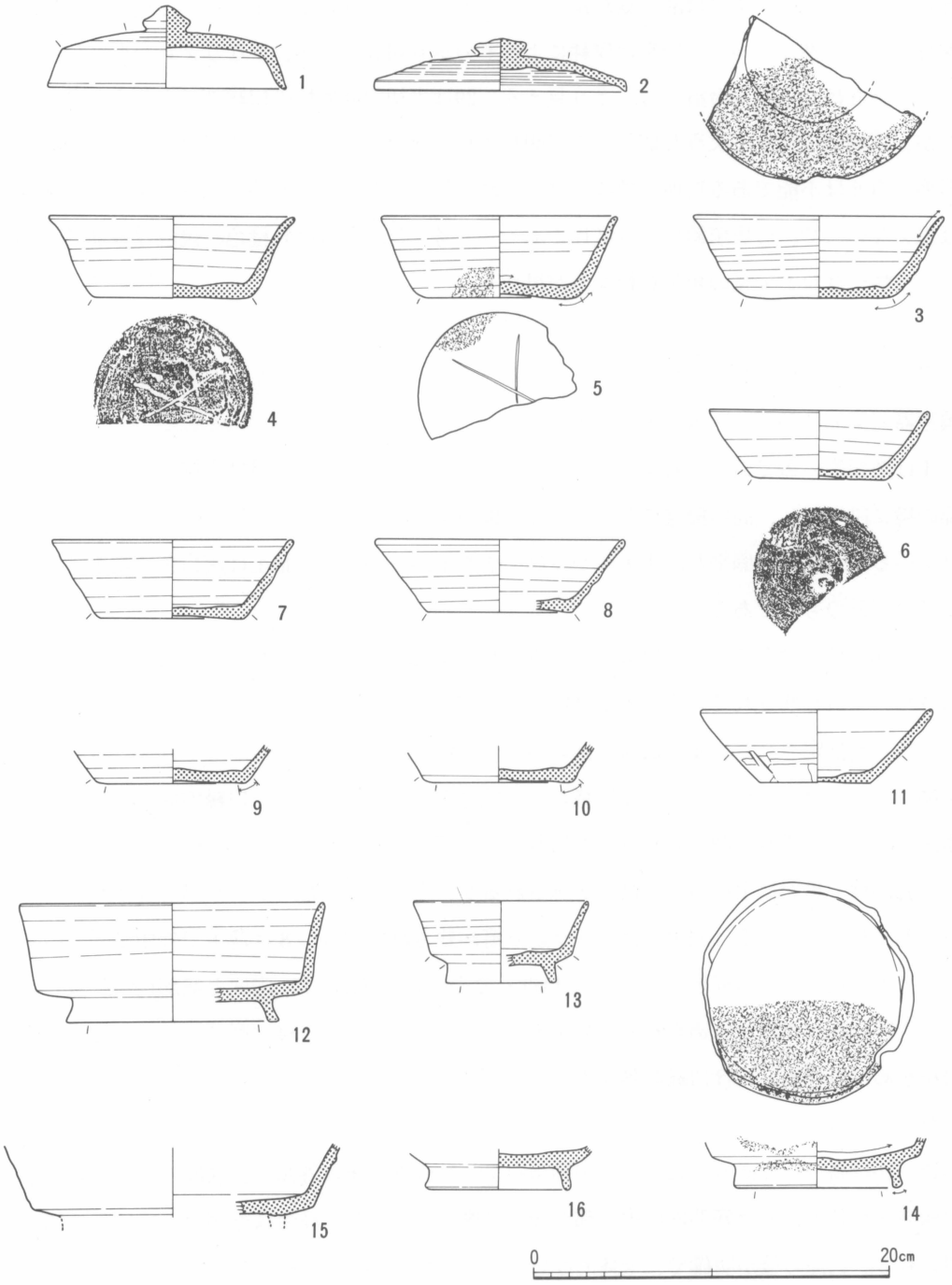
須恵器（第53～55図、図版39・40、表21）

1は短頸壺の蓋である。器高が高く、坏を伏せた様な形状で、口縁は直線的に外傾しと天井部の境に段をなし、高い擬宝珠がつく。2は偏平な蓋で、口縁端部は下方へつまみ出し処理されている。つまみは偏平だが中央がやや高く盛り上がっている。胎土は灰白色で精選されている。東海系のものであろう。

3～10は坏身である。3は坏破片で、内面が転用硯として用いられている他、底面の稜が研磨され、墨痕が残されている。墨痕は断面にも認められ、約半分に欠けた状態での使用されていたことが推定される。4は底裏に回転ヘラ切り痕を残し、ヘラ記号が描かれている。口縁は上端でやや外反している。5は4同様にヘラ記号の施されるもので、口縁内面上端と底部稜が、摩滅が顕著で、墨痕も認められる。転用硯として使用されていたとみられる。6は小振りのもの。底部稜と裏面に手持ちヘラ削りが施されるが、中央部に回転ヘラ切り痕が残され、ヘラ記号が刻まれている。7は底裏に回転ヘラ切り痕が残されている。8は薄手で外傾がきつい。胎土には雲母粒がめだち軽質。9はSK－14近くで出土した底部片で、内面と底部稜が摩滅しており、内面全面に墨痕が認められる。転用硯であろう。10は底部の稜が摩滅している。胎土に雲母粒がめだち軽質。11は口縁の外傾がきつく底部の径が小さい。体部のケズリが器高の半分まで及んでいる。

12～16は高台坏である。12は体部が箱型を呈し、直立気味に外傾し、底部の稜は顕著である。口縁端部が若干、また底部内面中央部が顕著に摩滅している。高台は裾が張っている。13は小型のもの。底部の稜が明確で、全体的な感じは12に類似。14は口縁を欠いて底部のみのもので、転用硯である。稜は明確。内面は摩滅し1/2に墨痕が顕著に認められる。高台端部も摩滅が激しい。断面に4箇所ほど刀子によるとみられる、鋭利な刃物でV字に切込みが入れられている。15は底部に稜がつき、黒斑が顕著で、東海系と思われる。16は底部のみの個体である。高台端部は摩滅している。

40は長頸壺の肩の部分で、球状に丸みをもって膨らむ。外面上部に軽い自然釉がかかり、内



第53図　奈良平安時代土器(1)

面には黒斑が顕著である。41は長頸瓶の底部である。SE－02から出土したものであるが、混入としてグリッドで取り扱った。球状の体部を呈し、ハの字に開く偏平な環状の高台が付されている。高台端は外縁で接地する。外面には灰釉が薄くかけられ、内面には小さい黒斑が若干認められる。胎土は精選され堅緻である。おそらく猿投窯のものであろう。SE－04出土の頸部と同一個体である可能性が高い。

42は小型の短頸壺で、上下が接合しないが同一個体であろう。若干肩が張り、丸底気味の底部に連なる。器高は低い。内面にはロクロ目が顕著に残されている。体部と底部との転換点には沈線が廻っている。

43は脚部に4条の縦透かしの入る盤であり、口縁、脚下半部を欠損している。裏面に自然釉がかかり、内面中央部には重ね焼きの際に坏を逆位で台にして置いたため、口縁の痕が残されている。

44は外面に平行叩き目の残された甑で、胴部が外傾し、口縁が直角近くに折れて口縁端は三角断面をなす。内面は叩き目がなで消されている。

土師器（第54・55図、図版39・40、表21）

17は赤彩された坏蓋で、偏平な形状を呈している。

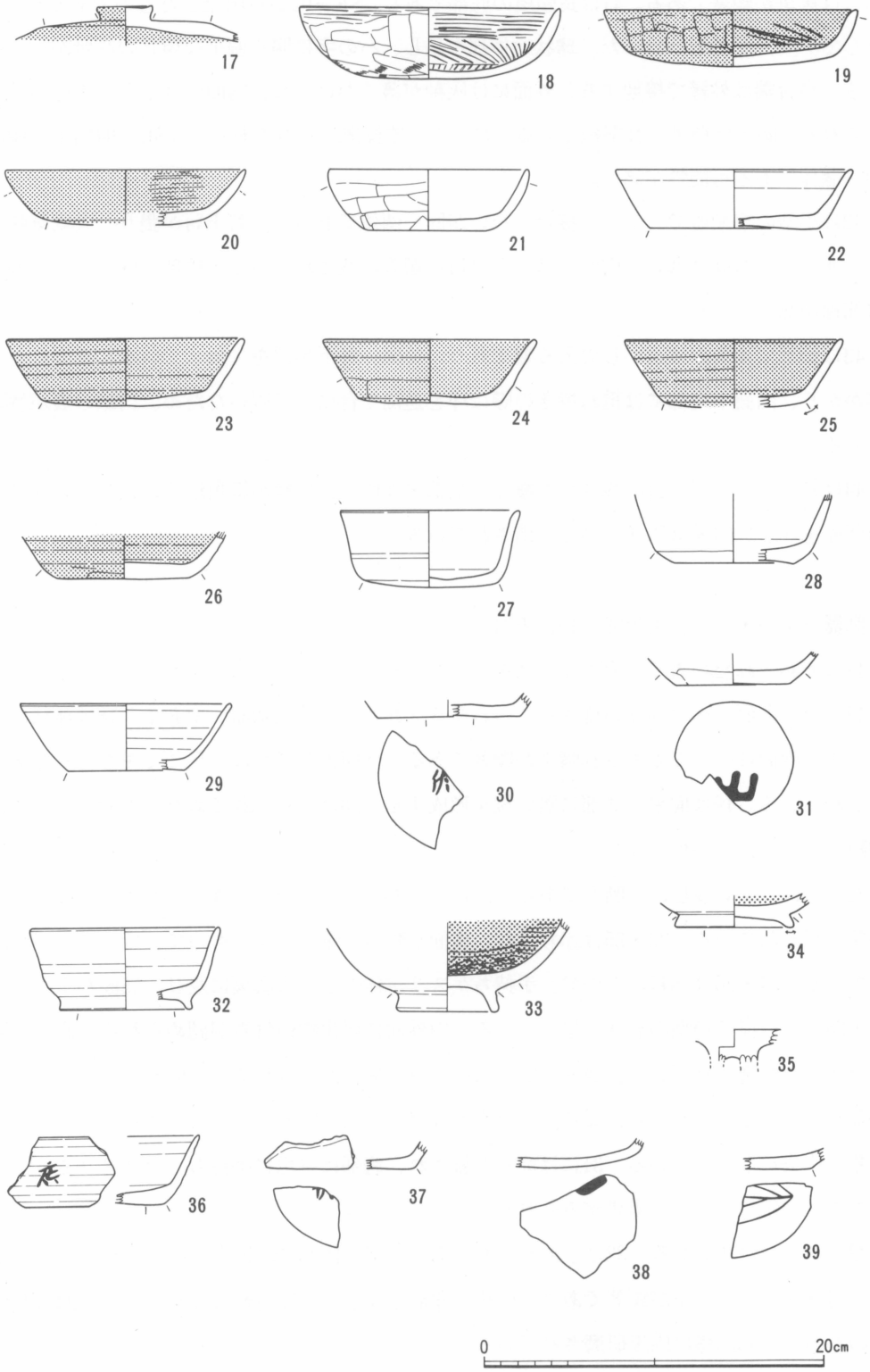
18～21は外面にヘラ削りの施されるいわゆる「非ロクロ系土師器」である。18は球状の体部をなす。内面はヘラミガキされ暗文が顕著である。外面のケズリは一旦ミガキを行った後、実施されている。19は偏平で底部に緩い稜を形成する。20は赤彩されており、外面のケズリは不明瞭。21は底面が平坦になる。

22～31はロクロ成形の土師器である。22はやや偏平で、底径が大きい。底裏が平坦にケズリ調整が行われている。23・25は赤彩され、底面が膨らみ気味になるもので、稜の部分が摩滅をしている。24・26は赤彩のもので、手持ちケズリが体下部から底裏に及び、底面が平坦になる。27・28は小口径で箱型の形状を呈している。内外面に炭化物の付着が認められる。底部は回転ヘラケズリが施されており、底面が27では膨らみ気味、28ではやや上げ底を呈している。29は体部が球状に膨らみかげんになる。30は底面は静止糸切り回転ヘラケズリされ、「佐」=「佐」の墨書が 中央になされている。31には赤彩が施され、底部は平坦に手持ちヘラケズリされ、底裏下位に 太い字で「山」の墨書がみられる。

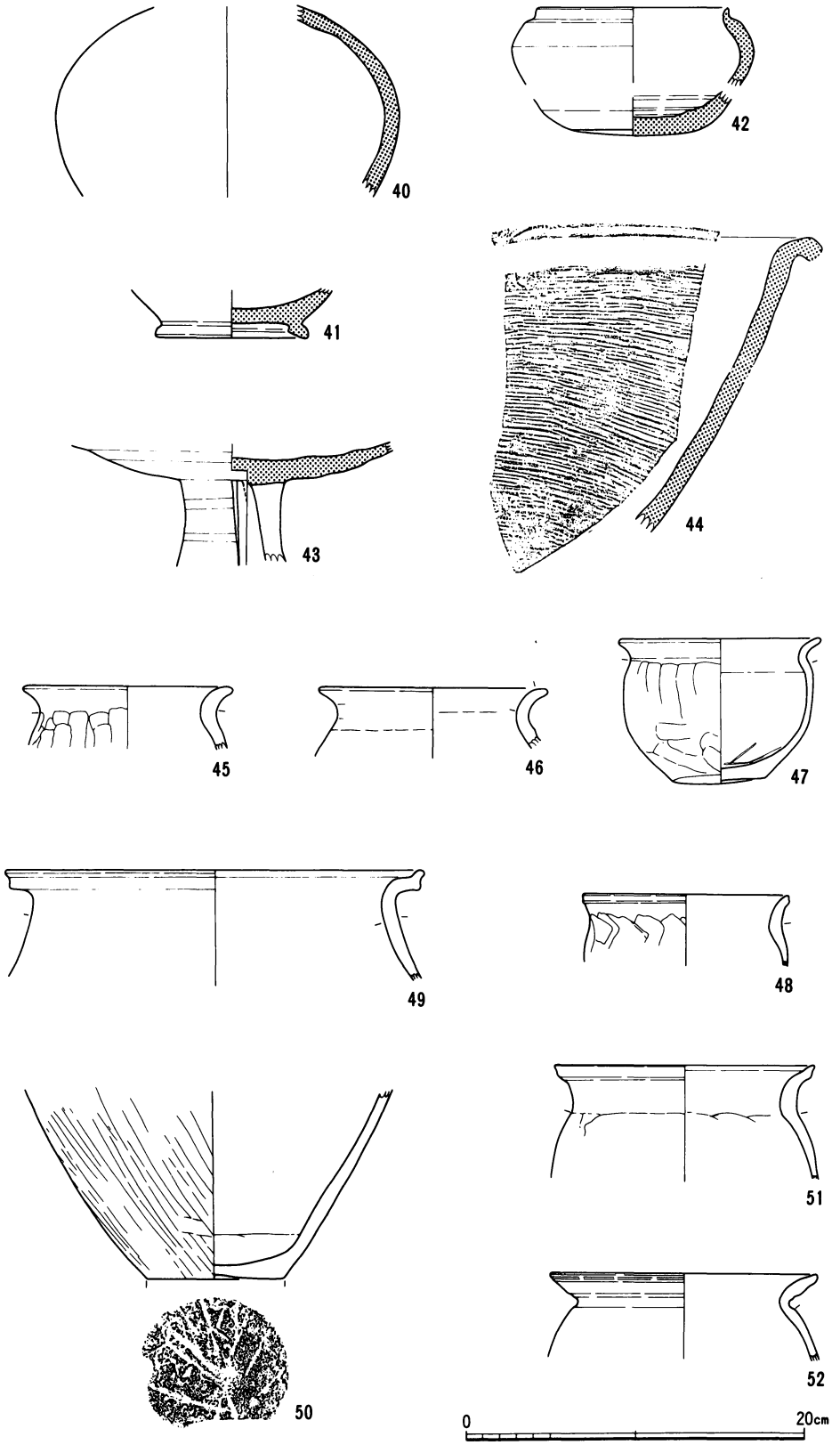
32～34は高台坏である。32は小振りのもので、箱型の体部に、裾張りの高台がつく。33は内黒で内外面ヘラミガキが顕著であり、碗状の器形をなすもの。高台は高めである。34は高台のみのもので、33同様に内黒研磨されている。

35は高坏の体部下端から脚にかけての部分である。

36～38は墨書土器破片で、36は体部外面に小さく「庚」の字が、37では部分的だが底裏に30



第54図　奈良平安時代土器(2)



第55図　奈良平安時代土器(3)

と同じく「佐」が書かれている。38は底裏に太字の31同様「山」の字であろう。39は底裏に木葉文様が線刻されている。

45〜52は土師器の甕である。45・46は口縁はゆるく「く」の字状に外反している。47は薄手の小型甕で、外面には上部が縦に下部が斜方向にヘラケズリが施されている。前者同様の口縁形態をとる。48は口縁が立ち気味になり、端部が折り返し状になっている。49は常陸型の甕で、口縁が「L」字に大きく屈曲し、端部が上方につまみだされ、縁帯を形成する。胎土には長石・石英礫が多量に含まれている。50は49の底部と思われるもので、斜方向のヘラナデが顕著で、底裏には木葉痕がみられる。二次焼成のためか、器面の剝落がみられる。51は口縁がゆるく「く」の字に外反し、端部のつまみ上げが施される。52は口縁が「L」字状に屈曲し、直線的に外傾し肥厚するものである。

表21　奈良平安時代土器

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	須恵器 壺蓋	径 13.5 高 4.7	2/3	ロクロ成形 天：回転ケズリ	暗灰色、長石混	32M21-28・30・31
2	〃 坏蓋	径 14.4 高 3.0	1/5	ロクロ成形 天：回転ケズリ	灰白色	33L14-20
3	〃 坏 1b類 (転用硯)	14.2 4.7 8.4	1/3	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	灰色、内・底裏：磨滅 石英、長石粒、黒斑有	38M14-20
4	〃 坏 2類	13.8 4.5 9.0	1/2	ロクロ成形 回転ヘラ切り 底：ヘラナデ・記号	青灰色 長石礫多	32L44-115
5	〃 坏 2類 (転用硯)	13.4 4.6 9.2	1/3	ロクロ成形 回転ヘラ切り ヘラ記号	青灰色 内・底：磨滅 長石礫含	31M20-1
6	〃 坏 1b類	12.5 4.8 7.5	1/2	ロクロ成形 回転ヘラ切り 底：手持ちケズリ	灰色 石英、長石礫混 ヘラ記号	32M40-10
7	〃 坏 2類	13.4 4.5 8.0	2/3	ロクロ成形 回転ヘラ切り 稜：ナデ	青灰色 長石、石英粒多	31L24-48・55・67
8	〃 坏 1b類	14.2 4.1 8.3	1/3	ロクロ成形	灰褐色 長石、石英、雲母粒多	32M31-55 32M32-2・9・11
9	〃 坏 1b類 (転用硯)	— — 8.2	底部	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	灰色 雲母細粒多 内外：墨痕・磨滅	40N03-9
10	〃 坏 1b類	— — 8.2	1/3	ロクロ成形 回転ヘラ切り	明灰色 石英、長石、雲母粒多	33L04-9・50

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
11	須恵器 坏　3類	13.2 4.0 6.3	1/2	ロクロ成形 体下：ヘラケズリ 底：ヘラケズリ	灰白色 砂礫含	33M01-1～3・5
12	〃 高台付坏	17.2 6.6 15.3〔11.9〕	1/3	ロクロ成形 付け高台 底：回転ケズリ	暗褐灰色 長石礫多し	32L44-108
13	〃 高台付坏	10.6 4.6 8.0〔 6.3〕	1/2	ロクロ成形 付け高台 底：回転ケズリ	青灰色 長石礫混 回転ヘラ切り	32L44-108
14	〃 高台付坏 （転用硯）	— — 8.3	底部	ロクロ成形 付け高台 底：回転ナデ	青灰色、墨痕 高台内磨滅 長石、石英雲母粒混	32L14-36
15	〃 高台付坏	— — 16.7	1/5	ロクロ成形 付け高台	灰～黒灰色 長石粒混、黒斑 高台剝落	067-81
16	須恵器 高台付坏	— — 〔 8.3〕	底部	ロクロ成形 底：回転ナデ	青灰色、高台：磨滅 長石、石英、雲母 暗灰粒混	32L14-36
17	土師器 坏蓋	— —	天井部1/3	ロクロ成形 天：回転ケズリ	赤彩 つまみ：3.3×0.8	32M43-2
18	〃 坏　1類	15.6 4.3 —	完形	外：手持ちケズリ 口・内：ヘラミガキ	橙褐色	33L34-9
19	〃 坏　1類	15.0 3.4 12.5	2/3	外：手持ちケズリ 内：ヘラミガキ	赤彩	31L44-9・10
20	〃 坏　1類	14.2 3.3 9.1	1/4	外：手持ちケズリ 口・内：ヘラミガキ	赤彩	33L04-85・86
21	〃 坏　1類	12.0 3.6 7.0× 8.4	1/3	外：手持ちケズリ 内：ミガキ、ナデ		31L34-55
22	〃 坏　2a類	14.0 2.5 10.0	1/3	ロクロ成形 底裏：ヘラケズリ		38N12-1・13
23	〃 坏　2a類	14.0 3.9 9.8	1/2	ロクロ成形 内：ミガキ 底：手持ちケズリ	赤彩 底稜：磨滅	33M00-12・13
24	〃 坏　2b類	12.7 3.6 8.5	4/5	ロクロ成形 体下・底：手持ちケズリ	赤彩 内上端：磨滅	32L44-155
25	〃 坏　2a類	13.0 4.0(推) 8.2	1/2	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	赤彩 底：磨滅	31L12-24 31L13-33 31L22-39
26	〃 坏　2b類	— — 7.8	底部	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	赤彩	31L49-48

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
27	土師器 坏　3類	10.7 4.4 7.9	ほぼ完形	ロクロ成形 底裏：回転ケズリ	内外面スス若干 暗～黒褐色	31L43-61・62
28	〃 坏　3類	— — 7.0	1/3	ロクロ成形 底：回転ケズリ	内外面スス若干 暗黒褐色	31L43-5・36
29	〃 坏　4類	12.4 3.9 6.8	1/4	ロクロ成形 底裏：手持ちケズリ	明灰褐色	31L22-19・30
30	〃 坏　4類	— — 8.6	底部1/3	ロクロ成形 静止糸切り 回転ケズリ		33M-20
31	土師器 坏　2b類	— — 6.8	底部	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	赤彩 「山」の墨書	40N21-3・22
32	〃 高台坏	11.2 4.8 9.0〔7.8〕	1/4	ロクロ成形 底裏：回転ケズリ	明灰褐色 高台端：磨滅	38M34-5
33	〃 高台坏	— — 〔6.1〕	1/3 口縁欠	内外：ヘラミガキ 腰：ヘラケズリ 付高台	内黒 高台端：磨滅	31M21-34
34	〃 高台坏	— — 〔7.0〕	台部	ロクロ成形 内：ヘラミガキ 回転糸切り	内黒	31M21-11
35	〃 高坏	— — —	体～脚部	ロクロ成形 内：ヘラミガキ	内黒	31L23-239
36	〃 坏	— — —	1/5	ロクロ成形 回転糸切り 底裏：手持ちケズリ	体部墨書「庚」	43N43-5
37	〃 坏	— — —	底部1/4	ロクロ成形 底裏：ケズリ	底墨書「佐」	33M01-42
38	〃 坏　2a類	— — —	底部1/4	ロクロ成形 底：手持ちケズリ	赤彩、底：墨書 底面膨らみ	40N03-17
39	〃 坏	— — —	底部1/4	ロクロ成形 底裏：ケズリ	底：木葉状 沈線	40N13-15
40	須恵器 長頸壺	— — —	肩部1/4	ロクロ成形	暗褐灰色、自然釉 黒斑、長石粒混	31L22-27・32 37-38
41	〃 長頸壺	— — —	底部1/2	ロクロ成形 回転糸切り 回転ケズリ	明褐灰色 付高台、自然釉	(003)-56
42	〃 短頸壺	— — —	口縁片 底部	ロクロ成形 沈線	灰色 石英・長石粒混	32M31-1 32M21-41

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
43	須恵器 盤	— — —	口縁 脚下半欠	ロクロ成形 縦透し 裏：自然釉	褐灰色 黒斑、重ね焼き痕	31M20-10
44	〃 甑	— — —	破片	口：ロクロナデ 外：平行叩き目 内：スリケシ	灰色 雲母・長石粒少	39N10-26
45	土師器 甕	12.4 — —	口縁1/4 肩	口：ヨコナデ 外：タテケズリ		32L43-9
46	土師器 甕	13.6 — —	口縁1/4 肩	口：ヨコナデ		104-1(カクラン)
47	〃	12.2 8.7 5.5	1/2	口：内ナデ 外底裏：ケズリ		33M01-1・39・40
48	〃	12.2 — —	口縁1/4 肩	口：ヨコナデ 外：ナナメケズリ		40N21-31・36
49	〃	24.8 — —	口縁1/3 頸	口:ヨコナデ	石英・長石・雲母粒多 焼成良 常総型	31L24-2・80 70、89、94 128
50	〃	— — 8.2	底部	外：ナナメナデ 底裏：木葉痕	〃	32M20-1・24 26～28・31 32M30-48・65 111
51	〃	15.4 — —	口縁1/4 肩	口：ヨコナデ 外：タテケズリ		31L23-109 229
52	〃	15.8 — —	口縁1/4 肩	口：ヨコナデ		40N01-40・41

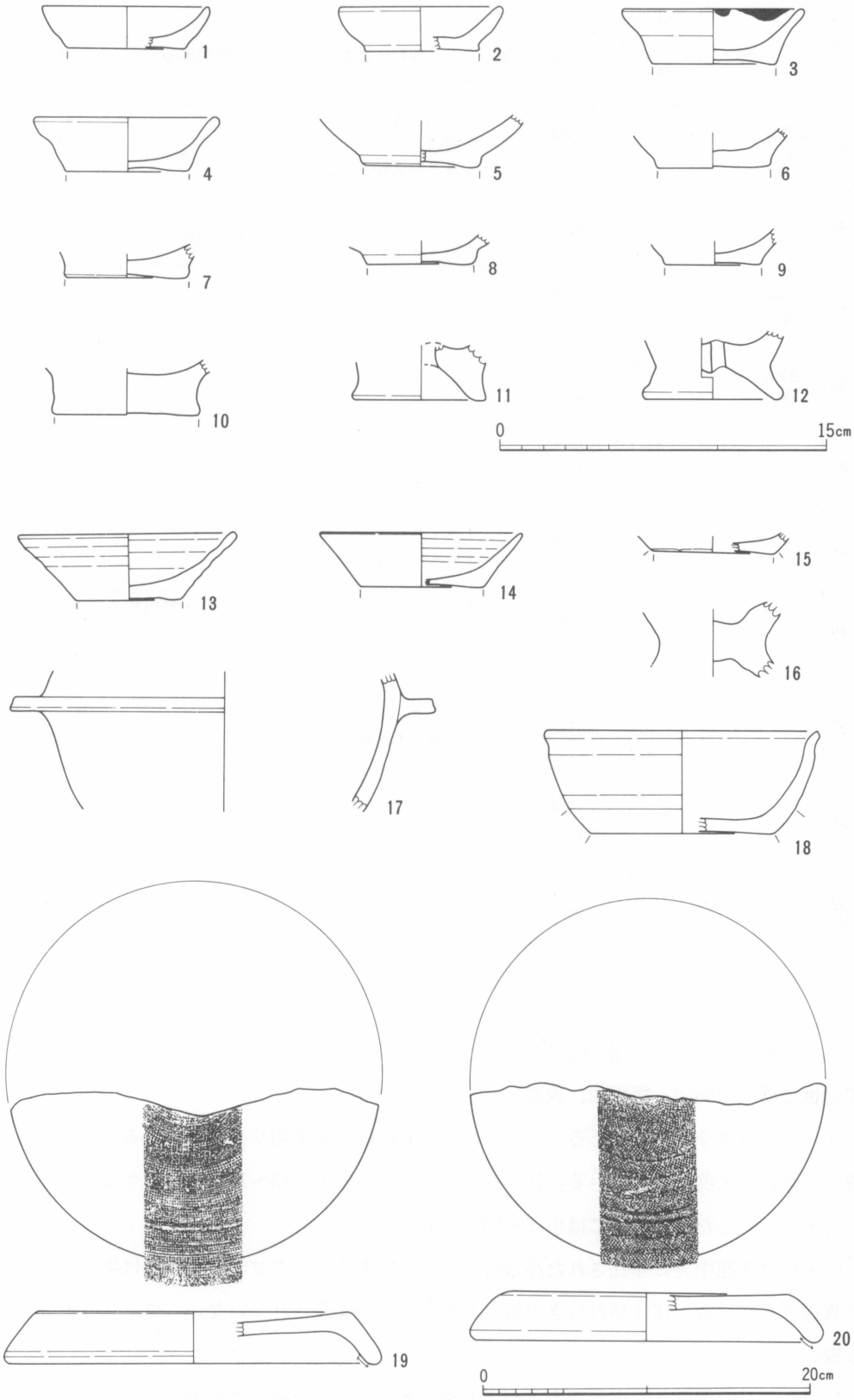
4　中近世以降の土器・陶磁器

中近世土器（第56図、図版42、表22）

1～10はカワラケ小皿である。ロクロ成形で底面は回転糸切りのままである。3には灯芯を置いた際のスス痕がついている。10は高台状をなしている。13～15はカワラケであるが、大振りであり皿とした。基本的には小皿と同じである。

11・12は底面中央に穿孔された高台付きの器台である。ロクロ成形で、孔は裏から棒状工具で貫通されている。16は高台付きの器台と思われるが穿孔されていない。ロクロ成形で、底面は厚い。

17は小ぶりの鍔付きの土器であるが、羽釜であろう。鍔の高さは2cmほど。土師器的な質感



第56図　中近世土器

を呈している。中世前半頃に位置するものか。18は碗である。灰褐色で耐火度の高そうな胎土をしている。

19・20は瓦質の蓋で、外面全面に細かい格子目の回転スタンプ文様がみられる。中央にはつまみがつくが欠損している。この文様は同心円状にきれいに施されており、回転台で土器自体

表22　カワラケ皿・土師質土器

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	カワラケ 小皿	7.6 1.9 5.4	1/2	ロクロ成形 回転糸切り痕		30L03-A
2	〃 小皿	7.6 2.0 3.2	1/2	ロクロ成形 回転糸切り痕		30L04-B
3	〃 小皿	8.4 2.5 5.6	1/2	ロクロ成形 回転糸切り痕	スス付着	30L32-2
4	〃 小皿	8.5 2.5 5.7	2/3	ロクロ成形 回転糸切り痕		045-1
5	〃 小皿	— — 5.6	1/3	ロクロ成形 回転糸切り痕		29L44-14
6	〃 小皿	— — 5.4	2/3	ロクロ成形 回転糸切り痕		30L24
7	〃 小皿	— — 5.6	底部	ロクロ成形 回転糸切り痕		043-2
8	〃 小皿	— — 5.0	底部	ロクロ成形 回転糸切り痕		30L04-D
9	〃 小皿	— — 4.5	底部	ロクロ成形 回転糸切り痕		29M52-C (30M02)
10	〃 小皿	— — 6.6	底部	ロクロ成形 回転糸切り痕	高台状	29L44-28
11	土師質土器 有孔台	— — 6.2	高台部1/2	ロクロ成形 穿孔		30L-32
12	〃 有孔台	— — 6.4	高台部	ロクロ成形 穿孔	孔径＝0.6cm	30L-34
13	カワラケ 皿	13.4 4.0 5.9	2/3	ロクロ成形 回転糸切り痕	スス付着	30M11-B

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
14	カワラケ 皿	12.6 3.3 7.6	1/3	ロクロ成形 回転糸切り痕	外面：アレ	30L04-C
15	〃 皿	— — 7.5	底部1/2	ロクロ成形 稜部：ケズリ		31L12-2・6 31L23-7
16	器台	— — —	底・脚部	ロクロナデ		30L32-16
17	羽釜	胴 21.6 （鍔）26.0	胴部	ヨコナデ	土師器的 外下：スス付着	30L12-B 30L22-4
18	鉢	17.0 6.2 11.4	1/2	ロクロ成形 底：回転ケズリ	焼成良 灰褐色	32L34-49
19	火消壺 蓋	径 23.0 高 3.2	2/5	ロクロ成形 外：回転スタンプ文	瓦質、黒色 内・内縁：磨滅	31L23-275
20	〃 蓋	21.8 3.0	1/2	ロクロ成形 外：回転スタンプ文	瓦質、黒色 内縁：磨滅	31M10-1

を回しながら施文したとみられる。内面口縁端部は身との合わせの部位が摩滅している。

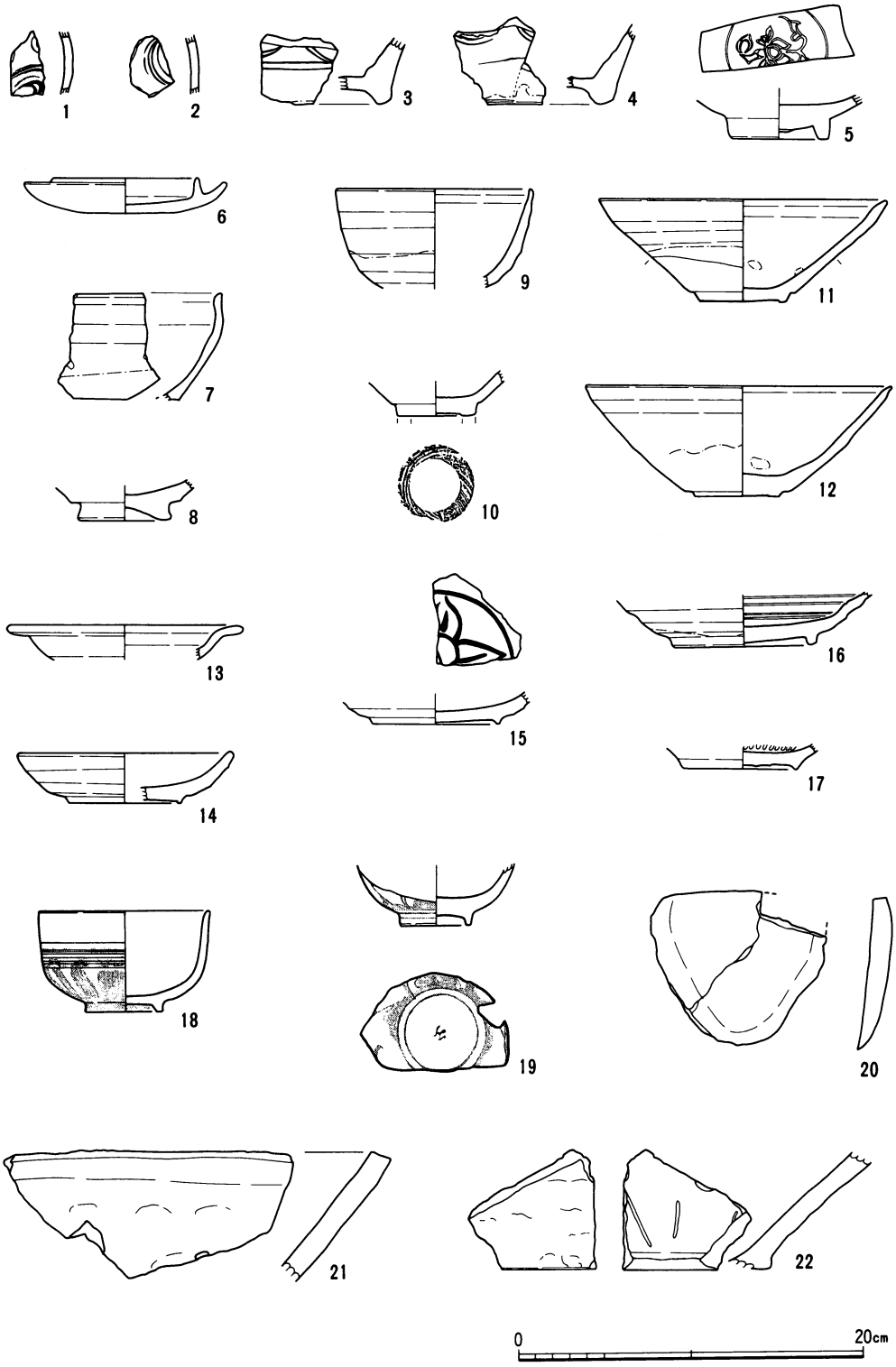
陶磁器（第57図、図版42、表23）

1～4は中国青白磁の瓶子で「梅瓶」とよばれるものである。器面には草文が彫刻手法により施され、淡青緑色の釉が厚くかけられている。釉は内面にも薄くかけられている。外面には貫入が著しく、二次焼成を受けているためか器面が荒れている。高台端部は無施釉で、円頭状に擦られている。13世紀の所産のものである。墓地の隣接する30LM区での出土であり、蔵骨器として用いられていたものが混入したものであろう。

5は中国青磁鉢の底部である。牡丹唐草文がスタンプ手法により描かれ、厚く淡緑色の釉がほぼ全面に施釉されている。高台裏には蛇の目に無施釉部が残され、中央ぶに砂礫が溶着している。15世紀、龍泉窯のものとみられる。

6は受け付き状の灯明皿である。鉄錆釉が底裏にも薄くかかり、炭化物が内面に若干付着している。底裏には立ち上がり端部が接合した重ね焼き痕が残されている。

7～12は15～17世紀の瀬戸・美濃産の茶碗類である。7は天目茶碗の体部片で、釉は茶と黒が細かく斑状に混ざる。8は天目茶碗の底部で、高台裏面には円錐状にえぐりが入る。還元焼成気味で、褐灰色を呈し黒飴釉がかかっている。16世紀の瀬戸産ではなかろうか。9は灰釉丸



第57図　陶磁器

茶碗である。16・17世紀のもの。10は小振りの茶碗の底部で、灰釉がかかり、平茶碗になりそうである。高台端には糸切り痕が残されている。11・12は灰釉平茶碗で、体部が急角度で直線的に外傾しており、高台は小さく裏面はわずかにケズリくぼめられている。内面底部近にピン痕が残されている。15世紀前半、瀬戸産のもの。

13～17は皿である。13は小型で薄手の折縁皿で、白濁した志野釉がかかっている。17世紀前半頃のもの。14は鼠志野の小皿で、黒色の胎土に白濁釉がかかり、暗灰色を呈している。釉は高台裏面にまでみられる。15は鉄絵による花文が施されており、志野釉が施されるが、胎土が黒灰色を呈する部分が多く、灰色になっている。釉は底裏にも及んでいる。17世紀前半期のものであろう。16は白色釉の皿で、体部内面に同心円状に沈線が施されている。内面はよく擦られて摩滅が著しい。17世紀のも。17は灰釉の施された菊皿である。釉は透明で厚くかかり、高台裏には施釉され、輪トチン痕が残されている。

18は外面が灰釉・鉄釉掛分け、内面には灰釉の施された偏平な茶碗で、「腰錆茶碗」といわれる、18世紀中頃のもの。本調査区南接の確認グリッドで出土した。

19は染付磁器碗で梅樹文の施されるいわゆる「くらわんか碗」で、18世紀前半のものである。

20～22は無釉の捏ね鉢である。20は二次的に外面が全面擦られ球状に摩滅している。21は17世紀美濃産のもので、灰褐色を呈しよく焼き締まっている。22は底部で、内面はよく摩滅し、縦に焼成後とみられる沈線がまばらに施されている。常滑産であろう。

表23　陶磁器

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	青白磁 瓶子	— — —	胴部片	ロクロ成形 内外施釉	器面：アレ、貫入 草文 胎土：灰白色、堅緻	30L02 (30L-134)
2	〃 瓶子	— — —	胴部片	ロクロ成形 内外施釉	器面：アレ、貫入 草文 胎土：灰白色、堅緻	30M01-C
3	〃 瓶子	— — —	底部片	ロクロ成形 ケズリ高台 底裏無施釉	器面：アレ、貫入 草文 胎土：灰白色、堅緻	30L22-4
4	〃 瓶子	— — —	底部片	ロクロ成形 ケズリ高台 底裏無施釉	器面：アレ、貫入 草文 胎土：灰白色、堅緻	30L43-7
5	青磁 鉢	— — 〔 6.0〕	底部	ロクロ成形 ケズリ高台 高台裏、蛇ノ目無施釉	胎土：灰白色、堅緻 淡緑色 牡丹唐草文	30M32-17
6	陶器 灯明皿	11.8 2.2 5.4	1/3	ロクロ成形 受付き 全面施釉	胎土：暗灰褐色 鉄錆釉 炭化物付着	30L43-21

7	〃 天目茶碗	— — —	体部1/5	ロクロ成形 ケズリ高台 外：回転ケズリ	胎土：乳灰色 鉄釉	29M41-B
8	〃 天目茶碗	— — 〔5.4〕	底部2/3	ロクロ成形 ケズリ高台	胎土：褐灰色 黒斑：高台鬼板仕上げ 黒飴色釉	30M00-D
9	〃 丸茶碗	11.6 — —	体部1/5	ロクロ成形 外：回転ケズリ	胎土：乳灰色 灰釉、貫入	30M02
10	〃 平茶碗	— — 〔4.7〕	底部	ロクロ成形 回転糸切り ケズリ高台	胎土：乳灰色 長石粒混 灰釉、貫入	30L13-13
11	〃 平茶碗	16.7 6.1 〔5.0〕	1/3	ロクロ成形 ケズリ高台 体下・底裏：回転ケズリ	胎土：乳灰色 礫混 灰釉、貫入	30L02-D、 30L21-3 30L22-1・4・ 9、30L33-7
12	〃 平茶碗	17.8 6.4 〔5.0〕	1/3	ロクロ成形 ケズリ高台 体下・底裏：回転ケズリ	胎土：乳灰色 灰釉、貫入	29M42-A 30L14-B
13	〃 折縁皿	13 — —	口縁1/5	ロクロ成形	胎土：乳灰色 志野釉・貫入	29L42-D
14	〃 鼠志野 皿	12.4 2.9 〔6.5〕	1/2	ロクロ成形 底：回転ケズリ	胎土：黒色 志野釉・貫入	29M41-A 49M42-B
15	〃 志野 皿	— — 〔7.4〕	底部1/4	ロクロ成形 ケズリ高台	胎土：乳灰色 黒灰色 志野釉、貫入	30L14-B
16	陶器 皿	— — 〔8.5〕	底部2/3	ロクロ成形 ケズリ高台 底：回転ケズリ	胎土：乳灰色 白色釉	29B41
17	〃 菊皿	— — 〔6.4〕	底部	ロクロ成形 全面施釉	胎土：乳灰色 灰釉、輪トチン痕	30M30-2
18	〃 茶碗	10.0 5.9 〔4.5〕	1/2	ロクロ成形 全面施釉	胎土：灰色 外：灰釉、鉄釉 内：灰釉	42O10-16
19	磁器 染付碗	— — 〔4.3〕	1/2	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉	胎土：白色 くらわんか手 梅樹文・高台内銘	34M20-23
20	陶器 捏鉢	— — —	口縁片	—	長石、石英礫多 外面擦石に転用 常滑産	30L33-5
21	捏鉢	— — —	口縁片	—	焼成堅緻 内：マメツ	29L44 29M40
22	捏鉢	— — —	底部片	縦沈線	内：マメツ 胎土：石英、長石粒 黒斑、黄褐色礫	29L43

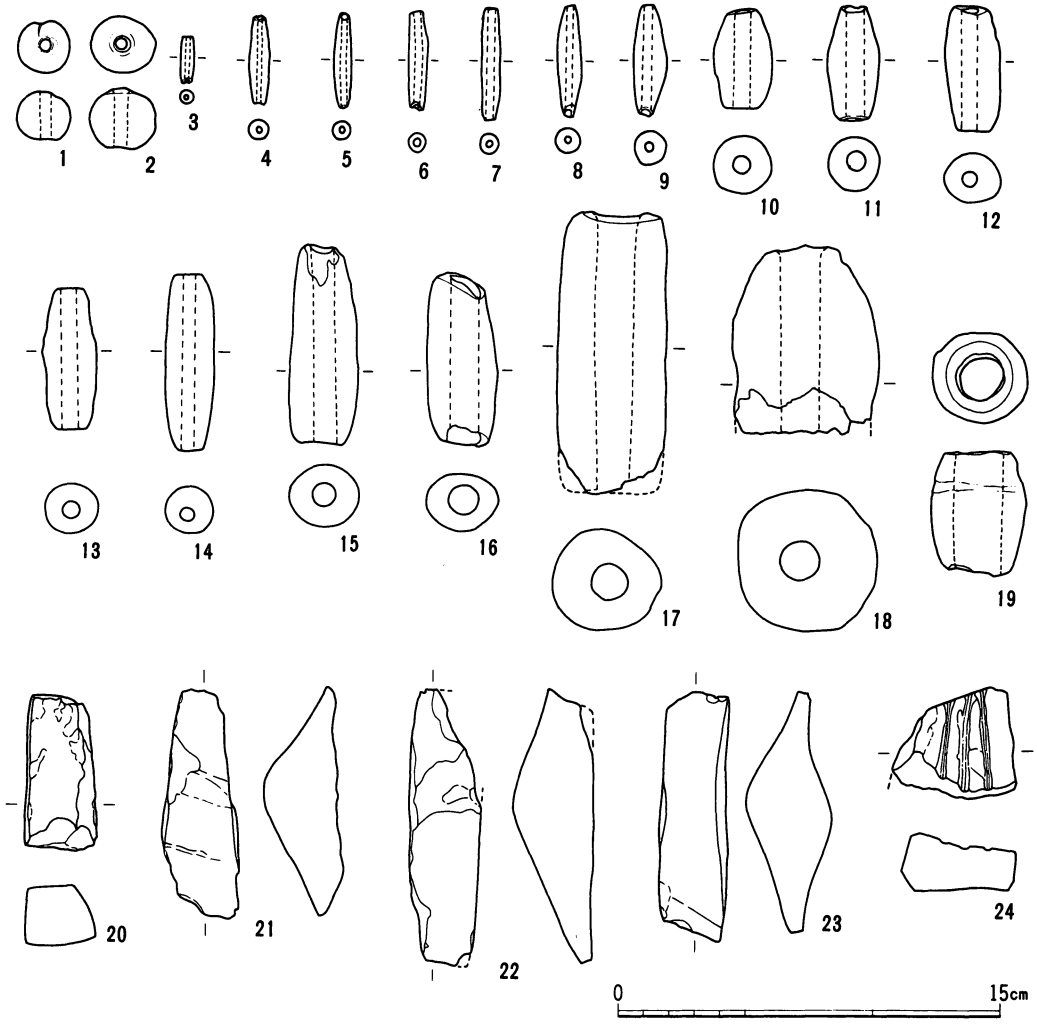
5　土製品

土玉・土錘（第58図、図版43、表24・25）

1・2は土玉である。径2cmほど土球に、径0.5mmの細棒を中軸に貫通させ製作されている。

3～19は土錘と思われるもの。円棒を軸として、粘土を貼付け、管状に成形したもの。3～9は細管状の土錘である。長さ4cm前後、径は1cm弱のものが主。10・11は長算盤玉状の土錘で、径2cm、長さ4cm前後である。両端が平坦に截断されている。12～16は棒状土錘である。長さ、太さに変異が大きく、15・16は大ぶりで内径が太い。17・18は太棒状土錘になる。径は4cm以上、長さは10cmを超えると思われる。

19は常滑焼の管状土錘である。土師質のものに比して長さが4.8cmと短く、薄手であり、孔径が1.9cmで広い。



第58図　土錘，石製品

土人形（第60図、表24）

17は土人形で、両面型取りで成形されたもの。Ⅰ区で表採された幅2.1cm、厚さ1.6cmで上半部を欠損する。袴をはいた半架像で、七福神の恵比寿天とみられる。基部底面中央から頭部にむけ施された、細孔をともなっている。

6　石製品

砥石（第58図、図版43、表26）

砥石を図示した。21・24はSD－23上、20・22・23は南端部のⅢ区での出土である。他の石製品としてはⅠ区北端で石塔の破片があるが、図示できるものはない。

20～23は角柱状の凝灰岩を素材とした砥石である。20は角柱状で四面が平坦に擦られている。21は一面のみの使用面を有し、両端部が顕著に摩滅して中央が山状に盛り上がっている。22は三面が使用され、特に正面と裏面は両端部がすり減って、長軸断面が菱形を呈している。23は三面使用のもので、正面が21同様山状に中央の盛り上がりがあり、その頂部には敲打痕がみられる。

24は表裏二面の使用されたもので、砂岩製。使用により凹レンズ状にくぼむ。片面には平行した3状のＶ字溝が切られている。薬研や石皿的な用途も考慮すべきであろう。

7　金属製品

古銭（第59図、図版43、表27）

計13枚の出土をみた。北宋銭や古寛永等の古手のものは、SB－１からSB－６の建物跡上の29M41・42区に集中してみられた。

１～５は北宋銭で、１は景徳元寶、２は祥符元寶、３は皇宋通寶、４は紹聖元寶、５は聖宋元寶である。６・７は明銭の永楽通寶である。１・３・４・６は４枚接着して出土しており、埋葬に伴う六文銭と思われる。

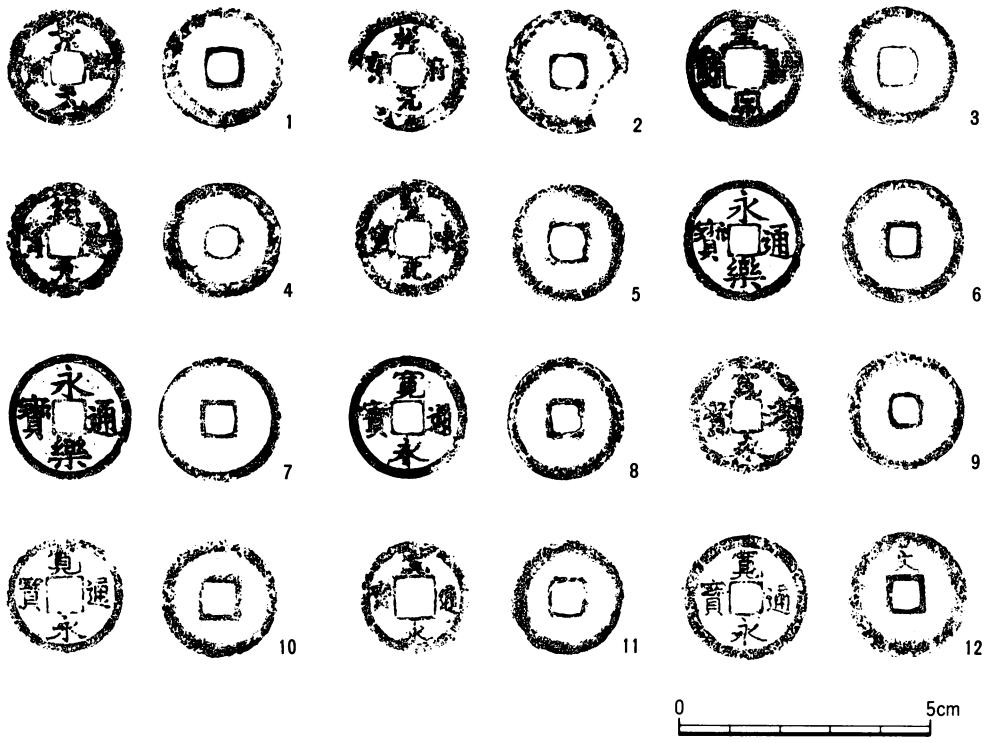
８・９は古寛永で、接着して出土した。

10から12は新寛永で、10は元文期亀戸銭である。11は元文期の藤沢・吉田島縮字銭である。12は背文があり、寛文期亀戸銭である。10・11は街道跡付近、12はSD－23の溝脇からの出土である。

鉄製品・キセル（第60図、図版44、表28）

グリッドから出土した鉄製品の量は多いが形状をなすもの少なく、所属時期も明確にできなかった。ここでは形状の形状のわかるもののうち、代表的なものを図示するにとどめた。

１～４は偏平な角釘の類である。１はクサビとしてもよい。３は折頭型になる可能性もある。



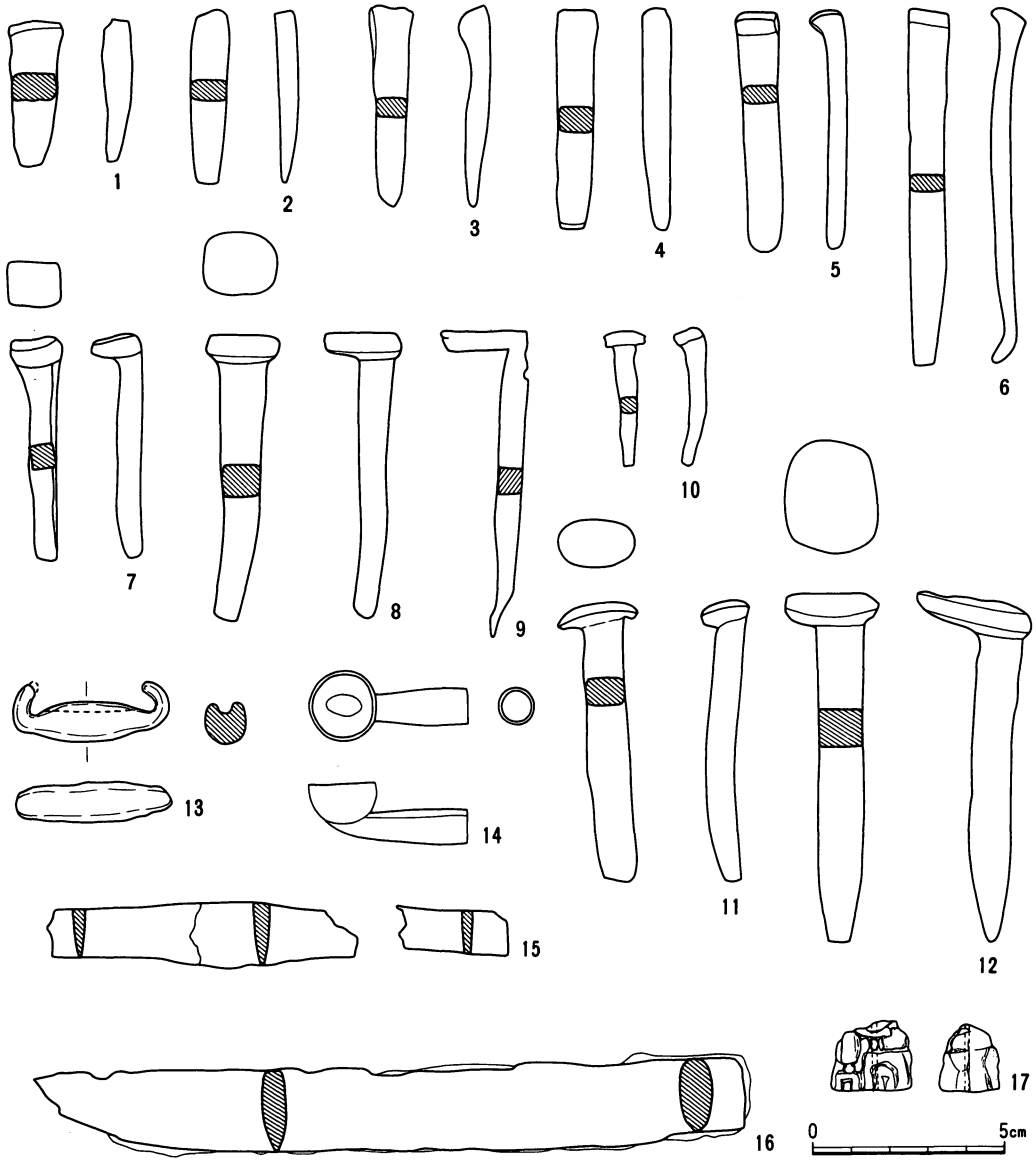
第59図　古銭

5～12は折頭型の釘である。5・6は偏平で頭部が軽く折れるもの、7・8は頭部の完全に折れる皆折釘になる。9は「L」字状に基部が折れたものである。10～12頭部を偏平に叩きた出し平釘としてよい。12は大型でレールをとめる犬釘に似ており、新しそうである。

13はタンス等の引手金具と思われる。現代のタンスのものと異なり、かろうじて指がかかるほどの大きさしかない。指掛かりの部分は太くなり、断面が「U」字状を呈している。

14はキセルの雁首であり、本調査区南端に接する確認調査グリッドより、第　図の茶碗とともに出土した。真鋳製で全長4.3cmを測る。火皿部は径1.8cmと大きい。脂返し部は短く、直線的である。

15は刀子片で、基部と刃部の一部が残されている。16は短刀である。全長18.6cm、刃渡り16.5cmを測る。無反りで切っ先には膨らがある。茎部は目釘孔がなく、かつ不自然に短く、脇差し等を切断して刃を落として茎部にしている可能性がある。断面では茎部が厚くなっているが、錆のためである。



第60図　鉄製品・キセル・土製品

表24　土製品・土玉一覧

挿図番号	計測値				遺存度	特記事項	遺物番号
	長(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重(g)			
28-25	0.6	2.2	0.5	1.5	完　形	臼玉 焼成不良	SD－8 (004)-153
33-13	3.0	(巾) 2.2	(厚) 1.4	—	〃	土人形（七福神？） 型起こし、底面穿孔	SD－12 002-321
37-26	3.5	3.4	0.6	46.1	〃	紡錘車 微細砂混、暗褐色、焼成良、ヘラケズリ	SD－28 081-113
60-20	—	(巾) 2.1	(厚) 1.6	—	下半部	土人形（恵比寿天） 型起こし、底面穿孔	I区表採
12-29	1.4	1.7	0.35	4.0	完　形	土玉 微細砂含	SE－4 015-154
15-8	1.5	2.0	0.3×0.4	5.8	〃	〃	SX－6 003-307
15-9	2.0	1.8×2.0	0.3×0.3	7.0	〃	〃	SX－6 003-217
15-10	1.6	1.9×2.1	0.35	6.8	〃	〃	SX－6 003-368
15-11	1.7	2.1	0.4	7.0	〃	〃	SX－6 003-146
15-12	1.9	2.1×2.4	0.4	9.9	〃	〃	SX－6 003-158
15-13	2.0	2.6×2.8	0.6	14.1	〃	〃	SX－6 003-4
26-8	3.1	3.0	0.8×0.9	24.2	〃	〃	SD－6 021-1
28-26	2.1	2.1	0.4×0.6	8.0	〃	〃	SD－8 030-96
28-27	1.9	2.2	0.45	7.7	〃	〃	SD－8 030-90
28-28	2.0	2.3	0.35	8.2	〃	〃	SD－8 030-50
28-29	2.3	2.5	0.45	14.5	〃	〃	SD－8 030-77
33-12	2.0	1.4	0.45	4.8	〃	〃	SD－15 002-124
58-1	1.8	2.1	0.45	6.9	〃	〃	30M31-7
58-2	2.3	2.1×2.5	0.5	11.6	〃	〃	30L44-7
	1.85	1.8	0.35	8.7	〃	〃	31M20-24
	1.15	2.0	0.4	9.7	〃	〃	33M23-5

表25　土錘一覧

土錘1類

挿図番号	計測値　（　）…現存部				遺存度	特記事項	遺物番号
	長(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重(g)			
17-2	3.7	0.8	0.3	2.0	完　形	細砂含まず 明褐色、焼成良	SE－1 (001)-括
20-17	3.4	0.6	0.2	1.4	〃	〃	SE－3 (003)-43
20-18	4.0	0.7	0.3	1.5	〃	〃	SE－3 (003)-30L04A
20-19	4.2	0.8	0.3	2.4	〃	〃	SE－3 (003)-105
20-20	4.3	0.8	0.3	2.2	〃	〃	SE－3 (003)-括
20-21	4.4	0.7	0.3	2.6	〃	〃	SE－3 (003)-括
20-22	4.9	0.85	0.3	2.6	〃	〃	SE－3 (003)-括
26-8	4.3	0.8	0.3	2.0	〃	〃	SD－1 (002)-130
28-30	4.3	0.8	0.3	2.0	〃	〃	SD－8 (004)-77
33-10	—	0.9	0.2	—	2／3	〃	SD－15 002-148
33-11	4.3	1.0	0.25	4.2	完　形	〃	SD－15 002-130
34-19	—	0.7	0.25	—	2／3	〃	SD－23 022-147
34-20	3.8	0.8	0.3	2.7	完　形	〃	SD－23 022-158
37-17	(5.5)	1.2	0.35	—	先端欠	〃	SD－31 083-18
46-13	4.3	0.9	0.25	3.8	完　形	〃	SD－43 091-21
46-14	5.0	1.1	0.35	5.1	ほぼ完形	〃	SD－44 092-3

挿図番号	計測値 ( )…現存部				遺存度	特記事項	遺物番号
	長(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重(g)			
58-3	—	0.5	0.15	—	一部欠	細砂含まず 明褐色、焼成良	30L04
58-4	3.4	0.75	0.2	1.7	ほぼ完形	〃	41N43-2
58-5	3.6	0.65	0.25	1.3	完形	〃	29L44-A
58-6	3.9	0.7	0.25	1.3	ほぼ完形	〃	045 (30M31・41)
58-7	4.3	0.8	0.25×1.3	2.3	〃	〃	30L23-D
58-8	4.3	0.95	0.2	3.3	〃	〃	29M42-A
58-9	4.25	1.3	0.3	5.5	〃	〃	29L44-D
	4.35	0.75	0.2	2.0	完形	〃	30L-233
	4.5	0.75	0.25	2.6	〃	〃	30L-24
	(3.8)	0.9	0.3	(2.7)	ほぼ完形	〃	37M-43
	3.55	0.85	0.2	2.3	完形	〃	29M-30
	4.4	0.85	0.25	2.3	〃	〃	ⅢG-116
	3.7	0.7	0.2	1.4	〃	〃	29M-42A
	3.1	0.7	0.2	1.3	〃	〃	29M-40C
	(4.5)	0.9	0.2	(2.8)	ほぼ完形	〃	29M-42A
	(3.25)	0.7	0.25	(1.3)	〃	〃	30M-10
	3.15	0.65	0.25	1.2	〃	〃	29M-40D
	(3.0)	0.9	0.3	—	2/3	〃	41D-40-8
	(3.55)	0.95	0.2	—	〃	〃	29M-B-40
	2.55	0.8	0.25	1.3	ほぼ完形	〃	39M-43-3

土錘2類

挿図番号	計測値 長(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重(g)	遺存度	特記事項	遺物番号
			( )…現存部				
20-23	4.7	2.4	0.7 微細砂多	23.9	完　形		SE－3 (003)-36
37-18	3.8	2.1	0.7	17.0	〃	平滑化	SD－28 081-181
37-19	4.5	2.0	0.5	16.1	〃	〃	SD－28 081-117
37-20	4.0	1.9	0.6	—	〃	表面風化	SD－33 076-50
37-21	4.5	2.0	0.5	16.5	〃	平滑化	SD－38 088-28
37-22	4.3	2.5	0.9	24.3	〃	〃	SD－38 088-29
46-14	4.4	1.8	0.7	12.8	〃		SD－42 102-118
46-16	4.7	2.2	0.7	—	一端欠		SD－42 102-54
58-10	3.9	2.2	0.6	17.5	完　形	両端カット	37N31-7
58-11	4.4	2.0	0.7	13.3	〃	〃	38N43-2
	4.1	2.05	0.6	17.4	〃	器面平滑 微細砂を含む 端部カット	40M14－4
	3.95	1.1	0.6	18.3	〃	器面平滑	37M44－6
	4.6	0.8	0.5	14.0	〃	器面平滑 微細砂を含む	33M40－9
	4.2	0.7×0.8	0.55	14.7	ほぼ完形	器面平滑 微細砂を含む 端部カット	37M40－4
	4.4	1.3	0.55	19.7	完　形	器面平滑 微細砂を含む	34M00－63
	4.9	1.0	0.5	19.9	〃	器面平滑 微細砂を含む 端部カット	37M44－2
	4.6	1.0	0.7	20.6	ほぼ完形	微細砂を含む 凹凸有	30L33－7
	5.3	0.8	0.4	(20.6)	一部欠	器面平滑 微細砂を含む	29L43-44・54
	4.7	1.9	0.6	17.1	完　形	〃	37N32-6
	4.6	2.2×1.9	0.3	18.0	ほぼ完形		30L22－1

土錘3類

挿図番号	計側値 ( )…現存部				遺存度	特記事項	遺物番号
	長(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重(g)			
20-24	6.4	2.9	0.8	56.5	完　形	微細砂多	SE－3 (003)-55
28-31	7.8	2.5	1.0	51.3	〃	指　痕	SD－8 073-115
37-23	(6.5)	(2.3)	0.9	—	一端欠		SD－29 085-15
37-24	7.8	3.0	0.9	63.2	完　形		SD－28 081-112
40-11	7.5	2.3×2.6	1.0×1.1	45.3	〃		SE－5 094-4
46-17	—	2.2	0.75	—	1／2		SD－40 090-13
46-18	—	2.6	1.2	—	一端欠		SD－42 102-184
46-19	7.8	2.7	0.8	55.0	完　形	胎土精選 焼成良好	SD－43 091-41
46-20	8.1	2.3	0.65	—	一端欠		SD－42 102-139
46-21	7.4	2.7	0.8～1.1	52.7	完　形		SX－10 097-20
58-12	4.9	1.9×2.2	0.6	20.3	〃	一端カット	37N30-2
58-13	5.4	1.9×2.1	0.7	17.7	〃	一端カット 2類的	29L42-B
58-14	6.8	1.8×1.9	0.5	25.8	〃	両端カット	38M04-3
58-15	7.7	2.4	0.9	52.0	ほぼ完形		40N10-12
58-16	6.7	2.2×2.75	1.1	38.4	完　形		34M30-18
	6.1	3.2×2.5	0.7	40.8	〃	微細砂を含む	38N20-7
	(6.0)	2.6×2.2	0.8	47.8	ほぼ完形	〃	33M22-34
	6.5	2.7×2.5	0.9	44.7	完　形	〃	38M34-1
	(5.3)	21.5×1.9	0.5	(24.0)	一部欠損	砂細含まず 2類的	40O40-7
	(6.8)	2.9×2.5	0.7	41.9	〃	微細砂を含む	40O10-9

土錘4類

挿図番号	計測値 ( )…現存部				遺存度	特記事項	遺構 遺物番号
	長(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重(g)			
28-32	9.4	3.9	1.3	138.2	完形		SD－8 067-121
37-25	8.3	4.2	1.5	—	1／2		SD－28 081-6
46-22	—	(3.6)	1.1×1.3	—	1／3		SD－43 091-8
46-23	—	(4.6)	1.3	—	1／2		SD－35 089-16
58-17	10.7	4.0×4.3	1.3×1.6	(189.8)	一部欠	太棒状	40N21-24
58-18	—	5.7	1.5～1.6	(233.1)	破片	〃	33L24-3

表26　石製品一覧

挿図番号	器種	計測値（　）…現存部				遺存度	調整	特記事項	遺物番号
		長(cm)	巾(cm)	厚(cm)	重(g)				
49-1	石鏃	(2.3)	1.7	0.3	(0.9)	先端欠	両面加工	凹基 粘板岩	表採
49-2	石鏃	3.6	1.9	0.4	2.0	完形	両面加工	平基 チャート	38M34-7
49-3	石鏃 木製品	—	2.7	0.7	(5.0)	端部欠	一側縁使用痕？ 両面加工	玄武岩	30L-03 (30L224)
49-4	磨石	8.2	6.6	5.7	436.1	完形	両側縁使用 両面敲打痕	安山岩	30L・M (Cトレ)
49-5	磨石	7.7	5.7	2.7	172.2	完形	側縁使用	砂岩	083-4
49-6	砥石	6.4	4.5	2.6	40.6	完形	片面主使用	軟質砂岩	32L34-17
49-7	石皿	(9.2)	(9.3)	5.4	(542.7)	1／4	両面使用 側縁敲打痕	安山岩	102-107
49-8	軽石	3.3	2.8	1.7	(5.2)	一部欠	全面磨滅	軽石	37M44-5
15-14	砥石	7.1	3.9	3.5	91.1	完形	角柱 四面使用・刻み有	凝灰岩	SX－6 003-83・85
58-1	砥石	(7.0)	2.8	2.4	(58.6)	一部欠	角柱 四面使用	凝灰岩	39M24-8
58-2	砥石	8.8	3.0	2.9	75.4	完形	角柱 一面使用	凝灰岩	33M04-5
58-3	砥石	9.6	2.7	3.3	86.4	完形	角柱 三面使用	凝灰岩	41O40-16
58-4	砥石	10.6	2.8	3.3	98.4	完形	角柱 三面使用・敲打痕	凝灰岩	41O30-15
58-5	砥石	(4.2)	(4.9)	(2.3)	(51.9)	破片	両面使用 有溝	砂岩	33M21-4

表27 古 銭 一 覧

A 遺構出土

挿図番号	銭　種	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)	特記事項	遺物番号
20-28	開元通寶	2.9	24.4	19.85	7.7	6.45	1.2	0.81	初鋳年　621	SE－3 (003)-d2
29	景徳元寶	3.1	24.5	20.0	7.4	6.0	1.2	1.07	1004	SE－3 (003)-d2
30	天聖元寶	—	(25.0)	(21.0)	—	—	1.2	0.62	1023	SE－3 (003)-d3
31	皇宋通寶	3.0	24.3	19.9	8.6	7.4	1.1	0.75	1039	SE－3 (003)-d2
32	(至)和通寶	—	—	—	—	—	—	0.64	1054	SE－3 (003)-d4
33	熙寧元寶	2.6	23.35	18.0	7.4	6.45	1.2	0.78	1068	SE－3 (003)-d6
34	元豊通寶	—	—	—	—	—	—	0.74	1078	SE－3 (003)-d5
35	元祐通寶	3.5	24.4	19.3	8.35	6.95	1.4	1.12	1093	SE－3 (003)-d2
36	元符通寶	2.4	23.5	17.9	7.65	6.3	1.2	0.69	1098	SE－3 (003)-121
25-1	寛永通寶	2.7	24.3	20.0	6.8	5.5	1.1	0.89	古寛永　称沓谷銭？	SX－3 039-76
32-26	寛永通寶	3.0	25.4	20.0	7.1	6.0	1.25	0.67	寛文亀戸銭　背文	SD－12 018-119
27	寛永通寶	2.4	24.7	19.3	7.4	6.15	1.2	0.51	延宝亀戸銭	SD－12 018-92
28	寛永通寶	1.3	22.8	18.3	7.9	7.3	0.8	0.84	元禄大坂軽目銭	SD－12 018-101
34-15	常平通寶	7.3	32.2	21.7	10.25	8.1	1.3	0.95	鉄銭　1678	SD－15 002-156

B グリッド出土

挿図番号	銭　種	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)	特記事項	遺物番号
59-1	景徳元寶	3.3	24.65	18.3	7.3	6.2	1.1	0.59	初鋳年　1004	29M42
2	祥符元寶	(1.9)	25.5	18.6	7.5	6.3	1.1	0.69	1008	29M41
3	皇宋通寶	3.3	24.55	19.8	9.0	7.45	1.05	0.98	1039	29M42
4	紹聖元寶	3.2	23.7	18.1	7.4	6.05	1.15	0.86	1094	29M42
5	聖宋元寶	2.6	24.2	18.6	8.0	6.8	1.4	0.95	1101	29M41
6	永楽通寶	2.2	24.8	21.2	7.0	5.8	0.95	0.57	1411	30M02
7	永楽通寶	3.7	24.8	20.8	6.6	5.35	1.4	0.8	1411	29M42
8	寛永通寶	3.9	24.5	20.0	6.8	5.4	1.35	0.77	古寛永　称松本銭	29M42
9	寛永通寶	2.2	23.9	18.3	7.0	5.55	1.05	0.62	古寛永	29M42
10	寛永通寶	2.8	23.8	19.9	7.8	6.4	1.3	0.83	元文十萬坪一匁銭	30M42
11	寛永通寶	2.6	23.0	18.3	9.0	7.025	1.1	0.40	藤沢・吉田島縮字銭	31M21
12	寛永通寶	3.7	25.55	20.3	7.1	5.55	1.4	0.73	寛文亀戸銭	33M30

G＝外縁外径平均値　N＝外縁内径平均値　g＝内部外長平均値
n＝内部内長平均値　T＝外縁厚平均値　t＝文字面厚平均値

表28　銅・鉄製品一覧

挿図番号	器種	計測値			遺存度	調整	特記事項	遺物番号
		長(cm)	巾(cm)	厚(cm)				
23-6	角頭釘	4.3	1.1	0.7	完形			SB－6 (033)ピットd
23-7	釘状鉄製品	4.5	0.6	0.2	完形			SB－6 (033)ピットh
23-8	クサビ状鉄製品	3.9	1.1	1.1	完形			SB－6 (003)ピットh
31-27	キセル雁首	5.3	火皿部 (径) 1.5 (深) 0.9	ラウ部 (外径)1.0 (内径)0.75	完形	ラウ部に8条筋彫り込み	厚み0.1cm	018-11
33-14	タンス引手金具?	4.4	—	(径) 0.65	破片			SD－15 002-176
34-21	鉄釘	—	1.0	0.5	2／3	折頭釘		SD－23 022-132
60-1	〃	3.9	1.4	0.8	完形	クサビ状		33M24-23
60-2	〃	4.7	1.0	0.55	〃			30L22-29
60-3	〃	5.3	0.8	0.6	〃	折頭気味		39N10-1
60-4	〃	5.8	1.1	0.7	〃			33M04-4
60-5	〃	6.4	1.1	0.9	〃	やや折頭		32M32-4
60-6	〃	9.4	1.0	0.45	〃	やや折頭	先端折	33M02-13
60-7	〃	5.8	0.7 頭部〔1.4〕	0.6 〔1.3〕	〃	折頭	ねじれ	33M03-2
60-8	〃	7.4	0.7～1.2 頭部〔1.9〕	0.6～0.9 〔2.0〕	〃	折頭		33M04-15
60-9	〃	8.0	0.7 頭部	2.2 〔0.7〕	〃		基部折	31M21-40
60-10	〃	3.5	0.7 頭部〔1.0〕	0.4 〔0.8〕	〃	平頭		表採
60-11	〃	7.3	1.1 頭部〔2.1〕	0.8 〔1.2〕	〃	平頭		29M40A
60-12	〃	9.0	1.2 頭部〔2.5〕	1.1 〔3.1〕	〃	平頭		32M20-21
60-13	引手	4.1	1.6	1.0	〃	U字断面		表採
60-14	キセル雁首	4.3	1.8	1.6	〃		真鋳製 ラウ部(外)0.9 (内)0.7	42O10-12
60-15	刀子		1.1 ～1.6	0.3 ～0.4	1／2			表採
60-16	短刀	18.6	2.3 基部〔1.9〕	0.6 〔0.8〕	完形			32L34-47

第4節　小　　括

1　縄文時代

縄文時代の遺物は土器と、若干の石器のみである。土器は後期称名寺式の一括遺物が特筆される。中期までの土器は摩滅が激しいものが多く、良好な状態の土器は中期末から後期のものが得られている。分布状況でみると北側30・31列が最も濃密である。31列に加曽利B式、38列には称名寺式、40列には加曽利E式の集中の傾向があり、利根川に近い北側に至るにつれ、時期の新しいものになるようである。

この事実は自然堤防の成立の過程を考える理解できよう。すなわち利根川に近い部分は波うち際であり、常に水の影響を受けて当時のまま状況を保ち得ず、古い遺物もあったとしても残り難かったことが考えられる。しかし後期以降徐々に海退の進行により岸が遠ざかり、恒常的な陸地が形成され、その上に遺跡が残されていく。このような形で低地帯に人々の足跡が記され始めたと推察できる。

2　古墳時代

A　古墳

古墳時代の遺物は埴輪と、供献されたとみられる須恵器である。北端部に出土が集中しており、北西に隣接して存在した前方後円墳である変電所裏古墳からの流入物と考えられる。中近世の井戸跡・溝からも多く出土しており、その時期に既に古墳の改変が実施されていたとみられる。埴輪は6世紀代前半のものである。須恵器は𤮋や提瓶の破片が出土している。田辺編年の第2型式4・5にあたるもので、7世紀前後に位置づけられる(註1)。埴輪とは半世紀ほど時期が下るが、埋葬後の墓前祭祀等に関わるものとすれば矛盾しない。香取地域では低地に古墳が6世紀前半にみられ傾向があり、当遺跡での結果もそれと矛盾しない。第2章で述べたように、かつては遺跡の周囲に仁井宿古墳群と仮称した、数基の小規模な古墳が存在したという。前方後円墳は浅間神社古墳とこの古墳の2基である。浅間神社古墳の規模は全長70m、後円部墳丘径約30mであり、前方部を西にとり、利根川に軸を平行にしている(註2)。変電所裏古墳は明治期に成田線建設のための土取りで消滅したが、地籍図から間接的に判断すると、浅間神社古墳よりも規模は小さくなるが、軸の向きは同方向であると思われる。

B　埴輪

報文中の資料、およびここに図示できなかった破片資料も含めたうえで、当遺跡出土の埴輪について簡単にまとめておく。

まず、埴輪に対して付与できる年代は突帯の形状や、24に見られる朝顔形円筒埴輪のくびれ部の形状からみて、6世紀前半代が考えられる。突帯の形状は図示できなかったものの中に断面三角形のものが少量含まれているが、大多数の破片は図示したもの同様若干ダレ気味の断面形である。また24の朝顔形円筒埴輪にみられるような、比較的しっかりしたくびれ部は6世紀なかば以降のものにはみられないのが通例である。逆に5世紀代にまでさかのぼりうるような要素は、以上の資料中には見当たらない。このようにみてみると、6世紀前半と考えるのはごく妥当である。ただし、それ以上の細かな年代の決定をこれらだけから行うのはいささか無理であろう。

つぎに、これらの資料の系統的位置づけについて少し考えてみたい。過去において轟俊二郎氏が香取郡を下総型円筒埴輪の分布範囲と位置づけて以来(註3)、資料数があまり増えていないためにそこから先に話が進まないのが現状であるが、ここでは下総型以前であるのでそれを前提条件として話しを進める。下総型以前の埴輪の系譜のなかで注目されるのは、香取郡小見川町三之分目大塚山古墳出土埴輪にみられる、基底部からの粘土紐巻き上げ技法の系譜である(註4)。これは、ほぼ同じ時期と考えられる茨城県石岡市舟塚山古墳出土埴輪資料中にも、特徴的にみられる技法である(註5)。それらの資料は野焼き段階のものであるが、当遺跡出土の埴輪の中にもこの技法が見受けられる。先の説明の中でも述べたとおり、底部成形技法は粘土板成形技法と、粘土紐巻き上げ技法の二種が混在している。これは年代的な相違などではなく、あくまでも混在といった現象なのであろうと考えられる。ただし、それが円筒埴輪、朝顔型円筒埴輪、形象埴輪といった器種の違いを反映しているものなのかどうかは、ここでは解決できなかった。

なお、9の口縁部破片は説明中にもあるとおり胎土中に雲母粒を含んでいる。図示資料以外にも雲母粒を含むものはほとんどなく、出土地点が調査区の南端に近いことから考えて、この資料は調査区北西に隣接する前方後円墳のものではなく、調査区南西に隣接する円墳、もしくは周辺の異る古墳のものである可能性が高い。

3　奈良平安時代

A　井戸跡

1区で1基（SE－4）、2区で2基（SE－5、SE－5）検出された。いずれも素掘りで円形プランのものである。SE－4は径2.5m、SE－5、SE－6は径1m強で小型になる。深さは1mである。

SE－4は整地跡SX－6と近接しておりセットになるだろう。集落跡に伴うものとみられる。ここではやや埋まった状態の時に土器が完形のものを含め多量に投棄されていた。井戸の廃絶に際し土器を投棄し、埋めた可能性が高い。ただ出土した土器には8世紀前半から9世紀

後半まで約1世紀半の時期幅があり、理解に苦しむところである。転用されたりして伝世していたものや、古くなり不用になったものが新しいものと一緒に投棄されたとみられる。考古学的な型式の劃期ごとに土器がチェンジされているのではなく、異なる型式のものが同時に使用されていたことも考慮しなければいけないかと思う。

SE－5、SE－6は土壙としてもよい規模であるが形状や深さから井戸とした。周辺には建物関係はみられず、溝や畝跡のみ所在していた。耕作に伴う井戸の性格を考慮したい。SE－5では下位から完形およびほぼ完形の土器4点が一括して出土しており、うち「山」の墨書が3点に認められた。この例は井戸廃絶に際し投棄されたとみてよいだろう。墨書は同一の手になるとみられ、墨が溢れ粗雑な書体である。投棄に際し一括して書かれ置かれたのではないか。「山」の文字には宗教的な意味合いが強いとの指摘がされている(註6)が、当遺跡は香取神宮の膝もとであり、興味の深いところである。

井戸に土器を投棄する例としては、岡山県百間川遺跡で土器が多数埋納されたように集中して出土した例があり、井戸祭祀の可能性が指摘されている(註7)。平城宮などでは人形や人面描かれた甕などが出土することがあり(註8)、明確な形では残らないものの、何らかの井戸にまつわる祭祀が当時には広く行われていたとみられる。現在堀抜きの井戸は減ったが、今も井戸祭祀の習慣は残っている。この地域には「井戸庭」という井戸にちなむ地名もあり、井戸に対する特殊な意識が働いていたと考えられる。

一歩論を進めれば、当遺跡での状況は井戸廃絶に伴う祭祀の存在を示唆するものではないであろうか。近世以降でもやたらに井戸を埋めることはないし、当時も同様であったことは十分考えられる。ここにあげた例が即、井戸廃絶に伴う祭祀の存在を証明するものではないが、今後井戸祭祀のあり方を廃絶の状況を綿密に考慮しつつ進める必要があろう。

B　土師器・須恵器

出土したものは8世紀から9世紀にかけての土師器・須恵器が主体で、なかでも8世紀中頃から9世紀前半頃のものが多い。9世紀のものは1区の井戸（SE－4）と近辺に集中する。3区では8世紀台のみになる。特に井戸（SE－5）出土品は一括土器で、同時存在とみてよい。資料的には二次的な出土状況のものがほとんどで、かつ土器でも器形のわかるものが量的に少なく、この遺跡ではあまり深く論じることはできないと思う。従って、坏を中心に現時点での編年観(註9)にそって分類しながら、出土土器を一覧で示しておく程度でとどめたい（第62図）。

須恵器坏蓋

図示したものは3点である。器高のあるものと低いものがあるが、つまみの形状口縁端部から、8世紀後半の位置づけができよう。

須恵器高台付坏

底部が丸底状になるものと、平坦になるものがある。前者は8世紀前半、後者は8世紀の後半になろう。

須恵器坏

坏1a類　体部下部と底裏がケズリ調整を施すもの。底径が大きく、体部が急激に立ち上がる。器高は低めである。3区の井戸跡・土壙出土の主体である。ケズリには手持ちケズリの他、回転ケズリが混ざる。

坏1b類　調整は同様だが器高が高く、底裏のケズリは一方向になされるもの。底径は1a類よりも小さい。口縁上部での外反気味である。薄手のものがめだつ。

坏2類　底面ヘラ切り痕を残すもの。暗褐灰色で白色礫を含む胎土が特徴的である。ヘラ記号を残す例がある。8世紀後半の時期であろうが異質である。

坏3類　SK－14〔4〕、グリッド〔11〕のもの。口縁に対して底径が小さくなるもので、薄手である。底裏、体部下半にケズリが入る。9世紀前半のものとみられる。

土師器坏蓋

点数は少なく、完形品もない。赤彩されているのが特徴である。

土師器坏

坏1類　非ロクロ系杯で体部ヘラケズリ調整の施され、内面ヘラミガキの施されているもの。器形をうかがえるものは6点であった。大半は8世紀代に入ると思われる。底面が平坦に成形されるものは9世紀まで下ろうか。

坏2a類　ロクロ成形で、箱型を呈し底裏のみに手持ちケズリの施されるもの。偏平で底部径が広い。かつ底面が球状に膨らみを有する。

坏2b類　ロクロ成形で、箱型を呈し体部下端と底裏に手持ちケズリの施されるもの。3区の井戸跡や土壙での出土が顕著である。2類はSE－5での須恵器1a類との供伴が確認されている。赤彩土器が多く、その率は図示したものでは3割になる。時期は8世紀中頃になろう。

坏3類　ロクロ成形で、箱型を呈し、底面に回転ヘラケズリ痕を残しているもの。体部下端にケズリの入るものもある。点数は少ない。煤状の付着物が顕著なものがめだつ。8世紀後半に位置づけられよう。

坏4類　ロクロ成形で底面手持ちケズリになる。口径に比して底径が小さい特徴がある。SE－4で集中して出土した。球形に近い体部が特徴的である。SE－5〔17〕は内黒である。時期的には9世紀前半以降のものになろう。同〔18〕の坏は底径も大きく前代の器形に近く、8世紀末になろうか。SX－6のものは口縁上部が外反し、新しい様相をみせており、9世紀後半の可能性がある。

坏5類　ロクロ成形で底面回転糸切り痕が残されているもの。4類と同様に口径に比して底径

が小さい。点数はわずかである。SE－4〔15〕には底部と体部との稜にケズリ調整が加えられている。4類と同時期とみられる。

土師器高台付坏

小型で高台の低いもので8世紀の中頃以降のもの、内黒で球状の体部と高い高台を有し、9世紀後半以降になるものがある。

須恵器で特徴的なことは円面硯・台付き盤等の、普通の集落跡では特殊な土器が出土している点である。転用硯も4点ほど出土がみられ、これらは「大家」の墨書土器とともにその性格が注目される。体部を欠き、高台端や底裏がすり減っており、擦る用具として用いられたとみられるものが14点ある。このような道具を用いるような作業を行う場が存在した可能性がある。

器形面での分類に加え、須恵器は胎土・色調・焼成面でも以下のように、いくつかに分類できそうである。

a　雲母粒を多量に含み、軽い土質で白っぽい色調のもの。

b　石英・長石粒を含み灰色～青灰色を呈するもの。焼成は堅緻。
　胎土中の鉄分が器面に溶出したとみられる黒斑を伴う場合がある。
　非常に多量の石英・長石粒が含まれているものも若干あり、細分できようか。

c　暗褐灰色を呈し、石英・長石粒を含む重量感のあるもの。杯2類にあたる。

d　胎土は明るい灰色ないし褐灰色を呈し、緻密で非常に焼きのよい類。
　黒班が顕著である。

aの雲母を含む類については茨城県新治郡新治村内の窯の可能性が指摘されている(註10)。b・cも混和材の供給先を考慮すると、産地は筑波山等の花崗岩産地をかかえる茨城県地方である可能性が高い。地理的にも佐原地域とは霞ヶ浦沿いに直通できる位置にあり、須恵器の供給に至便である。

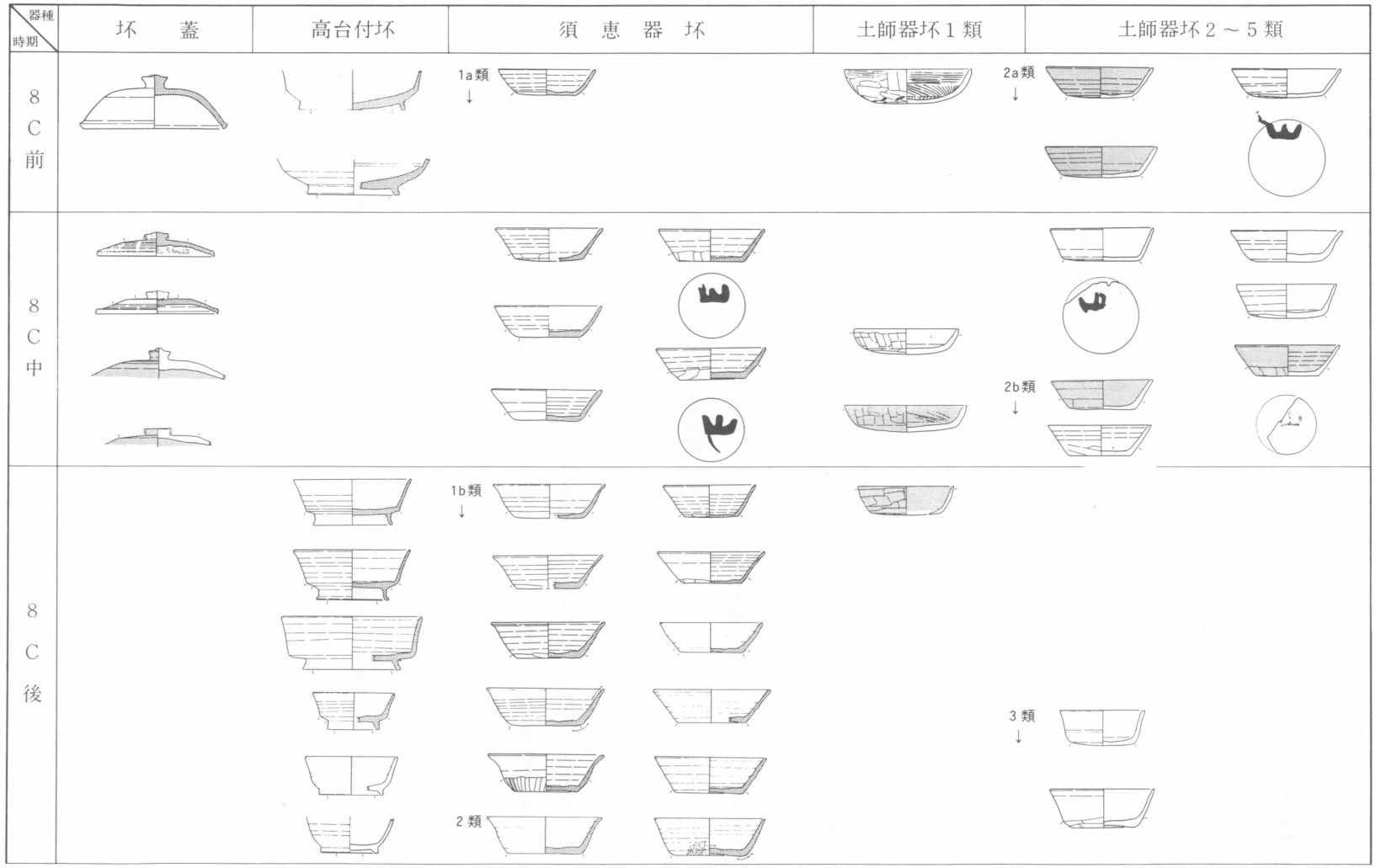
dは長頸壺や蓋でみられるもので、東海系と思われるが量は僅かである。

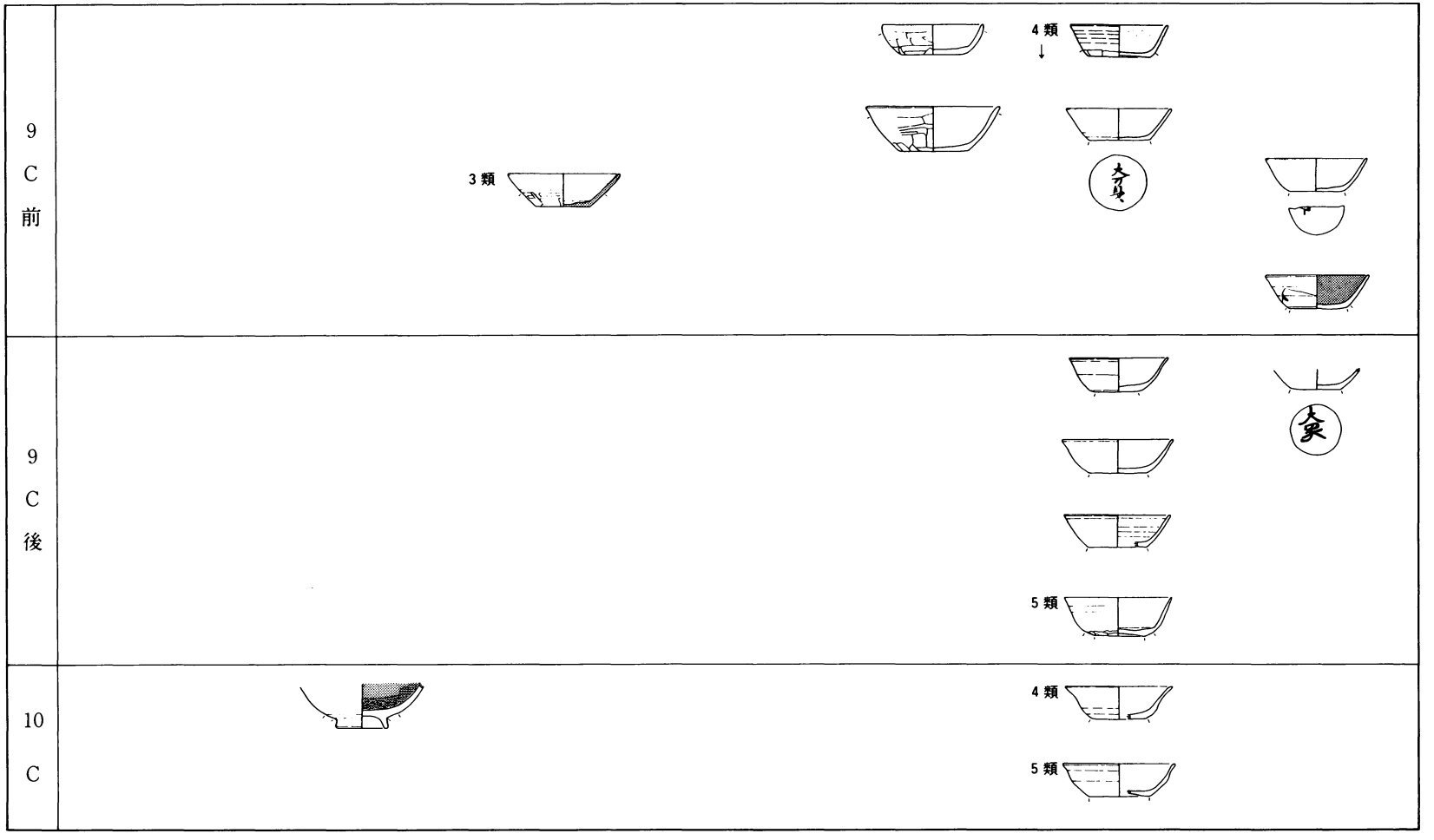
これらの差異は時期差、産地の差を示すものであろうが、外見的な判断では確実な事はいえない。まだまだ発見されていない須恵窯が存在するであろうし、鉱物的な分析を加え、今後成果を積み重ねていく必要があろう。

C　墨書土器

墨書土器は15点出土した。量的には少ないが、井戸等から一括出土しているものがあり注目される。

1区の井戸跡SE－4では「大冢」、「大万具」と書かれた坏が出土している。「大冢」は「大家」の異体字である。佐原市吉原三王遺跡では「仲家」が主体だが「大家」もみられる(註11)。


器種
時期
坏　蓋
高台付坏
須　恵　器　坏
土師器坏１類
土師器坏２～５類
8C前
8C中
8C後
1a類
2a類
2b類
1b類
2類
3類



第61図　奈良平安時代土器一覧

八日市場市柳台遺跡でも「大家」の墨書があるとの指摘がある(註12)。「大家」は官庁・役所の意味をもつ語であり、当遺跡の位置からすると香取郡衙や香取神宮との関係が想定される。しかし類例の増加や、周辺での遺跡の実態が明らかにならなければ結論はだせない。

「大万具」は「大万」は量の多いことを示し、「具」は物・道具という意味かととれる(註13)。仏教関係の語のようだが、縁起をかつぐ吉祥文字の可能性もある。書体は非常に整って達筆で、熟練度の高い書き手によるものと推察される。同時に3区の33Mでは「佐」の書かれた坏が2点出土した。「佐」は官位に関連した字で次官を意味する。東金市山田水呑遺跡で出土が顕著である(註14)。はたして当地佐原の地名と関連があるか興味深い。

3区では「山」の墨書が7点出土した。いずれも、裏面に太く粗い字で書かれている。井戸跡のところで述べたように井戸祭祀にかかわるとみられるものがある。「山」は「寺」と同義語でもあり、この地域での寺との関わりが注目されるところである。山の墨書の例は八千代市村上遺跡(註15)や東金市山田水呑遺跡、多古町吹入台遺跡(註16)での出土例など多くみられるが、共通した意味があるのか、検討を要する。

4　中近世以降

A　遺構

掘立柱建物跡

同一地点に密集して6群検出された。時期的な幅はあまりなかろう。個所を同じくして多数の柱列が存在するのは、掘立柱が短期間しかもたないために、建て替えが多かったからであろう。配置状況からみて、L字の溝（SD－8）は建物の予想される範囲を巡っており、柱列に伴うとみてよかろう。西側のL字溝も同種の区画溝になるか。

出土遺物は少ないが、菊花文の鉢は17世紀初頭に位置づけられるものである。井戸SE－3が両溝のちょうど中間に配置されており、その状況から判断してほぼ同時期に伴った井戸であったとみられる。本体及び周辺の出土遺物に有田の染付磁器、寛永通寶の存在しないことからみて、17世紀中葉までの時期になろう。遺構及び周辺出土遺物をみると、古手のものは蔵骨器に用いられたような13世紀のものである。日常的な陶器では15世紀室町期のものからみうけられ、16世紀大窯の陶器が主体的にみられる。伝世を考慮すると室町時代16世紀頃の上限を考えたい。平碗や天目茶碗の存在は飲茶の習慣をもつ富裕層の屋敷跡であるか、後述の井戸の性格からみて墓地や寺との関わりが予想されるところである寺院跡の可能性も考えられる。

井戸跡

3基の検出になる。SE－1は溝SD－1とセットになるような位置にある。SE－2は溝SD－1と接しており、磁器が出土しているので近世後半のもので溝よりは新しくなるであろう。SE－3は大型で擦り鉢状をなし、土留めの杭列を有しており、カワラケ・石塔・土鍋等が一括して

覆土下位から出土した。杭列は階段状の足場を意図したものであろう。遺物は井戸廃絶に伴い、投棄されたものとみられる。「薬師」や梵字の墨書の施されたカワラケ、蔵骨器とみられる青白磁瓶子、石塔が出土していることから、近接して墓地か寺院関係の遺構の存在が予想される。なお削平された古墳の部分は現在は墓地となっており、五輪塔が多数残されている。

道路跡

この街道跡は銚子へ向かう「銚子街道」で、明治期に南側に新道（旧国道＝現在は市道）ができてからは脇道になってしまったが、古来主要街道であったものである(註17)。

街道跡は少なくとも4時期が確認できる。第1期は地山面に溝状の痕跡SD－14の残された面で、出土遺物が奈良平安期のものであり、使用開始年代がそれで推察できる。溝状痕跡の上部には常滑の鉢・甕等の破片が出土し、北側の建物跡の時期の16・17世紀にも道路があったとみられるが、後代の溝（SD－12・SD－15）に切られて判別できない。これを第2期とする。第3期は道に平行して両側に側溝SD－12、SD－15が掘られ、道路面に砂の盛られて下層の硬化面が形成さる時期である。出土した古寛永や磁器の年代から、18世紀の開始年代が与えられるが、北側溝SD－12の遺物には19世紀に入る陶器もあり、下限がそのあたりにおけようか。第4期は南側に側溝SD－15を有し、砂が盛り上げられ上面が硬化している時期であり、北側溝は埋没している。溝SD－15の出土遺物自体は19世紀のものを主体に、18世紀中葉以降の磁器から現代のものも多数認められ、最近まで溝自体は使用されていたとみられる。道路はさらに最上層として、近現代の面が現地表面で南に側溝を伴ってのっている。

街道跡に直角に接続するSD－18、SD－19、SD－20、ならびにそれらと南端でL字に接続しSD－23の北に沿うSD－22の溝は、道路に関連すると思われる。遺物は奈良平安時代が主体だが、SD－18、SD－22、SD－23には近世前半の遺物が多く含まれており、溝使用の下限が推察される。

溝状遺構

近世遺構の主体と思われるもの。1区の北側のように道路、建物跡に伴うものもあるが、丈量図を検討すると、地割りに関係するものが多いと思われる。条理に関係しそうなものもみうけられる。いかんせん20m幅の部分的な調査であり、復元には制約が多い。

溝自体、本来附属遺物を伴うことがまれな遺構であり、遺物は大半が二次的に投棄あるいは流入して出土しており、時期的なことは遺物からは明言することは危険である。しかしあえて出土遺物面で検討すると近世遺物の包含のしかたで以下の4類に分けられる。少なくともそれらの遺物が地表にあった時には埋まっていなかった可能性が大で、その使用終了時期を推定する手がかりとはなりそうである。

a　出土遺物が奈良平安の遺物のみのもの。奈良平安期に所属する可能性高い。

1区　20、24

2区　28、29、38、

3区　39、43、44、52、53、60

b　カワラケ等の16・17世紀遺物がみられるもの。中世末から近世初頭に埋没したと思われる。

1区　1～3、6～11、13、23

2区　33

3区　40、41

c　中近世遺物を含むもののカワラケ・磁器は含まないもの。近世前半期の可能性高い。

1区　4、18、19、22

2区　31、34～37

3区　42、62

d　磁器等の18世紀以降の遺物を含むもの。近世後半の以降まで使用されていたとみられる。

1区　12、15

2区　37

3区　42

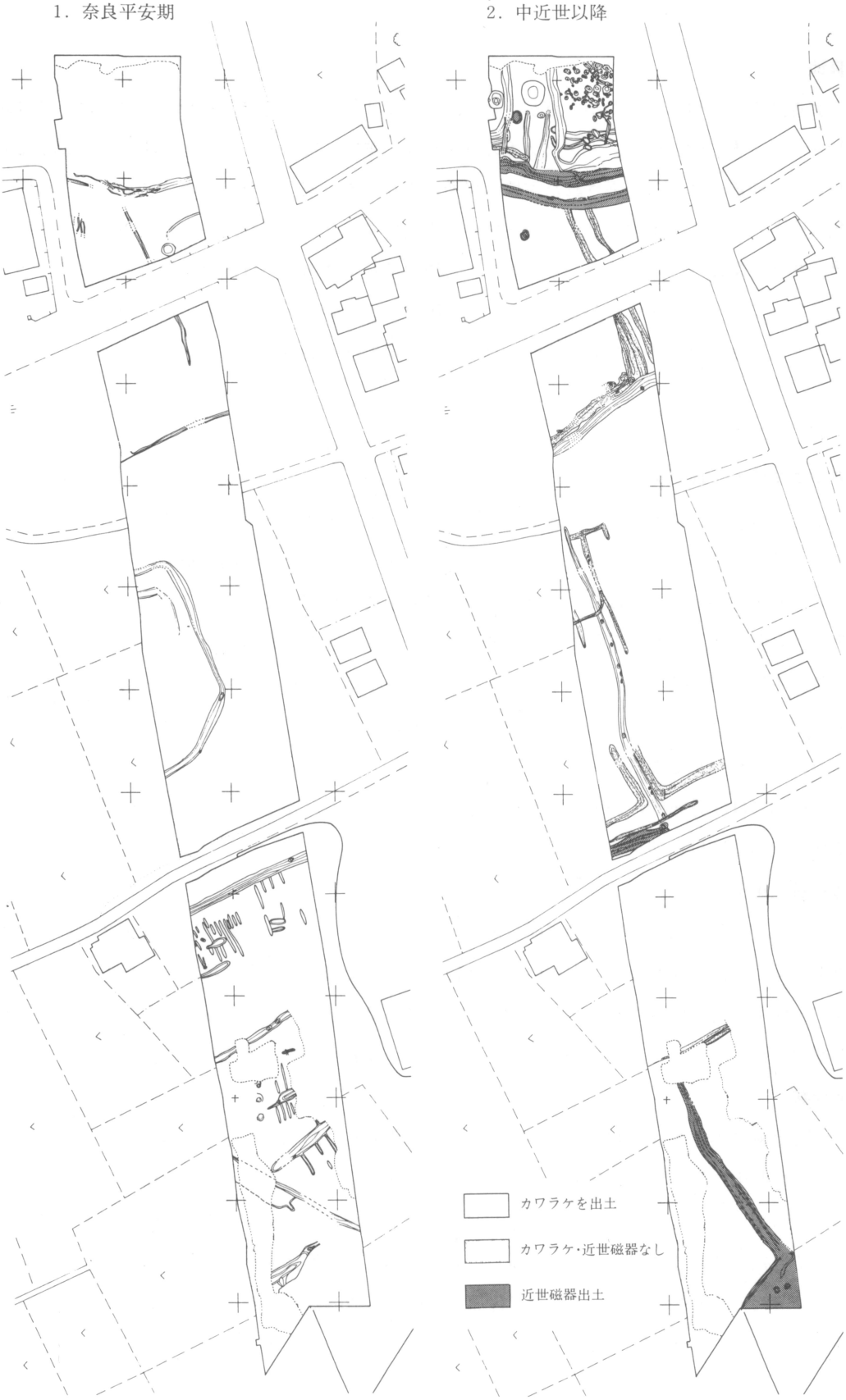
SD－24、SD－38、SD－39、SD－43•44、SD－60は方向性が一致し、かつ土師器のみを出土する溝で、条里との関連も可能性としてあろう(註18)。方位、間隔は以下のとおりである。

表29　条里的な溝の方位と距離

溝No.	SD－24	SD－38	SD－39	SD43・44	SD－60
方位	N－65.5°－E	N－65°－E	N－58.5°－E	N－51°－E	N－62.5°－E
距離（m）	←85.0→	←27.3→	←22.5→	←18.3→	

SD－24とSD－38は方位がほぼ一致している。SD－24とSD－39の間隔は112.3mで1町に近い。SD－43・44とSD－60の間隔は1町の6分の1ほどになっている。

なおIII区南端部では水田部に溝SD－42、62が連なっている。本来奈良平安時代にも水田が存在したであろうが、近世以降の水田跡と完全に重複しており区別はできなかった。そのため水田跡としての調査は行わなかった。また畝跡とみられる並列する細溝が検出されたが、当センターの近年の調査でもいくつか事例がでてきている。時期的な把握は本遺跡では困難であった。



第62図　出土遺物の時期別遺構配置図（1/1,250）

墓地

調査区内では検出できなかったが、墓の存在を示すものとしては、遺物として石塔、蔵骨器とみられる青白磁の瓶子、カワラケ等の灯明具類、華瓶、接着して出土した宋銭・古寛永などがある。前述のように削平された古墳の場所が現在「奥主家」の墓地となっており、五輪塔が多数残されている。奥主家は江戸時代仁井宿の名主をつとめる家格であった。隣合う掘立柱の建物跡との関連が気になるところである。古墳の墳丘本体あるいは周囲が中近世に墓地として利用されていたことがうかがわれる。なお原田亨二氏の御教示によると、墳丘から経石が出土したということで、塚としての機能も有していた可能性もあろう。

B　遺物

カワラケ皿・小皿（第63図）

中近世遺物の主体となるもので、図示したものは小皿主体に60点。土鍋片につぎ点数が多く中近世焼き物全体の約2割を占める。大きさを考慮すればかなりの出土率である。素焼きの土器で径6cm～13cm、高さは2～3cm、偏平で底面糸切り無調整である。3割ほどにスス跡がみられ、灯明具として用いられたことが推察される。厚い底部、高台付きのものも若干みられる。通常、中世の遺跡ではカワラケ小皿の出土率が高さが指摘される。灯明具は日常的に用いられ、消耗度も激しく使い捨てられることあ多いと思われる。墓地が近接しており、そこで使用されたものも多かったであろう。

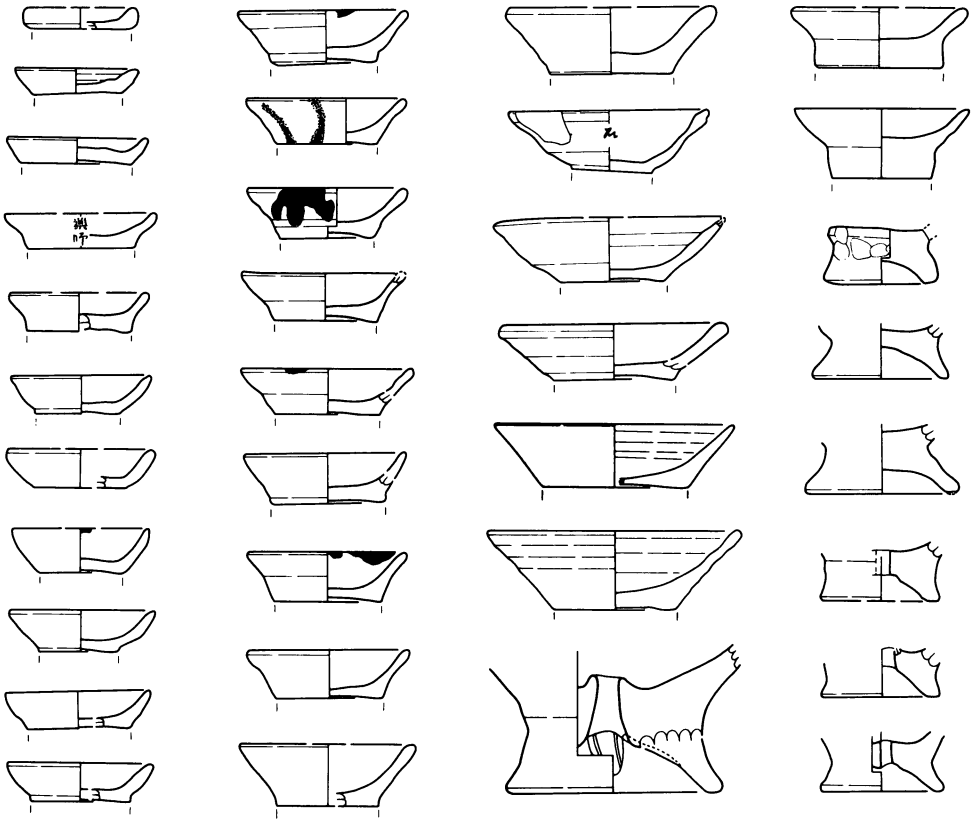
時期的には、分布的に29・30列の1区北側に集中がみられることから、陶器の様相を考慮して16世紀から17世紀前半までの時期があてられよう。

有孔台（第63図）

高台状をなし、底の中央に焼成前に垂直の孔が穿たれている土師質土器。大小2種があり、小型のものは高台径6cm強、大きいものは12cmほどになる。中心孔に棒状の器具を挿し込んで立て、使用したと推定される。祭祀具あるいは灯明具の台でもあろうか。同様のものは佐原市七部山遺跡(註19)、吉原三王遺跡で出土している。いずれも後者の大型のものである。

土鍋類

内耳土鍋は出土率は最も高く5割方を占める。普遍的にあり、かつ大個体になるからだろう。一般的に胎土に雲母粒を含む深型品で浅いバケツ状を呈し、内面に一対の双環耳を有している。SD－19で出土した18（混入と思われる）だけは浅型であり、豆等を炒るホウロクになる。民具としても残っており、19世紀以降の新しいものであろう。外耳釜が2点出土しているが、この形態は関西に一般的にみられる形で、佐原市吉原三王遺跡にも類例がある。器形的に鋳鉄製の茶釜に類似しており、飲茶具に関連するとみたい。



第63図　カワラケ等一覧（1/4）

陶磁器

古いものでは13世紀のものからある。古手のものはSE－3等で出土した中国製青白磁梅瓶（13世紀）、SD－23（8）の青磁盤（14世紀）、グリッド（1）の青磁碗（15世紀）で、日本のものではSD－28（9）の瓷器系の鉢（12世紀後）である。古瀬戸はSE－3（14）（14・15世紀）・SD－23（10）の瓶子、SE－3（15）の三足盤（15世紀前）、擦り鉢ではSE－2（6）（15世紀前）になる。

16•17世紀では陶器は出土量の1.5割方である。16世紀大窯の時期のものはグリッド（9）の丸碗、同（11・12）の平碗、SD－8（19）・グリッド（14）の志野皿、SD－33（11）折縁皿、SD－12（1）の大鉢等がある。天目茶碗もこの時期に属するものが多いとみられる。常滑の鉢や甕は15世紀後半から16世紀前半のものになろう。

17世紀以降の登り窯の時期、瀬戸でいうところの本業焼のものはSD－28（13）、SD－33（12）、グリッド（15）の鉄絵皿、グリッド（16）の皿、掘立柱建物跡の溝SD－9（5）の輪花鉢がある。SD－8（20）等、鉄錆釉の擦り鉢、SD－15（3）の香炉、SD－9（9）の灰釉徳利もこの時期以降である。

18世紀以降には、有田焼がかなりを占めてきており、陶器の比率は減ってしまう。磁器で古手はSD－12やSD－15で出土している「くらわんか手」の茶碗で、18世紀前半のものである。出土品には総じて18世紀後半以降19世紀に入る新しい時期のものが多い。瀬戸・美濃の陶器では、SD－12の灯明皿、京焼風といわれるSD－12鉄絵の碗（6）や鉢（8）、グリッド（18）の腰錆茶碗等がその時期にあたる。なおSD－15（1）の瀬戸・美濃産の鉄錆釉擦鉢、備前風のSD－15（11）の焼き締めの擦り鉢は、19世紀中葉以降のものとみられるが掲載した。

この他にも陶器はかなりの種類が出土しているが、小破片で分類不能のもの多く、近世後半には在地産のものも出現しており、その様相が解明されていないので不明な点が多い。SE－12をはじめグリッドでも、幕末以降現在近くまで続きそうな陶磁器もあったが、それらについては割愛した。

土錘・土玉

全体で110点の出土をみた。錘に用いられたものと推測される。この他、陶製のものが1点出土している。ここでは分類可能であるものについて分析を試みる。

土玉　球状を呈し中軸に孔を有する。17点の出土。
径1.4～3.0cm、重さ4.8～24.2g。
平均で径2.1cm、重さ9.3gになる。
偏差は少ない。細砂を含む。

土錘1類　長さ3.4～5.0cm、径0.5～1.3cmの細管状を呈する。36点出土。
重さ1.2～5.5g。
平均では長さ4.0cm、径0.8cm、重さ2.4g。孔径は0.25cm前後。
胎土には精選され、砂を含まないことが特徴。焼成がよい。

土錘2類　断面が切り子玉状に、先端が細く中間が太くなる管状をなし、
長算盤玉状と称した類。20点を数える。
長さ3.8～5.3cm、径1cm前後と2cm前後のものの2種がみられる。
重さは13～24g。
平均での長さ4.4cm、径1.7cm、重さ17.7g。孔径は0.6cmほど。
焼成は良好で堅緻である。

土錘3類　管状で中型のもの。20点あり。2類よりも長い。
径1.9～3.0cm、長さ4.9～8.1cm、重さ17.7～63g。
平均の長さ6.9cm、径2.5cm、重さ43.6g。内径は0.8cmほど。
2類的で孔径0.5～0.7cmと小さいものと、孔径0.7cm以上、重さ40g以上の
大きいものの2種に分かれる。

焼成は3類に準ずる。

土錘4類　大型の管状土錘。6点と少ない。細砂を目立って含む。

完形のものが少なくデータに乏しい。径は4cm強、長さ10cm程度、

内径1.4cm前後になるか。重さはグリッド（32）が138gである。

土玉は土師器遺構SX－3から出土しており、奈良平安期のものであろう。土錘1類は中近世の遺構群中に分布の密度が濃く、その時期のものか思われる。2類は土師器出土する溝で出土する傾向があり、3類はSE－5の井戸中で奈良平安期の土器と供伴しいる。2・3類とも奈良平安期の所産の可能性が高いとみられる。

補　註

（註1）田辺昭三「須恵器大成」1981

（註2）原田享二「佐原市仁井宿浅間神社古墳－低地古墳群の成立をめぐって－」香取民衆史4　香取歴史研究者協議会　1985

（註3）轟俊二郎「埴輪研究」第1冊　1973

（註4）車崎正彦「常陸舟塚山古墳の埴輪」古代　59・60合併号　1976

（註5）平野　功他「小見川町三之分目大塚山古墳発掘調査報告書」小見川町教育委員会　1987

（註6）浜名徳永「出土墨書の集成と考察」「山田水呑遺跡」上総の国山辺郡山口郷推定遺跡の発掘調査報告書　1977

（註7）中野雅美他「百間川沢田遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59　1985

（註8）平城宮跡

（註9）史館同人「シンポジウム資料　房総における奈良・平安の土器」　1983

原田享二「佐原市上の台遺跡（旧香取郡）」房総における歴史時代土器の研究　房総歴史考古学研究会　1987

（註10）萩原恭一「千葉市小仲台（2）遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡」千葉県文化財センター調査報告第160集　1989

（註11）栗田則久「旧香取郡出土の墨書土器」古代　第83号　1987

動坂遺跡調査会「文京区・動坂遺跡」1978

（註12）長内美枝子「油作第2遺跡の墨書土器について」「平賀」平賀遺跡調査会　1986

（註13）石田三成の旗印に「大万」の文字がある。同じ意味か。

（註14）註3文献

（註15）天野　努他「八千代市村上遺跡群」千葉県都市公社　1974

（註16）三浦和信「多古町吹入台遺跡」多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書　(財)千葉県文化財センター　1986

（註17）岩澤和夫・石井保満他「銚子街道」千葉県歴史の道調査報告書3　千葉県教育委員会　1987

(註18) 大谷弘幸　笹生　衛「関東地方の条理」考古学ジャーナル310　1988

(註19) 小松　繁他「佐原市長部山遺跡」長部山遺跡調査会　1980

その他の参考文献

㈶東京都埋蔵文化財センター「多摩ニュータウン遺跡　昭和60年度」東京都埋蔵文化財センター調査報告　第8集　1987

旧芝離宮庭園調査団「旧芝離宮庭園」1988

楢崎彰一　美濃の古陶」1976

赤羽一郎　「常滑焼－中世窯の様相－」考古学ライブラリー231984

西田泰民　「出土陶磁器に探る食文化」江戸遺跡研究会第1回大会「江戸の食文化」発表要江旨　1988

辻　真人　「ホウロクの変遷」江戸遺跡研究会第1回大会「江戸の食文化」発表要江旨　1988

仲野泰祐　「江戸時代中•後期の瀬戸窯－研究の現状と今後の視点－」江戸遺跡情報連絡会会報№10　1987

馬場誠二「近世の釘－その形態と経済－」　江戸遺跡情報連絡会会報№11　1988

鈴木裕子・渡辺ますみ「東京大学校内遺跡（仮称グラウンド地区）出土の江戸時代前期の土器」江戸遺跡研究会会報№17　1989

五島美術館「江戸のやきもの」図録　五島美術館展覧会図録　№104

堀越正雄　「井戸と水道の話」　1981

佐賀県立九州陶磁文化館「北海道から沖縄まで国内出土の肥前磁器」　1984

小川　望「近世土器研究の現段階－「江戸在地系土器」について－」貝塚43　物質文化研究会　1989

中村端隆他「梵字事典」雄山閣　1977

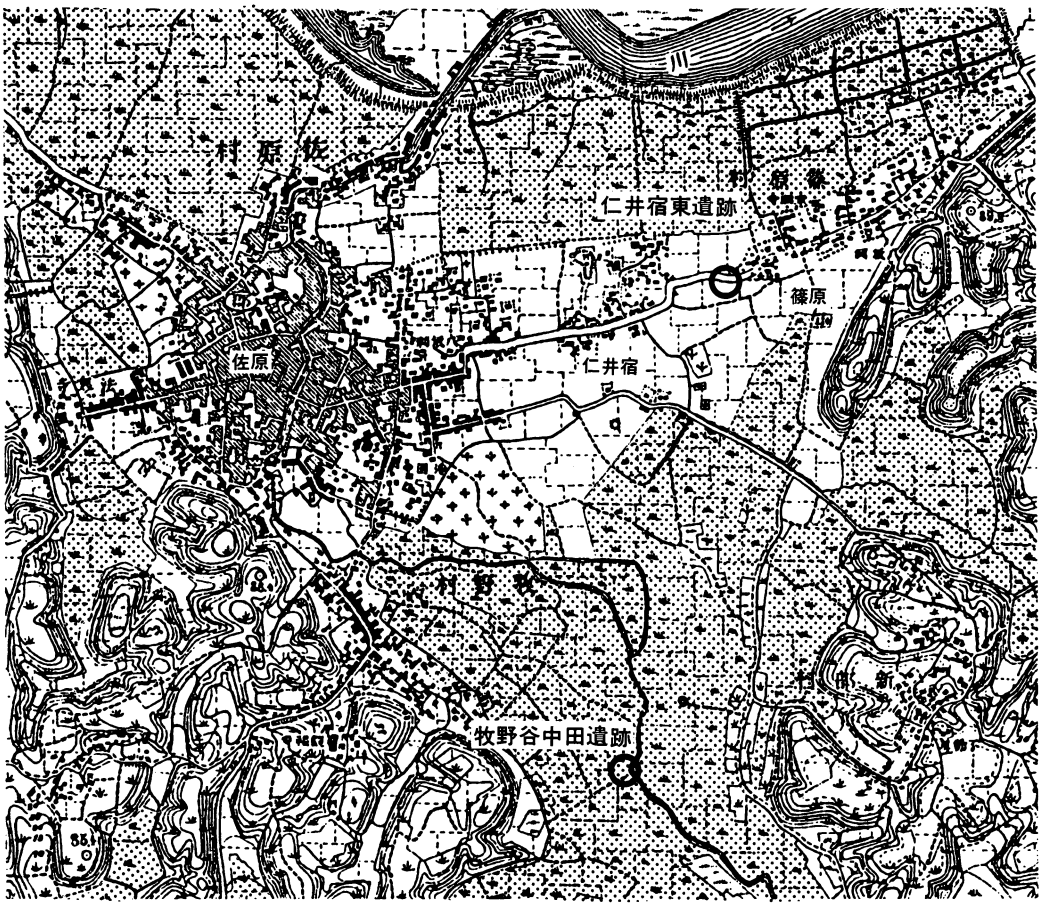
第５章　牧野谷中田遺跡の調査

第１節　遺跡と調査の概要

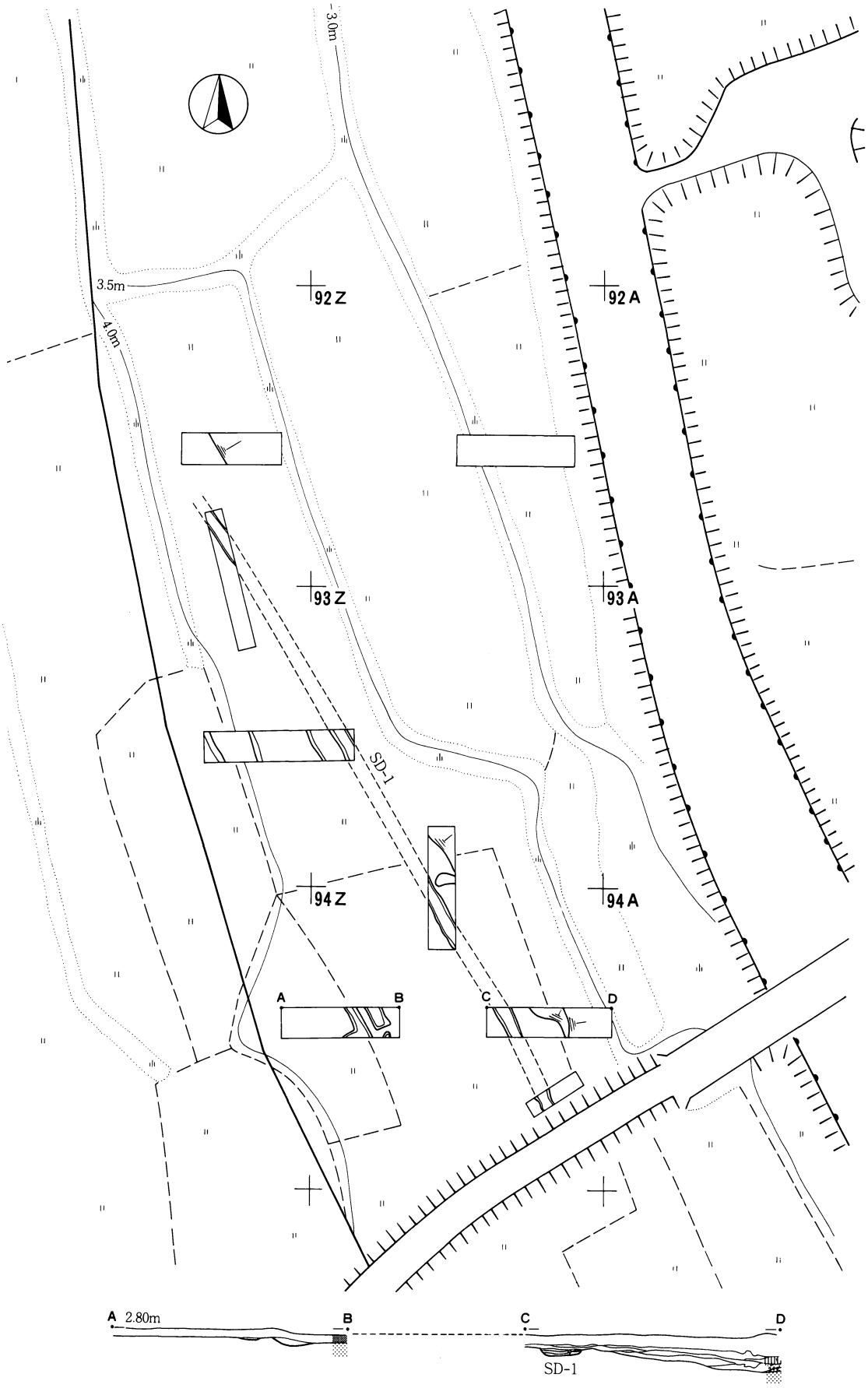
牧野谷中田遺跡は、小野川下流域西岸の牧野台地の東側に拡がる微高地上に位置する（第64図)。遺跡地図によれば古墳時代の遺物包蔵地である。調査範囲は小野川の現河道の西岸、92Y区から94Y･94Z区新部橋際にかけて、距離60mにわたる区間にあり、遺跡全体の範囲の東限になる。

確認調査では小野川に沿って細溝を検出し少量の遺物を得たが、地山面がほぼ全面にわたり削平を受けている上、他には遺構も検出されなかったので、サブトレンチを追加設定し溝の状況を確認するにとどめ、本調査には至らなかった。

層序は基盤が成田層近似の砂層で、川に接近するにつれ低くなっている。上部の土層は標高



第64図　水田の分布状況と旧河川（迅速図 1/20,000）



第65図　調査区、遺構平面図（平面図1/400 断面図1/200）

の高い部分では、直接耕作土になるが、川沿いでは耕作土下に上部に黒色土、ついで沖積層の黒褐色砂質土、最下層にグライ化し灰色を呈した砂質土がみられ、湿地堆積を示している。

第2節　遺構と遺物

SD－1　038－119（第65図、図版46）

唯一検出された確実な遺構で、92Y43区から94Z34区にかけて、N－31°－Wの方向で直線的にのびる溝である。幅0.8m、深さ0.25mの「U」字溝である。確認した範囲での長さは約46mにおよぶ。地山の砂層を切り込んで壁、床を構成している。覆土は上部に灰褐色砂、下部に黒灰褐色砂ないし黒褐色砂がみられる。溝の半ばまで堆積していた後に土砂が急激に流れ込み埋まったと推定される。遺物は覆土上面と床面近くに集中がみられた。

出土遺物（第66図、図版45、表29）

1はLRの縄文が施された底部で、底面から急な外傾で胴部へ立ち上がっている。甕ないし壺の器形になるものと思われる。部分的に撚糸文もみられており、原体が付加条縄文の可能性もある。弥生土器であろう。2は外面に縦ヘラミガキの施される甕等の胴部である。古墳時代前期和泉式とみられる。いずれも床面に密着して出土したもの。3は半截竹管の沈線がみられるもので、頸部から胴上部にかけての文様帯の一部であろう。6は胴部片で1同様の縄文が施文されている。

1・2の土器の出土状況からみて、当溝は古墳時代に属するとみてよかろう。

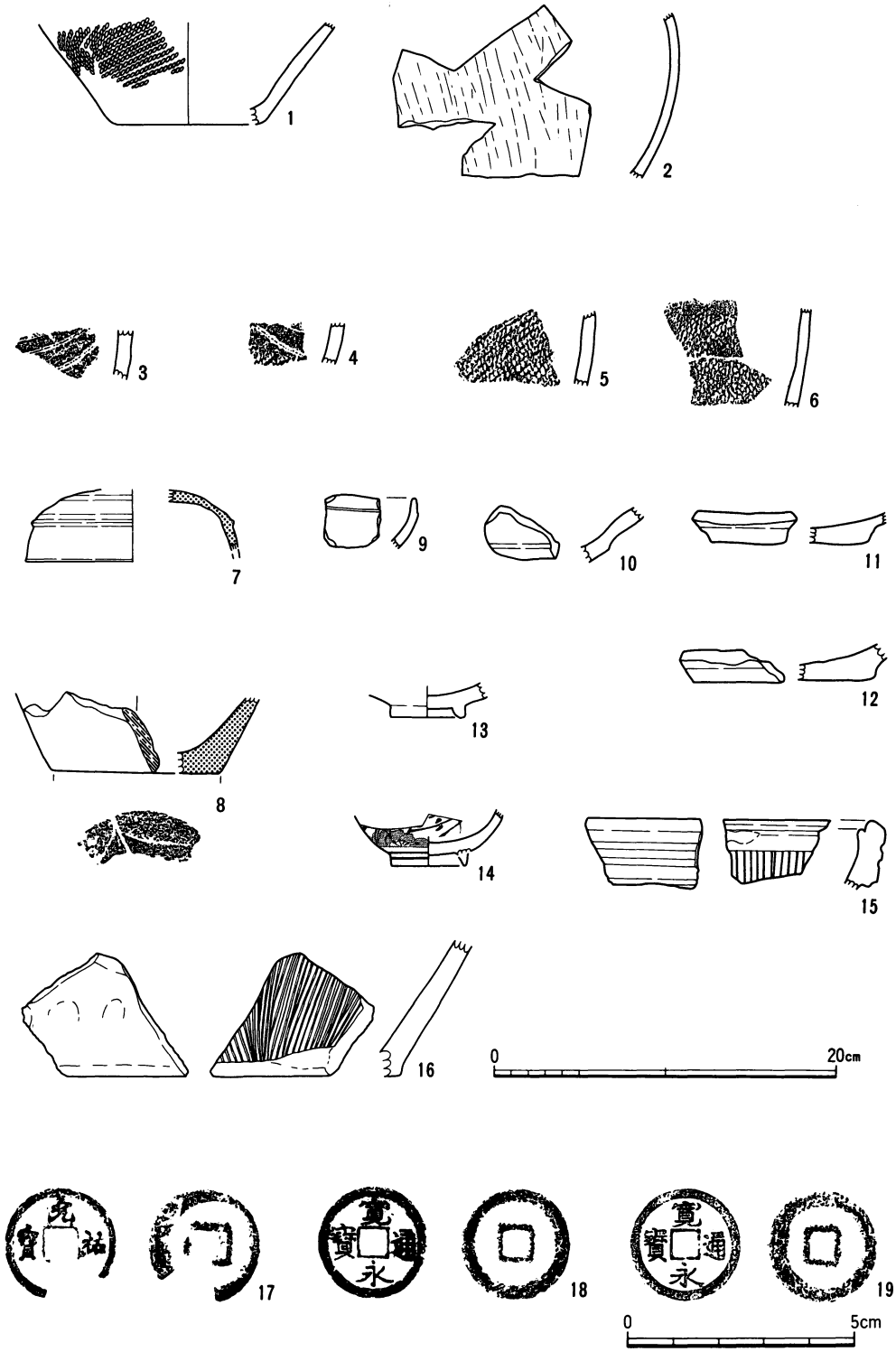
グリッド出土の遺物（第65図、図版45、表29）

94Z23区の溝SD－1の東側には、地山直上からSD－1覆土上部にかけて、溝出土のものと同一個体と思われる弥生土器の細片が50点ほど出土した。4・5はその一部であり、SD－1出土1・6に接合するものもある。4は半截竹管の沈線が施されており、下部には縄文もみられる。5は縄文が施されている。

7は須恵器坏の蓋で、丸みを帯びた天井部をなし、口縁との境に稜を形成する。口縁は膨らみ気味に若干外傾している。口縁端部はくぼみながら内傾し、段をなしている。陶邑TK10あたりの産で田辺編年　期の始めごろ、古墳時代6世紀中ごろのもとみられる。

8は須恵器甕の底部片で、断面の一部が摩滅が顕著で、砥石として転用されたものとみられる。外面には横方向のヘラケズリが施されている。底裏には木葉痕が残されている。

9～12は古墳時代前期の土師器である。9は口縁上端に沈線が廻らされ、以下体部がヘラケズリされている。10は高坏の体部と口縁部との境の稜部分で、内黒でヘラミガキを受けている。11・12は甕の底部で、底板が下方へ突き出す形状をなしている。底裏にはヘラケズリ痕が残されている。



第66図　出土遺物

13は灰釉の施された碗で、瀬戸・美濃産である。14は花木文の施される染付磁器碗である。15は備前風の焼き締め摺鉢で、タガ状の縁帯をなす。内面上端には隆帯が設けられ、下位に密接して櫛書き沈線が施されている。19世紀のものとされる。16は無釉の摺鉢下半部で、密に櫛書きの条線がみられる。外面は凹凸がめだつ。常滑の産であろう。

17から19は古銭である。17は北宋銭で「元祐通寶」であろう。18・19は古寛永になる。

表30　土器

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
1	弥生土器 甕　？	— — 9.0	底部1/2	LR　？	細砂多	SD-1 119-1 94Z23-7・8・31・34・39
2	土師器 甕	— — —	胴部片	外：タテミガキ		SD-1 119-4・5・6
3	弥生土器 甕　？	— — —	胴部片	半裁竹管沈線		SD-1 119-2
4	〃 甕　？	— — —	胴部片	半裁竹管沈線 LR　？		94A20-1
5	〃 甕　？	— — —	胴部片	LR　？		94Z23-30
6	〃 甕　？	— — —	胴部片	LR　？		94Z23-34 119-1
7	須恵器 坏蓋	径 12.5 高　4.3	1/4	ロクロ成形 天井部ケズリ	青灰色 長石粒混	94Z23-3・32 94Z24-5
8	〃 甕	— — 9.8	底部片	外：ヨコケズリ 底：木葉痕	断面磨滅 砥石に転用 微細砂多	94Z-24
9	土師器 坏	— — —	口縁片	外上端：沈線 外下：ケズリ	内外：黒色	92Y31-1
10	〃 高坏	— — —	体部片	内：ミガキ	内：黒色	93Y23-1
11	〃 甕	— — —	底部片	底裏ケズリ		94Z23-29
12	〃 甕	— — —	底部片	底裏ケズリ		94Z24-17

番号	器種	法量（cm） 口径 高さ 底径〔高台径〕	遺存度	成形・調整	特記事項	遺物番号
13	陶器 碗	— — 〔4.4〕	高台部	ロクロ成形 ケズリ高台	胎土：乳灰色 灰釉・貫入	94Y24-1
14	〃 碗	— — 〔4.5〕	底部	ロクロ成形 呉須染付 全面施釉		94A20-1
15	〃 擂鉢	— — —	口縁片	ロクロナデ	胎土：褐色 長石、暗褐・黄褐色ブロック混	93Z23-1
16	〃 擂鉢	— — —	体下部		灰褐色 石英、長石粒多	93Y24-1

表31　古　銭

挿図番号	銭　種	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)	特記事項	遺物番号
13	元祐通寶	1.9	25.2	21.15	8.25	6.5	1.4	0.84	初鋳年　1093	209-038 94Z-34.2
14	寛永通寶	3.3	24.7	19.75	7.2	5.6	1.2	0.55	古寛永　称松本銭 正足宝内跳寛	209-038 93Y-23.2
15	寛永通寶	3.0	24.6	20.2	7.0	5.4	1.05	0.51	古寛永　称松本銭太細 14と接着	209-038 93Y-23.2

G＝外縁外径平均値　N＝外縁内径平均値　g＝内部外長平均値
n＝内部内長平均値　T＝外縁厚平均値　t＝文字面厚平均値

第6章　結　　語

仁井宿東遺跡は標高4 mほどの利根川自然堤防上に立地する遺跡である。遺物は縄文時代以降のものが出土し、遺構としては奈良平安時代以降のものから検出された。調査区の南端部には遺跡認定の根拠ともなった古墳が隣接して存在したが、結果的には対象区域にはかからず、出土遺物として埴輪・須恵器を得たのみである。

検出された遺構は奈良平安時代のものが井戸跡3基、整地跡2ヶ所、中近世のものは井戸跡3基、掘立柱建物跡2群、土壙6基、整地跡2基、街道跡1条、貝ブロック1個所などである。この他、溝62条、畝跡2個所、土壙11基、整地跡2ヶ所があった。

奈良平安時代の遺構は南端と北端に二分されるが、遺物は調査区のほぼ全面に分布していた。結果、この微高地上に広い範囲で遺物が分布し、規模の大きい遺跡になることが予想される。役所に関連しそうな土器の出土、井戸にまつわる祭祀とみらえる例が検出できたことが特筆される。中近世では遺構は北端部、旧街道沿いに集中をみせており、特徴として大量の遺物が投棄された井戸や、溝と整地跡を伴う建物跡、佐原から津ノ宮を経て銚子に至る旧街道跡が検出されたことがあげられる。また墓地との関連を示す遺物の出土が顕著であった。

牧野谷中田遺跡は牧野の台地から東に連なる微高地上の遺跡で、今回の調査地点は東縁部、小野川べりにあたる。弥生土器や古墳時代土器を中心にした遺物が出土し、古墳時代の溝1条が検出された。周辺には古代条里制のなごりのような地割りもみられるので、今後の調査の折には、注意しなければならない。

今回の調査が佐原低地における初の集落遺跡発掘調査の例であり、さらに縄文時代からの先人の足跡が残されていることが明らかになった。このことは佐原市における文献資料の空白を埋める上で、また今後の調査の指針となる上でも意義が大きかったと思われる。

付章　仁井宿東遺跡出土材同定結果

1　試料

試料は№1～31の31点である。№1～9は江戸時代（？）の溝とされるＳＤ－８号跡の底部から検出された加工材や流木など、№10～31は中世末～江戸時代の井戸とされるＳＥ－３号跡から検出された土止め杭と板である（表　1）。

2　方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版48～50）も作成した。

3　結果

試料は遺物の表面から採取されたもののようで、劣化が進んでいるうえに量が少なく、確実な同定のできないものも多かったが、29点が以下の10種類（Taxa）に同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質はつぎのようなものである。なお、（　）のついた試料番号は同定の不確実なもの（類似種）を表している。これらは、劣化の進んでいない部分で再検討する必要がある。

・イヌガヤ（*Cephalotaxus harringtonia*）　イヌガヤ科　№22.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが、樹脂道はない。放射仮道管はなく、分野壁孔はヒノキ型（Cupressoid）～トウヒ型（Piceoid）で１～２個。放射組織は単列、１～10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

イヌガヤは、本州（岩手県以南）・四国・九州に分布する常緑小高木～低木で、時に植栽される。なお、北海道西部・本州の主として日本海側・四国の一部には、匍匐性の変種ハイイヌガヤ（*C. harringtonia* var. *nana*）が分布する。イヌガヤの材はやや重硬で、器具、旋作材などに用いられる。種子は搾油（燈用）された。

・マツ属（複維管束亜属）の一種［*Pinus*（subgen. *Diploxylon*）sp.］　マツ科　№9.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められ、分野壁孔は窓状。放射組織は単列、１～15細胞高。

複維管束亜属（いわゆる二葉松類）には、アカマツ（*Pinus densiflora*）、クロマツ（*P.*

thunbergii)、リュウキュウマツ（*P. luchuensis*）の3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

・ヒノキ属の一種（*Chamaecyparis* sp.）　ヒノキ科　№2、4、(5)、(6)、31.

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属にはヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）とサワラ（*C. pisifera*）の2種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易，強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種［*Quercus*　(subgen. *Lepidobalanus* sect.*Prinus*) sp.］　ブナ科　№8.

環孔材で孔圏材は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状及び短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループでモンゴリナラ（*Quercus mongolica*）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* var. *grosseserrata*）、コナラ（*Q. serrata*）、ナラガシワ（*Q. aliena*）、カシワ（*Q. dentata*）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹後地方以北）にミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち関東地方平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20*m* になる高木で古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られる。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・シイノキ属の一種（*Castanopsis* sp.）　ブナ科　№21,24,29.

環孔材～放射孔材で管径を漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。柔組織

は周囲状、散在状および短接線状。年輪界は明瞭。

シイノキ属には、ツブラジイ(コジイ)(*Castanopsis cuspidata*)とその変種スダジイ(*C. cuspidata* var. *sieboldii*)がある。カシ類とともに、暖温帯常緑広葉樹林の主要構成種である。ツブラジイは本州(伊豆半島以西南)・四国・九州に、スダジイは本州(福島・新潟県以南)・四国・九州・琉球に分布し、また植栽される高木である。一般には、スダジイが沿海地、ツブラジイが内陸地に生育する。材はやや重硬で、割裂性は大きく、加工はやや容易、耐朽性は中程度〜低い。材質的にはツブラジイがスダジイより劣るものとされている。薪炭材としての用途が最も多く、器具・家具・建築材などにも用いられる。種子は食用となり、樹皮はタンニン原料となる。

・クスノキ科の一種(Lauraceae sp.)　No.19.

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独または2〜3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性II型、1〜3細胞幅、1〜20細胞高。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

クスノキ科の材は解剖学的には互によく似ており、大型の油細胞をもつクスノキ(*Cinnamomum camphora*)やタブノキ(*Machilus thunbergii*)などのほかは区別がむずかしい。

・サクラ属の一種(*Prunus* sp.)　バラ科　No.14、(15)、(17)、(23)、(25)、(27)、(28).

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独または2〜8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III〜II型、1〜5細胞幅、1〜30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや不明瞭。類似種としたものは、いずれも道管内壁にらせん肥厚が認められない。これは劣化によるものと判断したが、本来の形質であるならば、別種となる。

サクラ属には、ヤマザクラ(*Prunus jamasakura*)やウワミズザクラ(*P. grayana*)など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ(*P. persica*)やスモモ(*P. salicina*)など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木〜低木であるが、バクチノキ(*P. zippeliana*)、リンボク(*P. spinulosa*)の常緑樹も含まれる。このうちヤマザクラは、本州(宮城・新潟県以南)・四国・九州の山野に分布する落葉高木で、材は中程度〜やや重硬・強靭で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。また樹皮は樺皮細工に用いられる。

・ニシキギ属類似種(cf. *Euonymus* sp.)　ニシキギ科　No.18.

散孔材で、横断面では多角形、単独および2〜3個が複合、単穿孔をもつ。内壁にはらせん肥厚のようなものがあるが十分確認できない。放射組織は同性〜異性III型、単列、1〜20細胞高。年輪界はやや不明瞭。

ニシシギ属には、ニシキギ(*Euonymus alatus*)、マサキ(*E. japonicus*)、マユミ(*E. sieboldianus*)

など約15種が自生する。落葉または常緑性の高木または低木ときに藤本で、属としては全土に分布し、また植栽される。丸木弓・小器具・旋作材などの用途がある。

・ヤブツバキ（*Camellia japonica*）　ツバキ科　№7，10,11,13,26,30.

散孔材で横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段（bar）の数は10～20。放射組織は異性II～I型、1～2(3)細胞幅、1～20細胞高であるが時に上下に連結する。柔細胞は時は結晶を含む。年輪界はやや不明瞭。

ヤブツバキは、本州・四国・九州・琉球の主として沿海地に自生する。ツバキ属には、ヤブツバキと四国・九州・琉球の山地に自生するサザンカ（*C. sasanqua*）があり、ともに多くの変・品種があり植栽される。ヤブツバキの材は重硬・強靭で割れにくく、加工はやや困難、耐朽性は高い。器具・旋作・機械・薪炭材などに用いられる。種子からは油が搾られ、頭髪・食用・機械・燈・薬などに利用される。またサポニン原料ともなり魚毒・農薬として用いられた。木灰は媒染剤ともなる。

・ヒサカキ（*Eurya japonica*）　ツバキ科　№12,16.

散孔材で横断面では多角形、単独または2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段数は30前後、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性II型、1～4細胞幅、1～50細胞高。柔組織は散在状。年輪界と不明瞭。

ヒサカキは、本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州・琉球に自生する常緑小高木～低木で、暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の下木として普通である。多くの変・品種があり、各地で生け垣などに植栽される。材の強度はサカキよりやや劣り、薪炭材として一般的であり、小細工物・器具材としても用いられる。枝葉は玉串として用いられるほか、その灰汁は媒染剤となる。また果実は染料となる。

以上の同定結果を用途などとともに一覧表で示す（表　32）。

4　考察

試料の多くは杭や流木など、遺構のごく近くに生育する樹林から採取したと考えられるものである。そして、その中にはヤブツバキやヒサカキ・シイノキ属・クスノキ科など暖温帯常緑広葉樹林を代表するTaxaが多く認められる。また、サクラ属やコナラ節の落葉広葉樹や、ヒノキ属・複維管束亜属・イヌガヤの針葉樹も常緑広葉樹林中に生育している樹種または樹種を含むTaxaである。こうしたことから、当時の遺構周辺には、現在（ただし、人間による大規模な土地改変の行われる前）の下総台地とほぼ同様の森林植生があったものと考える。

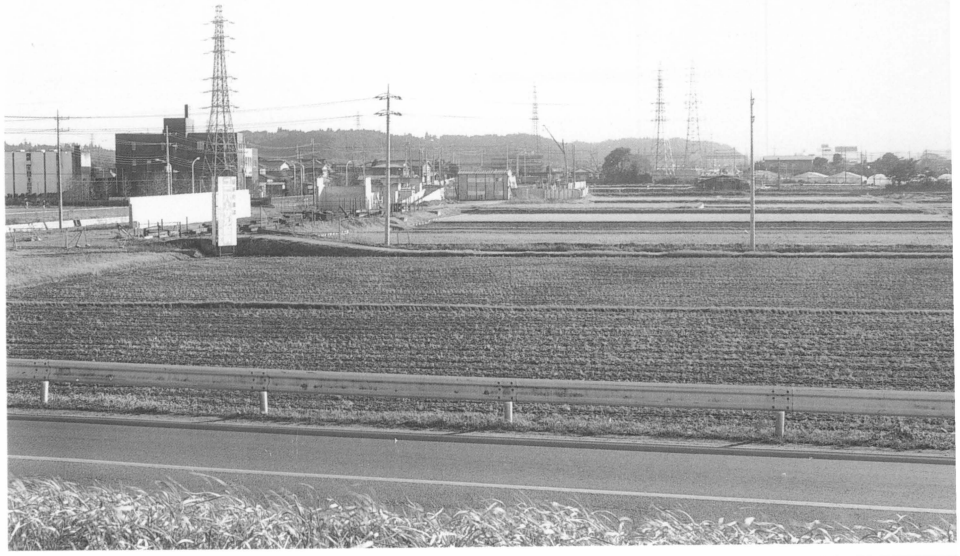
表32　樹種同定資料一覧

試料番号	遺跡	遺物番号	用途	種　　名
1		28	板	針葉樹
2	SD-8	30	角　材	ヒノキ属の一種
3		35	角材？	コナラ属（アカガシ亜属）の一種
4		52	板	ヒノキ属の一種
5		54	叉状品	ヒノキ属類似種
6	038	61	穿孔板	ヒノキ属類似種
7	−073	38	杭　？	ヤブツバキ
8		49	流　木	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
9		60	流　木	マツ属（複維管束亜属）の一種
10		138	杭	ヤブツバキ
11		148	杭	ヤブツバキ
12		150	杭	ヒサカキ
13	SE-3	171	杭	ヤブツバキ
14		146	杭	サクラ属の一種
15		154	杭	サクラ属類似種
16		173	杭	ヒサカキ
17		182	杭	サクラ属類似種
18		136	杭	ニシキギ属類似種
19		164	杭	クスノキ科の一種
20		168	杭	広葉樹（散孔材）
21		128	杭	シイノキ属の一種
22	033	131	杭	イヌガヤ
23	−003	139	杭	サクラ属類似種
24		161	杭	シイノキ属の一種
25		172	杭	サクラ属類似種
26		176	杭	ヤブツバキ
27		130	杭	サクラ属類似種
28		147	杭	サクラ属類似種
29		152	杭	シイノキ属の一種
30		157	杭	ヤブツバキ
31			板	ヒノキ属の一種

写　真　図　版

遺跡周辺航空写真

国道から



県立病院から
北をのぞむ

県立病院から
南をのぞむ

仁井宿東遺跡遠景

第１次本調査区
（東から）
SB-1～6

第２次本調査区
（北から）

市道北際

SE-4
遺物出土状況

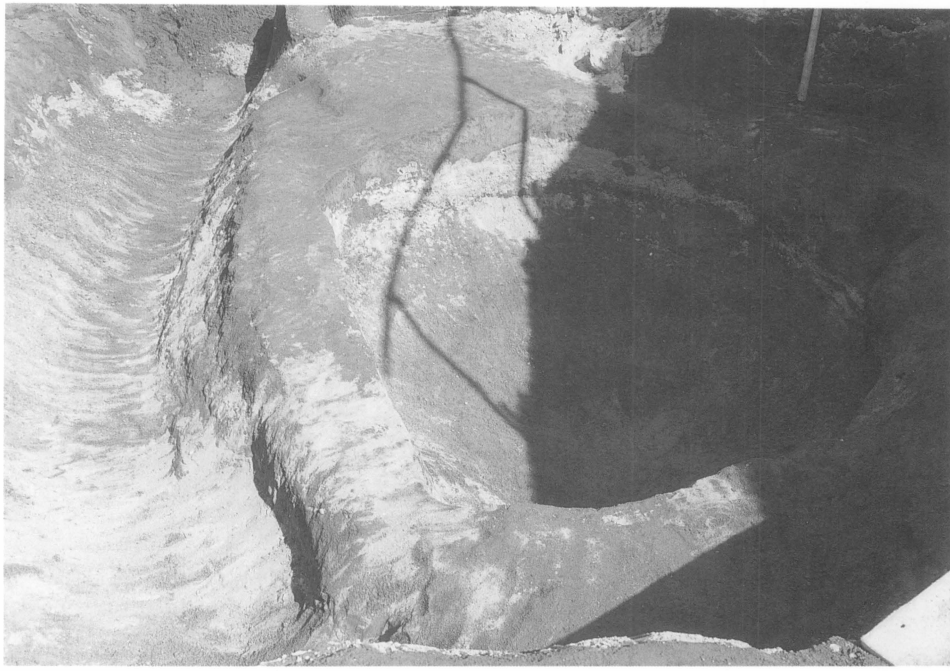
SE-4 全景

SE-4、SX-6
と溝

SE-4、SX-6

SE-1 と溝

SE-1 全景



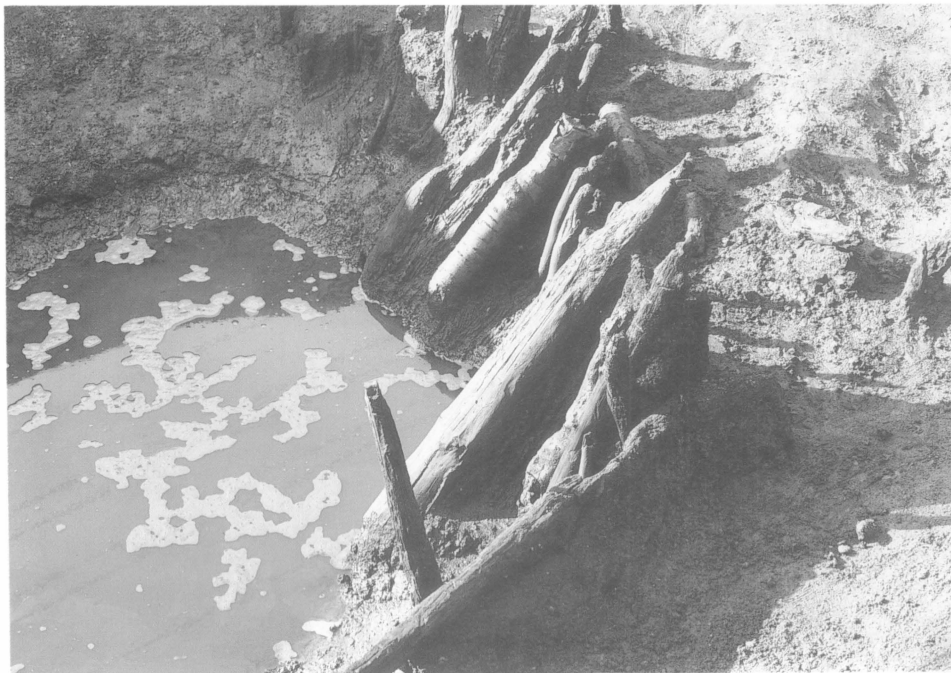
SE-2 全景

SE-1、SE-2

全景

遺物出土状況
（北側）

杭列



SE-3

SX-3（道路跡）と溝

SD-9（ワダチ状）
SD-8・12

土壙群

Ⅰ区道路跡・土壙・整地跡

全景

木製品出土状況

SD-8

市道南側
遺構群

SD-18～20・23

試掘坑

SD-18～24
試掘坑

溝群
（北から）

溝群
（南から）

SD-33～37

II区遺構群

全景
（北から）

全景
（南から）

南半部
（北から）

SE-5 全景

SE-6 全景

SK-14 全景・
遺物出土状況

SE-5、SE-6
SK-14

SD-42・62
SX-12（整地跡）

SD-52・42
SX-10（整地跡）

SD-60

III区溝

SE-4 出土遺物(1)

20

21

22

12

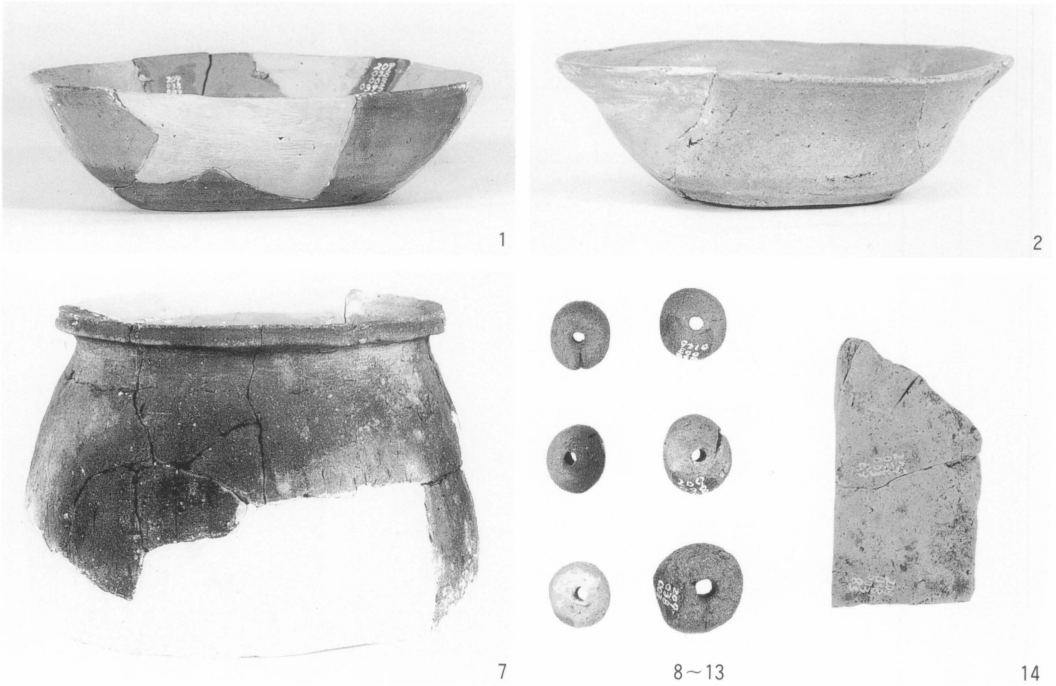
27

29

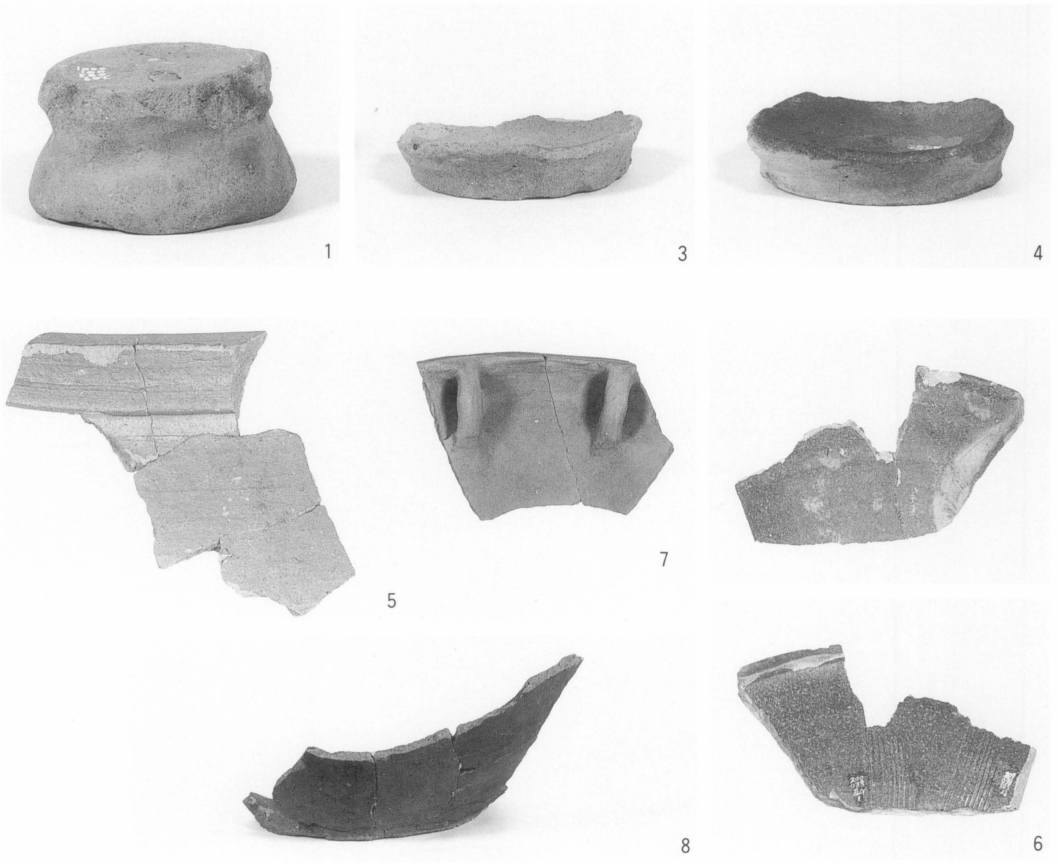
「大万具」　18 墨書

「大冢」　21 墨書

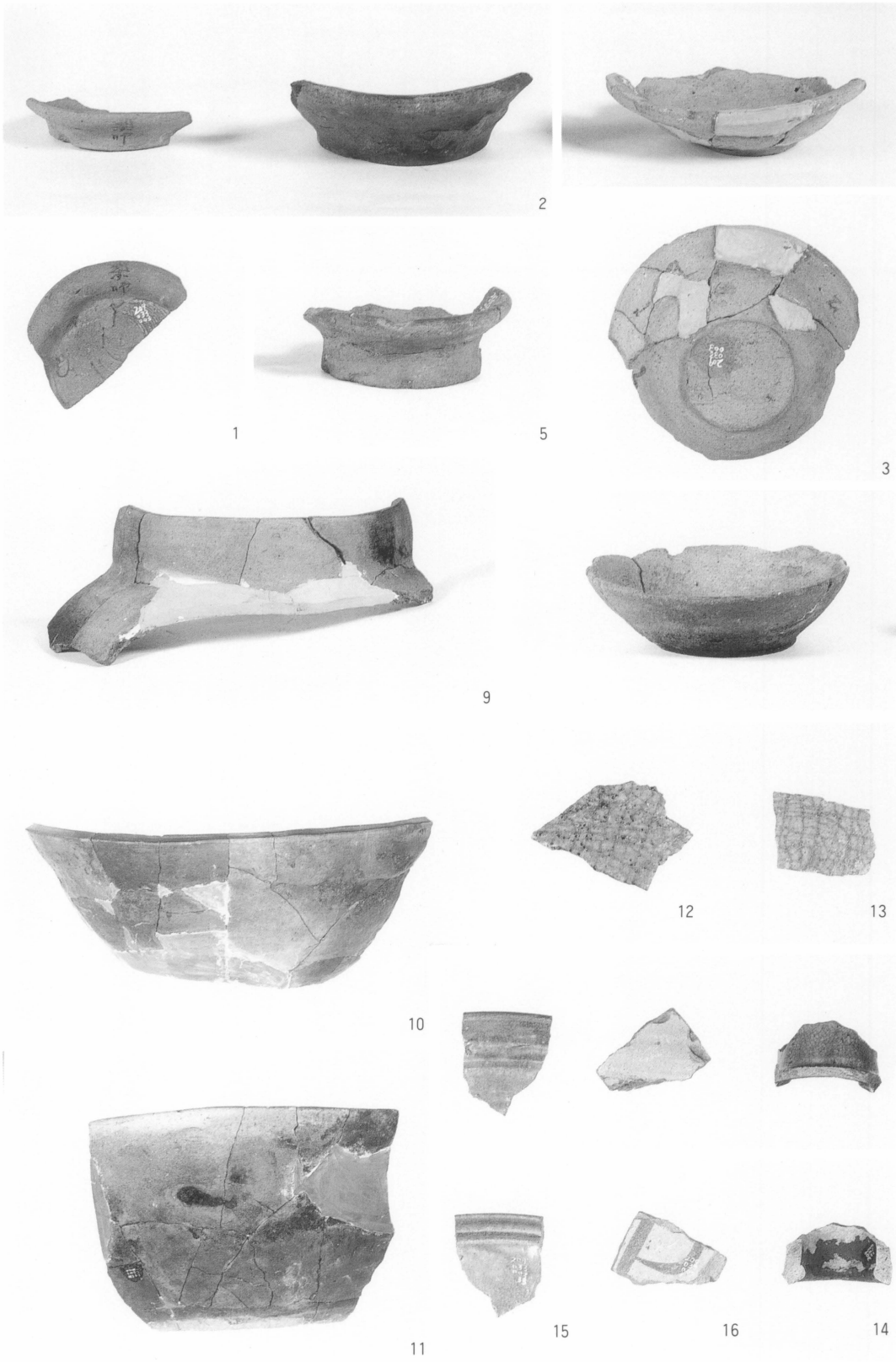
SE-4 出土遺物(2)



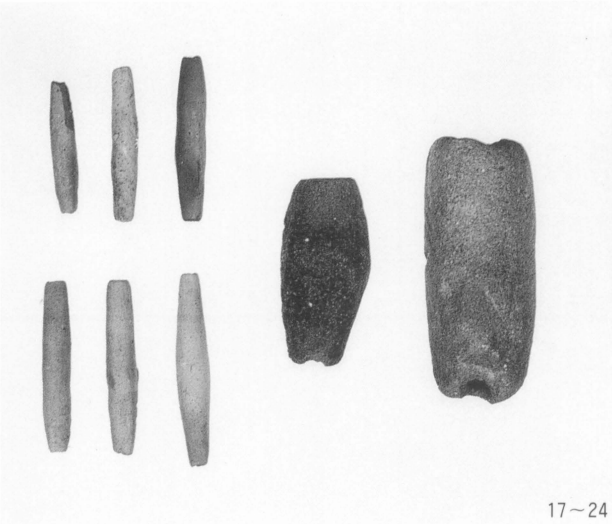
SX-6 出土遺物



SE-1、SE-2 出土遺物



SE-3 出土遺物(1)

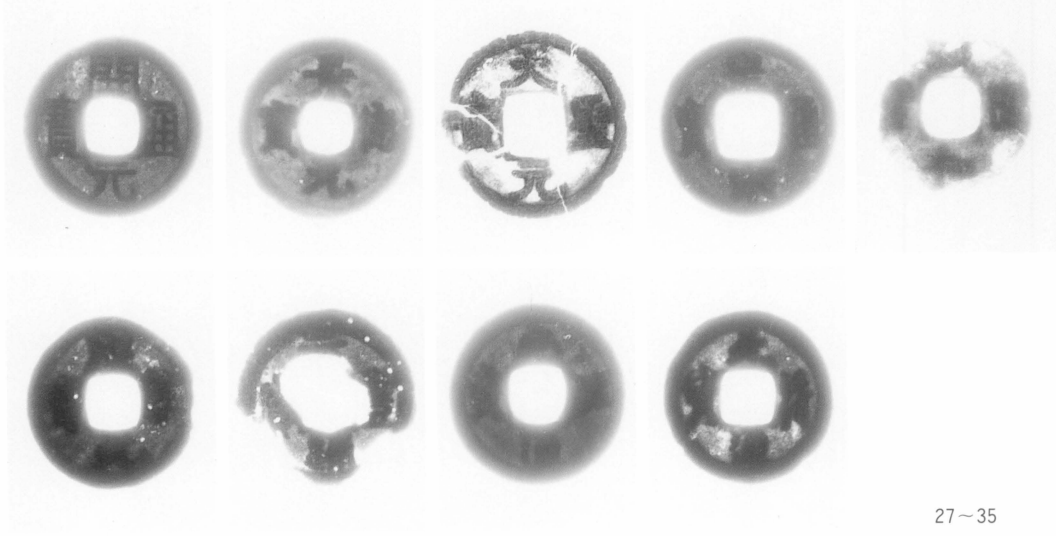


17～24

25

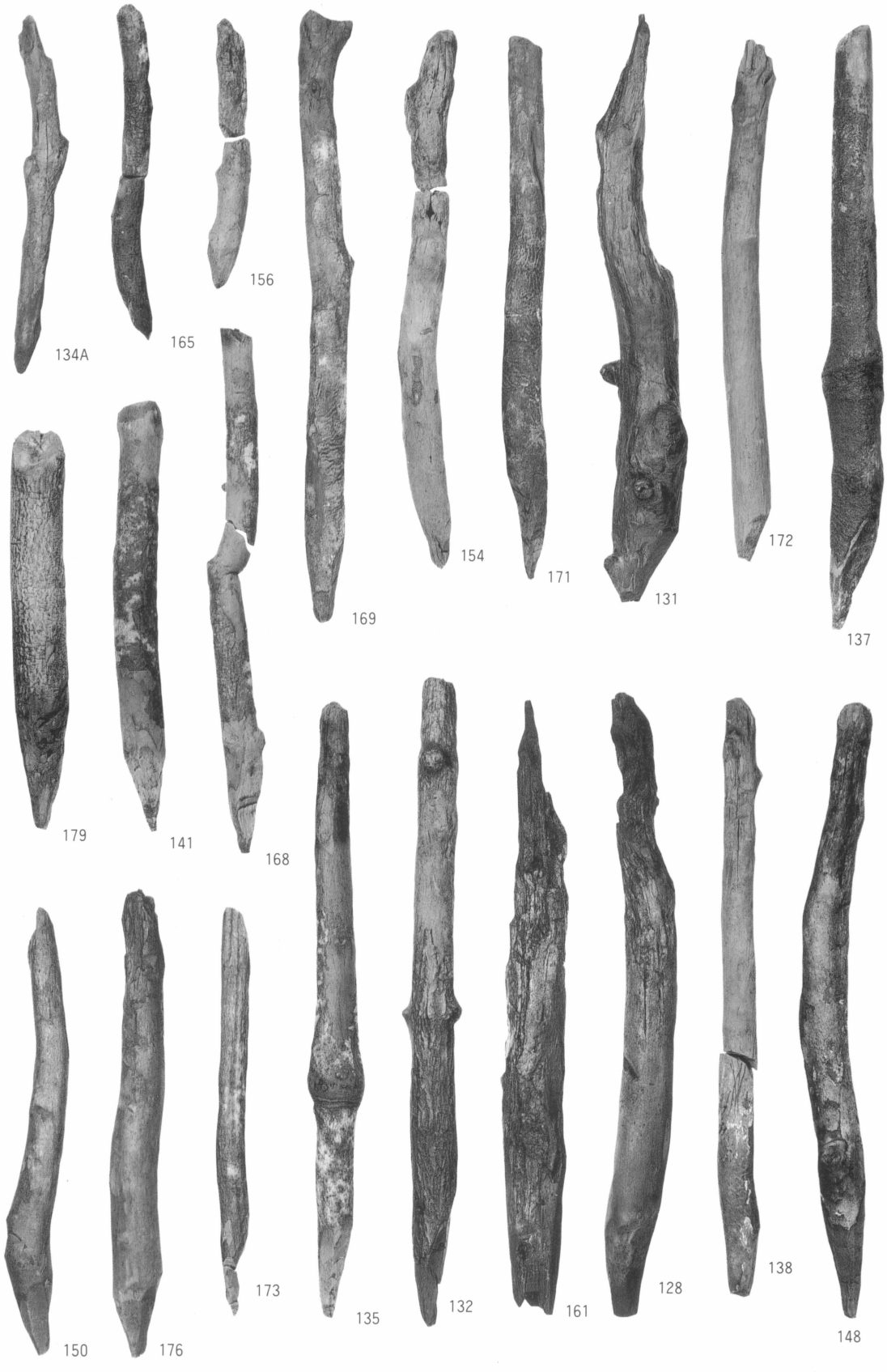
26

27

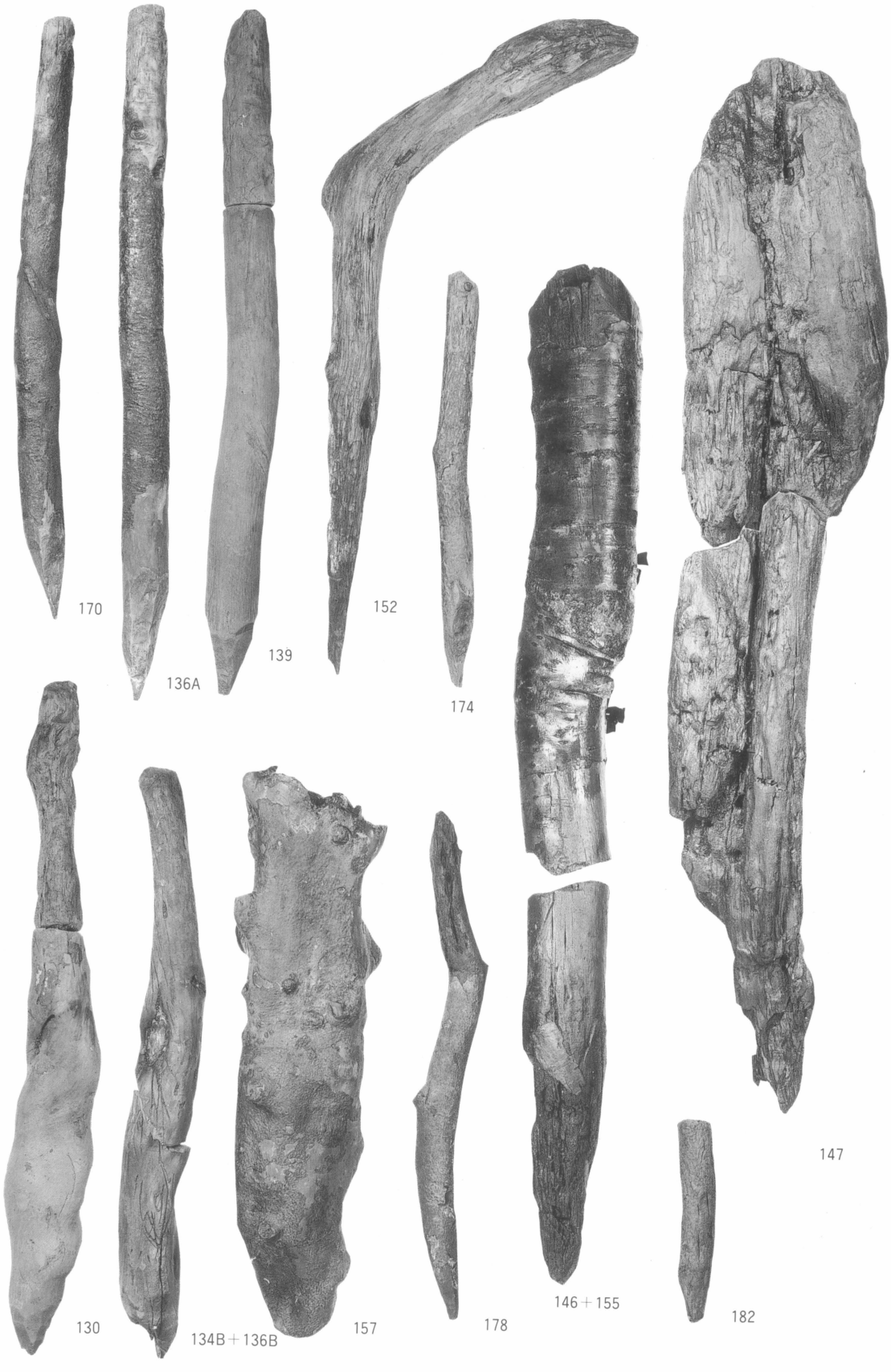


27～35

SE-3 出土遺物(2)

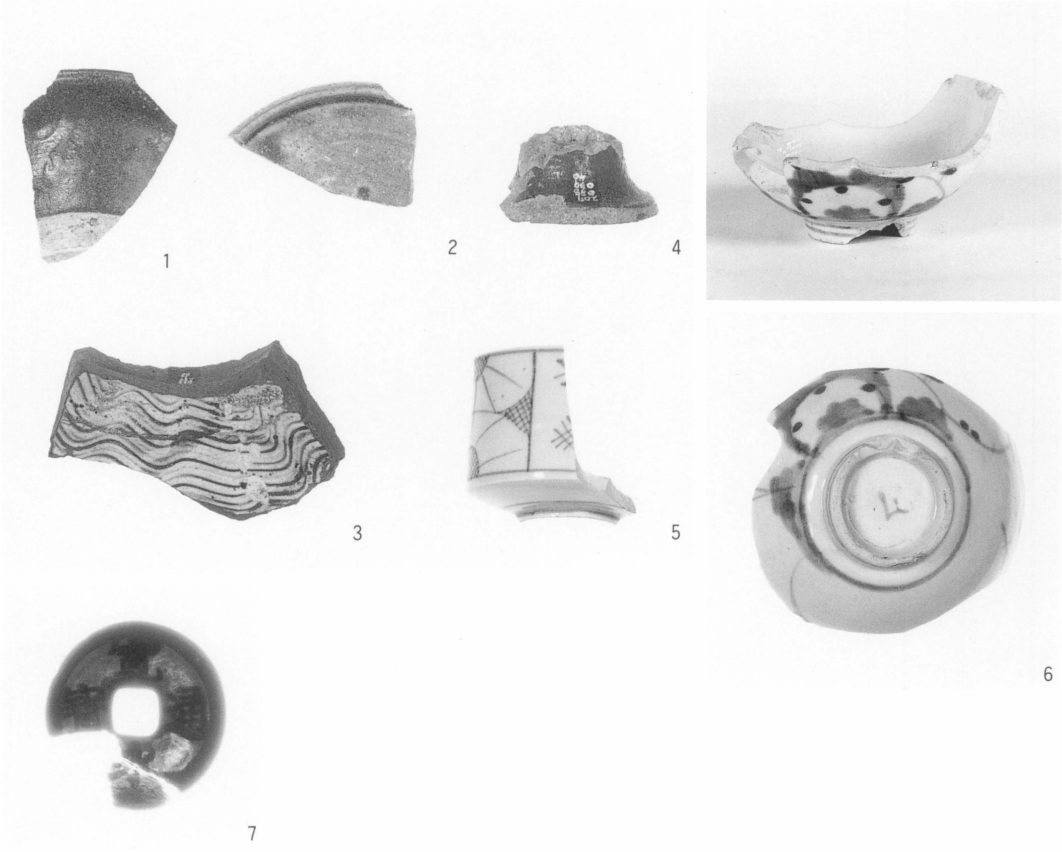

134A
165
156
169
154
171
131
172
137
179
141
168
150
176
173
135
132
161
128
138
148

SE-3 出土遺物(3) 杭



SE-3 出土遺物(4) 杭

SB-1・6、SD-9 出土遺物



SX-3 出土遺物

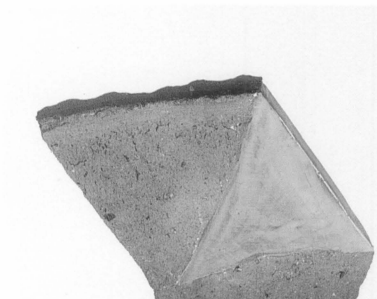
1

2

3

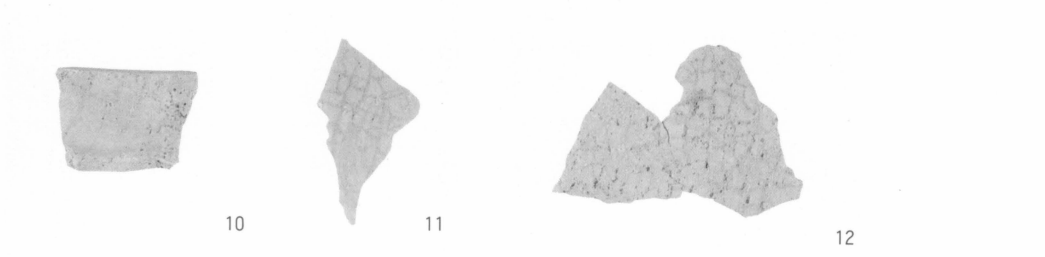
6

7



14

13



10 11 12

1

2

3

4

5

6

7

8

9

13

15

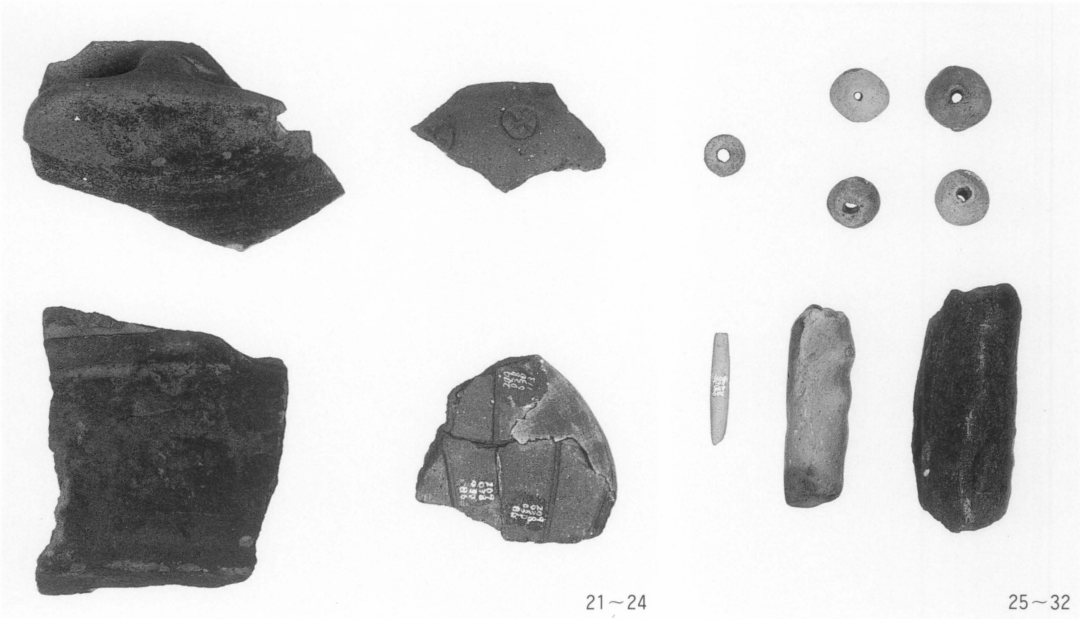
16

18

24

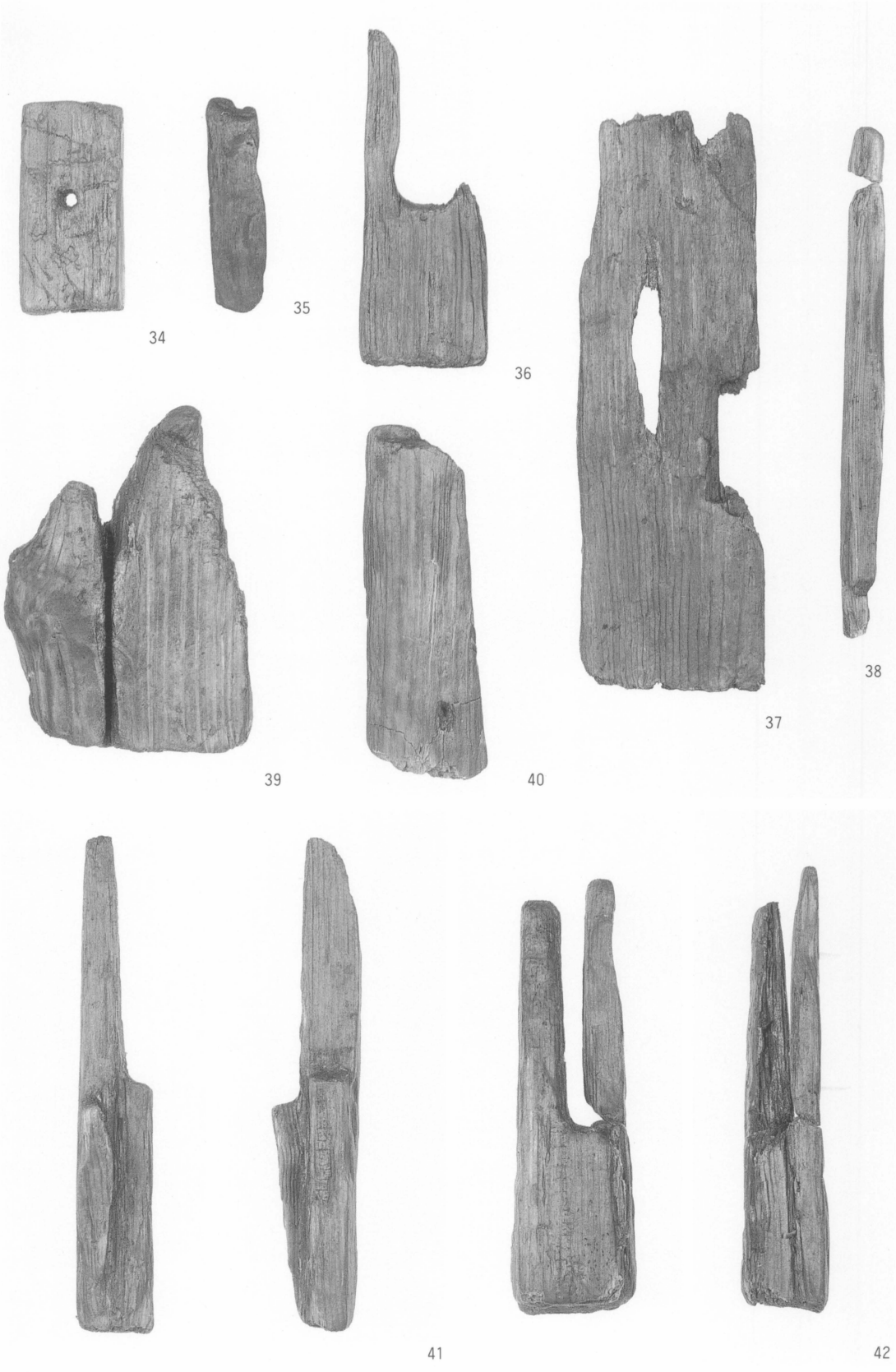
19

SD-8 出土遺物(1)、SX-1 出土遺物

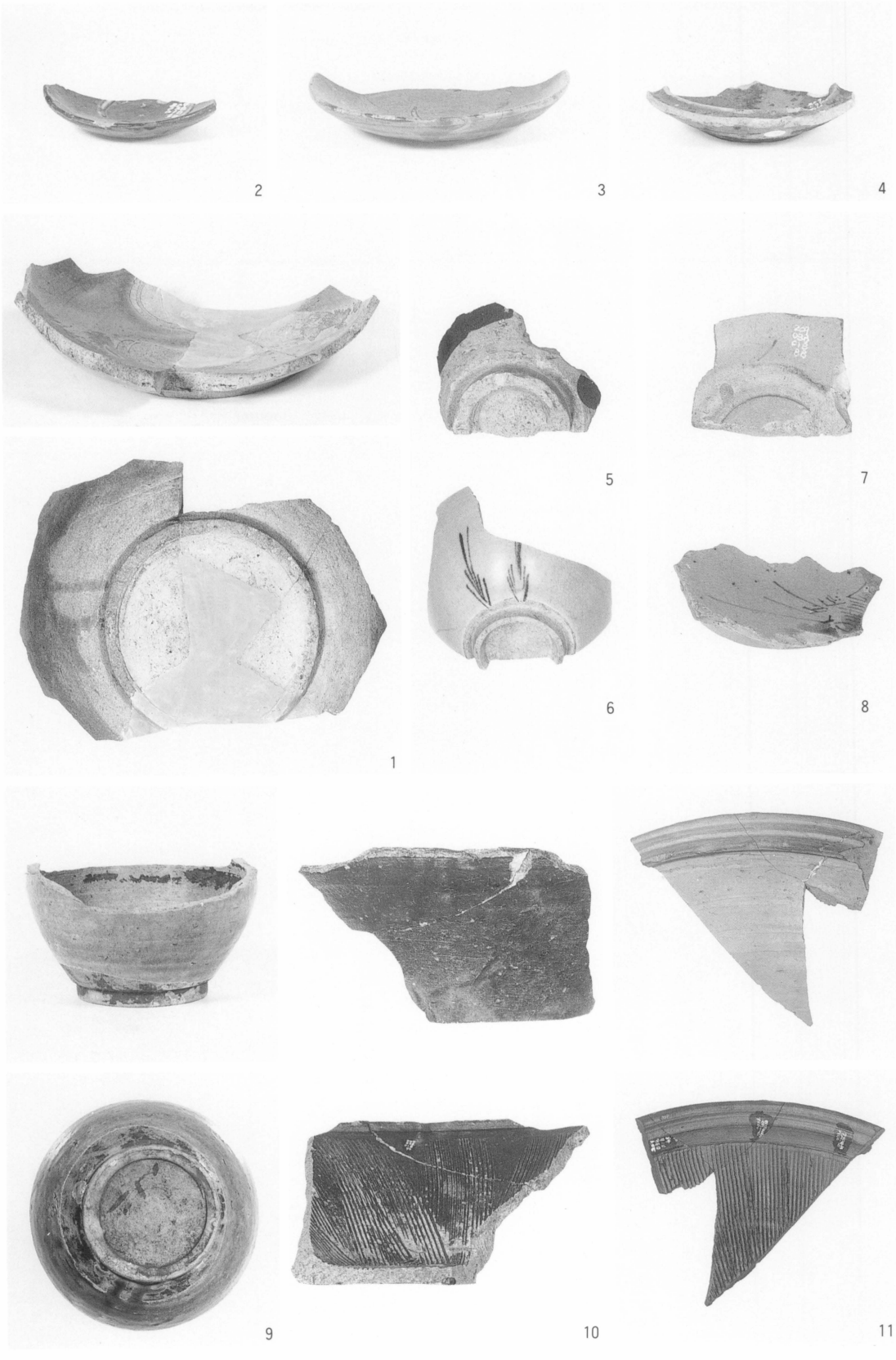


SD-8 出土遺物(2)

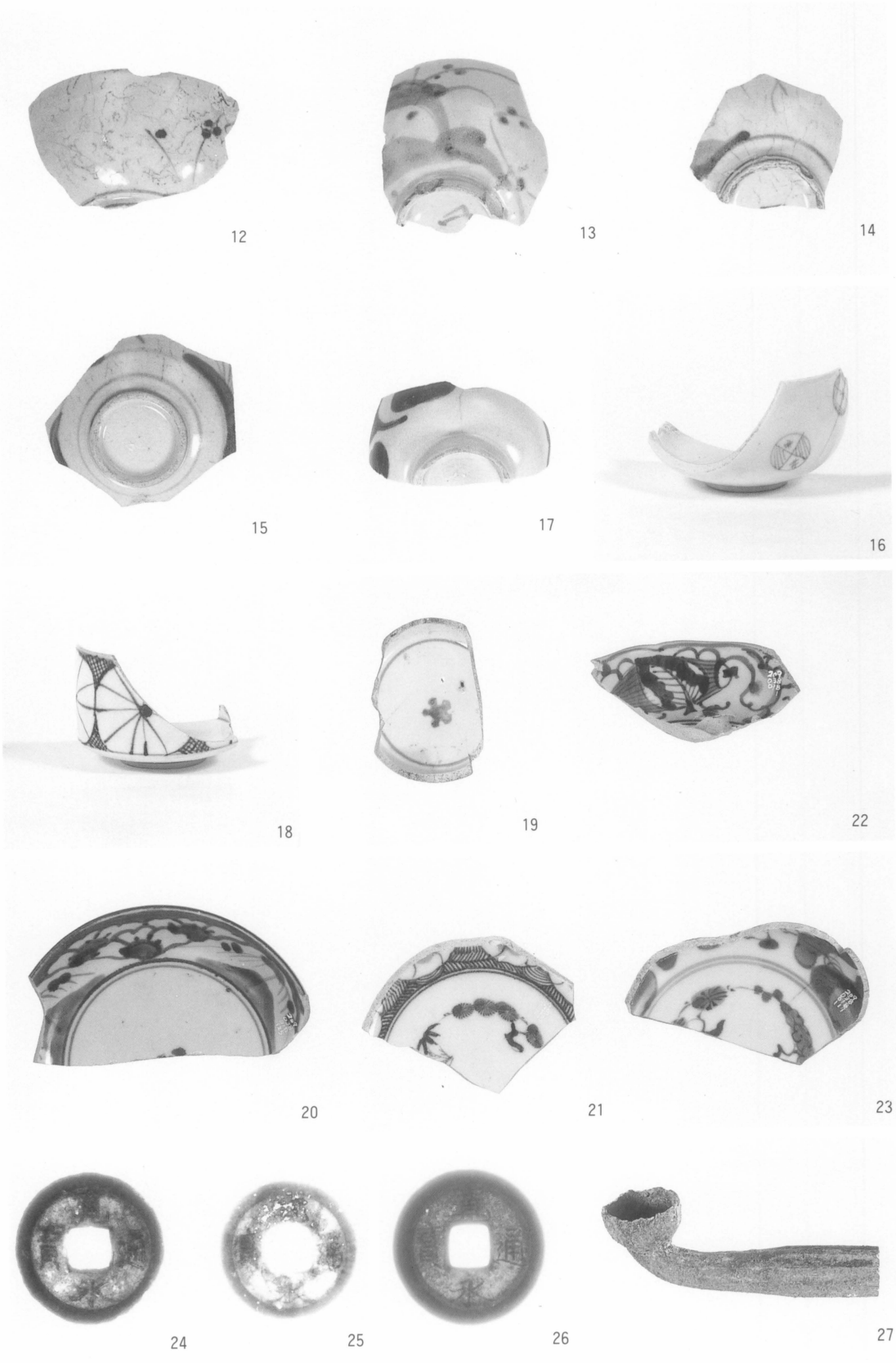
SD-10 出土遺物



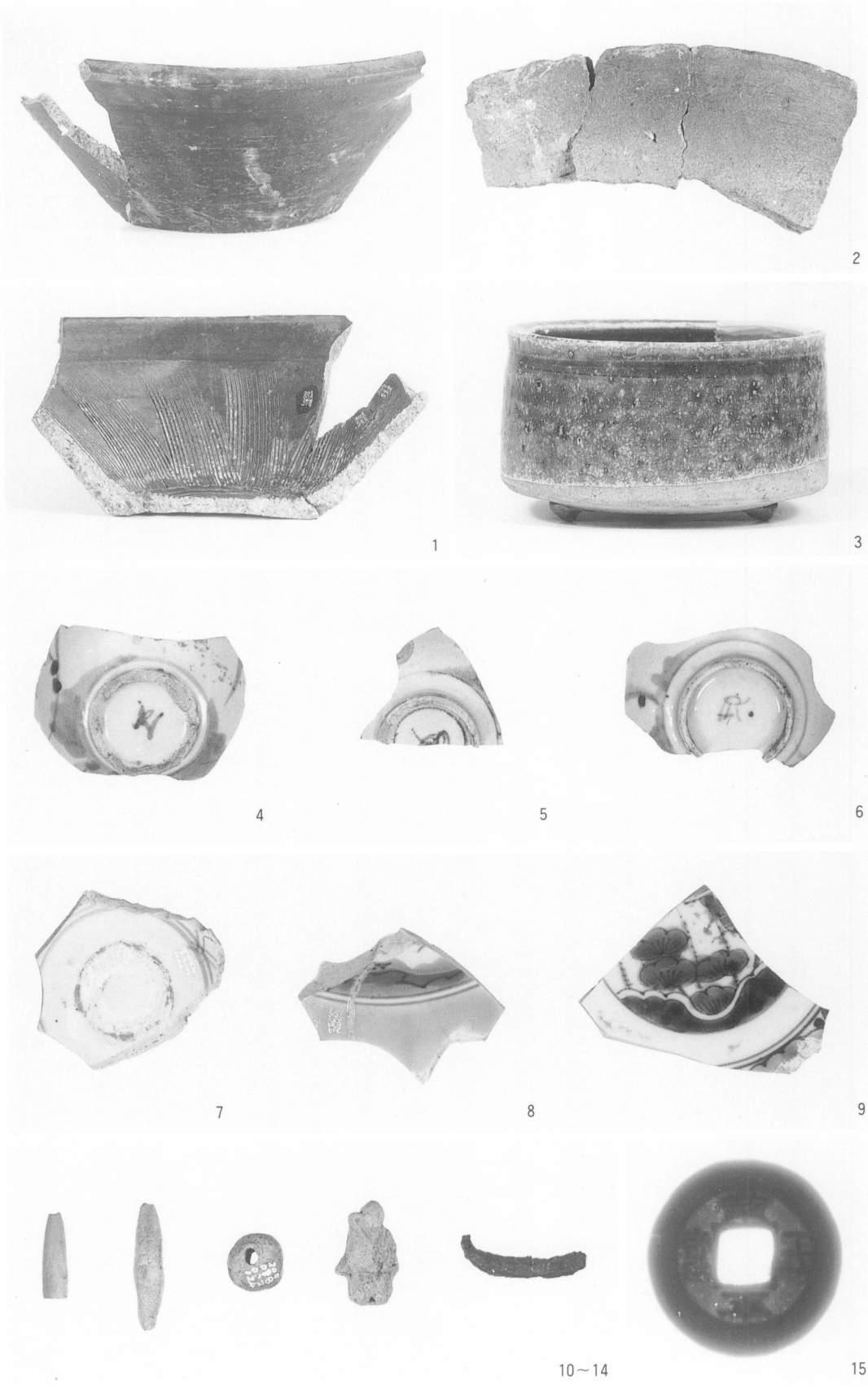
SD-8 出土遺物(3)



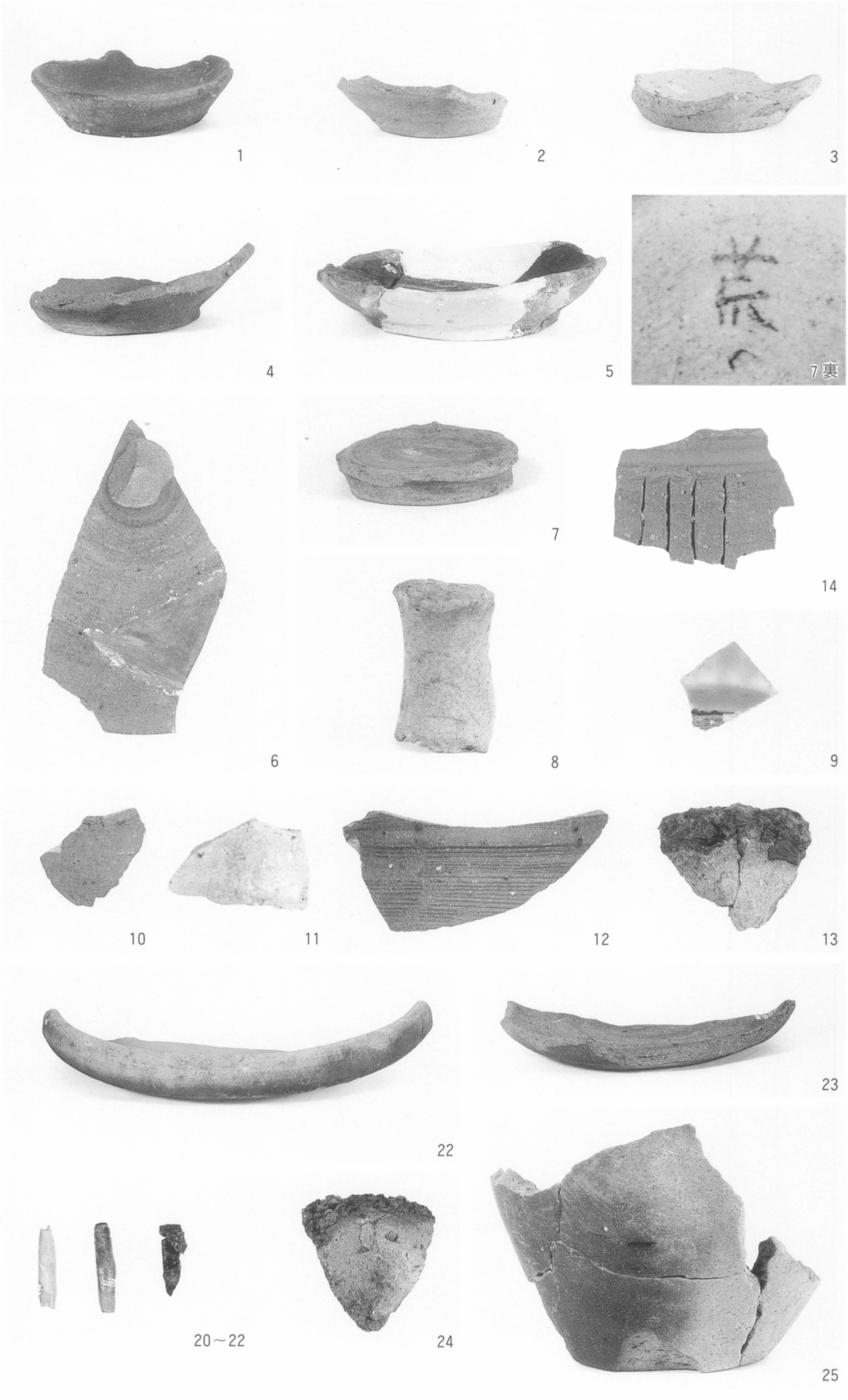
SD-12 出土遺物(1)



SD-12 出土遺物(2)



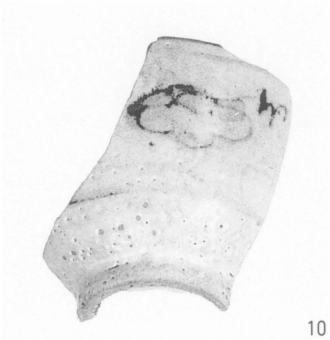
SD-15 出土遺物



SD-18・19・23・24 出土遺物

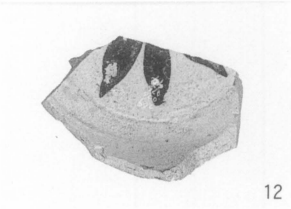
2

4

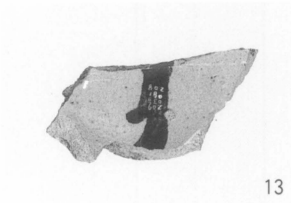


10

11



12

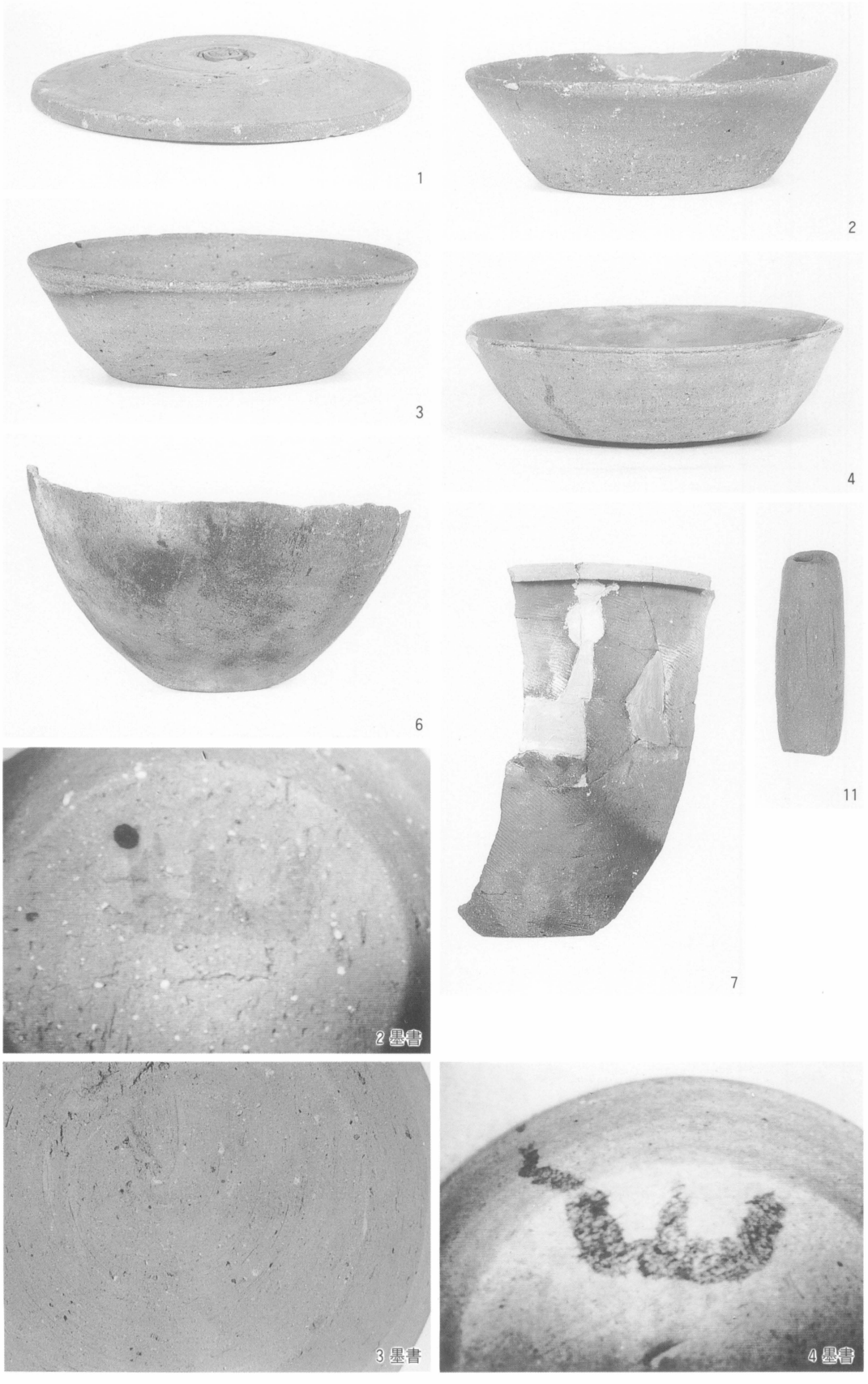


13

14　15　16

17～26

II区溝出土遺物



SE-5・6 出土遺物

1

3

4

5

7

8

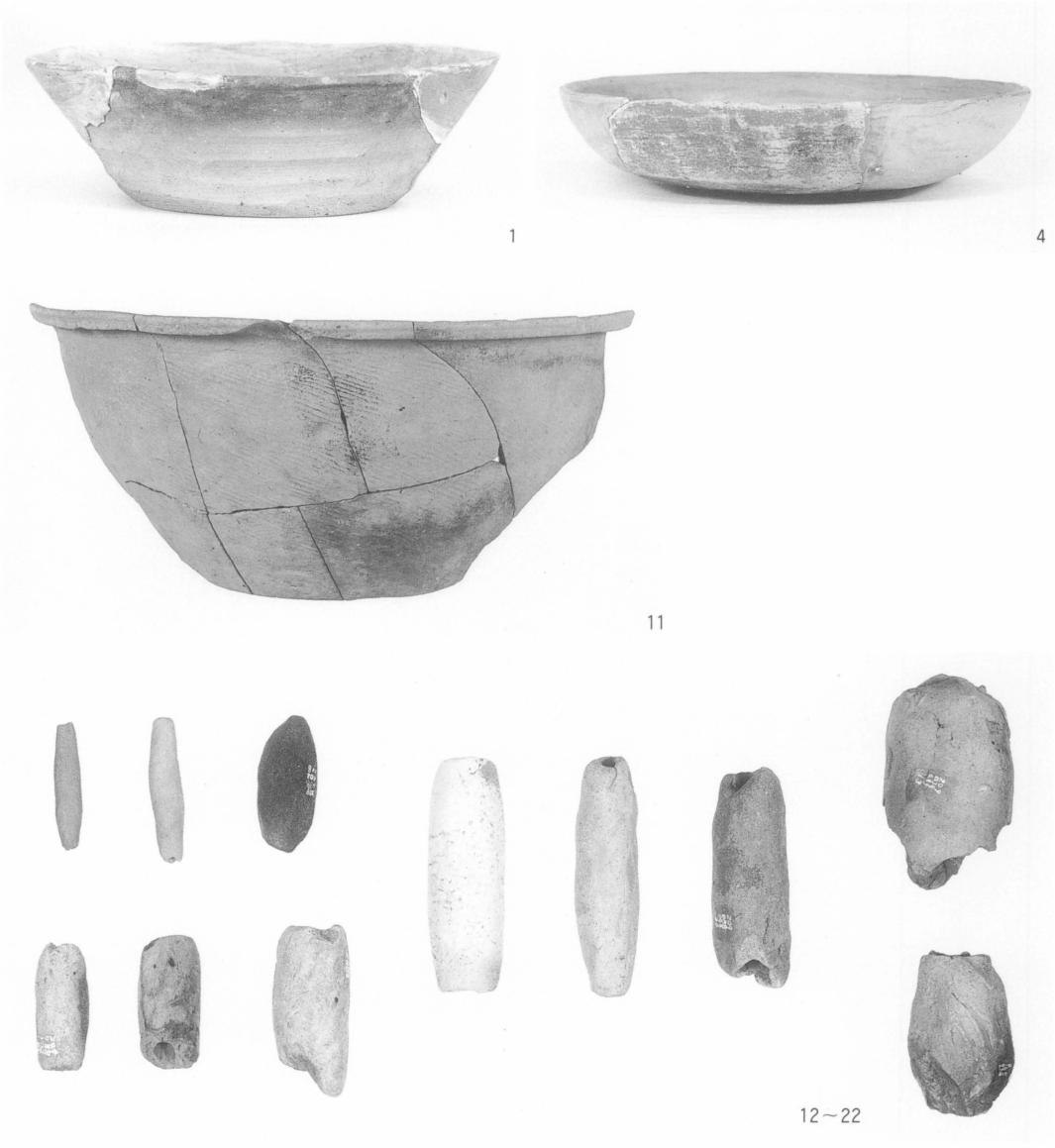
10

11

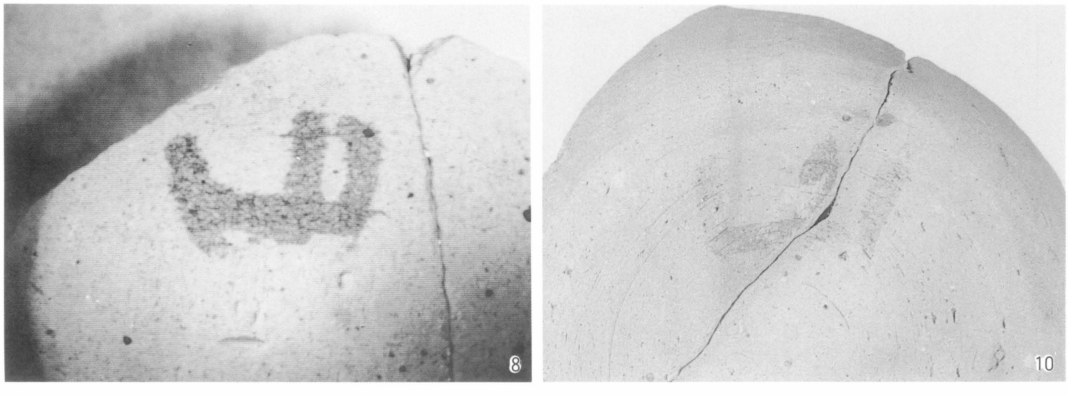
14

19

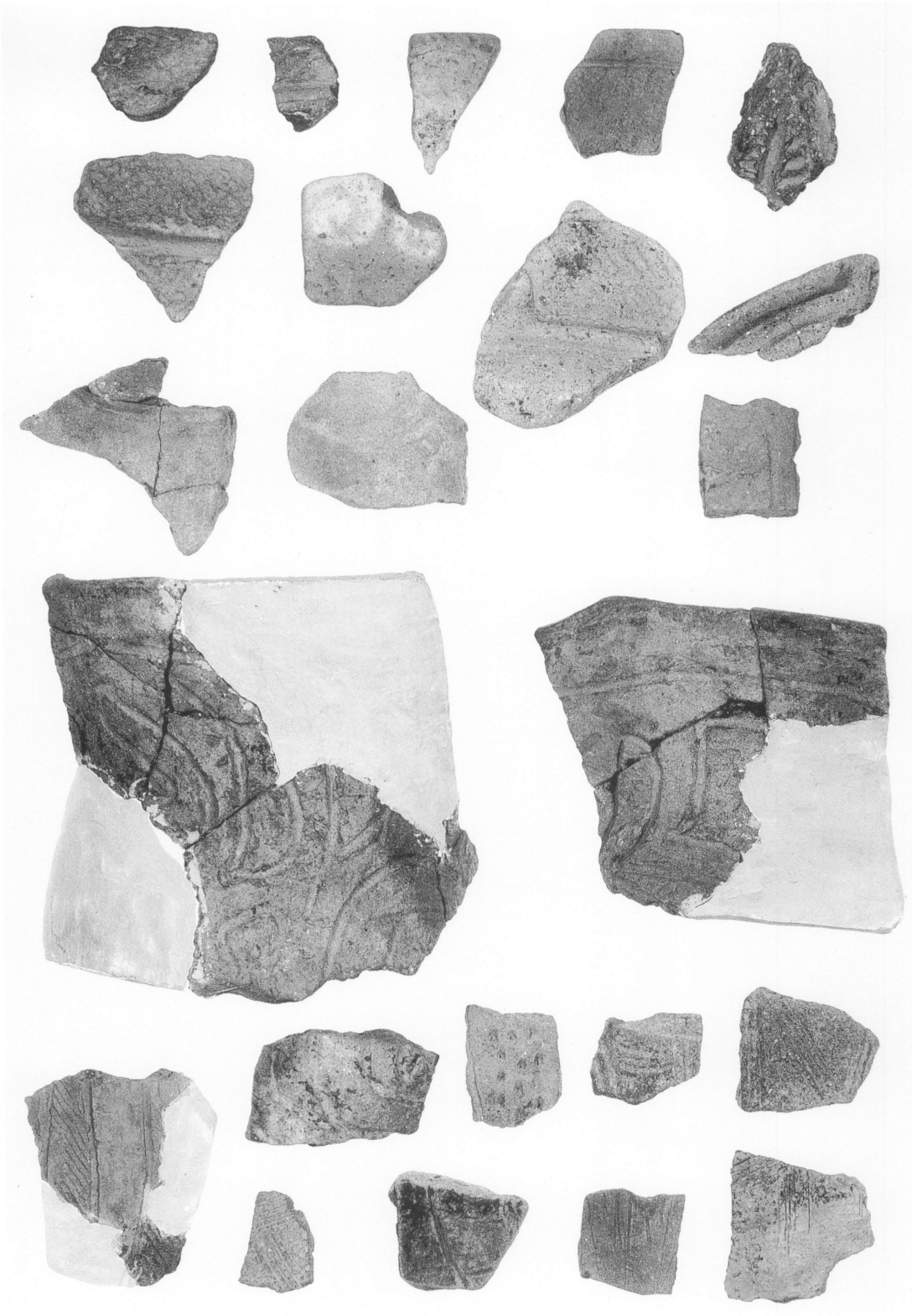
SK-14 出土遺物



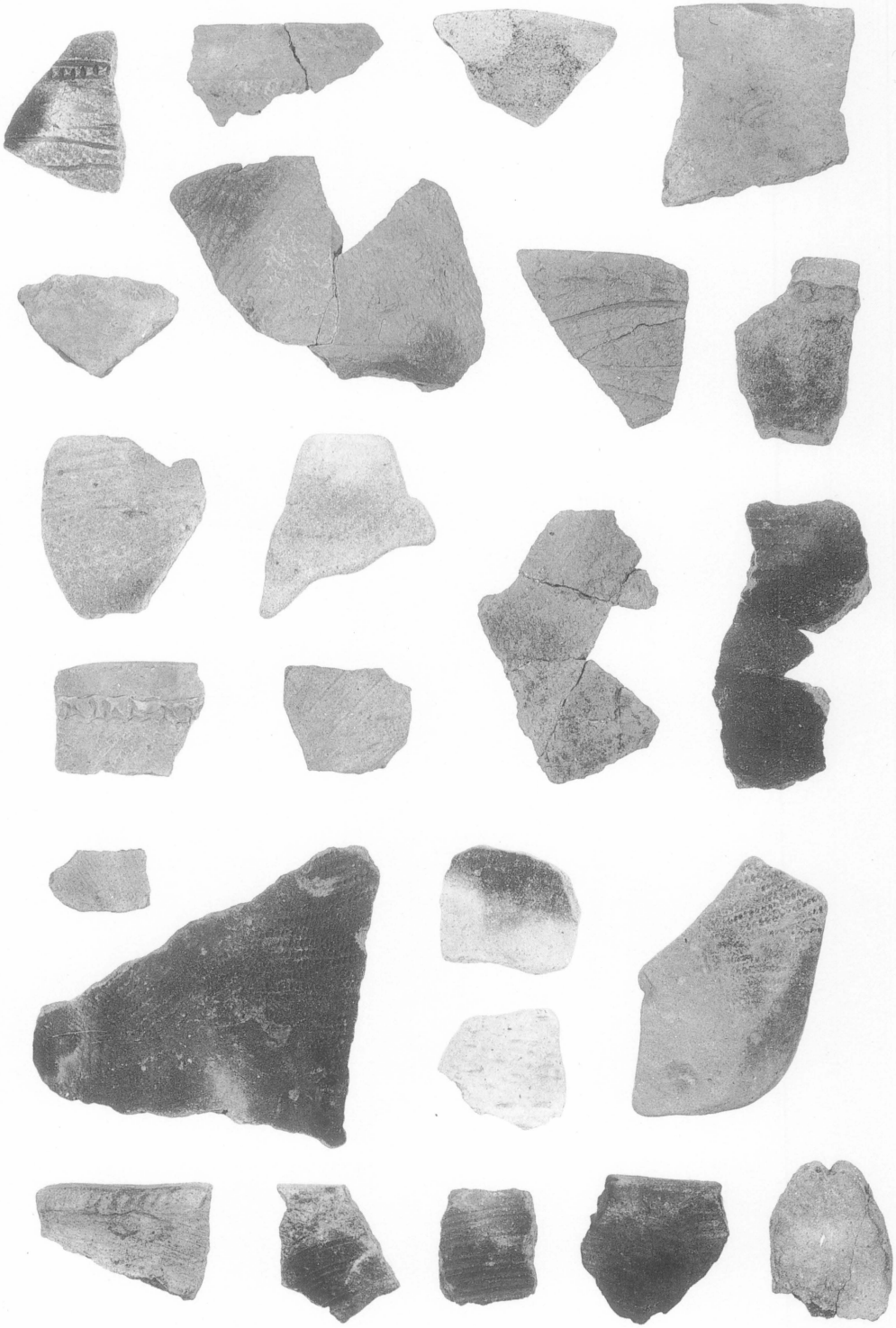
Ⅲ区溝・整地跡出土遺物



SK-14 出土墨書土器



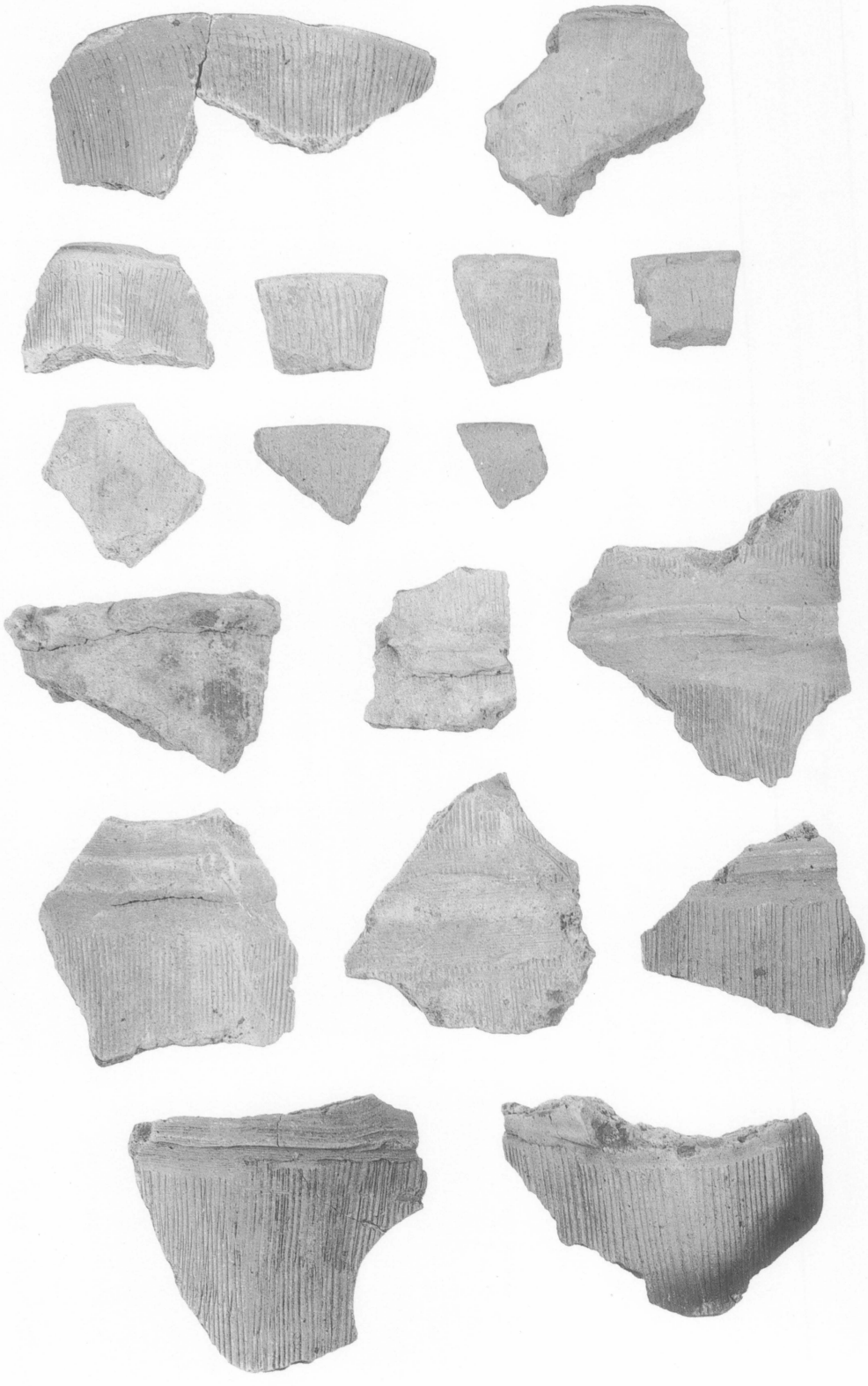
縄文土器(1)



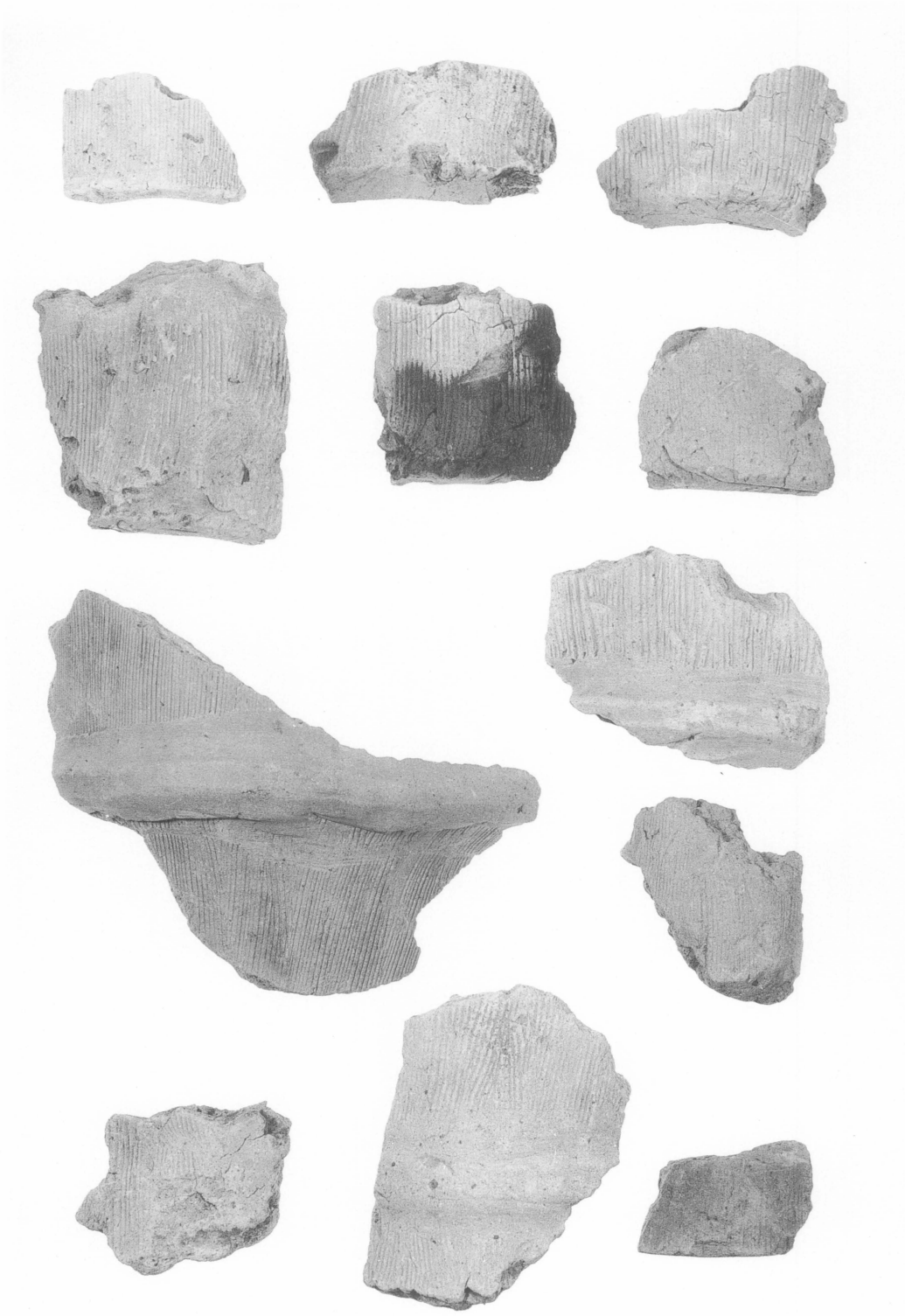
縄文土器(2)

縄文時代石器

古墳時代土器



埴輪(1)

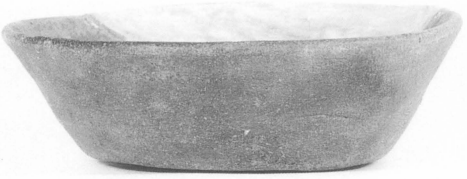


埴輪(2)

奈良平安時代土器(1)

18

19

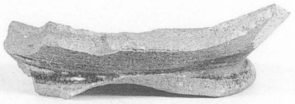


22

23

25

27



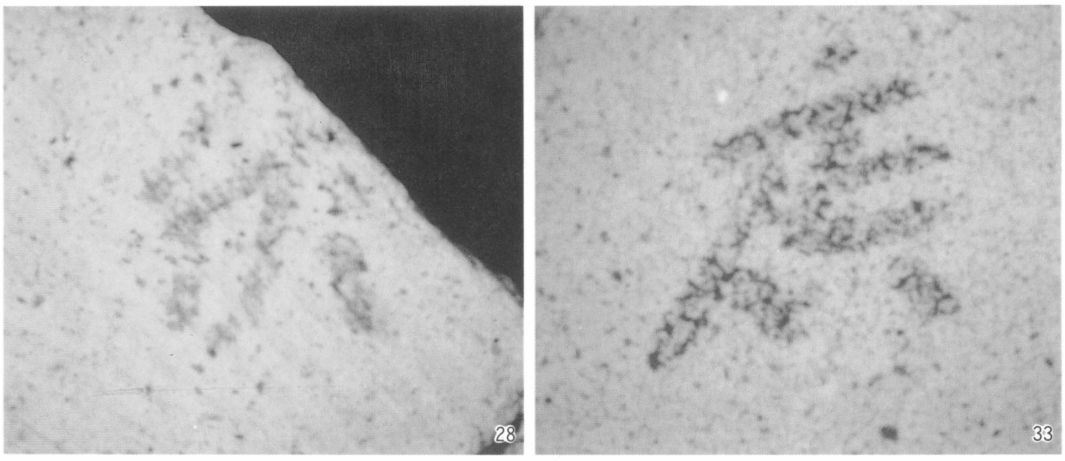
41

43

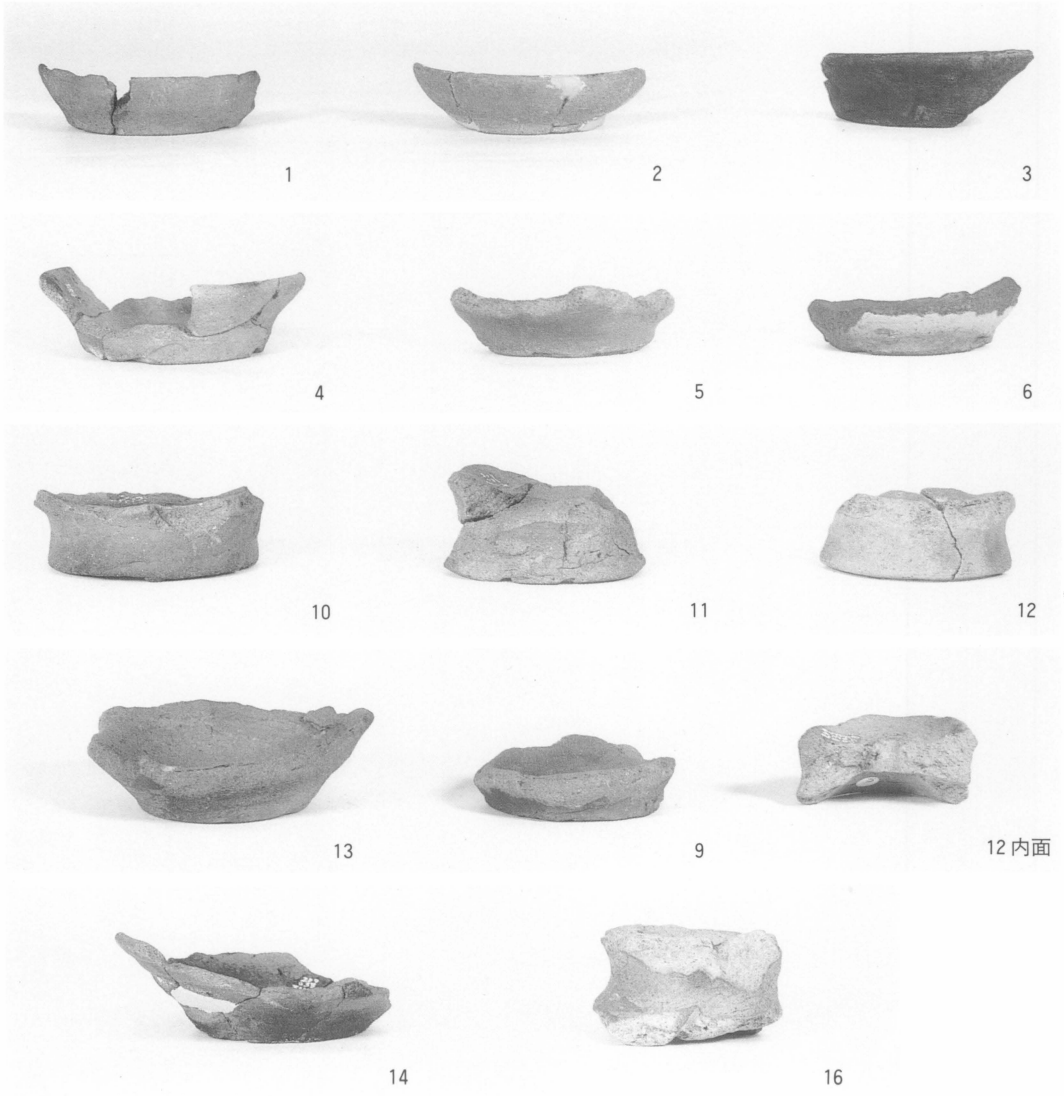
47

50

奈良平安時代土器(2)



墨書土器

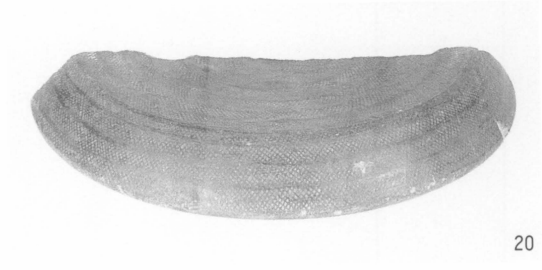


カワラケ小皿等

17

18

19

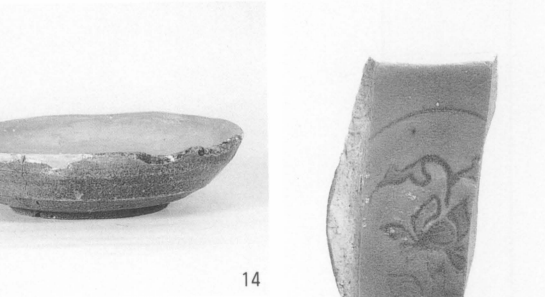

20

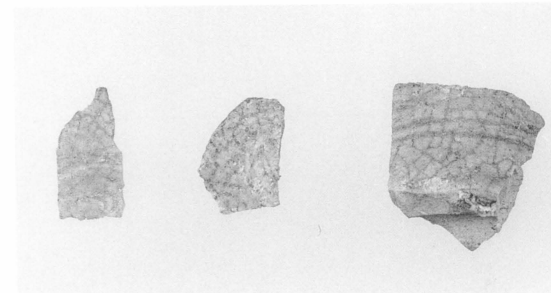
土師質土器等

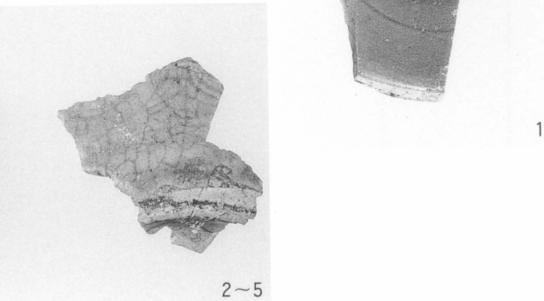
11

12

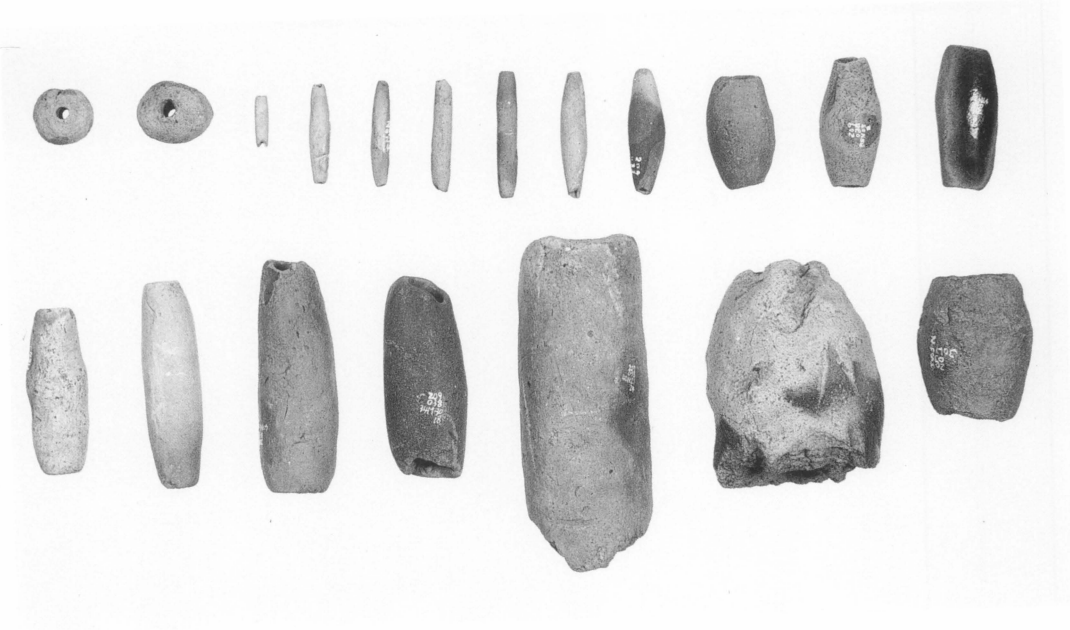
18


14

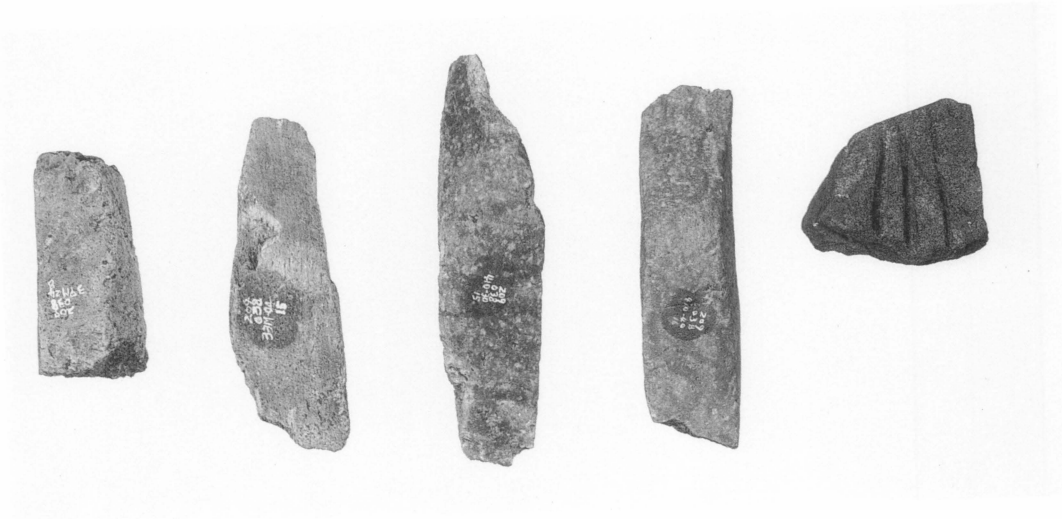

2～5


1

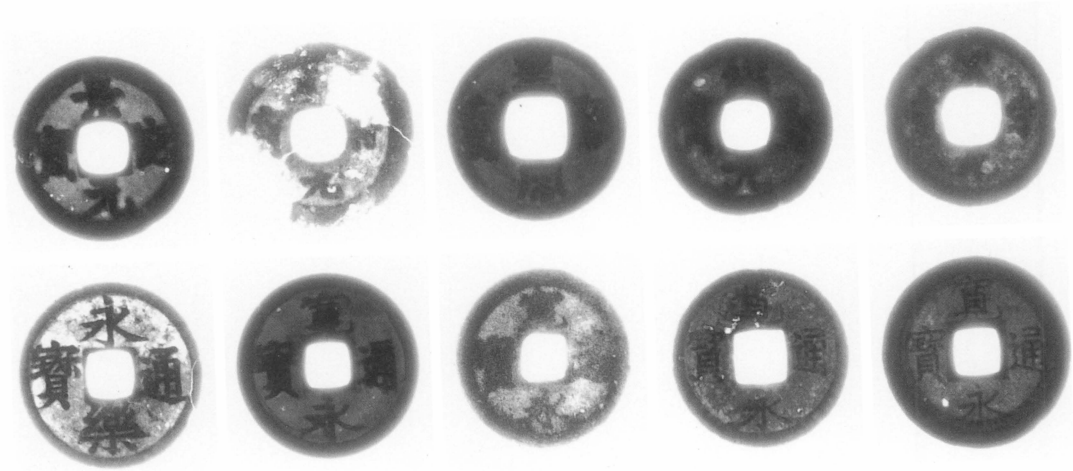
陶磁器



土玉・土錘



砥石



銅銭

鉄製品・キセル

取水堰付近
（東から）

近景
（南から）

遠景
（東から）

牧野谷中田遺跡

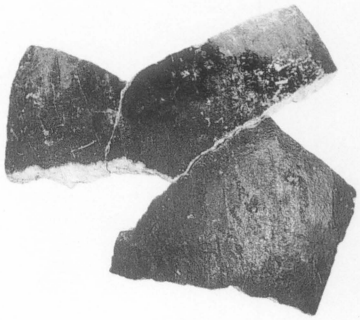
トレンチ
遺物出土状況

SD-1
94Z23・24
（西から）

SD-1
93Z42・94Z02

トレンチ、SD-1

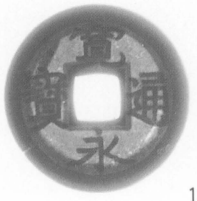
1



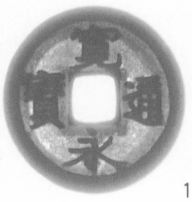
2

3～16

17

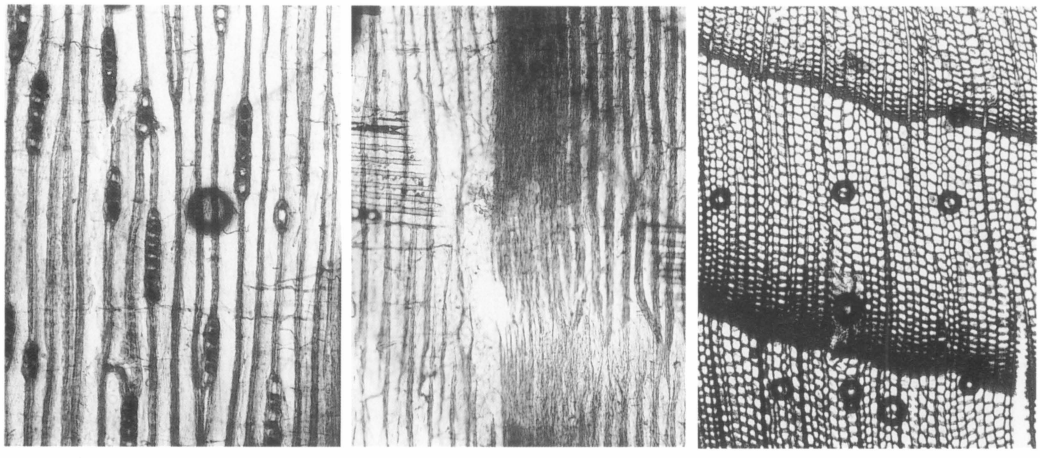


18



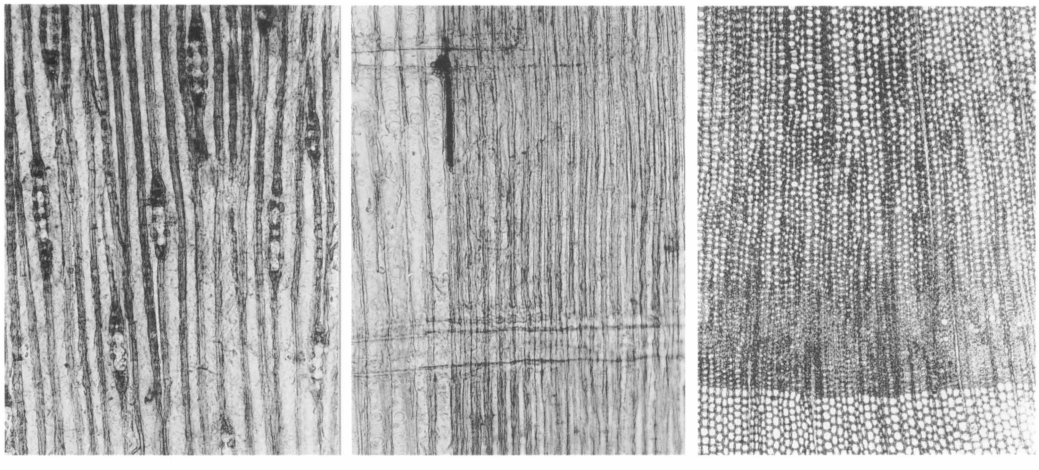
19

出土遺物



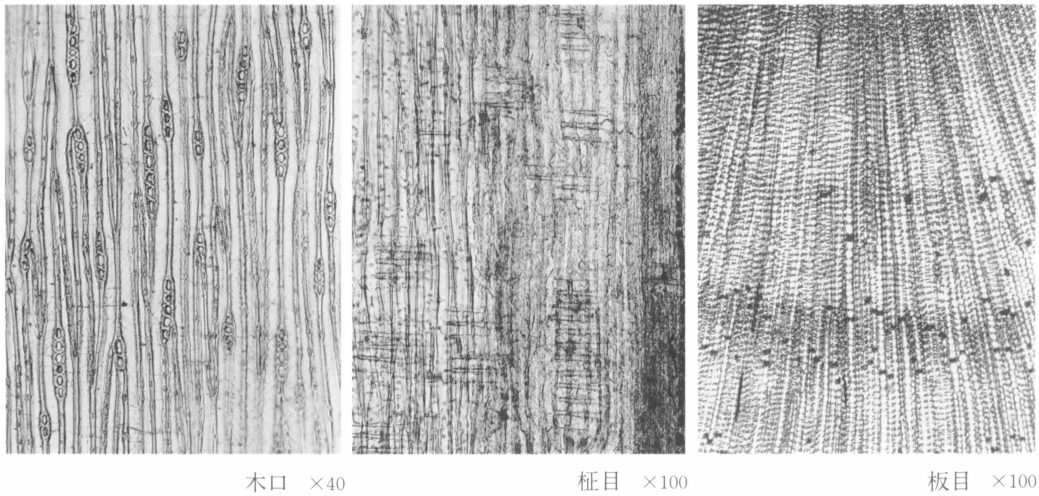
木口 ×40　　柾目 ×100　　板目 ×100

Cephalotaxus harringtonia No.22



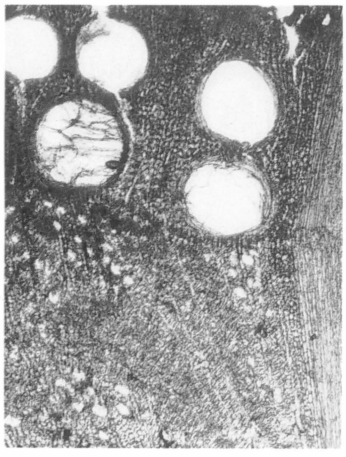
木口 ×40　　柾目 ×100　　板目 ×100

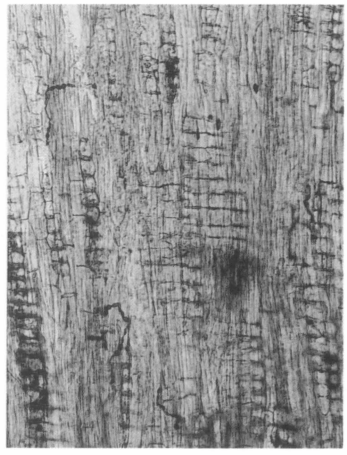
Pinus (subgen. *Diploxylon*) sp. No.9



木口 ×40　　柾目 ×100　　板目 ×100

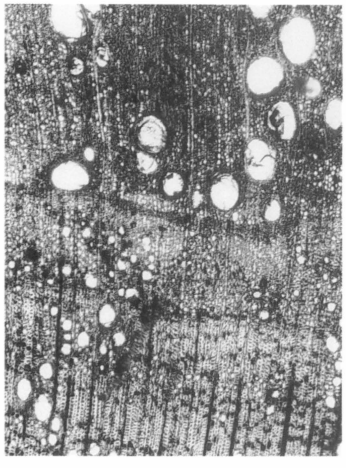
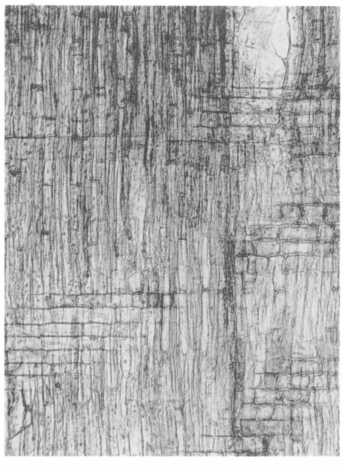
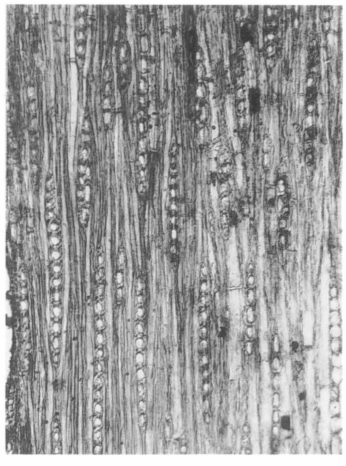
Chamaecyparis sp. No.31





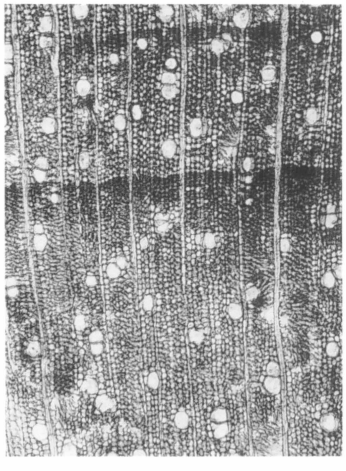
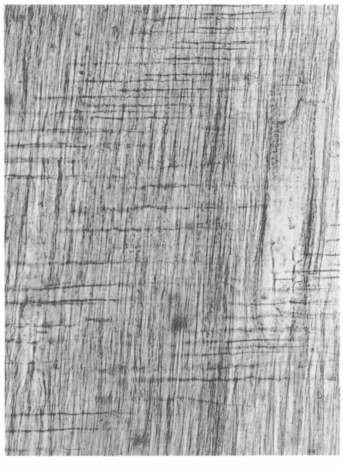
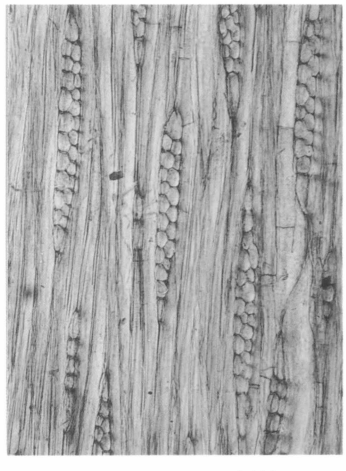
木口 ×40　　柾目 ×100　　板目 ×100

Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp. No.8

木口 ×40　　柾目 ×100　　板目 ×100

Castanopsis sp. No.21

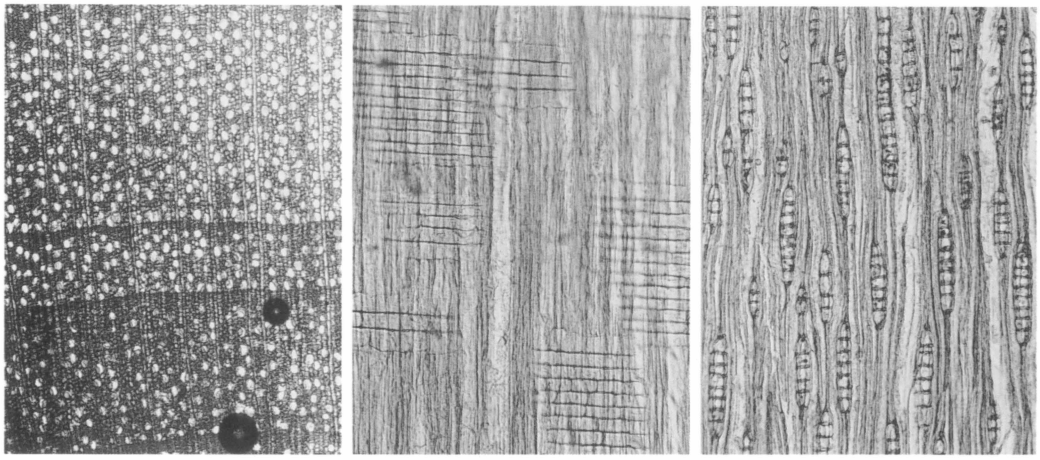
木口 ×40　　柾目 ×100　　板目 ×100

Lauraceae sp. No.19

樹種同定資料(2)

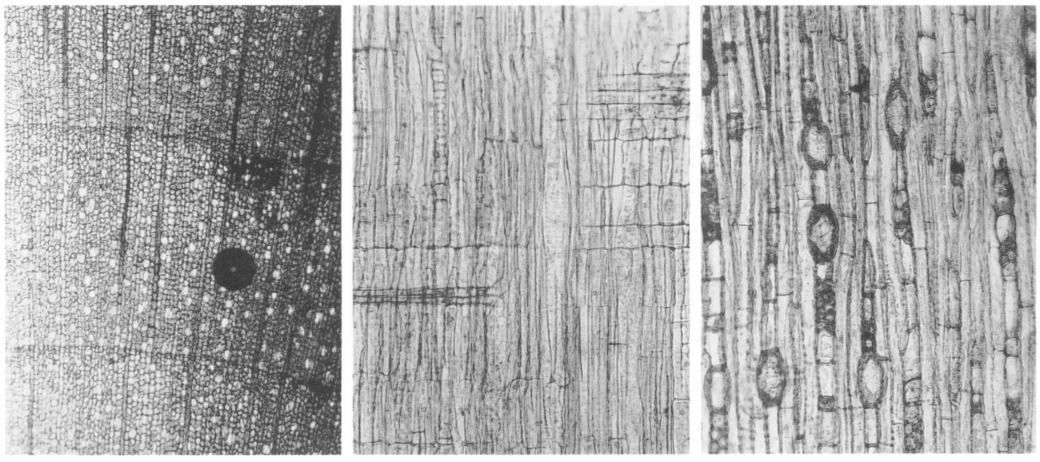
木口 ×40　　柾目 ×100　　板目 ×100

Prunus sp. No.14



木口 ×40　　柾目 ×100　　板目 ×100

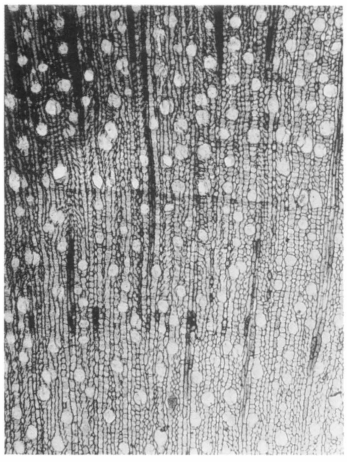
cf. *Euonymus* sp. No.18



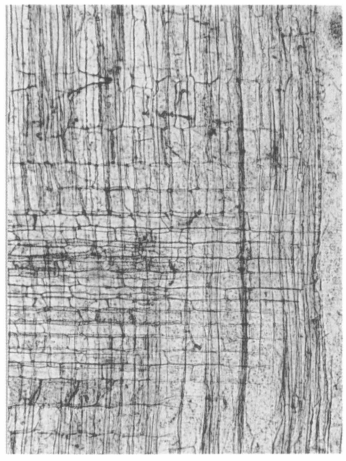
木口 ×40　　柾目 ×100　　板目 ×100

Camellia japonica No.13

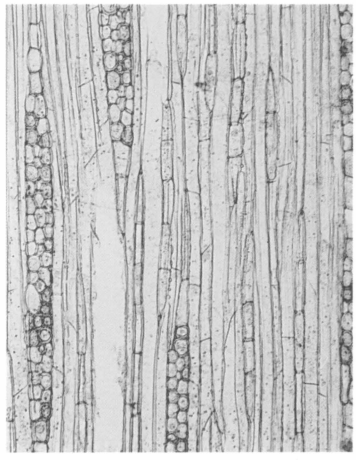
樹種同定資料(3)



木口 ×40



柾目 ×100

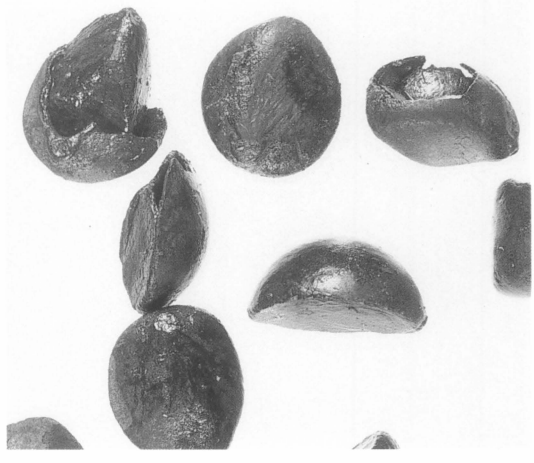


板目 ×100

Eurya japonica No.16

樹種同定資料(4)

センダン (*Melia azedarach*) センダン科



ヤブツバキ (*Camellia japonica*) ツバキ科

SD-8 出土種子

千葉県文化財センター調査報告第182集

佐原市仁井宿東遺跡・牧野谷中田遺跡

—中小河川改良事業小野川放水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成２年３月24日　印刷
平成２年３月31日　発行

発　行　千葉県土木部河川部
千葉市市場町１番１号

編　集　財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城２丁目10番１号

印　刷　有限会社 正文社
千葉市都町２丁目５番５号